東北文化資料叢書第三集　民俗資料　宮城県黒川郡大和町升沢地区

船形山の民俗

吉田潤之介採訪資料

東北大学大学院文学研究科東北文化研究室

二〇〇八年三月

『船形山の民俗』正誤表・追加註記

頁	行	誤	正
六下	一	伊藤辰則	伊藤辰典
一一下	一〇	豊斟〇尊	豊斟渟尊
一一下	一四	〇孜盧島	磯孜盧島
一二上	二	見尊〇	見尊鷸
一二上	四	〇草葺不合尊	鷸草葺不合尊
一五上	一四	〇〇葺不合ノ尊	鷸鷸葺不合ノ尊
二一上	一二・一三	琥珀〇〇瑪瑙	琥珀碪碓碼碼瑙
二二上	一一	琥珀〇〇碼碼瑙	琥珀碪碓碼碼瑙
二五下	二	〇石ヲ打詠め	硃石ヲ打詠め
二六下	二	〇穴あり	峒穴あり
二八下	六	胎内〇の	胎内峒の
三二下	一三	天狗にやら〇て	天狗にやら飼て
一一下	一〇・一一	「《…／…》」の記号は《割註右行／割註左行》を表す	
一七下	八・九他	「〳〵」は繰返し記号〳〵を表す	
三〇上	二	「〳〵」は繰返し記号〳〵を表す	

東北文化資料叢書第三集　民俗資料　宮城県黒川郡大和町升沢地区

船形山の民俗

吉田潤之介採訪資料

東北大学大学院文学研究科東北文化研究室

二〇〇八年三月

東北文化資料叢書　第三集

民俗資料　宮城県黒川郡大和町升沢地区

船形山の民俗　吉田潤之介採訪資料集

目次

凡例

吉田潤之介採訪資料集　解題

第一部　『船形山手引草』

第二部　聞き取り調査時の録音テープ記録

［1］山内地名①

［2］山内地名②・仙人・人生儀礼

［3］山内地名③

［4］山内地名④

［5］山内地名⑤・ご開帳・サツキマイリ・小栗山①

［6］山内地名⑥・嘉太神の伝説・炭焼き①

［7］山内地名⑦・船形山故事①

［8］山内地名⑧

［9］自家発電・タタラ・祟り

［10］船形山故事②

［11］船形山故事③・番所①

［12］船形山故事④

［13］道路開発

［14］本家分家関係・嫁いびり

［15］梵天ばやい

［16］小栗山②

［17］小栗山③

［18］悟りを開いた話

［19］歌念仏

［20］宿・番所②

［21］薪山・番所③・炭焼き②・軍隊

［22］カミサマ・オナガドコロ・鏡ヶ池

［23］藍染め・雨乞い

［24］炭焼き③

［25］熊獲り

［26］オシキ①

［27］オシキ②・女正月

［28］結婚

凡例

一、『東北文化資料叢書』は、東北大学大学院文学研究科東北文化研究室が、東北地方の文化と歴史の研究に資するための資料を逐次刊行するものであり、本書は同叢書の第三集に当たる。

二、本資料叢書では、宮城・山形両県に跨る船形山に対する信仰や民俗の解き明かしをライフワークに、長年にわたるフィールドワークを行ってきた吉田潤之介（一九一八～二〇〇〇）の収集資料（仮称「吉田潤之介採訪資料」）の内から、彼が行った調査の指針ともなった『船形山手引草』の翻刻と、本書をもとに彼が実際に行ったフィールドワークの一端を伝える、調査時の録音テープの文字化資料を収録した。

三、解題においては、吉田潤之介の人となりについて触れると共に、彼の収集した資料の意義について触れ、ここに収録した『船形山手引草』とその録音テープの資料的価値についてまとめた。

四、第一部には『船形山手引草』の翻刻を収録した。本史料の解読・翻訳・校正は東北民俗の会会員の小田嶋利江（東北大学非常勤講師）が担当し、さらに天野真志（東北文化研究室員）が校正の確認を行った。

五、『船形山手引草』の翻刻にあたり原本の表紙・扉・各丁はその先頭に「表紙」などと表示し、丁数とその表裏は「1丁表」のように表記した。

六、本文は原本の改行に従い改行し、原本と資料原稿の行を対応させた。挿入や割註などにより資料原稿が複数行に及ぶ場合は、二行目以降の第一文字前にハイフンを挿入した。

七、仮名の変体は通行の字体に改め、漢字の異体は一部通行の字体に改めた。また解読できない文字は□で示した。

八、第二部は、吉田潤之介の残した調査時の録音テープの一部を、文字起こしした記録である。文字起こしのうち「19」は小田嶋利江が担当したほか、残り全てを鈴木由利子（東北民俗の会会員）が担当し、本資料集の編集を担当した鈴木岩弓（東北文化研究員）が最終原稿を作成した。

九、録音テープというメディアの特性から、ここに表記した文字はあくまで暫定的なものでしかない。テープの中には声の重なりや、雑音が混入してそもそも上手く聞き取れない場合があり、その部分に関しては「……」で表した。また話の内容がプライバシーに関わり、収録することが不適切と判断された場合にも、その部分を「……」で表記した。さらに、方言などのために、音は聞こえるが言葉としての意味が不明な場合もあったが、その場合は聞き取れた音に近いカナで表

記した。

十、民俗語彙や固有名詞はカタカナで表記し、可能な場合は（　）内に漢字表記を加えた。とはいえ「船形山」にも「舟形山」という表記があるように、同じものを指す用語の漢字表記が複数見られる場合が多々見られる。本資料集では、原則的には現代用いられている表記を採用するよう努力したが、全てにこの原則が適用されているわけではない。

十一、テープには、潤之介自身によると見られる、題名の記入されているものとされていないものがあった。また録音時期の異なると思われる場面が、同じテープに引き続き録音されている場合もしばしば見られた。そのような状況の中で整理する必要から、ここでは収録したひとかたまりの文字原稿に、編者が便宜的に標題を付けてみた。その際には語られた内容のポイントとなる用語を用いることを心がけたが、これはあくまで整理の必要上限られた文字数で付けた題名であったため、そこで実際に話題となって述べられている内容の全てを示すものではない。

吉田潤之介採訪資料　解題

1．はじめに

本書に収録した資料は、吉田潤之介がその後半生のライフワークとして実施した、船形山および、その山麓の升沢地区を主な対象とした民俗調査の中から収集された研究成果の一部である。

編者とこの資料との出会いは、平成十三年の一月、宮城県黒川郡大和町吉岡在の横田清二氏のお宅を訪問した時に始まる。その当時編者は、「東北民俗の会」の一員として同町升沢地区の集団移転に伴う緊急民俗調査に従事していた。升沢地区は、米軍の実弾砲撃演習が隣接する王城寺原演習場で行われることが平成八年度に閣議決定されたことを契機に、地区を挙げての集団移転がなされることとなっていたのである。村落が消える、ましてそれが山村の伝統的な生活様式を色濃く残すことで著名な大和町の升沢地区が消えることを知った時、県内の民俗学関係の任意団体である「東北民俗の会」では、会の有志によって「升沢調査会」を組織し、消滅する村落を対象とした民俗調査をボランティアで実施することとした。横田宅を訪問したのは、そのような調査がいよいよ終盤のまとめ段階に近づいてきた時のことであった。

そのようなわれわれに対して、本資料集で一部取り上げることになった仮称「吉田潤之介採訪資料」の情報が寄せられたのは、平成十二年の年末のことであった。升沢地区でのわれわれの調査の動きを知った横田氏から、親戚の吉田潤之介が残した資料を一度見に来て、使えるなら役立てて欲しいとのお話をいただいたのである。そもそもこの資料は、吉田潤之介が逝去後、遺族の間で遺品の整理が行われた際に、処分しようとしていた遺品の中から見つかった、「船形山舛沢関係」としてまとめられていた資料群である。この遺品は段ボール箱で十箱に及び、潤之介の生まれ故郷の大和町吉岡の地に送られ、親戚の横田氏のところで保存されていたのである。

横田宅で対面した四半世紀以上前に行われた民俗調査のナマの資料は、われわれを驚かすものであった。われわれがその当時、升沢地区などで聞き取り調査を行った際に、「かつての姿」としてお話しを伺った内容の行事などが、潤之介の眼前の出来事として記述されたメモをはじめ、写真やコピー、お札など、さまざまな種類の船形山に関わる大量の資料と共に段ボール箱にずっしりと入っていたからである。われわれは早速横田氏のご厚意に甘え、それらの資料を借り出して、われわれの調査の一助とすることとしたのである。

2. 吉田潤之介の人となり

吉田潤之介は、大正七年（一九一八）に現在の黒川郡大和町吉岡仲町にて出生した。生家は近世以来の大商家で、祖父と父は二代にわたって町長をつとめた名家であった。

昭和十一年に宮城県仙台第二中学校（現在の宮城県仙台第二高等学校）を卒業すると、潤之介は昭和十三年に國學院大學予科に入学、同十五年三月に予科修了後、四月からは國學院大學学部国史学科に入学した。今も健在の同級生の話によれば、大学時代の彼は余り目立つ方ではなかったようであるが、録音テープに残されている彼自身の言葉では、バルカン史を専攻したという。昭和十八年九月には、第五二期として國學院大學学部国史学科を卒業している。

戦中でもあった大学卒業後の足取りは不詳であるが、昭和二十二年から二十三年は宮城県黒川農学校（現在の宮城県黒川高等学校）の嘱託教員をしていた。その後昭和二十五年からは、東北大学附属図書館に司書として勤務することとなり、昭和五十五年に筑波大学附属図書館を退職するまで、東北大学、東京教育大学、筑波大学の三大学の附属図書館に勤務していた。その後「三笠宮記念図書館」を付属施設としてもつ中近東文化センターに勤め、平成八年にはその後に移った細田学園高等学校を退職して社会の第一線から退かれたようである。

潤之介が船形山に関心を持つようになった直接の契機は、彼の資料を整理した小田嶋利江によるなら「終戦後の索漠とした空虚感」にあり、これを癒す対象として船形山登山に励むうちに、この山が研究対象となってきたものという。とりわけ東京教育大学に勤務中の昭和四十四年以降、大学紛争を経験したことは、そのような現実から離れた船形山研究をより深化させることとなった。『船形山手引草』をじっくりと解読したのもその頃のことであるし、本資料集で取り上げた調査時の録音テープも、ちょうどその頃以降に録音されたものである。

以後の潤之介の夢は、船形山に関する著作を刊行することであったという。『船形山手引草』の解読に関連する多くの文献資料を収集し、またそこに書かれた内容が実際にどうであるかを船形山麓に住む人々に会って聞き取り調査をするという地道な作業が続けられていた。しかしそのような作業は実を結ぶことなく、平成十二年の三月、潤之介は逝去した。享年八十二歳であった。

3.「吉田潤之介採訪資料」の概要

今見たように、ここで取り上げる資料を収集した吉田潤之介は、大学に勤務していたものの、いわゆる文部教官として学生の教育や研究に携わるような「大学の先生」ではなかった。生

まれ故郷の船形山に対する素朴な関心を暖め、そこに生まれた疑問点を一つ一つ紐解いて行く作業を長年にわたって積み重ねてきた、一人の野の研究者であった。

私は学者じゃないんです。こういう資料がある、こういう資料がある、あとは、煮て喰ったり焼いて喰ったりは、(私は)そういう職人だからね、先生方調査すりゃいいことだがね。一応そう言うことに関する文献だけは網羅してみようと思ってね、私、考えてるんですよ。

本資料集に収録した録音テープには、以上のような彼の研究スタンスを語る声が収録されている。ともかく、資料を収集する。変化の多い時代にあって、従来行われて来てこれから変化する兆しのあるようなものは、ことさら留意して収集する。しかしそのような資料から何が見えるかは、下手な理屈を言わずに専門家に任せればよい。言うなれば「資料収集学」と言うのが、潤之介のまず初めに目指した研究姿勢であったようである。

かかる姿勢の吉田潤之介自身が、これまでに発表した研究成果としては、『民間伝承』に収録された「宮城県黒川郡大和町吉岡の方言(上)」がある(『民間伝承』三六―二、六人社、昭和四十七年七月)。この論考は、あくまで吉岡方言のグロッサリーとして書かれており、彼の研究態度を貫いてか、分析は一切加えられていない。なお、続く(下)が発表された記録はない。

彼の収集資料は、「升沢調査会」のメンバーの伊藤辰則(元東北文化研究室員)と小田嶋利江が一枚づつデジタルカメラで撮影し、目録を作成した。またカセットテープに関しては、鈴木由利子が文字化作業を行った。その結果整理された潤之介の収集した資料は、平成六年四月現在、以下のように分類される。

メモ・資料抜き書き・草稿	一三一二点
コピー	六一七点
パンフレット・小冊子	一〇二点
書籍・雑誌	四七五点
神札・護符	三九二点
名刺	一二点
新聞切り抜き	二一点
写真	一三一点
カセットテープ	二一点
その他	四二点

本資料集ではこのうち、潤之介が自身の研究を深めていく際の最大の手がかりとなった『船形山手引草』の翻刻と、その内容の確認を含めて、潤之介が聞き取り調査をした際に録音されたカセットテープの文字起こしが収録されている。

現在、オリジナルの資料は全て横田氏に返却し、東北文化研究室では録音・録画したCDとDVDを保存している。

4.『船形山手引草』

ここで翻刻した『船形山手引草』は、「吉田潤之介採訪資料」に収められた手稿である。潤之介がこれを手元に置くに至った経緯は明らかでないが、表紙に書かれた「升澤　喜左衛門」にある喜左衛門が升沢地区の早坂家の総本家であった早坂国男宅の先祖と考えられるため、その経緯は不明ながら、早坂国男宅で所蔵していたものと考えられる。

本書の中には、船形山に祀られるカミの縁起、山形側の行蔵院の縁起、了定法師の開山伝説、北条時頼の御所山封山伝説など、多くの伝承が記述されている。そのような記述は船形山に関する宗教民俗学的研究はもちろん。民俗学全般の研究に役立つのは間違いがなく、現在の山内の様子と比較しながら読むだけでも大変興味深い読み物となっている。吉田潤之介にとって、本書との出会いが、それまでもっていた船形山に関する素朴な探求心をより深めて行く契機となったであろうことは容易に理解できる。本書の解読に触発された潤之介は、刊本を中心とした文献資料を収集するのみならず、船形山を取り囲む宮城県・山形県の各地を奔走し、地元に所蔵されている文書収集や、聞き取り調査・祭りの実態調査を精力的にこなしていった。それがために、彼が収集した資料が膨大な量に膨らむ結果を生んだと言うこともできよう。

本書の存在はおろか、その翻刻が公刊されたという話は、管見の及ぶ限り聞いていない。その意味からも、本書の翻刻を世に問うことは、今後の船形山周辺の研究に対して、大いに役立つものと期待している。

5. 採訪時の録音テープ

調査時に収集した資料は、一般にそのメディアの点から文字資料・映像資料・音声資料の三種に分類される。そのような資料のうち、資料集などに収録されて公にされるのは、圧倒的に文字資料によるものである。これはおそらく資料としての扱いの問題に起因することであろうが、本資料叢書も、これまでに刊行された二巻はともに文献資料の翻刻であった。

そのような中、今回公刊する資料集では、あえて調査時の録音テープに収録された音声資料の文字化資料を掲載した。このような企画を考えた理由は、まず吉田潤之介の残した資料の中に、大量の調査時に録音されたカセットテープが残されていたことがあり、さらにそれらのテープの内容を実際聞き取ってみると、四半世紀以上前に実施された、今では聞くことのできない内容の貴重な資料が多々入っていることが明らかになったからである。

確かに、音声資料を扱うには多くの問題がある。まず、録音

対象となった会話がどのような環境で録られているかと言う点が問題となる。本資料集に収められている会話を聞いていても明らかなことであるが、交わされる会話の応答では、言い間違いは日常茶飯事で、余り考えなくの応答が見られ、お互いが全く誤解の中で話が進むことも珍しくはない。それは酒の席ではより率の高いものとなる感があるが、全く酒の入らない普段の状態でも生じうることである。またテープレコーダを目の前にした話者が、自分のしゃべったことが保存されてしまうことを考えて、どこまで本音を語っているか不明な場面も多々見られる。このことは、歌や昔話収集など以外の聞き取り調査の際に、録音機材を持ち込むことの是非として、しばしば話題になる点である。

そしてさらに録音されたテープの文字化の点では、本人たちが直接文字化したわけではないため、彼らが想定したのと同じ表記ができておらず、文字化したことによって、話者の主張をねじ曲げた形に固定化している可能性もあろう。これは自身が書いた「文字」と、言いっぱなしのテープに勝手に録音されている、「音声」といったメディアの扱いに起因する大きな相違点と言うことができる。

その意味では、音声資料の文字化された資料は、文字資料ほど即効力を持った資料として活用できるものではないのであろう。しかしテープに録音された内容は、その文字表記も検討しつつ、その内容の信憑性に常に留意しながら扱っていくならば、充分活用できる余地のある資料と考えられる。今回収録した音声資料の文字化が今後へむけてどの程度意義があるかは興味深いところであるが、この点に対する確認を、読者のみなさまにもしていただき、ご感想などお聴かせいただければ幸いである。

【参考文献】

・『黒高７０年の歩み』宮城県黒川高等学校同窓会、昭和四十六年十月

・吉田潤之介「宮城県黒川郡大和町吉岡の方言（上）」『民間伝承』三六―二、六人社、昭和四十七年七月

・『創立百周年記念　院友名簿』昭和五十七年十二月、國學院大學

・『創立百周年記念　仙台二高同窓会会員名簿』平成十二年十月、宮城県仙台第二高等学校創立百周年記念事業実行委員会

・東北民俗の会編『升沢にくらす　集団移転に伴う民俗調査報告書』平成十五年三月、宮城県大和町教育委員会

・小田嶋利江「吉田潤之介収集の船形山関連資料について―船形山に魅せられて五十余年―」『東北民俗』東北民俗の会。平成十六年六月

第一部　『船形山手引草』

［表紙］……

舩形山手引艸

舛澤

喜左衛門

［扉］……

舩形山手引艸

舩形山手引艸

［1丁表］……

舩形山手引草　　奥曲興作

一佛西方に出現して一切を致し聖人中ニ在て
人道を修め神東方に天下り此日の本を守護
し給へ直なる道を天照す御裳川の御流レ
治る御代こそ久しけれ抑大日本ハ陸奥出
羽両国の境荒神舩形山の由来を委しく
奉尋ニ神代の時龍王より國常立尊に捧ル處
則龍宮界より金銀を以築上給ふ霊山ニ
して金剛神の御守護なり又国常尊より

［1丁裏］……

此御山を豊玉姫に給わりて金剛山と号シける
扨此姫宮ト申奉るハ則龍神の御娘にして
彦炎出見ノ尊ノ御后後ニ飯豊ノ神社と号し
奉る所也惟以ニ渾〻沌〻たる一氣始て天地と分カ
るゝ時其中ニ一物を生ズ其形葦牙の如し化して
神となる国常立尊と号し奉る又一物を生ず其形
菌の如し化して魔となる神ハ本来清浄にして
明徳普く萬里を照し國常立ノ尊より國狭槌尊
豊斟〇尊《飯土煮尊大戸道ノ尊面足尊伊弉諾尊／沙土煮ノ尊
－大戸邊尊惶根尊伊弉冊ノ尊》を天神
七代と号し奉る伊弉諾ノ尊天瓊矛を指下し

［2丁表］……

〇孜盧島を得て遭合為夫婦して陰陽和合の道を
はしめ夫婦の道普く行れ天照大神天の岩
戸を推開き出坐の御徳を以天か下を照臨まし
〳〵て正直清淨の道を教玉へ又素戔鳴ノ尊有
山田の蛇を退治し八雲たつ出雲八重垣つまこめニ八
重垣つぐるその八重垣をと神録まし〳〵て和哥の
道を開玉へ大巳貴尊ハ諸人ニ福を与へ給わんとて
大黒天と顕レて世間を利益し蛭子尊ハ交易の道ヲ開

き和饒のとくを施して福徳を授け給わんとの御誓願
天照大神より忍穂耳尊瓊ゝ杵ノ尊彦炎出見尊〇

［2丁裏］……

〇草葺不合尊を地神五代と申奉ル葺不合尊
より人皇に譲位ましくて神武天皇日向ノ国より
舩軍を起シ龍雷の軍法を以て夷敵を平定ましく
て天か下大キに治る帝諸国に御幸し玉へて天下の
地形蜻蛉の如くなるを以て秋津洲と名附給ふ夫より
聖帝明君受継給へて四海ヲ統御し給へハ魔王の輩
よる方なく唐と日本の汐堺ちぐらか沖ニわび
住居すきまをねろふ魔風のくせ者折を
見合魔国ニなさんと計機を廻らすおそろしき
然ルに人皇数代にして朝綱漸くゆるみ乱臣賊子

［3丁表］……

起るの弊にのりて魔王の輩時こそ至れ金剛山
ハ無類の名山と頓て金剛山ニ分ケ登れハ當山の
御守護金剛神山ニ入レじと防け共数萬の悪
广せん方なく無理ハ一時先ツしバらくと谷の岩
間ニ閉籠る後か世までも此所御籠澤と傳
へたり魔王大ニ悦ンて夫より此山ヲ住所と定め
是を味方の根城として日本を魔国とならさんと
自貪多利魔王と改めて数萬の悪魔邪神を眷属
とし雲霧覆い暴風暴雨時ゝ山水溢

［3丁裏］……

洪水し或ハ流行の悪病折ゝに近国所ゝを踏荒シ
魔行ヲ顕す恐ろしき是ハ扨置阿彌陀如來ハ安楽
浄土にましくて十方無量の衆生を摂取し観
世音大聖至諸共ニ大乗法ヲ説給ふアラ不思議や
遥の東ニあたりて妖氣盛に登り愁雲俄に
起るを御覧じ是ハ必定魔王の所為日本元より
信心厚キ国土にして無量無邊の佛子あり若し
此侭ニ差置ケハ日本遂ニハ魔国とならんさあらハ悪
魔降伏一切衆生を救わんとで玉ヲ以鳳皇の形ニ

［4丁表］……

造り立たる鳳舩紫金の柱七宝ノカサリ錦の帆
順風ニ乗じて恒河沙諸の佛神ト共ニ極楽世界を
出航し西洋国を打過キて唐土国に使ヲ立文昌帝や
文宣王数の聖を誘て七夕峠天の川打越エ玉へて
夫よりも無雲天ニハ雲かなく無熱天ハあづがらす
無煩天ニハわつらいなし数の諸天を行過きて
急かセ玉へハ程モなく土卒天ニ着給ふしバし逼
留ましくて梵天王と諸共ニ高天か原ニさしかゝり

天照大神御一同金剛山ニ下るゝ貪足利魔王是
を見て阿弥陀如來を入レじと防キ山と霧と
［4丁裏］……
以城郭とし谷と川とを以惣堀とし雲霧起
雨風俄ニ震動し数萬の悪魔をのきさけぶ其
声ハ山も崩ツルゝ如く也其時阿ミた如來の御守護
三宝大荒神少しもさハかず山上に立顕レ鑓の石突ヲ
以岩石かつしと突給へハ火の光りほの走り出鳴雷イカツチとな
りて
ひかくぐわらくどうくと響渡りて恐ろしく山中
千峰千谷震動し猛火四方ニミちくて山ゝ峰
ゝ殘りなく皆草木ニ燃付ケハ魔王の輩大キに
驚キ山川萬里のちくらか沖より雨ヲよび霧ヲヨヒ
水ヲ運て防セけ共元より雷火の事なれハ火の勢い
［5丁表］……
いよくく盛ンにして魔王の屋形ニ燃付て天モかすめと焼ケ
上ル魔王も今ハ詮方なく谷のくまくく川の中我モ
くと逃げ籠る三宝荒神御覧してヱゝゝ汝
等何国までも逃さんど谷の回り川の口四方を
関留め天の川水関下セハ数千萬里の天の川
落る瀧水どうくと一時に山中海となり逆巻波
ハ満ゝたり魔王モ今ハたまりかね山上に立顕レ三寶
荒神を真中に追取巻く其時荒神少モさハかず
持たる利劔を投附給へハ貪多利魔王も同ク利劔を投
付たり何レモ無類の寶劔にて只空中ニ戦ふ其勢イ
［5丁裏］……
恐ロしとしも中ゝに申計ハなかりける掛る所ニ加勢として
魔利支天毘沙門天不動明王翔来る魔王の輩
是を見て其丈五丈余りの烈風魔王物をも不レ謂不
動を見かけ無二無三ニ討て懸レハ飛違へ二打
三打つくく推並へ無手と組荒ニあれたる
魔王の勢い不動モ後ニだちく黒から不動も
今ハ早大汗流シて真赤面たゝ心中に祈念して
我名ごそ不レ動ゆへ不動と名附神モ仏も皆
中間力を添よと云まゝに一心の精力ゑいやつと
こなたへかつはと引伏て縄ヲ掛んとする所ニ不思
［6丁表］……
議や忽消て跡もなし不動大キに怒り歯かミを
なして立たりしか是も其丈五丈余りにして荒ラ
獅子魔王と名のりて毘沙門目かけ斧ヲ打振り
討てかゝれハ毘沙門天ハ十文字の鎗追取りて
投戦ふ魔王いかゝしたりげん斧の柄中より打折其

俜消て跡もなしかゝる所ニ小山の如キ荒に荒たる天龍
魔王鉄棒片手に水車魔利支天を目かけて
討て掛レハ心得たりと鉄棒片手ニ受留め推並んて
むづと組ミちつとも引ケぬ魔利支天取て押へてねち
首セんとする所に是も同しく消失て行衛へハ更ニ
[6丁裏]・・・

傳へ蹴去レハはしめ此御山金剛山と号シける
其後三宝荒神悪魔ヲ降伏して中興し玉ふ
所を荒神山と号する也扨又阿弥陀佛ハ此御山ニ玉
寶舩ヲ止め當山八ケ所ニ八大金剛第一大靈大権
現と顕レ一切を利益し給ふ又玉鳳舩を止メ玉ふ所
を止舩原と号ジ蹴又舩形山舩ケ嶽舩ケ峠とも
申也夫よりも止舩原ニ大慈大悲の薬師如來舩
形山大権現と顕レ玉へ御浦ニ三寶大荒神
［8丁裏］……
八大金剛童子天照皇太神宮西宮大明神大弁
財天五所大明神大聖十一面観世音寶生神
山ノ神権現を始め奉り御峯ニ十萬八千佛
二十八靈権現愛染明王南都の大日如来十二天尊大
聖観喜天十二神将七福神彦炎出見尊〇〇葺不
合ノ尊稲荷大明神神變菩薩了定菩薩と現し給へ奥院ハ
寶鏡功徳水飯
豊大明神八大金剛童子八大龍王神等顕レ給へて即此御山
を飯豊ノ神社ト号し奉ル荒神山ニハ福徳大弁財天
荒神山大権現と顕れ三寶荒神毘沙門天稲荷大明神山神権現御
前立ハ魔利支天日天月天十二天七福神岩屋の
［9丁表］……

観音八大金剛大権現天照大神宮西宮大明神叱枳尼天
吉祥天観喜天大黒天毘沙門天金比羅大権現胎内
権現南都大日如來蔵王大権現神変菩薩前鬼
後鬼了定菩薩顕レ玉へ五所山にハ梵天帝釈
南都大日如來五所山大権現と現レ玉へ御後に
三寶大荒神御脇立ニハ大毘沙門天八大龍王神
御前立ニハ三十六靈権現天照大神宮西ノ宮大明神
五所大明神七福神大聖十一面観世音寶生神
八大金剛大権現稲荷大明神雄瀧ニ大聖不動明王
［9丁裏］……
雌瀧ニ水分ノ観世音地蔵菩薩御前川ニ八水神顕レ
給ふ又此御山上古ハ金蓮山と号しける荒血澤ニ
［一行抹消］
［一行抹消］
ニハ感満大聖不動明王金カラ童子制叱伽童子始
として三十六童子軍荼利夜刃明王大威徳夜刃
明王降三世夜刃明王顕レ玉へ行者澤ニハ胎内権現
神變菩薩前鬼後鬼孔雀明王道陸神山上山
下五寶善神仙人権現天王澤ニ廣目天持国天
増長天毘沙門天山神正観音如来澤ニハ大日如来
［10丁表］……

阿彌陀佛藥師如来宝積(ホウシャク)如來多寶(タホウ)如来日月
燈明佛大聖十一面観世音法王澤ニハ
法王大権現十六羅漢五百羅漢如意輪観音七鬼神
白山権現山王権現虚空蔵神霊澤ニハ御中主(ミナカヌシ)ノ尊
高皇産霊ノ尊神皇産霊尊を始奉り八百萬神の
御守護にて天神七代地神五代の尊霊八幡宮春日大明神
西宮大明神鹿島香取息栖(イキス)明神猿田彦(サルタヒコ)ノ太神稲荷
大明神牛頭天皇鬼子母神石凝(キシコル)尊玉屋ノ尊佛生澤ニ
文殊地蔵菩薩ヲ始め奉り御澤ニ八萬八千佛大梵天

［10丁裏］……

帝釈四大天皇一切天衆十六善神瑠璃(ルリ)光薬師
如来妙見菩薩精霊権現御本尊ハ則日光大権現
御浦ニ三寶大荒神御脇立(ワキタチ)ハ観世音大聖至船形
大権現金比羅大権現弁天澤ニハ大弁財天宇賀
大権現五所大明神十五童子三寶荒神叱枳
尼天吉祥天歓喜天大黒天毘沙門天馬頭観音
庚申佛七福神青面金剛童子等頭レ玉へ狐形ニハ
白岡大明神夫堅石船形山大権現蛇ケ嶽ニハ福徳
大弁財天三寶荒神蛇王権現荒神山ニハ三寶大荒神

［11丁表］……

八面荒神頭レ玉へ石ノ堂(イシノトウ)山ニハ石堂大権現南ニ南
岡大日如來北ニハ大楯(タテ)山大聖十一面観世音御うらに大六天王
五所山ニハ五所大明神大弁財天宇賀大権現十五童
子三寶荒神天霊山ニハ三光大権現三寶荒神御後(ウラ)ニ蔵王
権現法王権現不動明王瑠璃光如來七福神八大
金剛童子大日如來寶生佛等頭レ玉へ金清水ニも
水神権現船岡ニ船霊四社大明神三峯山ニハ三霊
大神宮則雪ノ神社と号し奉ル御中主尊高皇産
霊尊神皇産霊尊国常立尊より天神七代八百
萬神一切神祇武雷ノ尊霊金山産尊少童ノ命

［11丁裏］……

八大龍王神石凝ノ尊風神月讀尊素戔保ノ尊天照皇太神宮
始メ奉り地神五代ノ尊霊三光宮大巳貴尊蛭子ノ尊
飯豊大明神七福神玉屋尊級長戸邊命山祇命
十種大明神三霊大大明神雅産霊命猿田彦尊瓊矛
太神宮滄溟太神宮神變菩薩了定菩薩等出頭なり又美ゝ尽ニも
福徳大弁財天天石窟大神宮蔵王権現七福神
十一面観世音法王権現神變菩薩御うらに南都大日如來天御
中主ノ尊白髭山ニ白髭大明神西ニハ石頭山地蔵権現
と現レ其外諸佛神鎮護の霊山上ハ法華の峯高ク
下は法心の渓深くして諸尊の大法蔵をヲ具足ス即

［12丁表］……

奥羽ヲ脚下ニふまいて一目に是を観臨し八水流か分て
是を潤沃ス内ニハ雪と金銀魂を凝集し表ニハ玉石
奇巌を盈ミ寶珠枝葉［以下抹消］
を交じへ珍草地を覆ひ華ハ紫雲の如く
映じ紅葉ハ蓮華の如くニ顕ス異香妙潔ニして
峰のあらし渓の流レハ皆讀経奏楽の法音八功徳水
清浄にして心ヲ洗ひ如意寶珠を胸板ニ修ム東に
大陽と向イ西ニ素月を受上ハ近く星辰ヲ戴キ下ハ則
金銀の霊産ニ坐し天神降り地祇出顕し諸佛
［12丁裏］……
來光萬霊集会して千種萬化の表相顕然
として萬善萬福の感應一切を利益する處法
示自然の霊場諸尊の垂跡十方無量の淨土
を化顕し般若波羅蜜空無我の道場一切利
益の寶地なり常ニ霊明美妙を化顕して不思
義の天徳あり感應たとへハ影の軀クカ如く響の
應ずるが如く水の物を潤し火の物ヲかハかすが
如く天地の精霊佛神感應の理唯信念一心
の凝結ニ成就ス夫當山大霊権現の御本願と申
奉ルハ衆生済度を旨とし諸の罪業を消滅し
［13丁表］……

諸の煩脳を救心身正直清浄にして悪を去り善ヲ積ミ現世
福徳和平にして後世後生安楽を成就し給わんとの御誓願又雲居
春げき高天ケ原より天下らせ給ふ神〳〵ハ
安楽を成就せしめ給わん
六根清浄心清浄目に諸の不淨を見て心ニ諸
の不淨ニ不染身ニ諸の不淨ニ觸て心諸の不淨に
不染一心清淨にして則至誠至神の清淨と
只正直を一筋に首ニ戴く神／＼也正直清淨なる
ならハ神も佛も納受の鏡ニうづる一心ニ感應利
益の御誓願遥ニ遠キ唐土の聖りモ爰ニまし
／＼て大聖十一面観世音と顕レ玉へて人道成就の
［13丁裏］……
御誓願扨人道と申するハ其儀上下各職の分堅
く相守り家業精道百穀成就貨財ハミちく
平等ニ下なる者ハ上ヲ敬へ忠義ヲ尽シ能国法を
守るべし上なる人ハ仁徳高く義理深く国平らかニ
下安く父母ニ孝行第一ニ子をハ慈愛し教を立夫トニ
に貞烈妻ニハ義理を第一ニ夫婦和順し兄弟中能睦敷
兄を敬へ弟を愛シ長者老者ヲ尊ンて幼者賤者を
憐ミつゞ朋友平ニ信篤く心を研キ道をとき仁義礼信鏡ニし
昼夜心ヲうつすべし道理を守り人事を主とし

家富ミ栄へて財穀(ミチ)充内外共ニ和同して子孫
［14丁表］……
安楽長久なる是観音の御守護にて人道成就の
御誓願又大霊権現仰けるハ衆生ハ愚癡にして悪趣ニ
流転(ルテン)ス今我衆生(シュ)の為ニ戒行を定めて衆苦脳(クヂ)を
救ひ同しく一切を利益すべし此信念戒行不可
思議(シキ)無量功徳にして能其真實(ジツ)を修行すれハ
衆生則佛徳ニ至ルべしされハ能是を信受して惰(ヲコタ)ル事
なかれとのたまへハ則大聖十一面観世音其戒行を書記し
給ふ文ニ曰物ヲ盗ミ貪(ムサボ)ル事(ナカ)勿レ是を盗貪戒(トウトンカイ)ト
云益なきニ鳥獣虫に魚惣して生物を殺ス事なく
又草木の類をも猥りニ伐折ル事勿レ是を無益殺生ト云
［14丁裏］……
男女共ゝ他婬ヲ犯ス事勿レ是ヲ邪婬戒ト云酒ハ限(カキ)
りなき物なれハ其能程ヲ用ひて心乱シ荒(スサム)事勿レ
是を乱酒戒ト云偽リ云多舌多口ヲ慎ミ又人にたハむれ
侮(アナド)ル事ながれ是を偽
戯戒といふ又欲を放にしてこゝに長する事勿レ又物を争へす
－益の論議をする事勿レ
－是ヲ貪慾戒(ソンヨクカイ)となす世ヲ
疑り人を疑ひ又欺キそしる事勿レ是ヲ疑謗戒(ギボウカイ)ト云
短慮(タンリヨ)にして腹立いかりのゝしり又世ヲ恨ミ人を恨る事ながれ
是を瞋恨戒(シンコンカイ)ト云愚癡を起ス事ナク自其智慧(チエ)をミがき
又萬の事ヲ怠(ヲコタ)り倦(グダ)ム事勿レ是を癡惰戒ト云内外共
萬(ヨロツ)の奢リする事なく又益なき事に物を費ス事なかれ
［15丁表］……
是を奢費戒と云合て是を十戒といふ宜敷慎ミ
守るべし父母に孝敬を極め推して君ニ忠義を
尽スべし又誠を治めて一心清信成是を孝
信行といふ天の正質ニ従ひ心身正直清淨なる是を
質淨行といふ萬の事を慎ミ守りて天地の正徳を
成就するを慎守(ケンジヤウ)行といふ謙譲して萬を敬ひ各相
交るに礼義を慎ミ行ふを敬礼行と云萬の正道ニ
晋(スヽミ)進んで日月の運行する如くすミやかなる是を
精進行といふ仁義正徳行レ人事人道成就して天
下国家和平安楽成是を王法行と云人世は
［15丁裏］……
貴賤上下各其職分を慎ミ守り能家業
を修めて人道を成就するを人事行といふ人世ハ諸
行無常にして變化極りなく盛衰禍福浮沈(セイスイクハフフチン)の常
流転して定る事なし三世の心不可得(フカトク)也と
いへ共人世の変化流転の真理ヲ自得し深く

心源の至理を推シ一心則生鉄明鏡の如くニして
精進すれハ則三世モ悟ルベし故ニ是を悟世
行と云又物をこらへしのんて其心をやハらげ和同成
是を忍和行ト云世上ニ法ヲ勧て善ニ入又各我身
の分をも能しりて時として財穀を施スの類是を布施行ト云
[16丁表]・・・

各其靈妙の表相をうつし外ニ十六ケ所ハ開山
以来の出現合て八十八ケ所大天狗小天狗護法無
量の券屬(ケンゾク)或ハ其方を遷(センセン)りて何方ニ顯レ此方を
飛行し彼方ニ顯し遷變化顯自在の妙用
山中千峰千谷四十八流レ六十四瀧八功徳水ありて
廻り廻る事三百里拠此御山と申ハ東の方ニハ金
華山西ハ羽黒山月山湯殿山南ノ方ニ蔵王嶽北ハ
［18丁表］……
鳥海山ニ駒ケ嶽四方ニ名山備りて東ハ滄海(ハドウ)万里を
いたきツゝ西ニハ連山波涛の如く朝な夕なの御來光
日ゝに新タニ又日ゝに新タにして三徳一致の靈山と
三世(タナビキ)を照らす法鏡の功徳モ四方にみち／＼て紫雲
靡キ金光放(ハナ)ち靈妙美妙を顯し給へ共凡
夫ハ物を不知して以前の魔王のしわざにて鬼よ化(バケ)
物と取騒キ近寄ル物モあらざれハ因縁結(インエンムス)ぶ方便
もなく年月送ル其内に役ノ小角といへる人山ゝ峰ゝ
踏分ケて修験(ケン)の法を開かれし金剛山より出ル水
此丹生川を渡レ給へハ不思義やな朱成水ニ
［18丁裏］……
白キ蓮華(レンケ)の流レ來ル行者此由御覧して此水
上の奥ゆかし尊キ佛ましまさん是より山ニ登らんと
川ニ添ふて分(ワケ)登り急キ玉へハ無程も左の方成
山よりも一條の金流瀧津瀬(タキツセ)を紅(アカ)キ蓮華の
流レ來ル是仏神の御手引難在さよと分(ワケ)登ル
然ル處ニ白髪たる老翁壱人忽然と顯レ給へて
曰阿弥陀如來當山の悪魔降伏一切衆生濟度の為
西方安楽世界より恒河沙(カウガシヤ)の仏神諸共ニ御出現則
當山ニ玉寶舩ヲ止メ給へて信念至誠(シンネンシセイ)の行者ニハ
無量の福徳を授げ二世安楽を成就(ジヤウジユ)し玉ハんとの
［19丁表］……
御誓願しかあれ共凡夫ハ物を不知して近寄者もあ
らされハ因縁結ぶ手便(ヒタヅラ)もなく一向汝を待チ
玉ふ事年久し早く當山を踏分一切衆生の利益
せよ是より直に先導を致スべし我れ護應
澤ノ仙人権現也と夫よりも荒神山ニよち登レハ紫雲の
靡キ弁財天金光放チ白蛇ニのり十五童子の
御守護にて数の仏神諸共ニ顯レ給ふを礼拝ス
仙人権現の　を降伏し
當山中興の根本也とて大靈権現顯レ玉へて福徳成
就の御誓願夫よりモ三野輪(ミノハ)三所の権現久利加羅(クリカラ)不
［19丁裏］……
動を拝し蹴段ゝ山ゝ谷ゝふミ分ケて左の方より

朱成水是こそ荒血沢とて丹生川の水上なり
七瀧大聖不動明王拝し嶽登レハ無程水上弁財天
紫雲ニ乗じ五所大明神諸共ニ顕レ玉ふを礼拝シ
早五所山ニ分登レハ大日如來を始として数の仏神
御出現深く祈誓ヲかけまくも彼方此方を
ふミ分ケて峠ニのほれハ止舩原紫雲ハ四方ニ満〳〵
て則華ふり音楽起り大霊権現恒河沙無量
の諸仏神現し玉へてこハ難在〳〵と礼拝ス仙人
権現曰是ハ凡夫の為の御來光眼を閉て拝スべし
「20丁表」……
畏り候と眼を閉れハ不思義やな谷山共ゝ消失し
洪ゝたる佛土ニ變じ金銀瑠璃珊瑚琥珀〇〇
瑪瑙珠玉珎種の寶殿十二の寶蔵八功徳水清
淨ニ金蓮白蓮咲みたれ金砂銀砂や水晶珠玉
の光り異妙の香潔吹き乱レ諸菩薩天天萬種
の音楽何レを見ても仏神の実ニ歓楽ぞ難在
仙人権現ノ曰衆生ハ愚癡にして諸の悪業を作りて地獄ニ
流轉ス大霊権現大慈大悲の大願を以衆生の罪障を
消滅して極楽淨土ニ接取し玉ふ今是を汝ニ見
スべし早く此方えと見渡セハ修羅の地獄と打見
「20丁裏」……
得て突キ合伐合たゝき合追つ追れつ攻戦ふ
剣の山ニハ剣か草木と生茂り上より剣降下り五体を破り
血しほニ染ミ泣キさげふともかへりミず獄卒共ハ数多にて
鉄棒振立〳〵追立ル又火の地獄と打見得て下より
火焔燃上り上より鉄火ふり下り火の車ニのセられて
あつし〳〵と泣叫畜生道ニハからだ半分或ハ面或ハ
手足犬猫牛馬血の池地獄ハ八万由旬沈めハ鉄虫身
を裂キ破り浮メハ毒蛇か取付喰付巻〳〵ル又三途川の水
上ニ裸カてはたして川普請成就ニ近き其頃ハ一夜の洪水
押流シ昼夜ニ普請止ム事なし是ハ現世の博奕打野原
「21丁表」……
萱谷地藪の中池や小堀ニよろぼふて起づ轉つ這
廻ル是ハ現世の大酒のミ乱酒犯して其むぐい顔ニ泥ぬり
散髪ミ長しもふとしも丸裸むばらからだち荷わせ
られはたして野原追廻ハス是ハ現世の色過キて邪婬犯
た其むくいカダスぼまりて思案顔ひたいニしハを畳
つゝきれた衣しやうにきれ帯しめて此方彼方ニ這つぐ
ばふ是ハ現世の貧乏者家業惰不精道米金
そまつニしたむくい借ヲかへさずへそぬがれにせ物拵目を
ぬかれ物をむさぼり指ぬがれ偽云て舌ぬかれ業の
秤ニかがるも有常張の鏡ニうつすも有地こくの

［21丁裏］……

数ニ限なし仙人権現の曰汝早くみたの名号を唱て此
衆苦脳を救ふべし畏り候と一念彌陀佛則滅無量罪
念佛衆生接収不捨則発菩提心徃生安楽国
南無阿弥陀佛と唱れハ不思義や地獄の苦脳消
失せて忽菩提の心を発シけるニぞありかたき仙人権
現曰是より極楽世界を拝スべし浄土ハ遥ニ十萬億と
申せ共信念の自在ハ如一弾指と説給ふ我ニ従ひ
候得共早彼国土を見渡セハ慾悪煩脳有事なく
諸の憂苦もなし珎種萬宝無量の歓楽金
銀瑠璃珊瑚琥珀〇〇碼碯の七宝合成し山谷海川
［22丁表］……

ある事なく四時なけれハ不寒不暑八功徳水清浄
にして其味ハ甘露の如く異妙の香気普く薫し
七宝白玉水晶紫金の他各砂石を交じへて合成し
金蓮白蓮種〻の蓮華か咲みたれ岸の上ニハ栴檀
樹分陀利華名木名華咲さがへ宝樹ハ七宝珠
玉水晶紫金を交じへて合成し徳風起りて
微動ク其風ハ調和にして不寒不暑不レ遅レ不レ早
宝樹を吹音発無量微妙の法音萬種温雅の
徳香を流布しつゝ諸菩薩天人無量ノ妓楽天より寶
花ヲ雨し不レ老不レ死にいつも二十の佛土故無
［22丁裏］……

量寿国共申也阿弥陀如來ハ光明普く十方国土を
照らし無数の化佛現し蹴御左右ニ大聖至観世音
光明光り輝イて大乗法を説給ふ又大梵天帝釈
四大天王日天月天無量の緒天宝勝佛や多宝
佛天神七代地神五代聖賢天衆始として十方無
量無邊の諸仏神出現有て御歓楽役ノ行者も
諸共ニ見るニ余り聞しにまさる極楽をしバし
感じ玉へける仙人権現曰大霊権現の御説法我仏土ハ
十方無量世界の仏神及一切天衆の尊信帰趣
して寶ニも安楽をなす所也故ニ名付て極楽といふ
［23丁表］……

しかる故に諸仏神の御來光如此是を以其名号を
唱れハ一切の仏神ニ通達ス故ニ天上を願ふ者ハ則天上
に成仏し高天ケ原を願ふ者ハ則高天原に上り
各其願ニ應じて十方世界不至ト云事なし去レハ一向
戒行を修行して深く信念至誠ヲこらすべし扨信念ト
申するハ大霊権現大慈大悲の功徳ニよりて凡夫の
心を離レて頓て成道して仏の心にならんと思へ思ふ事
弥至信を凝也仙人権現曰夫當山ハ大霊権現一切衆生

濟度利益の其為ニ極楽淨土ニなぞらへ鎮座し玉ふ
霊地にして一切緒仏神の集合し玉ふ其故ニ信念
［23丁裏］……
至誠の行者ニハ現世て福徳如此未來は往生あの如く
二世安楽の御誓願無縁の凡夫ハ山ゝ峰ゝ澤ゝ
谷ゝ嶮岨艱難苦労とこそハ顕スべし因縁ありて
信念起ルハ諸の仏神出現ありて其霊相を拝して諸願ヲ
満足致スべし信念積りて成道すれハ如此と又
此御山の徳風ニ身ヲ触又法鏡功徳水の霊水ニ身
影をうづセハ諸の煩脳ヲ離レ自然に発心ヲ発ルべし
汝早く當山ヲ踏分ケ一切衆生を利益セよとありけれハ
役ノ行者承り御畏り候得共女人ハ五障三従の罪
深してケ様ニ尊キ御山ニハ参詣如何ニと申上三寶荒神
［24丁表］……
聞召尤也女人ハ参詣不叶と大霊権現曰我一切
衆生済度のため是まて出現セし上ハ女人といへ共
利益セずんハあるべからず乍去各女人の不淨ヲ憚り
禁制するも道理有其儀ならハ是爰ニと一ツの
印石ヲ取出し此印を授持する者ハ諸の災難ヲ
まぬかれ萬の煩脳を改て現世福徳安穏後世往生
安楽なるべしされハ能戒行を修しこの印を受持
して弥信念至誠を凝さハ参詣せしと不異女人
因縁濟度の方便と渡し玉へハ仙人権現推戴キて
役の行者ニ渡されて彼御山ニ納玉ふと傳へ蹴
［24丁裏］……
夫よりも拝し別て出羽国鸍の子より陸奥の国小
栗山同舛澤より出羽國観音寺陸奥国分大
倉より小野田本郷鹿ノ原口天地四方ニ南無阿彌陀佛
の六方六字に表ジ蹴六口ニこそハ踏分當山守護ニ
丈六の蔵王大権現天下らせ北舩原ニ鎮座し給へ
つニ去レハニや神や仏と申するハ奇妙
自在の徳ヲ顕レ岩ヤ石をも顕し蹴千樹や万
化の御姿皆山中に化現して信心衆生の其為ニ
福徳菩提の御手引扨夫よりも役ノ行者ハ神變
大菩薩と顕レ玉へし参詣賢固に御山の守護ヲなし
［25丁表］……
玉ふ兎ニモ角ニモ仏神の霊験利生そ難在是ハ扨置
奈良の都ニ住給ふ了定法師と聞得しハ一切經の奥深く
悟のつぼミ華ひらげ仏法成道まし／＼て神儒の二道も
曇りなく実ニ九重の春の空千種の桜をかき分ケて
葛城山ニ詣蹴不思義の霊夢難在や東をさして
下るゝ我住ミ馴レし墨衣網代の笠や奥深く千

代を籠たる節竹も一時の夢と突杖のしむるわ
らんじ長谷越に大慈大悲の観世音諸願成就の御守
護と祈り急ケハ伊賀国阿邊や山田の里すきて
分ケツゝゆけバ伊勢国鈴鹿の山ハ遥にて波モしつかニ
[25丁裏]……
をさまれる天照太神宮ヲ伏拝ミ心願深く祈誓して
安野津この津の帆かけ舩何の苦もなく桑名の
渡し尾張ハ成就あづ田の宮深く祈誓をかけ
まくも末は仏となる身なた生死の三河ヲ打越て
都ハ跡に遠江願望成就駿河富士伊豆ノ三嶋の
大明神拝し別レて筥根山相模の国も見得渡ル
早小田原の村すゝめ其名モ廣キ武蔵野や心モ
勇ム放レこま上総下総余所にして早下野ニ那須
ノケ原遥ニ見得ル日光山頓て御山ヲ拝し蹴急ケハ
無程関東陸奥の国堺堺の明神伏拝ミ関の白川打
[26丁表]……
越て浮世の事ハ須賀川や花の本宮打詠めたれか
我か身ヲ二本松世界の人を福島に伊達の大木戸
打越て鎧すり石虎の石屏風の石モ望ミなし
遥ニ見得る蔵王嶽をふし拝ミ白石川を渡りつゝ
深き心ハ岩沼やげんかい島ハ名のみにて宮野ノ
原ニ着玉ふ頃ハ秋ニハあらね共萩ノ名所もそこ／＼ニ
取つなげ玉田横野の放レ駒つゞじか岡をふし
をかみ野田の玉川渡り蹴遥ニ見得ル沖のいし
末の松山打詠め千賀ノ塩釜ふし拝ミ早松島の
玉錦キ都の松も及ばれじ心モ晴レて出ル月海上万里
[26丁裏]……
を照し蹴八十八嶋に映セしハ黄金世界も斯や
らんと飽ぬ眺めとわかれして旅立空ハ高城ぞ
と山路を分ケて一筋に早今村ニ着玉ふ先ツ晴渡ル
空の西遥ニ西を見玉へハ紫雲たなびき峯高く
銀の世界と被思て是ハ御山か在かたし何国か道の
しるべぞや履掛坂を打越て四方の原を詠レハ
誓も高き峯薬七ノ森を伏拝ミ遥ニ見
得る駒ケ峯大日如來を拝し蹴華渕山や
賀室ケ嶽霞にまごふ室根山五穀成就の権
現と都て聞し霧ケ嶽そもおそろしきアノ
[27丁表]……
山に大武丸と云シ鬼年月久敷住籠り魔行ヲ顕ス
其為に雲霧不絶ト云傳ふ扨其比の事なるが
田村将軍と云し人鬼神退治の折からに大慈大悲の観
世音勧請ありて夫よりも箆ケ嶽と申とかや遥

の西に戸澤山誓尊キ権現と薬莱山をふし拝(ヲカ)み和泉
ケ嶽や白髯山霞を拂ふ春風を仇とハ誰か云染(イヘ)だ
原の小叅モ青ゝと野邊の千草モみとりしてつづじ
山吹種ゝの花梢に傳ふ下り藤遠近聞(フチヲチコチキコ)ゆる郭公
遥の沖を見渡セハ民のかまとも賑(ニギハ)ひて田打(タウチコヒ)糞
附麦さぐり思ひ〳〵の装束ニ男女の働勇敷野
［27丁裏］……
堀の水の涓(ケン)ゝと鶉雲雀モ数しげく妻こふ
雉子のほろ〳〵討実類(ゲニタク)いなの風景や兎にも
角ニモ荒神の恵ミも深キ荒川(フカアラカワ)をワタシ
玉ふて夫よりも仙臺道ニ差掛り山崎(ヤスシッ)原を
打過きて四ツ屋の茶やニ休ろふて清水
の小里ニ急キ蹴早ほの川ニ
着玉ふ掛ル處ニ不思義や羽黒山の方よりモ
鳳ノ鳥忽飛來り御僧の御前ニしバらく舞(モウ)テ
夫よりモ川上さして舩
形山ニ登りけり是よりも此川を鳳の川と申とかや御僧此由御覧
して
ゝコハ難在〳〵
［28丁表］……
是仏神の御手引高根ニ見得し羽(ハ)黒山奥州
最初の権現と深く祈誓をかげまくも川に添て
登るゝ三ツ石山ヲ弓手ニなし〇石ヲ打詠め男
石女石を拝し蹴扨此石と申するハ舩形繁昌
其為ニ陰陽日月表されて鸍子村ニ鳥井
岩陸奥と出羽との表口西と東の外門に定置ルと
云傳ふ切石山ヲ打過キて誰か云初めし小栗山
峯の大栗ころ〳〵と薬師か森を伏拝ミ栗ノ小坂
を打過キて瀧の澤水打渡り鳳の川水ハまん〳〵と
天か岡の峯高く原の小叅モみとりして向ふに
［28丁裏］……
に見ゆる里邊澤御山の心奥深く妻澤川を
渡り蹴八魔か森を打詠め扨此山と申差るハげん
がい嶋に住居する八面鬼王と聞得(キコエ)しハこの日の
本に仇をなし討手下りて
亡され八面の其角ハ此山ニこそ飛來り魔行ヲ頭
ス其故ニ八魔か森と傳得たり椚平(クスノキ)を打過て
荒沢こそ差掛り舩形山を伏拝ミ人衆川を
打越て玉作か平ニて急カるゝ是より小瀧ニ差
掛り此方ヲ見れハコハ如何ニ十丈餘りの悪鬼顕レ
瀧ニ腰かけ壺の清水に足をひやし空眠りして
［29丁表］……

居たりける御僧是を御覧じて世の中ハとけて同しき
たき水の皆極楽の佛也けりと宣へハ忽消て
跡モなし此處にて垢離(コリ)をなし六根清淨心清
淨心願成就し給へと深く祈誓(キセイ)をかけまくも
彼方此方をかき分ケて苔岩大石飛越(タキツセ)はね
こへ落る瀧津瀬押分ケて川上深く登るゝ
然る處ニ断巌絶壁(タンガンセツヘキ)屏風の如く立すバり
其間も狹き一條の霧立登る急流に明月
かがやく大蛇(シヤ)の眼只一口と川中に御僧是を御
覧じて本來十方空三界惟一心との給へは
［29丁裏］……
是も同しく消失て屏風岩を打詠め
大瀧さして急るゝ右より落る急流ハ清水
川水の清ゝと早大瀧に着玉ふ此方を急
度見てあれハ南方屏風の如く立すハり
向ふハ十丈余りの瀧の水只どう〳〵と響キつゝ
岩につたミ梢にかゝりし其水ハ実ニ白糸や
山桜風吹散らす如くにて張り落る瀧壷は
藍ニ染たる如くにて逆巻水ハまん〳〵と左右を
よつく見てあれハなめらがまるろミたる苔むして
瑠璃をのべたる如也幾世經(ヘ)ぬらん此瀧の所ゝに
［30丁表］……
○穴(ホラアナ)あり天の岩戸の古を思ひたされて
我も又此御山をひらきツゝみたの光明かゝやか
さんと上を遥ニ見上れハまた残雪の深〳〵と雪
の下より生茂ル草木モ多キ其内に時やしりげん
たんほゝの花の色香も殊勝にて瀧ニ心を
うづされてしバしやすらい玉へける此時御僧心付
是尋常の瀧ならず尊キ神やましまさんと
瀧に向て合掌し南無〳〵と末タ詞の終らさるニ
遥の上に不動明王二童子と諸共ニ現レ玉へて
難在信願深く祈誓してたキにむかつて立
［30丁裏］……
玉ふ夫よりも此瀧ヲ南無瀧と申とかや唱ひ
違イし後の世ハなべ瀧とこそとなへつゾ然る所に何
国共なく山伏壱人立顕れて申様客僧ハ
當山修行と見受たり此所ハ清めの不動立(タヽ)
セ玉へて清の瀧キ御垢離(コリ)ありて可然御僧
此由聞玉へ頓て垢離をぞなし玉へ御装(しやう)
ぞくを改メらる山伏是と見ルよりモ御僧ヲかたに引
かづき只一飛と瀧の上上ルと見得しか我こそ
當山の御守護大天狗とかき消ス如く消にける

御僧歓喜の合掌し夫よりも尚奥深く

［31丁表］……

く（ママ）分ケ上ル湯谷地湯に御覧じて何方

此方を尋レ共霊地は更ニ見得分かず其時

御僧御山へ向ひ深く祈誓をまし〳〵て抑此御

山と申奉るハ神代之時龍王より國常立尊ニ

捧ル所難在も阿弥陀如來西方安楽世界

より悪魔降伏一切衆生済度利益（サイトリヤク）の其為

ニ恒河沙の仏神諸共ニ御出顕其時御守護

三宝大荒神悪魔天降伏し阿弥陀如來ハ則

此御山を安楽浄土ニなズらへ鎮座（ホンノウ）したまへ

諸の災難病苦貧厄及一切の煩脳ヲ救ひ

［31丁裏］……

諸の罪業を消滅（シヤウメツ）し諸の福徳を授現世安穏

後世往生安楽を成就し玉ハんとの御誓願

梵天帝釈四大天王宝生佛（ホウシヤフブツ）や多宝神日天

月天無量の諸天天下り玉へて御山の御

守護三宝大荒神ハ大天狗小天狗護法

無量の眷属（ケンゾク）を進退し或ハ大豆小豆粟

やけし共身を變じ木の葉の下ニ隠レつゝ

化して魔王と成時は須彌（シユミ）の御山ニこしをかけ

足てならくを踏ならす悪風悪霊世上ニあら

ゆる悪魔（マ）邪神を踏従ひ又大毘沙門天と申

［32丁表］……

奉ルハ国土の悪鬼（アク）天の邪鬼（ジヤキ）各二鬼を

踏従ひて立玉ふ雲居はるけき高天か原よりノ

真如實相中道の御神体天御中主尊を始奉りて

天神七代地神五代の尊霊月よミ日よミ風

の神雪や雷（イカツチ）雨の神遥ニ遠キ唐土の聖（ヒジリ）も

爰ニまし〳〵て三徳一致の霊山と三世を照らす

宝鏡の功徳も四方に満（ミチ）〳〵て役ノ行者の踏初給

べし六方六口と申セ共人里遠キ御山の凡夫ハ

物をしらざれハ近寄者もあら雪の過し

弥生の春の頃葛城（カツラキ）山ニ詣テしか御本尊の

［32丁裏］……

御告ニ奥羽の境金剛山新タ〳〵の霊山ニ数の

仏神まし〳〵て一切利益の御誓願仏法弘通（クツウ）

の其為ニ早く奥羽に下ルべし役ノ行者（ノタマハク）曰

見ルニ余り聞シに勝（マサ）ル金剛山我か踏初し

御山なり今より汝に任する也仏法興隆（コウリウ）旨と

して諸願成就を守ルべし早とく〳〵とありし

故又ふミ分ケて縁の綱たゝ一筋の心願ニ神

明仏陀疑所なく御山開興繁昌一切を済
度利益し玉へと肝膽(カンタン)砕て誓にしあら難在
や老翁壱人顕レ玉へて曰ク汝當山繁昌一切
［33丁表］……
利益の大願と然らは是より直に一百日の行法ヲ修
し其後御山開かれよと御米三合玉ハりて我れ
仙人権現也とかき消ス如く消玉ふ難在〳〵と御跡
三度禮拝シ笹を結ンて庵(イホリ)となし日〻の行法
不怠昨日今日とハ思ひ共月日ニ関守(ホウハン)するされば
早百日を充(ミチ)ニけりさあらハ御山に登らんと蔦(ツタ)を結て
注連(シメ)となし木皮ヲ以法冠とし金剛杖をつき鳴らし
御山をさして登る〻然る處ニ山伏壱人立顕レ我れハ
當山修行の山伏也御僧モ修行と見受たりさあらハ
一所と云ま〻にかき分ケ推分ケよぢ上り何方也と
［33丁裏］……
見れハ止舩原紫雲靡キ音楽興り金光(クワマ)光放
て大権現顕レ玉へて難在心願深く祈誓して北舩原
にさしかゝり蔵王権現十三佛数の仏神まし／＼て諸
願をかのふ御誓願拝し別レて北か方青鹿森の峯傳へ
爰ぞ荒神大権現十五童子や風ノ神数の仏神
拝しける御前川を下られて護應沢ニ差掛り
仙人権現ふし拝ミ山中賢固の御守護と下り給タル
箕輪(ミノハ)三所権現久利加羅不動(クリカラフトウ)を拝し蹴材木岩
を打詠め龍の瀧ヲのぼられて御沢ニこそハ
着玉ふ今宵ハ爰ニ通夜して神も佛も
［34丁表］……
落合の胎内(ホラ)〇の岩枕明て急げハ無程座禅(ザゼンイシ)石
業の瀧ヲモ拝シツゝ御釜石ヲ行過キて八万八千佛を
礼拝シ白水川を打詠め愛染明王(アイゼンミヤウワウ)庚申佛急キ玉へハ
天照大神宮大黒天毘沙門天数の仏神拝シツゝ左に
當(アタ)りて荒血沢七瀧大聖不動明王ヲ拝シツゝ
登レハ無程水上大弁財天五所大明神をふしをかみ拝シ
別レて夫よりも五所山ニ急るゝ早御宝前ニモなり
しかハ垢離やうかいや身を清め御前川ハ八水神
御瀧ハ大聖不動明王御本尊ハ南都の大日如來則五
所山大権現御脇立ニハ八大龍王神大毘沙門天
［34丁裏］……
御浦ニ三宝大荒神其外三十六霊権現の御守護を
拝シわかれて護篭(ゴロウサハ)沢権現役ノ行者をふし拝ミ是
開山の高祖とて前鬼(センキゴキ)後鬼ト諸共ニ深く祈誓をか
けましも上り詰たる龍王瀧拝シ別レて胎内権現
遥ニ見得ル西ノ峯天狗か岩屋ヲ御覧じて沢ヲ傳へて

わげ登り南舩原七峯八澤数の佛神拝しける
堅(タテ)石舩形山大権現蛇ケ嶽より荒神山三宝大荒神
石堂大権現大楯(タテ)山ニ十一面観世音大六天王天靈
山に三宝荒神三光大権現南に南岡大日如來御所山に
五社(所)大明神南ニ當り三峯山高天ケ原ヲ表
[35丁表]……
されて此日の本の神靈の天下らセ玉ふ御山と深く
祈誓(ケン)ヲなし玉へハ不思義や紫雲靡(タナビキ)キ八百萬の御神
現し玉へハ難在〳〵と礼拝モ止舩原ニ立戻りふたたび大靈
権現ヲ拝シ玉へハ山伏ハ夫當山の御誓願新タ〳〵ニ
まし〳〵て一切利益の御山也と則錦(ニシキ)の袋(フクロ)を取出し
是こそ大靈権現の御説法授記し玉ふ處の金剛
法蔵經及戒行今汝ニ授く深く信受して一切を利
益セよと渡シ玉へて夫よりも山中堅固ニ守ルべし
我こそハ白岡大明神と白狐(ヒヤクコ)の形ヲ顕シ玉ふ春の末夏の始
の其頃に白狐の形を顕せるいわれハ斯と傳へタリ
[35丁裏]……
御僧此由御覧ンジて難在〳〵と御跡三度礼拝シ再度
六方六口ヲ踏分玉へて夫よりも聖武皇帝御寶祚
万安聖德無窮天下太平国土安穏五穀成就一切安楽の御勅願を
捧ケツヽ別當寺院ヲ定られ御山を繁昌なし玉ふ
是ぞ當山の中興第二の高祖ト仰かれて荒神山
五所山護應(ゴヲウサハ)沢止舩原南舩原天靈山三峯山等各八
ケ所ニ了定権現ト現レ玉へ福徳菩提(フクトクボダイ)の御手引御山の
御守護なし玉ふ夫よりも因縁篤く信心至誠の人多く
日ヽ月ヽニ年毎ニ参詣弥まし御山の繁昌衆生
の歓幸大方ならず立テ申セハ立間ニ叶座シて申セハ立ぬ間ニ
[36丁表]……
叶とて我モ〳〵と信心の佛徳(ブットク)神徳人の徳三徳一致感
満(マン)の我身をてらす一心に仏の誓難在扨夫よりモ五百
余年の其間御山繁昌一切利益ノ其内ニ封山なりし
因縁を委敷尋奉ルニ出羽国村山郡と聞得しか
龝(龜)子村の山奥ニ茶屋て世渡ル雨蓋の在所は名高キ
桜屋か壱人娘ニおはづとて年ハ二八の八重桜咲か咲ぬ
か郭公問てしらバや女郎花早疾起キて今朝よりも
男ながセのなげ嶋田髪の飾りも美敷金しや紫
玉錦梅に鶯華に蝶銀のかんざしさわやかニ朝日に
うつす客の顔色しろ〳〵と口べにも桜ニまがふ
[36丁裏]……
粧也はだニハじゆはん幸菱(カ)若紫の染色も
千代よろつ代を松竹や祝の龜に口吸龝(龜)心を
籠し上着ニハ結の神の引合色ハ愛敬吉岡

染可愛の人ニ小車や廻り會たい紋所しその散らしも
花やかに文玉草を書つはたなひけ〳〵〳〵の女郎
草ミやうかに叶我らハ茶屋ハはんしやうふきのとう
祝ヲ籠ル金銀華目出度事ヲ菊の花萬
歳楽と栄ふらん花の姿ニ風わりと柳の腰の
たおやかに結び下ケたるしゆすの帯白や浅
黄と思ハずニ紺ト萠黄の千鳥かげさとれとかぐす
［37丁表］……
まへたれや心をしむる玉たすき賑ふ茶屋の習ニテ
小ずまをしやんとゞあけてあめやさどうやくるミ餅
酒モ肴モ数〻ニ御休ミ被成と参詣の行者をムカフ
其内ニ五十路ニ近キ御僧の旅の労と打見得て片
手ニ天蓋片手ニハ千代を籠たる節竹の杖ヲ力ニ
歩ミ來ルお初ハ是を見ルよりモサア御休ミと天蓋
とりて棚ニ上先ツ御茶一腹ト差出セハ御僧悦此上
なから水一ツ所望〳〵とありけれハコレ此水ハ當所
の名水龍宮より涌來ル故龍水とこそ傳へしか御上ケ
被成て御ろうじまセ御僧是を聞召弥珍敷
［37丁裏］……
名水よ色モ風味モ格別と賞じ玉へハ夫よりも
早日モ西ニかたむきて御寺まてハ叶まじ今宵
一夜所望ぞとわらんじ解て奥坐敷頓てお
初ハ酒さかな御旅労レの折〻ハ御酒ニまさりし物
ハなし御上被成て御慰奥山深き此在所猿の様
なるわたし共御見苦フハ候べし去なから
御壱人ニテハ御徒然もの兼て在所の木伐うた
諷ましよとてうたの数〻郭公猶まさりづる
風情也蒐ル所ニ當山の別當堂源坊湯治の
かへりと打見得て供人大勢引連て通り掛レハ
［38丁表］……
此唄声遥ニ奥を見てあれハ御僧壱人おはつか相手
性得邪智成堂源房心に一物差挟ミ兼て親キ
お衣か茶や待設たる奥座敷手と手を取て
入合の今宵ハ爰ニ一宿と酒モ肴モ夫〳〵に抱の
女諸共ニ車座敷に居流レてお衣か毒味も
恋のミに堂源房ハきけん笑顔て三献まてハ
手前の物相老の衣こそ目出度けれとお松ニ
さすお衣モ三こん堂源様牛蒡かお好な此
衣モおまめてくるみハよろこんぶ二タ心なき
蛤貝片思ひとハ誰か云いもセのちきり根深
［38丁裏］……
ぞと目出度物ハ数の子ニ鮭の肴もとり〳〵に

車ニ廻ル盃モ千鳥ヲかけて思ひざしあいよにあいよ
袖の下つのる恋詠のくゞミ酒さしづさゞれづ
唄舞も顔ニあかねや千鳥足堂源房の伝に〳〵
ハお初を一寸ト呼いれよとハツト答て下女のお島
ハ斯とお初ニ告けれハ兼てかしこき生レ付心の内ニ
思ふやうなびげ〳〵と文玉章数限りなく
さま〴〵ニ口説がれたりし事もありさりなから
女狂ハ御僧様の作法てなし世上の誹り
もはかられズ我身の上も親のゆるさぬ色

［39丁表］……

恋ハ叶難しと振切て今日奥座敷の唄の声聞
取たるハ必定也必お袗がはがらいて我を恥む
為成べし病氣ヲ云て行かずんハ又もや難
題はがられず
いづそ行すバ叶フまし酒と肴を小風呂敷御免ト云
て奥座敷
遥ニ下りて手をつかい扨此頃ハ御湯治御満足今日
御帰山と聞からハとくに御見目申す筈なれと
何やかやとて其内に御使受し上からに

［39丁裏］……

只今参ル不調法御免じ被成て下さんセ
寸志なからモ酒肴笑を含めて目遣いニ口の
車の落坂初の心ニ引替て飲や謡や夫〳〵ニ
お袗か胸にたく煙早更渡ル春の夜の御休ミ
被成と酒の肴下ケよ〳〵と下女共ハ勝手にこそハ
運び行りんきのはしを幸と頓ておはつハ暇
乞お袗ぞ今ハとげ〳〵と枕屏風をそご〳〵に一夜を
千代とちきりツゝ　是ハ扨置御僧ハ茶
やのおはつか情ニて旅の労レモ漸ゝに早晴レ
渡ル朝霧や峯の姫袗みとりして谷の

［40丁表］……

鶯聞初むる山のいろ〳〵面白く岩根か瀧の音
高く稲倉へぐりを打越て急くニ程なく御寺
ニこそハ急き給ふ夫よりモ大霊権現弁財天毘
沙門天大黒天五所大明神始として数の末社を礼
拝し今宵ハ御寺ニ通夜して明日ハ御山の参詣モ
此由斯と御寺の役僧兼て別當堂源坊言含
置たる臺所今宵ハ泊りの行者餘多ゆへ奥
の座敷ハ一ゝ取込御見苦敷ふハ候得共此所ニ御休ミと
莚ふとんニ薪の枕御僧是を御覧じて是モ修行
の功徳ぞと三更四更の夜モ深けて五更の天

［40丁裏］……

モ開ぐれハ役僧出てサア御参詣御出立是當
所の山法ハ通夜ハ百疋山役銭ニ先達銭合て百疋
道銭橋銭お小屋の賂是亦百疋是此通りと書
立壱枚差出セハおはつか故（ユエ）とハ夢ニモしらず
蒔たる物ハ種と也入たる物ハ祈祷となる耳ヲ揃て
三百疋渡し玉へて参詣守備よく夫よりも
鹿ノ原口ニ差懸り奥州差て越玉ふ月日
積りて廻国も首尾能修行願成就帰国
目出度時頼公四海の波モ静にて国モ納る
時津風枝もならさぬ御代なれや心も深キ
［41丁表］……
雨蓋タの茶屋のおはつか其情ケ金剛山の御寺の
貪欲信心行者の妨ト隠シ目付を被下て
容子ヲ聞ケハ當所の別當堂源房女狂ひの
大一番先キのしだらモお初ゆへ扨此比ハ益スヽ色ニ
ふげりて寺内ニも餘多の女ヲ抱置キ婬乱（インラン）ほう
らづ限りなく銭と金とハ土砂とけちらして行
者の難義山役銭も弥ましにそごよこゝよと
名を付て餘多の金銭貪取役僧共を始
として山中不残本寺の風俗慈悲の心ハ扨
置て欲心仏の本尊を昼夜モ分ズ念じ

［41丁裏］……
ツゝ此由斯と聞召時頼公の仰ニハ山法師共ヲ追
ちらし寺院ニ火をかげ焼拂ひ荒神五所山
是より三百年の其間稠敷封山参詣停止致ス
べし牧野小太郎五百餘騎出羽をさしてぞ
下ラルる
是ハ扨置堂源房ハ時頼公とハ夢ニモしらす
仕濟したりと悦ンて尚モお初ニ心を寄度ゝ
しのぶ山道の今宵ハ霧モ深草やお初〳〵と
云声ニハツト答て表の戸コリヤ御坊様かよふ御出
何方への御通りかげ御房ハ是を聞よりモ今日行
［42丁表］……
者衆の中天狗にやら〇て夫を尋（ツカモレ）に出たるか
霧の深キに山迷ひ是まて下り候也早夜に
入でハ急かれす今宵一宿所望ぞと草鞋といて高
あぐらおはづか心に思ふ様是迄度ゝ來レ共持病のしやくや血ノ
起り
いろさま〴〵に持なして帰したりしか又もやねたの
すりこん尤（カ）如何かわせんと一ツの思慮（アン）下女のお星にいふ
含メ酒と肴を取出し善に持成（モテナシ）早御休（ヨキトリ）ミ
とふどんに枕持出レハ其手を取て口説事去年の（コッ）

春より度〻に文玉章も数しれず恋しなつかし
やるせなく千〻(チ)ニ心をつく〳〵し兼て難所の山道をそもし
［42丁裏］……
を思ふ一念ニ平地を歩ム心地して真昧闇(マックラヤミ)ノ
霧の夜モ十五夜月を見るやうにそもじを
當と忍びしハ實(ケニ)ニ深草の少将も我ニハまさじ
女郎花なひがセ玉へとありけれハそこてお初
か申様仰御尤ニハ候得共隣のお杢ハ数年の
御中今更わたしか吹分ケて邪魔なあらしと
お杢か恨ミ凡高キも賤キも恋の道ニハ隔なき
たとへわたしかやぼしやとて人木石ニあらざれバ
色めく恋のなかるべきお松(マツ)か方ヲふつツりと後
方切レた上ならハ兔ニモ角ニモ菊の花
［43丁表］……
恋ひし可愛の其故にお前のお顔を見ル毎ニ
わたしか胸の芍薬(シヤクヤク)をかほよ草とハたかいふ初た
朝な夕なの乱レ髪住居の床ニシヨンホリと
サア聞たと障子ぐわらりとお杢かによつこりひつくり
もつくり堂源房コリヤお杢か何しニ來たお杢は是
を聞よりモ恨めしけ成ル顔をあげ堂源坊をつく〳〵と
扨此比ハ文の便モ絶(タイ)〳〵ニ音信迚モ無からハ夢
見モ悪敷胸さハき案じ煩ふ折からに浦噎(フク)風
ニさそわれて心ならずモ障子こししのんてきけハ
おまへの御声ニ恢(コライ)へかねたる恋の道御ゆるし
［43丁裏］……
被成て下さんセ過にし弥生の春よりモほれつ
ほれたる合ほれや恋の大綱ちきりの錠(イカリ)
しめておろした其上ニ水も外にハもらさじと
祈證誓紙の数〻を書て封じて愛染さた
五年の間も一時の栄花ふつて〳〵(ヤス)雨ふり花水
のあわとハどふよくなうつり安キハ人心此山中ニ
我壱人捨(ステヲ)小舩とハうらめしや鮑(アハビ)の貝の片
思ひそれ程すかぬ自を恋ひし可愛と何故ニ
わしハ牡丹ニおまへハ獅子梅よ鶯見立して
蝶よ花よとむつ言モ云かわセしモ徒(イタツ)ニ
［44丁表］……
斯賤しき身の風情いつぞ殺して被下と伏沈(シツ)ミ
てそ泣にける掛ル處ニ役僧壱人葦駄天走リ
ニ翔來(キタリ)鎌倉よりの下知として牧野小太郎五百
余騎尚近国の加勢二千余騎當山を焼亡シ封
山セんとて先陣既ニ鳥井岩後陣ハ未タ久連(クレナイ)内や
窪(クボ)の道筋雲霞の如く攻登ル兎ニモ角ニモ御帰

山ありて御評義とあわ正敷ぞ申上堂源房ハ
是を聞何鎌倉よりの討手とや罪なき我ゝ焼亡ス
抑當山と申するハ聖武皇帝の御勅願天子
の御倫旨ある上ハ武家の指圖ハいらぬ事寄手
［44丁裏］……
ハ何百萬モあらバあれ稲倉へクリを切ふさ
き岩ノ根か瀧ニ兵を伏セ天狗か森ニ奇兵を
備へ峯ゝ山ゝ所ゝに物見を置て荒神山ハ二番
の取手止舩原ハ詰の城出羽奥刕ヲ一目ニ見落シ
遠く來らハ遠矢ニかけ近く來らハ一騎討落
花の如く討ちらし夫よりモ其勢ひニ乗じつゝ関
東一ゝ攻落シ頓て都ニ参内し罪なき由と奏
聞セハ出羽奥刕ハ御寄進物一ト先御寺ニ帰
らんと早御寺えも成ぬれハ過にし元暦の其後
ハ平家の落人當山初所ゝの山奥隠レすむ
［45丁表］……
頓て使を立られて加勢をこそハ頼まれたり
寺中門前僧法師山先立や強力共獵師
木こりに至ル迄都合其勢八百余騎各手分
を定め蹴夫よりモ堂源房ハ三百余騎を引卒シ
稲倉へぐりニ馳向へ大木小木を伐倒乱杭逆茂木
透間モなく僅の細道只一筋こゝを戦場と定め蹴
是ハ扨置牧野小太郎五百余騎出羽国ニ走
下り鷲巻原ニ陣ヲ取山形米沢由利庄内
新庄最上近郷の軍兵をかり集め先着到り
記るニ富沢太郎元綱楯岡修理之助
［45丁裏］……
義治天童次郎定国山形備後戸澤十郎
坂田備中守川合尓七安藤武丸和田大友舛渕
松尾小山の一黨大山平国始として都合其勢
四千五百余騎まんまく次第ニ打つゞき皆家ゝ
の簇の紋澤瀉輪違藤や九曜ヤ梅鉢の
ちつ共引な猪や敵ニあふたら猪狂ひ只一口ト
狼や虎ニ従ふ風車いざやと組ムモ熊の猪
時の太皷もどう〳〵とかゝれ〳〵と扇けり團も
共ニ夫〳〵ニ味方ヲ勇ム帆かけふね敵を射
ちらす弓矢の紋今度の軍に梶の葉や
［46丁表］……
ばしやふも餘多打見得てぶとうモ揃ふ一文字
敵を一ゝ桐の紋比ハ秋ニモあらね共敵ハ乱レし
糸すゞきはつと飛散萩の花轡橘四ツ
目ノ結錢や牡丹や菱の紋蝶や柏や菊の

花ミやうかニ叶花軍敵ヲ巴ニかけちらし目
出度国に桔梗の紋千代ヲ籠たるふし竹や
常盤の杢の萬代の千秋楽とまつ矗屋
国も治る福寿草風深山の春風ニ彼方
此方とひるかへす魏ゝだう〳〵たる其勢イ當りを
はらい鑓の穂先キハ津花の如く大はた小
［46丁裏］……
はた馬印シへんほん〳〵と押立〳〵荒神さして攻め
登ル急ニ程なく雨蓋にも成りしかハ此所ニ本陣ヲ
据へ時頼公の賜ニハ綾の小袖に黄金添てお初
か方コハ難在〳〵と押戴キ夫よりモ牧野小太郎
敵の容子を尋レハ稲倉へくりに出張して必死
の覚悟を聞よりモ味方の勢ヲ三手ニ分ケ先
陣已ニ稲倉へくりに攻かゝる待もふげたる堂
源坊へぐりの出先ニ射手ヲ揃て指詰引詰射
ル弓矢寄手大勢と申セ共駒のひつめも立難く
岩石峙上ニハ高山聳下ハ名ニあふ丹生川の
［47丁表］……
稲倉渕とて藍に染ミ漸ゝ歩ムへぐり道天飛
鳥ニあらずんハ如何てか是を渡さんと寄手モ
ひるんて見得たりける堂源房ハ是と見て兼
て馴たる通ひ道飛鳥の如く只壱人多勢か
か中ニ割テ入西から東ニ一渡り北より南ニ一渡り
蜘手かくなわ十文字真向立割車切當ルを
幸伐散らセハ死骸ハつんて山をなし血流レて
川と也兼て朱なる丹生川モ比ハ秋ニはあらね共
金剛山の秋の暮紅葉ヲ流スか如く也寄手
の内より是ヲ見て安藤武丸と名のりて切て
［47丁裏］……
かゝれハ心得たりと渡り合上段下段と戦ひしか
和田大七郎と名のりて弓手の方より横合に
切てかゝれハ飛違ひ横ニ拂ひハ胴切ニ透
間を切込ム武丸か太刀を受留メ直ニ付込ミ
から竹わり大友太郎元久是を見てそこヲ
引なと大太刀水車ニ切て掛レハ受流し
はつし／＼丁／＼／＼堂源いらつて討太刀に
鍔元よりも打折レさそくの元久かへくゞつてむ
んづと組ムめんどうなる下郎めと鎧の
上帯かへつかミ遥の谷ニ投落されみぢんニ
［48丁表］……
成ツて死してけり大友次郎是を見て兄の敵を余
まさじと切て掛レハ受流ししのきを削り鍔を割切先

より火焔(エン)を出し秘術を尽して戦ひしか堂源打太
刀受損じけさかけニすつとも切下ケられよろ〳〵たち〳〵
よろめく所を付入付込ミ唐竹わり夫よりも敵陣深
く欠(掛)ケ入て當ルを幸イまくり切切て〳〵切散セハ
只壱人に伐立られ秋の木の葉の散ル如く村ニ
はつと逃散たり堂源悦び軍ハこふこそす
る物と本陣さして行ニケる寄手の先陣初手の
軍ニ敗北(ハイ)し雨蓋の本陣ニ逃帰り次第を斯と
［48丁裏］……
告ケれハ牧野小太郎是を聞難所の勝負ハ是
非もなし敵陣(ヒキヤウ)よりモ切込レ只壱人の働キニ斯まて
敗軍何事ぞひやうみれんの味方の有さま
明日の軍ハ我の先陣敵を一ゝ討破らん
と兼て用意を被成蹴(サル)不レ敗(ヤブレ)の地ニ立て敵の
敗(ヤブレ)ヲ不レ失(ウシナハ)ス是軍畧の秘法也舛渕権太に
三百余騎稲倉山の沢傳へ後を上りて峯を
越シ敵の後を攻られよ調し合て夫よりモ五百
余騎を引卒し大はた小はた馬印シおろす
深山の春風ニ何方此方とひるかへし鑓薙刀(ヤリナキナタ)ハ
［49丁表］……
津花の如くいなくらへくりに攻かゝる堂源房ハ
是を見て昨日の軍ニ尚こりず攻來ル敵ハ油
断かならず勝て甲の緒をゞル大海坊ニ七十
騎か様〳〵と計事牧野小太郎大音あけ荒
神山の山賊法師首をとらんか其為ニ是まて
推参致たり数ニモたらぬ坊主首入用とてハ
なけれ共汝か罪悪重キ故世上の人の見セしめに
覚悟をセよと呼ハりたり堂源坊ハ是を聞
何北條時頼の討手とや抑當山と申ハ人皇四
十五代聖武皇帝の御勅願天子の御
［49丁裏］……
綸旨あれハ武家の指圖ハいらぬ事悪逆
深キ時頼め汝諸共逆はつつけ未来ハ修羅
刀山の地獄よりならぐニ沈ミ果ぬべし寄手ハ
何百萬モあらバあれ一度ニかゞれと呼つたり
牧野小太郎是を聞悪キ山賊法師の悪言か
なかゝれ〳〵と下知すれと一騎討(ニウ)ヲモ難成
岩石峙(ソハタチ)へくり道大木小木を伐倒シ乱杭
逆茂木透間モなしへくりの出先ニ討手(テサキ)ヲ揃へて
射立レバ近寄ル事ハ中ゝに堂源房は
高笑い如何ニ小太郎鎌倉邊の化粧軍
［50丁表］……

ニ違ふたぞ矢先キかいやなら弓(ユミ)なバ射まじ
是えくと扇(ヲフキ)ヲ開イて嘲(ワサケ)レハ兼て短氣の
小太郎か岩根をけタテ翔來ルを堂源
房モ走り出へぐりの中て切結ぶ何レモ劣
らぬ達人の秘術を尽して戦ひしか小太郎
足をふミはづし藍に染たるいなくら渕水
花散てあつはくく兼て得たりし水練の
水底くゝつてようくに本陣さして逃帰ル
堂源坊ハ是を見て只一さんニへくりヲ越シ村雲
たつたる真中に面モふらず切て入當ルヲ

[50丁裏]……

幸イ切立れハ牧野小次郎同三郎兄の
敵ヲのかさじと弓手妻手より切てかゝる弐人を
相手ニ戦ひしか兄弟共ニ数ヶ所の手疵郎
等共ニ助られ本陣さして逃帰ル大将な
けれハ寄手の勢我もくと総崩レ雨(アマ)ふた
さして逃て行く是ハ扨置舛渕権太
兼て嶮岨ヲようくニも早峯ニモ一弐丁(アイ)登リ
詰たる大難所思ひモよらず大海房會圖
のはたヲ引立レハ件(クタン)の伏勢一度ニ起り
山の上より一目に見おろし大石大木投かげ

[51丁表]……

るれハ手負死人ハ数しらず舛沢権太はかみをなして
立たる所を大海坊弓矢をついてきつてはなせハ
-咽ふへよりも背中をかけて射通され其侭そこニ
死してけり討残されし寄手の勢其形勢を見
るよりも我もくと本陣さして逃帰ル是ハ扨置キ
牧野小太郎今度の軍ニ打負手負討死数多
にて敵ヲ一騎モ討ざれハやすからぬ事ニ思ひまふだ蹴
夫よりも雨(アマ)蓋近所の百姓猟師木樵りに
至ルまて悉(コトゝ)く召集め此度鎌倉北条時頼
公の仰ニ依て荒神山平均ノ為出張セり
然レ共當所ハ第一不案内敵ハ難所ニ

[51丁裏]……

備ヲ立て難所の百騎モ一千騎ニ當ル中
力攻ニハ叶ふまじ古人も百度戦ツて百度
勝ツハ善の善成物ニ非ス不レ戦して人の兵(ヘイ)を屈(クツ)
するハ善の善なる物也と汝等如何ニもして味方
勝利の計を以我ゝを導キ堂源房を生とる
ニおゐてハ恩賞ハ望に任スべし各遠慮なく所存を
申出らるべしと小聲になりて申ける其時老人
進ミ出テ是より北ニ當りて桧棚ト云所有此澤

よりモ辰巳ニ向荒神山の後傳へニ山ヲ越味方
の勢を五手ニ分け一手の勢ハ荒神山一手は
［52丁表］……
止舩原一手ハ御寺を焼拂らへ一手ハ稲倉の後を攻
一手ハ前より攻かゝれ(ラ)ハ鬼を欺く堂源房何かハ
こらへ可申如何ニ〳〵と申上又もや一人進ミ出
堂源房の用心ハ峰ゝ山ゝ所ゝに物見ヲ置
昼夜の用心不怠今宵ひそがに澤傳へ御出陣
しかるべし小勢ハ本より大敵の取子と孫子か詞ニ
違まし早とく〳〵と申上れ(ケ)ハ小太郎聞て実ニ
尤と各手分ケを定めツゝしのび〳〵ニかけ向ふ是は
扨置堂源房此比両度の合戦に寄手ヲ散ゝ
切破り勝ほごつて悦び勇ミ先達でおはつ
［52丁裏］……
か茶やの口説より死なハ一所とお松か一念堂源
房の跡ヲしたへて來りしを願ふ所の幸ト則陣
中ニ止め置キ(ヨモミツシセキ)一向寵愛被成蹴今朝ハ山霧
深く四方ニ充咫尺モわかぬあけぼのに寄手の
陣より信濃国の住人忝尾八郎同十郎片山平八
飛騨国の住人奥山大吉(カ)同岩九郎山路嶮岨ハ生
国常の習ニて霧ニまきれて稲倉経繰を只
一さん敵ハ霧ニくらミし朝寝して何の備も非レハ
時分ハよしと陣前ニ大音上稲倉へぐり(カ)の先陣は
忝尾八郎同十郎片山平八奥山大吉同岩九郎
［53丁表］……
我と思ハん奴(ヤツ)原ハ出合勝負ト呼ハりたり陣中
俄ニ騒動し上を下えとかへし蹴五人の面ゝ是を
見て遠慮ゑしやくも荒磯の打くる
浪のまぐり切後陣の寄手モ是を見て我も〳〵とへ
くりを越て乱レ入(ワニ)鬼ヲ欺(アザム)く堂源房お忝とうまく
寝入り花ニ此騒動ヲ聞よりモむつくと起キ鎧ヲ取て肩(カタ)
になげかけ腹巻上帯丁ト〆(シメ)かぶと頭巾を
首ニ戴キ太刀十文字ニよご帯大長刀を水車
其勢恰(アタカ)モ烈風ノ如ク村雲立タル多勢か中に
切て入立わり胴切大けさ小けさ向者ヲハ拝ミ打
［53丁裏］……
廻りあふハ車切近寄者ヲハ人礫縦横無し□(ルカ)
薙(ナキ)立れハ寄手モひるんて見得ニけるかゝる處□(ニカ)
後の方より坂田備中守川合与七都合(ヨ)其勢五百余騎
新手ヲ下知して切て掛レハ堂源少シモさハかず新手
の勢に渡り合火花を散して戦ふたり大海房は
是を見て太刀真甲(マッコウ)ニさしかざし八郎目かけて

切て掛レハ袈尾心得たりと受流シ上段下段ト秘術ヲ
尽シて戦ひしか大海房か打太刀受はつし妻手
の腕を切落され既ニ危く見得る處に弟十郎
兄を討セて不レ叶と鑓ヲ撚(ヒネッ)て突テ掛(カヽ)レハ渡り合
[54丁表]……
しハしか程こそ戦ひしか鎗の柄中より切打レ既ニ危く
見ル處ニ片山平八奥山大吉(カ)同岩次郎切先ヲ揃(ヤリ)て
討テ欠(カヽ)レハ大海房事□(共カ)セすしバしか程ハ戦ひしか
遂ニ悉く追散らす爰ニ亦堂源房の弟に獅子
王丸とて今年十八歳力量萬人ニ勝レ討物
取ての達人也先月より此陣中ニありつれと何の高名
あらされハ今日こそ天晴の花軍ト卯花威(ヲトシ)の大
鎧五枚甲の緒を〆(シメ)て太刀真甲ニ指かざし川合
与七ニ討て掛レハ心得たりと火花ヲ散らして戦ひ
しか獅子王討太刀受損じ与七ニツニなりて失ニ
[54丁裏]……
ける坂田備中守是を見てそごを引なと云まゝに
切て掛レハ心得たりとしのきをけつりつばを割切先
より火焔ヲ出シ電光いなつま必勝剣秘術ヲ尽
して戦ひしか打物業ハ面とう也とおし双て
むつと組む何(イツ)レモ劣らぬ大力のゑいや〳〵とねち合音(ヲト)

山谷共ニ震動しさなから地しんニ不異互ニ揉(モミ)合
其内に山の片平踏崩シ兼て難所の山坂なれハ
互ニ足ヲふミはつし遥の谷底両人共ゝころ〳〵
獅子王かふとを木の根に引かけて坂田ハ足をふみ留んとそはの
大石金剛力石はふみぬけころ〳〵〳〵
續て轉ぶ備中か遥の谷底立留り獅子王
頓て甲を引はつしたかへニどつと笑ひける
[55丁表]……
蒐き處ニ金剛坊ニ勧念坊只一散ニ欠來り敵ハ
桧店の後越に多少ハしらず寺ノ後より乱レ入(イチ)一ゝ
火をかけ焼拂らへ荒神山ニモ攻登り味方ハ敗(ハイ)
軍皆ゝ四方ニ逃散たり我〳〵両人漸ゝに是まて
参り候と堂源坊ハ是を聞南無三宝此處の
軍も是まてなり是より直に川傳へ止舩原に翔登らんと
弟獅子王大海房金剛観念五人つれ遠目より
見つけるお袈か一念申〳〵堂源様こちの人待
てよ一所とよべとさけへと耳ニモ不入峠をさして急ルゝ
お袈ハこれを見るよりモ命限り魂限り何国迄モ追付(ヲッ)かて
[55丁裏]……
置べきやと跡ヲしとふて急き行急けバ程なく
箕の輪の近所ニもなりしかハ不思義や俄ニ手足

すぐんて歩(アユマ)れずコハ何事とよべとさけべと何の答モ荒
浪(ナミ)の峯の嵐(アラシ)や谷の瀧水どう〳〵と山彦たにも
聞分ケらずたとへ佛の山ぢやとて余りむこひ
つれないと心を千ゝにあセれ共迚モ叶ハぬ上からハ
神モ佛も何かセん恋の一念谷山も岩をも通
す念力と山を白眼んて在たりしか水ニうつりし
我顔の口ハ耳まて烈登り両眼光りかゝや
ひて長ケなる髪ハ四方ニ乱レ角(ツノ)ハ枯木と顕レたり
［56丁表］……
サア鬼になつた蛇ニなつた是まて也ト只一散(サン)堂源房
ハ是をもしらず峠をさして急キしか大量坊鬼門
房川を飛ンて飛下り敵ハ桧店の後ロ傳へ青
しゝ森の麓を廻り薬師か森の陰よりモ忍び上りて
一ゝ味方を追ちらし我ゝ両人漸ゝニ是まて参候ト
堂源坊ハ是を聞迚モ叶ハぬ我ゝか生き存らへて何
かセん是より直に腹かき切り一心則魔王と也日本
にたゞりをなし折を見合魔国ニなさんと七人一所ニ
腹かき切渕ニ飛入失ニしける夫よりも雲霧雨風震
動しお恋モ頓て欠來り大風大水諸国ヲあらし
［56丁裏］……
大蛇(ジヤ)ハ荒神山の麓なる青沼ニこそ飛ンて入
爰ヲ住所と定め蹤後の世まても蛇沼とて今に
古跡ぞのこりける堂源坊の沈ミし渕堂源トこそ
傳へ蹤今か世まても雲霧覆ひどう〳〵と響キ
渡りて恐し也夫よりモ牧野小太郎勝軍寺院
不残焼拂らい荒神五所山正嘉二年より三百
年の封山にて参詣停止と鎌倉さして急るゝ残ル
五方の口ゝハ此騒動を聞よりモおそれおのゝき
我も〳〵と手自(テヅカラ)に寺院ニ火をかげ焼拂らい皆
〳〵退散なしにける扨夫よりモ大霊権現穢土ハ穢土ニ
［57丁表］……
従ふと兼て説たる王法大事ぞ偽戯(キゲ)をぞセしと
御堂(ミ)モ御倉モ引からけ三百年之其内ハ嵐ニ
木の葉裏表風に任セて兎モ角モ神モ佛も
諸共ニ誓(チカイ)ひし言ハ違へしと山の岩間に閉篭(カン)る
諸行無常の穢土なれハ只王法ニ任セツゝ寒
暑月日めくり〳〵て小車の静(シツ)けき春ヲ待如く
三百年モ夢の夢時節ヲ待こそあり難き
是(コレ)ハ扨置出羽国丹生村に鎮座し玉ふ五所大明神
の由來を委敷尋(タツ)奉ルニ如夢幻泡影の姿
波世界奢ル平家モ今ハ早源氏ニ御代をセば
［57丁裏］……

められ須磨ニ内裏をうつされて不破や葛義の
関据て堅固ニ守護をなし玉ふ爰ニ平ノ
宗盛公之郎等ニ安部三郎高親弟八郎高元
とて文武の道ニ隠レなく打物取ての達人也
又朋輩ニ阿形ノ権内久国とて大力無双の荒
男腕立好との曲者也彼高親のれんちよくを
悪み或時壱ツの密書を
捧へ高親源氏に内通有と宗盛公ニさんけん
す宗盛大キに怒り阿形権内ニ二百余キ
阿部の屋敷ヲ押取巻大音上て呼りけるか
［58丁表］……
高親源氏に内通反叛のよし上聞に達し某討手迎たり早首
わたせとはのゝつたり
高親驚テ理非云分セんとする所ヲ走り寄テ
首打落シ家内の者共切殺し此騒動ニまぎれ
安部恩顧の家來伊丹三太といへる者高親の一
子定次郎を小脇にかへ込ミ藪をくゞつて浦口より
八郎高元の屋敷ニ逃行次第を斯と
告キタれハ高元大に驚キ如何かハセんと
一ツの思案を廻らし伊丹三太を近く召て仰けるは
我今権内めを討取兄の敵を報する事ハ易しと
いへ共左様ニしてハ我ゝ謀叛に同しく犬死して
不忠不義の名ヲ取事誠ニ以残念也サレハ
［58丁裏］……
如何ともして此度の大難をまぬかれ安部の恥辱ヲ雪キ
尚讒人原を討取て兄の泉下に手向んと思ふ也
去レハ君の御疑ヲはらし御心を安ンじ奉りし上
時宜ヲ見合本望を達スへし此謀事ヲ思ふに
定次郎か首と其身か首ヲ宗盛公の御目ニ懸
二心なき由を以相計ふべし汝か所存如何と
あれハ三太此由承り遖レの御賢慮也拙者
か首ハ塵埃よりもやすけれと定次郎様
ハ我君の御一子にして是を殺玉ふ時ニハ我君
一脉モ不残幸拙者ニ壱人の男子有其顔かだち
［59丁表］……
定次郎様ニ能相似たれハ是を身代りとして某シか首ヲ
差添奉らハ宗盛公の御疑も自然と晴レ
玉ふべし早疾〳〵と申上レハ高元悦び忠成
かな義なるかなと三太か背中をなでさすり
一間ニこそハ入玉ふ良有て一ツの小首を引さげ
出給ふ三太驚キ見れハ高本の一子當年五歳の千
寿丸こハ如何に早まり玉ふ物かなと悲歎の

なミたニ伏しつむ高元仰けるやうハ汝か心底察(サツシ)
入當家のためニ汝か首ヲ申受其上一子までハ
云かたし當家のためハ我も汝モ同し事二人か中の
［59丁裏］……
真実を千寿か首て推量あれ此うへハ〳〵ハ
迷途の旅の供をして千寿か介抱頼む也死出や(シテ)
三途の山川を其手ヲ引てやす〳〵往生有べしと涙と(ナミタ)
共ニ頼るゝ三太此由承り千寿様ハ従弟の為ニ
御身替り兄ノ子ニ義理とハ云なから我子ヲ御手ニ
かけられて君に忠義の仇討とハ遖レ智謀の御(テタテ)
手立此上なから定次郎様能ゝ養育安部家
を起シたて玉へ介錯頼ミ奉ルと云處ニ高元の妻
女松代走り出千寿ハ死して居ました何者か首
切た敵は何国と只狂乱の如くにてそごよ是よと
［60丁表］……
翔廻ル高元是を見ルよりも敵ハ爰よと千寿か首を
さし出セハ是ハ〳〵と計ニて五臓をしぼる血の涙其侭
そごに倒レ伏シロ説言こそ哀レ也扨モ〳〵世の中に
武士程つらいかなしい者あろふか忠と
義理とに詰メられて我か子を手ニかけ殺すとハ
如何成前世の業因かめくり〳〵て來ルとや病て死
たら是非モなし刃の上て此風情下百姓てあるならバ
何のしのふぞそつと負ふて逃ても済ムかゝる浮(ヲフ)目(ウキ)を
見ルのミか死ンた上ニもさいの川原て石の塔幼き子供か
よう〳〵ニ組上グ所を情をしらぬ鬼共か鉄
［60丁裏］……
棒ふり上打散らすわつと泣出シ地蔵菩薩のす
そやたもと取附有様今見る様ニ思われて死ンた
跡まて積の種親子の縁ハ一世ぞといが成佛かいゝ
初めたあんまりむごいつれないうらめしやさつきニ
鳥度(チヨト)昼寝した御菓子をたんと持て來て私シか
口ニ入置た枕双紙(マクラサウシ)を持て來てかゝさんなんて御座ン
すとそこて私シか申にハ是ハ此世の始りといふて聞し
て置いのじや早く成人さしたなら美い嫁(ヨメ)取(ウツクシ)て
まぐら草紙(ソウシ)を見るやウに旨物(ウマイ)もくわしたい
思ふ中ニも此風情おしや可愛(カアイ)やつれないと正体モなく
［61丁表］……
泣しつめハ夫トも今ハたまり兼(カネ)落ル涙の間(ヒマ)よりも
忠義ハ武士の習にて悔む心ハなけれ共兄を討レ
子に別レ斯浅ましき身の風情諸行無常の世
の習生者必滅會者定離明メられず悟られぬ八苦(シヤウシヤヒツメツエシヤヂヤウリ)
の世界うらめしや千寿ハ不動の申子ニて器量骨柄

世に勝レ餘所の童の七ツ八ツ手跡もよくて孝経小学
讀ミ習らへ観音經ヲ誦し今日の朝まて牡丹の
華を両手ニ持兵法つかふ真似ヲして障子唐紙
たゞきけり連レ武士の子じや物と自惚顔せし
甲斐モなく斯成果ル浅間しやさつきニ千寿か
[61丁裏]……
仏間ニて香を積上華を持観音經をよミ居ハ
そこてよつく云聞かした此より西ニ極楽世界ト云
處華モ御菓子モたんと有南無阿彌陀佛と唱レハ
直ニ往生すると聞念仏申セと云けれハ胸の仏かし
つたやら西ニ向て手ヲ合南無阿弥陀佛〳〵と
聲諸共ニ首打落シ忠と義理とに詰られて愛別
離苦の哀しさを推量アレと歎カるゝ蒐ル所ニ医者の
道閑翔來り阿形権内宗盛公え讒言し三郎
高親源氏え内通謀叛のよし直ニ討手を蒙りて
高親殿を始家内の人ゝ伐殺し又もや貴殿に討
[62丁表]……
向ふ早疾〳〵此間ニ何方えも落行時節を
待て御運を開かるべし貴殿の厚恩身ニ余り
ひそかに注進申也時刻後とて叶まじ早疾ゝト
跡をも不見して立帰ル高元是を聞よりも
歯かミをなし扨ハ権内めか讒言か今更云訳
叶まじ寄手ハ何百人もあらハあれ目さす處ハ
権内壱人首引提迷途の手土産今宵限り
之名残の酒宴妻の忝代と家の郎等安積
善治を近く召れツゝケ様〳〵の次第ニて汝等
二人定次郎を伴ひ何方えも落行安部家の
[62丁裏]……
後をも興スべし松代ハ是を聞よりもわつと
泣出し死なハ一所と夫婦の限り君の打死し
給ふならわたしを殺した其上ニ兎ニも角ニも
成玉へいがぬ〳〵と泣さけぶ高元不便の
涙をおさへ汝か心中尤モなれと我〳〵必
死の覚悟といふニもあらず権内めを討とりて
跡より追付参るべし尚更汝か胎内に七月半の
ミとり子有安部家の後ヲは興スべし疾く
とく〳〵と系圖の一巻黄金添て被渡ける
是非も泣ゝなき別レ見送り見帰り見送りづ
[63丁表]……
是非も情も恩愛の愛別離苦の夜の旅しの
び〳〵に落て行蒐ル所ニ安形権内手勢引具し
大音上テ高元兄弟源氏え内通謀叛のだん

露顕に及び某シ討手ニ向たり尋常ニ其首
渡セと呼ハりたり高元是を聞よりモ汝我ゝ
兄弟の忠義をそねミ剰へ讒言を構へ我兄を
討取又我ヲも討んと計ル人非人若シ君前ニ疑敷
事あらハ其理非を分明して賞罰を行ふこそ
士たる者の道とも云べけれ夫天道ハ正直を
てらし玉ふさレハ今我と汝と戦ふてまげ
[63丁裏]……
たる者ハ天罰ヲ蒙る所也勝者ハ天の助る
所也是を以是非善悪の分別を知るべし権内
あざ笑つて我今天に代つて誅罰を行ふ
多言ハ無益其首渡セと討て懸レハ高元
怒りて切結ぶ何レも劣らぬ達人也受づ流シづ
上段下段秘術を尽して戦いしか権内何とが
したりげん庭前の飛石ニつまつき倒るゝ處を
取て押て首打落しアラ嬉しやと立上ルを弟安形権
六兄の敵を余さじと切て掛ルを伊丹三太是
を見て主人の敵を沈て拂らへハ両足共ニ切落さ
[64丁表]……
れ倒るゝ處を首打落シ夫より寄手の大勢に
渡り合真甲立割大けさ小けさ廻り合ハ車
切切て〳〵切ちらセハコハ不叶命有ての物種と
皆ゝはつと逃げ散たり高元よろこび軍ハこふこそ
する物と夫よりも権内か首ヲ取出しひたひニ丸ニ
悪ト云字ヲすへ両眼ヲくり出シ庭前の杢の枝ニ
かけさセ今ハ浮世ニ望ミなし最期急かん
さらバ〳〵と屋形〳〵ニ火ヲかけて南無阿弥陀佛と
はら十文字ニかき切て無常の煙トたなひへて
其名を末世ニ残しける是ハ拠置松代主従の
[64丁裏]……
人ゝハ丹波路より丹後ニしのび宮津の宿ニ逼留シ
都の空の床しさに風の便もあれがしと待
わび玉ふ其内に夫ノ自害を聞よりも持病の
積のさし込ミて露の命もたへ〳〵ニ定次郎
善治両人を枕元ニ被召ツゝさゝかにの糸より細キ
聲ヲあげ兄ヲ被討夫トにわかれ子ニ別レ爰
まて旅のうさつらさ何にたとゑんようもなし
又此度の持病のしやくも早迷途の旅立そ
よく〳〵武運の尽キ果だ此胎内のミとり子ヲ
養育なして有ならハ安部家の後ヲモ興スべし
[65丁表]……
夫トの形身大事故おしからぬ命を存命て是まて

しのび下りしも皆むだ事となり果て此世の明(アカリ)りも
見セずして迷途の方えいたき行前世ハ如何成悪業
の廻りも早キ此風情只此上ハ〳〵此定次郎を
守立て名僧智識となすならバ両親伯父伯
母従弟の菩提能ゝ弔らへたび玉へ頼む〳〵の聲諸共
朝の露と消ニける定次郎ハ伯母の死骸ニ取付て
伯母殿(サマ)死ンて下さんすなお前か死なハわしも死ぬ
伯母殿のふと泣さけぶ善治も涙はら〳〵と御
道理さたや御尤モ是か泣ぬておラりよふが
［65丁裏］……
可愛の人やかなしやと正躰涙にふししつミ哀
といふモ余り有歎キて叶ハぬ事成レハ野邊(トムライ)
の送りも夫〳〵ニ無常の煙トなし奉り能ゝ弔
夫よりモ傳へ聞奥羽の堺荒上山あらた〳〵ニまし
まし〳〵て二世安楽の御誓願是を手寄ニ北陸(ホクロク)
道越後を越て彼両国の堺成関(ナル)ノ峠と申
にて越後の次郎といふ山賊(ヤフ)藪(シタ)の茂ミに隠レ居て善治か通ル
を見ルよりも五人張に拾五束切て放せハあやまたず
背中より胸板かけて射通され其侭そこニ倒レ
伏ス次郎悦刀脇差路金を奪取飛か如くにかげり
［66丁表］……

行定次郎ハびつくり動轉コハ何事と善治に
取附泣さけぶ泣聲耳にや通じげんよう〳〵
枕をもだけツゝ君の御先途見届ケ度ハ候得共
最早此手に果ル也是山賊の所為なれハ所持
の路金モ奪ハれて何と詮方なけれ共御身ニ障
あらざれハ是を案堵(あんど)で死出の旅只願ハく
〳〵ハ荒神山ニ尋ね行名僧智識となり
玉へ伯母御の遺言大切に守らセ玉へ此君よ未
來て御目(メ)ニかゞるへし南無阿弥陀仏の聲
諸共遂ニはかなくなりにけり定次郎は
［66丁裏］……
西モ東モ山中の人の往來もたへ果て日モタ
陽ニかたむけバ如何かハセんと泣キ叫ぶかゝる
處ニ御僧壱人参られて故を如何ニと尋られ
ケ様〳〵の次第とて涙と共ニ語るゝ御僧不便と
思召其義ならハ愚僧と一所ニ行玉へ愚僧
も荒神心さす定次郎ハ此由斯と聞召
コハ難在〳〵能ゝ計イゐハレと御僧一同荒神
山ニ登ラれて弘学院の弟子と也学問しゆ
行被成ける又有時の事なるか定次郎〳〵と
呼聲かすかニ聞得しかハ何事やらんと立出

［67丁表］……
見れハ五所大明神舩にのり此丹生川を下ら
セ玉ふ定次郎是を見るよりも十丈余りの
岩石より直に飛下り五所大明神を負奉り
夫よりも出羽国村山郡丹生村宮内に鎮座
し玉ふ諸願を叶ふ其故ニ願望大明神と
仰き奉る今か代までも尊ミける彼定次郎
の飛下りし岩石ハ先達はねとて古跡あり
夫よりも定次郎仏法成就の其上ニ一宇ヲ建立
なされツゝ二世安楽と成就して神宮寺
とて今か代までも尊ミける彼定次郎の
［67丁裏］……
後胤ハ山形行蔵院とて出羽十二先達ノ随一ニて百五拾石ノ
御朱印子孫永續繁盛と聞得
ける兎ニも角ニモ仏神の霊験利益そあり
かたき
是ハ扨置荒神山の麓ニ住居する其名を直に
熊丸と元ハ由有平家の落人高橋権太
盛次の末とかや壱人の老母に孝行の誠ヲ
尽ス真實や何世渡りも荒男兼て弓矢
の家なれハ猿熊猪ヲ射取り蹴老の母御の
仰ニハ如夢幻泡影如露亦如雷の娑婆世界
［68丁表］……
生者必滅會者定離仏の教難在後生を願ふ
自ら殺生戒ハ第一と二度喰飯を壱度食ひ
二ツの衣装ヲ一ツ着て飢寒の難義有迚モ殺生事
ハいやぞいな能に思案を頼むとてさめ〴〵泣キ
玉へツゝ熊丸是を聞よりモ仰御尤夫なら殺生
やめましよとぶどふ桧の皮まだの皮黄蓮
當帰白述やしゐたけまいたげしらたけも
栗榛に至ルまて堀取はき取拾取在所の
市ニ出シ蹴老母ハ念佛唱名不怠親子共ゝ
信心の年の齢モ六十路過キ今日ハ幸
［68丁裏］……
天氣モ吉後の菜畑の大根つミこゝミし
腰も杖つきの処ようく帰ル後ロの澤思ひも
よらず大蛇頸レ出物ヲモ不謂ハ只一口音ニ驚キ
熊丸立出コハ何事と狂気の如く欠出れば
大蛇ハ早くも逃失て行衛ハ更ニなかりける
流石にたげき熊丸も是ハくと計りにて
心の弓のつる切て其まゝそこニ倒レふし
五臓をしぼる血の涙口説事こそ哀也

扨モ〳〵定(サタメ)なきハ世の中よ六ツの年より父御に
別レ二十余年の其間あの母殿の御養育
［69丁表］……
奥山深キ御かんなん心詞ニのべ難し昨日
までも今日までも我を大事ト思召(ハタカ)裸
て居りて風ひくなびんか乱レて見くるしや
髪結ふてとらしやうと片時はなれぬ御心
尽シハ山より高く滄海よりモ尚深かりし
御高恩此山中にわび住居貧の病にとち
られて萬か一をも報セぬニ思寄らずモ非業
の御難兼て教訓難在さ廣キ都ニ登り
蹴不肖なからモ頓(ヘ)て立身母御ニ御安堵さ
すべしと思ふ内ニモ此度(コン)の御難也
［69丁裏］……
かゝるうき目ニ會ふ事ハ是皆前世の因か
めくり〳〵て來とかや四百四病の其内に
貧程つらいかなしい物かあろふかと前後ふかくニ
なげかるゝ責て大蛇の行衛を尋ね母の
敵ヲ報ぜんものと跡ヲしとふて立出ル歩むも
行も夢の夢夢の浮世ニ生レ來て
夢見てくらす夢なれや小蝶の夢ハ
さどれ共悟り兼たる愛別離苦會者
定離そと悟られぬ無常の風に燈の消て
行衛ハ白雲の途中て急度心付ヤア此分ニてハ
［70丁表］……
叶まじ扨ハ此比弓矢ヲ止メ殺生せざる弱ミニ附入
物なるべし熊丸カ命限り魂限り何地まてか
逃さんと矢の根ヲみかき弓弦くい〳〵蛇沼を
さして翔り行早彼所ニもなりぬれハ沼を白眼
て大音上汝大蛇親の敵出よ〳〵と呼ハれとも
答る者ハ山彦の峯のあらしやさゞ波の只満
ゝたる沼の面兎ニモ角ニモ詮方なく只一心に阿
弥陀如來を念しツゝ不思議や老翁老人忽然ト立顕レ
汝大蛇を退治セんとならハ此藥を矢しりニぬりて
水底を射ルべし若大蛇浮出ハかならず
［70丁裏］……
汝か手ニ入らんと一ツの丹藥をたまわり我こそ
三寶大荒神とかきけす如くニ失セ玉ふ
コハ難在〳〵と御跡三度礼拝し教の如く矢しりに
くすりをぬり五人張十五束引しほりしハし
たもつて水底目當テに切て放セハ不思議や
水ハ則五色ニ變じ大波逆立二十尋余りの

大蛇頸レ出眼の光りハ日月と角ハ枯木と立頸レ
牙(キバ)ハ研(ミカキ)し剣の如く紅の舌ヲ巻キ出シどつきを吐て
四方を白眼みし其勢ひ恐しトも中ゝニ申計り
ハなかりける熊丸是を見ルよりモ親の敵思ひしれど
[71丁表]……
件の毒矢を左りの眼に射込タリ大蛇いよ〳〵
怒りをなし飛ンて懸ルを不透二の矢をつかい切て
放せハあやまたずのどぶいかけて射通され
夫よりもくるへくるふて山ゝ谷ゝ震動し
舩ケ嶽の南ニくるい行キ石と變じて今か世に蛇石
の旧跡蛇王権現トこそ拝シ蹴(シヤ)夫よりも此山を
陸奥の蛇ケ嶽と申とかや春の末夏の始の其比ハ
末世ニ残ル白雪の蛇形を顕ス其いわれ斯こそ
傳へ置れりたり夫よりモ熊丸ハ何営ミモ無からハ
七ゝ四十九日や百かん日モ只仏念ヲ一心ニ石ヲ叩(タヽイ)テ
[71丁裏]……
光明偏照十方国土念佛衆接収不捨則發
菩提心往生安楽國と百日百夜一心不乱念じ
ツゝ不思義や香ノ煙ニつれ老母ハ金剛臺に
乗じツゝ我過去の罪障深く一旦大蛇の
難ニ終ルトいへ共汝百日百夜不怠念仏供養ノ
功徳ヲ以極楽世界ニ往生し現世の大願成就
セり大蛇ハ則金剛山ニ蛇王権現トあらわれ
たり益ゝ念仏怠ルべからず汝早此處ヲ去て
都ニ登能ゝ立身高橋の家をも興スべしと其侭
佛躰に顕レ西方さして帰るゝコハ難在〳〵と称念佛
[72丁表]……
力を出して叩(タヽ)く石二ツとなりて中よりモ餘多の
黄金出たりけるいよ難有〳〵と跡念比ニ弔ふて
夫よりも都をさして登られて能キニ奉公立身
し子孫永續繁昌とこそ聞得ける兎ニモ角ニモ
神佛の霊現利益ぞありかたき
是ハ扨置五所山封止の其後ハ雲霧(クモキリヲヽ)覆ひ暴
風暴雨時ゝに山水溢(アフ)レ洪水し出羽奥州の田畑
を荒流行の悪病折ゝに世界の人モ封山ヲ歎(ナゲ)キ
かなしむ怨念ニ弥ゝ悪魔か感じ蹴人ハ恐れて
鬼神山ト近寄者ハなかりける年月積(ツモ)りて
[72丁裏]……
熊丸か大蛇ヲ射通(トメ)シ其後は自然ニ霧(キリ)をも薄
雪や正嘉二年封山より星霜積りて三百年
仏に妄語あらされバ再度出現ましく(シユツ)て悪魔天
降伏し夫よりも大霊権現慈悲の功徳の難在ク

堂源坊ハ雷公天神と顕レ餘多の眷属引具
して徳風起して雲ニのり雨をそゝへてころ〳〵
ぐわら〳〵どふ〳〵〳〵光り渡りておそろしく
邪鬼ヲ退け悪魔を拂へ蛇や蛞やうハばミも世
界ニあだをする者ハ一ゝけ殺し追散し五穀ハ
成就草木国土繁昌し夫よりも紫雲靡
［73丁表］……
金光放チ霊明美妙の体ヲ顕シ玉へとも封山以來
数百年道絶草木生茂り縁起記録ハ燒尽
され御山の案内しる者なく悪魔大蛇の住所となり
其上ニ凡夫ハ物をしらざれバ近寄者モあらずして
因縁結ぶ手便もなく世界の人の風俗や人情
未タとげやらで恐レ懼るゝ一念ハ疑りて積りて集り
て雲ト也雨ト也霧や風共變じ蹴夫故覆ふ
雲霧や山ゝ荒るゝと申せ共心の雲かくもらセて心で
あらす嵐山扨夫よりも年月送ル其内に人
の心をよう〳〵ニとげれバ同し谷川の流レヲ汲ムも
［73丁裏］……
他生の縁結ぶの神の引合年ゝ参詣弥ましに
夫レ當山と申するハ信念戒行第一ニ結縁利益の
御山なれバ世上ヲ勧めて法ニ入各法ノ心成道し
参詣餘多群集して福徳菩提の
縁結び二世安楽の種蒔やすゝめらるゝもす
すむるゝも皆人ゝの功徳故勧受功徳と説
レたり夫當山と申するハ欲心仏ニおハさねば
是を献じ彼ヲ納ル等の祈願ハ勿論塩ヲたち
火をたぢ五穀ヲたぢ又ハ髪切裸の行難行
苦行ハ御きらへ物参詣とゞかぬ其人ハ身おバ
［74丁表］……
火水ニ清め蹴只一心ニ清浄の燈明照らすか御
悦人を進めて信心ニ参詣餘多群集して
福徳菩提の結縁是當山の御誓願病て願
か有とても見持大事ニ人事を尽ス上よりも平癒
の願をなすならハ霊現利益速也扨立願ニ
品ゝ有生死ハ娑婆の習ニて諸行無常の
風吹て生者必滅會者定離人躰受し神仏
迚モのかれぬ死出の旅むかしも今もかハらずに
老少ふとくの娑婆故ニ生ハ生ニ任セツゝ死ハ死に
任セて天堂極楽願ふべし野邊の狐ニだま
［74丁裏］……
されて生死の道ニ迷ふなよ非業非命を
よくしりて餓鬼畜生修羅や地獄ニ落ぬ

よう信念戒行第一ニ有常無常の穢土成レハ
穢土ハ穢土ニ任セツゝ此身ハ穢土ニ有迚モ心ハ
浄土ニ住居して只大常ニ至ルべし夫當山と申
するハ遊山見物無益の御山罰モたゞりも
なげれ共其身の不浄邪心悪業有人ハ悪魔
邪神の感應し怪我モ苦労も心より三宝
荒神数萬の眷属非常を戒む御守護神
油断ハするな只一心油断ハ現世の敵にて信念
［75丁表］……
現世の味方ぞや信念戒行第一ニ貧苦病苦や
災難苦厄過去の業因あるとても十ニ八九は
信心見持の怠りより苦痛禍害も起ル物禍福
無レ門人自招と説レだり人事ヲ尽した其うへニ
運命禍福をかたるべし信念戒行一心ニ死し
てハ天堂極楽えいきてハ福徳穢土の悪風貧苦
病苦や火水の難モ頓て其侭消失セて富貴
繁昌安楽し寸善尺魔と申せ共不可思議
無量の功徳信念戒行貧乏も病モかつつかず
此戒行を第一ニ信念称名不怠鏡ニうつる感應
［75丁裏］……
の我身を照らす光明や五倫五常ハ心□□□（滅消・破滅）

身の賢家業ハ現世の貨寶ぞと神も佛も
納受の十方世界只一心天地を壷中ニ入海水ヲ
呑竭仙術も一心より外になし只正直ヲ一
筋ニ一心疑タル其時は山ヲモ岩ヲモ通スべし
人事ヲ尽しタ其上ニ神や佛の一心ニ我等の一心凝るならハ
諸願の成就ハ必定也益なき薬ハ呑べからず益
なき事ハすべからず神や仏もモ同し事神や仏ニ
願かけて霊験利益あらずんハ必ず信念すべからず
信ト不信ト念ト不念の二ツの差別よつくとつくと
［76丁表］……
辨へて有無禍福をも語ルべし只一心に感應の
我身を照らす法鏡に悪魔を拂ふ御剣や百
願合如意寶珠くもらぬ法鏡くもらぬ心移
〳〵て感應の新タなるこそ難在悪魔の起ス
其風ハ諸行無常と吹ちらし佛の起ス其風ハ
寂滅為楽とおだやがに開くる手ニハ悪魔を拂へ
納ル手ニハ貨寶をいたゞき未来の楽ハ天堂
極楽現在楽ニハ福徳來り風雨ハ順時五穀ハ
成就草木國土繁昌し貨財ハミちく平
等ニ天下泰平国家安穏千秋萬歳
［76丁裏］……

萬ゝ歳ト栄ゆる御代こそ目出度けれ

「大正十年（ペン書き）八月十一日　読終り

安部民次郎

仝九月一日再読　」

舩形手引草終

［77丁表］……

此書妄作なりといへともつねに御山に通用
の義在之故舛澤に納備置ものなり
安政五年

了常道人

［77丁裏］……

（正嘉二年ヨリ明治四十年マデ
六百七十四年ニナル）［鉛筆書］

第二部　聞き取り調査時の録音テープ記録

［1］「山内地名①」　（昭和四十五年四月二十八日）

登場人物　老爺・老婆・男・吉田潤之介

老爺　系図だ、系図。

潤之介　これ、桔梗すか。

爺　橘だっちゃ。

潤　まるに橘、早坂家はそうだね。いま、これ調べてんだ私。

老婆　鳴原先生は、もう一冊作ってるから借りてな。

爺　この間の本わかった？借りたのあったっちゃ、どっからの資料だかわかんねやつ。わかった、誰だか。

潤　うん、わかった。

爺　俺達から行ったんでなかすぺ。

潤　うん。

婆　鳴原先生らはあんたらでがすぺ。

爺　元気で、はっぱ変わんねね。

婆　息子さん、たのむだけっとも。あいつ、電話番号。

爺　電話番号ね、仙台の二九局の……だ。

婆　鳴原先生か、会うてんだおん、書いてけろ、電話番号。おれさ、一冊けるからって言っただけども。

爺　おれもここんとこ、はっぱり行かね。

潤　鳴原先生、ここのこと調べてたすぺ。升沢のことね。

婆　ここのね、展覧会まで調べたんだおん。おらいのシャクブツ（釈迦仏）、全部あげたんだ。そんとき、見さ来いって言わったの、おれ、言わんなだって行かねけない節、なにさ、よけいさ、ほれな、ここの地元のことさ、そだけども、ほれ、まず、ともかく子供は小さいし、おれとじっちゃん稼がねければどうもならないっちゃ。来た人頭下げて、泊めてけろって言われっし、泊めねわけにいかねし、おれ、いなければ来たって泊めべきもん……、言いかねたの、ここの展覧会開いたやつを、言いかねたの、おれ。

あの人はね、調べねのはね、ここの大昔の何百年前のお墓調べねばり。マムシ知ってもの。うんとおっかねくて、行くっつうとマムシいんだっつうおんなや。足など噛みつかれっと大変だとって、とうとう、この、昔のお墓調べねだけ。

潤　ババチャンに教えらったんだよね、昔、仙人いたって。仏四つあったって。仙人の石、その仙人の碑が田んぼにあったはずなんだ。その碑ねんだ、今見たらどこいったんだ。

爺　仙人塚か、仙人塚はあるんでがす。

婆　これより奥でないの。

爺　おらうちの山、上。

潤　そこんとこ写真撮らせてけさいね。

婆　昔のお墓だり、しゃねとこも考え考え、案内してけろな、

バアチャンとおら言わったんだよ。よその人だな。

婆　おらいのガガが来てからは二五年んなる。

潤　息子さん三人いたのは知ってるよ。

婆　ケイイチに、アツオ、ツネオだべ。

爺　孫さんお嫁さんもらたっつね、あれ。

（テープ中断）

婆　イワナの山椒味噌つけて田楽したりはな。

爺　鯉の刺身だりな。

爺　難しいおん、薄くそぐんだべ。

婆　誰するや、ぬるってな。あいつ切る人はよほどー。

爺　今仙台の人たち、こいなんでも良いんだよ。

潤　今、十七、……。

婆　いつでも語ってんだよ、今の子供達さ。

潤　八幡町に子供達呼んだんだから。

婆　それから吉岡来て、子供三人はいた。

（テープ中断）

潤　手錠、槍もあるの。それ見たいな。

爺　御番所でがすから、ここ前の。

潤　それだ。その御番所っていうのね、伊達藩の時代でしょ。あっちから来た人の番所、こっちから行く人の番所、そうなんだね。

爺　うん。

潤　それが、『宮城県史』さのってないんだ、ここが番所だって。

爺　そうすかね。

潤　山形側ではね、もう、その船形越えてくる、サバネゴヤ、ウヤムヤ峠のことは書いてあるが、船形越えのことは書いてねえの。あすこ、尾花沢からね、紅花持って来てるはずなんですよね。番所だってことは、鳴原先生の話ではね、何を運んだかって、砥石運んだってこと聞いてるの。砥石運んだって資料ないんだよね。誰かがそれ教えてくれたんだね。

男　私がそれ聞いてんだよね。やっぱりね。

潤　砥石、それ運んだの牛ですか。

男　うん。牛でね。それがために、道路がね、切り開いたんだね、その時代に。今の登山道路ずっと行くんでがすね。

潤　ゲンヤチ通って。

男　いや、あっちへ回んねで。

潤　旗坂は通るの？

男　通るんでがす。旗坂登ってそして、今の登山道行ってるんでがす、それは。

潤　どっから山形抜けんの。

男　オコヤあるとこのわずか手前から、今度は。

潤　右っ側にあんの？

男　いや、左側に山形に入っていく道路あるんでがす。
潤　そこんとこ、サバネ通ったわけでないんだね。
男　観音寺におちるんだね。観音寺に抜けてるわけです。
潤　鶴子ってとこ、ご存知すか？
男　ツルノコは、こっちから行って右側すか。
潤　やっぱりある……。ここんとこは通ってるの。
男　そこんとこは通らねで、観音寺さ行ってるはずなんですね。ツルノコ通れば銀山に行くんだおんね。銀山温泉ね。二本あるんですから。
潤　御所山に登るには、ロッポウロッコウ（六方六口）があるって書いてあんの。
男　あります。
潤　そのことはわかったの。観音寺、鶴子ね、升沢関係あるんですよ。升沢神社とね、イシカミ、ちょうど小林君の向かいの神社、関係あるの。そして、あの神様がね、塩竈神社の志波彦神社と関係あんの。
男　そなんだね。
潤　志波彦神社がね、今日との天台宗と関係あるの。偉い坊さんが向こうからここ来てるんですよ。そこまでは、わかったの。わかったにしても山形側からの御所山縁起って本あるっての見つかったの。内容どうだかってことそんだけわかんねの、私。それがあえば、この資料は間違いなしということになんのね。一番変わんねのは、地名さね。だから地名だけはなるべく詳しく教えて頂きたいと思うしね。それと、昔、元禄時代からあったというしね。平家の落人だという話聞いてんの。その中にね、高橋という人いるの。
男　それはわかんねね。
潤　その高橋という人がここから育って、京都になんか、蛇ヶ岳（蛇ヶ岳）の蛇に噛まって、あだ討ちやった。ここに青沼ってありますか。
男　あります。
潤　青沼ってあるの。その青沼にね、その蛇が住んでたの、それをあだ討ちに行ったの、タケマルっていうのが。その息子が。行ったところが、一人老人が現れてきて、お前、ここに蛇を退治しに来たんだろうって。退治しに来たって、そしたら、この薬やっからって、薬もらった。矢の先に薬つけて青沼にちしたんだね、そしたら、蛇が躍り上がっておこって出て来てね、躍り上がって来たところをね、それを、もういっぺん矢をしたらね、その蛇死んじゃったの。その蛇を弔うためにね、百日、百ヶ日石たたいて拝んだんだと。して、それが、蛇ヶ岳になったんだと。その証拠に春の雪解けになるとね、あの山んとこに蛇の形が残ると。そこまでわかった

の。

男　石もあります？そこに、蛇ヶ岳に。

潤　その石があるの？

男　はあ。

潤　ほうれ、みなさい。やっぱ、聞いてよかったよ。なんかね、神様とね、その人の約束でね、テンニンサマか知らないがね、この石をやるとね、お前、約束守れと。その石はどういう意味かと私、先生に聞いたの。石っていうのはね、約束の時使うものだって、堅固だからね。おれは、破らないどっていう意味でその人に渡したということが書いてある。

男　石を表して蛇ヶ岳となってるんだおんね、そこさ。

潤　登んなけないのかや、困ったな。

婆　ただ、その粉はあるわけないから、その弓はあるわけなんだね。何のために蛇ヶ岳だとか、青沼だとか。

潤　鏡ヶ池ってのありすぺ。ようするに、あれは、田村将軍の悪玉御前が髪すいたっていうんだがね。それ、もっと、別当さんにお願いしておきたいんだけどね、あそこに鏡が入ってるんですよ。鏡が沈んでんの。なぜ鏡が沈んだかというとね、羽黒修験の山伏はね、湖に鏡入れる習慣がある。だから、なんか関係あるんです。あるかどうか調べたいくらいです。羽黒山ではね、八〇個ばかり鏡あがったんですよ、湖の中からね。ただごとでないんですよ。

　昔の人達の話みな聞きたいと思って。こうなったら。みな関係してくるんだ、京都まで関係してくるんだ。

　あと、役行者ってね、ババチャンが言った仙人がそれなんですよ。あんまりいろんな行をやるもんだから、当時、桓武天皇以前の天皇から封じられて伊豆に流されたの。伊豆に流されてね、だけんどもおれは一日いっぺんは本堂に帰ってくると言ったの。そしたらね、富士山に行って一夜にして帰ってくるという技もってたの。仙人の力があったんだね。

　歴史みると一五〇〇年くらい前の方だね。桓武天皇の命令で御所山との関係でてきたのが、一二〇〇年前、このエンギシキシンメイ（延喜式神名帳）というのの中に出てくるんでね、間違いないですよ。ところが、私読んでる安政年間の文献にはね、すでにその名前がないの。たった一二〇年前の資料がなくって、一二〇〇年前に資料がある。一〇〇〇年の開きの中でね、名前がなくなったということは、北条時頼がその法印をやっつけてしまったわけですよ。そのために、あの山は魔の山だといって登らなくなってしまったの。だから、そこまではわかったんでね、あとは昔の人たちの話を皆集めてゆけば良いしね、あと地名みんな控えて来ましたよ。だから、それ昔の人たちに聞いて行ってあるかないかって聞いて

行けばね、地名なんてそう簡単に変わるもんじゃないからね。例えば、出羽のことイデハっていったんですよ。矢を作るためにね、鷹よくいたんですよ、あそこに。鷹を献じたり鷹の羽を献じたりしたんですよ。矢羽ね。

男　弓張り場とそれから、的山とあんだおんね。こっちが的山、弓張った山はここにあんです。

婆　ワラビとっさ行く。

男　弓の弓張り場だね。的山は、ここのねぽっとした山ね。タカヤマね。仙人塚ってものね、昔から伝説あんだからね。人は住んだんだからね。

潤　番所あったってことは最大の収穫だね。番所に槍とか手錠とかあったね。写真撮らせてもらいたい。

男　鉄のもんでこれっくらいのね。足錠もあったてるんだが、どこにいったか見えないてんだね、この間。

潤　だれにも渡さないようにお願いしますわ。例え金困るって投げてしまうんじゃね、村の財産ていうより国の財産ですよ。資料がなくなってきてるんだから。昔のことについては、あんまり散らさないようにしておいてもらいたいと思ってね。

爺　下黒川の方調べたのすか？大郷の方。

潤　私、升沢ばりです。他やりません。升沢いってんばりですよ。大郷といえばコウジノカミが吉岡八幡宮に移ってきたんですよ。大郷にいたんですよ、それを吉岡にお神輿を移すとなれば、普通二人か三人で持てたお神輿がね、一〇人以上で持ってもてないということになったんですよ。神輿に重みつけたんだか、神様がいやいやながら重みをつけてしまったんだかわかんねですよ。それで吉岡の八幡様というのが飯坂から来てんですよ。それ、吉岡の村田法印知らねんですよね。それ写真とって、文章書いてあんの写真とってこのとおり書いてありますって、コウジノカミサマこういくして吉岡さ来たんですって置いてきましたよ。

私はね、なるべくここの人たちの話はね、なるべく忠実にいかしておいてね、後の人たち、勉強する人達に残しておきたいと思ってね。

男　やっぱり、ここは平家の残党だということはずっと伝えらったんだね。

潤　残党じゃないです。落人です、言い方は。どこから上がって行ったかわかんねけどね。すぐそば、平泉でしょ。それから、平家っていえば関西ですよ。平泉は源氏でしょ。ここまで手繰ってきた原形はどこにあるか。

男　早坂家が多いんでがすね。ここの部落もだいたいが早坂。

潤　荒川のぼって船形山に。

男　小栗山。

潤　小さな栗すね。小栗山で戦ってることもあるんだね。「ころころ　ころころ　こぐりやま」って言葉もあるんだね。こっちの小野田の方でがすか。

男　うん、ここでがす。

婆　この陰、この山。

男　シキマムラ（色麻村）小栗山でがす。船形権現様も小栗山にもあるんでがすと。

潤　はぁ、そうですか。

男　四二年に一回開くんだね、こっち。だから、一生に二回開く人は少ねってことだね。

潤　随分面倒になって来たね。

男　はぁ、そすか。

不明　ほうないだね。

男　はぁ、それからジョウギ(定義)の阿弥陀如来はここにもあったんだおんね。種沢というとこにっしゃ。同じものがね、オマンダラ（曼荼羅）、俺達でね、お掛け図っしゃ。

潤　オマンダラってね、密教だんです。

男　今それがね、ここから流れていったのが、シキマさ行って、そこから古川さ行ったてこと聞いてるんでがす。

爺　古川にオマンダラなにっつとこあるんって。

男　あんでがすぺ、やっぱり流れてんだ。お掛け図になってね。

潤　その一二〇〇年前のね神名帳にシキ神社ってのあんの。シキマって言いましたろ、シキマ。シキ神社といったんです。吉田はユキ神社と言ったの、ユキの神社といったの、吉田の方は。

男　やっぱ、小栗山にあんだおんな。

潤　戸沢山ってのあんですか？おそらくね、鳴子の向こうだと思うんです。ここもね、戸沢山もやぱっりそういう寺院があって、鎌倉時代にやられたってちゅうことわかってんの。ことね、御所山と戸沢山ね、御所山と戸沢山がやられたっていう記録あんの。

男　そうとう戦った時あんだね。

（テープ中断）

[2]「山内地名②・仙人・人生儀礼」

（昭和四十五年四月三十日）

登場人物　早坂喜一郎・吉田潤之介

喜一郎　その人がね、町村内の歴史をね、調べて刷本してたわけでがすぺ。その人は大体、ここの家に、年代まではっきりしたもんでないんだらしいんだね、先生。

潤之介　ふーん。

喜　どういうことになったもんだかね、行って、ちゃんと製本作って、仙台の図書館さ行って作ってもらって編集してあるんでがす。はっきり、吉田村内の歴史を。大体まず、……家の事情をからっかずでねしゃべって作っておくのでがす。おらいさも一部持って来たの。どこさ入ったもんだか、めっけねえおんな。その人ね、作ったのをね。図書館さ行って作ってもらって、編纂してもらって。配本すっからといってまわしてくれって来たの。

潤　印刷はしてあんの？

喜　してあんの。その人ね、全部調べて。何年かかったんだいか。すいぶんかかったんでがいんか。

潤　ふーん。

喜　村の歴史を調べんのね、とにかく、こういうこと参考になんだからってど、仕事なくなってからわかんねどって、ずっと調べてたんだ。止めてからずっと調べてたんだ。

潤　そいで升沢は、こういう話聞いてんだがね。平家の落人の人が来たというんで。一番ここで古い家はどこですか？

喜　んだねあれ、ドングリたってやったね、あそこの家なんでがす。これはね、昔から古いといって。

潤　名前なんというんだっけかな？

喜　早坂林右衛門。

潤　ああ、林右衛門さん。

喜　古いのでね、御番所だったそうだ、もとね。ここ、ハッポウヤクジって大船形山っつのは、最上のサンヤマ（三山）と同じことでね、昔のお山の一つだったんだとっしゃ。あっちの、月山の方は西のお山として、こっちのおらいの方は東のお山として。そしてその、人を出入りして参詣があったということ話をしてるんだね。それがために、そこのところ、その当時の番所だったそうでがす。升沢口と宮崎の方にあるしね。バンドコロ（番所）ってね、やっぱり関所ね。それから南の方には、定義の方に、白石（現在の仙台市泉区根白石）の方だな。

潤　ここのところね、ナニワ（難波）通っていわゆる白石通って、七北田通って仙台の方に行ったんだって聞いたんだがね。

こっからね、向こうの方にはどっから通って行ったですか？

喜 どっちの方にっしゃ？

潤 山形の方に。

喜 ああ、山形の方に行くにね。向こうはやっぱり定義でがいんか、先生。

潤 定義？ここ番所ですよ。

喜 うん、ここは番所。あっちは定義の方通って白髭。

潤 あっち通るの、こっちでねの？

喜 うん。山、そうだね。

潤 こっちじゃないの？

喜 うん。今だって。

潤 サバネの方じゃないの？

喜 うーん、そうっしゃ。今だって、定義。

潤 ウヤムヤの関通ったのすかや？

喜 そうでがすと。

潤 ウヤムヤの関通ったのすか？笹谷峠だよ。

喜 あっちでなく。

潤 笹谷峠のことウヤムヤの関っつんだ。

喜 ははあ、あっちをね。

潤 あっちからこっちに回って来るはずねんだよ。

喜 ほだね、そうすっと、山、やっぱりお峰なり下がって来て通ったんでねか？

潤 南船形の麓ね、西よりの低いところあたりでないんかと思うんだ。

喜 そう、そう、そう。

潤 そして、どこに出て来たんだかね。升沢神社のハタサカ（旗坂）あたりにでも出てきたんでないか。あとは、ミヤチのとこに出て来たんだいか。

喜 もとはね、ミヤチの方に出たんだ。小栗山通ってね、あの……をね。……かかって、上がって歩ったとっしゃ。この升沢の道路はね、こいつは、昔、寄留したった御番所あった当時の道路だと思うんでがす。そして、荒らしてはね、荒らして誰も人歩かなくなったんで、本木栄八という人がね、切り開きして銀杯貰ったんでがす。その人が開いたことに最近なったんだね。あとを荒らしてから、おらあ、ほだね、明治、ああ、大正か、大正初め頃だね。ここの部落の人を利用してだね、白石の熊谷ケサゴロウっつ行人がね、是非ともこのお山開きたいということで協力してけろっつのでね。やっぱり、なにっしゃ、皆んなに同意を得て開いてからこの道路歩ってんでがす。現在の道路ね、昔の道路を切り開いてね。歩ってんのさ、そこ。そいことだったんだね。

潤 御所山に登った所は、要するにサンコウノミヤ（三光宮）

からユウヤチ（湯谷地）下りて、オヤマゴヤ通ってオサワガケして、あそこの千畳敷に行ったんだが、その、本木さんという方は別な道路作ったの。

喜　んでなく、あそこの道路をね、オサワってやつは切り開くにね、ひどいために止めて、要するに沢さ上がって沢さ行ったのさ。

潤　昔の御番所っつうことは、要するに小栗山通って。小栗山でしょ、なんかどっかもっと低いとこ通って山形に。

喜　小栗山はね、小栗山口って別にあんです。小栗山にはね、バンドコロ（番所）ってあんでがす。あっちにもがす、番所って。今でも番所、番所って。

潤　はあ。

喜　升沢と、てんでなんだ。

潤　とにかく向こうの尾花沢になじょして行ったか聞きたいの。

喜　はあ、升沢ですか？小栗山ですか？

潤　あの、尾花沢に。

喜　尾花沢。

潤　とにかく山形側の方に。

喜　ああ、ああ。だって道路あんだから、先生。

潤　どこに道路あんの。

喜　ほだね、先生。ここの船形山からね、少し北さ行って、沢さおちんでがす。

潤　何沢っていうのっしゃ？

喜　んだなー、何沢っていうんだかな。あっちの方の持分だからわかんねおんね、先生。そのお沢がけっと、ながねみね行くと銀山さ行くんでがすと、先生。お船形山からながれ下がって陸地さ行くと銀山さ行く。遠いんだおね。

潤　うん、うん、うん。

喜　それからまた、オサワにいろんな名称あんだおんね。そいつかけてまた銀山に行ったんだおんね。うん、おらそいつ歩ったんだ。

潤　ゴオウザワ（護應沢）なんっつの知りませんか？

喜　ゴロウザワ（五郎沢）す？

潤　ゴオウザワ。

喜　山形の方でがいんか、そいつ。

潤　恐らくそうでしょう。

喜　確かそいなんだかしれんど。今なじょなことになってっか。銀山は銀山で道路開発してんだか、おらいの山さ通すようなこしゃえてんだか、なんだかね。

潤　昔ここに仙人がいたって話だね。それどういうことやったですか、その仙人は。

喜　おらとこ、なんだおね、血統でっしゃ。おらとこのジジイ、

私のジジイの舎弟だったんだおね。まず、オカタ持たねでね、四十三ん時に亡くなるってこと自分の生命を明言して、その年に亡くなったわけ。

潤　なんつう名前でしてったのっしゃ？

喜　名は早坂三代治っつんだおね、そして、自分が行者んなってから仙人と言ったんだね。ます、変な人で、神を司ったつんだね。まず、変なことばりあったんだね。

潤　変なことって、どういう、例えばどういうことすか。

喜　まず、人間の目で見らんね神というもの呼び寄せてね、やっぱり、自分の家の人達さ見せたんだね。その人がそういうチリキがあった人なんだね。そして、ここの桑沼っつ沼ある、そこにその、ジャ（蛇）がいたっつんだおねや。そうとう大きな蛇だったんだが、そしてその蛇をね、お宮の前に松の木あったおね、先生。ふっといね。切ってしまったけどね。そこに呼び寄せて、そこさ上げていたとかね、いろんな変な話ばりあったんでがす。それから、鉄砲ね。もと火縄筒だったんだね。その火縄筒で、ヒトッタマ（一つ弾）でスズメ五羽撃ってみせたとかね。あるいは、向こうの木さ、一寸おきとか二寸おきとかに何発当ててみせるとかね。そういう、変なやり方やってみさせたんだね。ここの部落のキョウインした人だおね。

潤　キョウイン？なにす？

喜　教員、学校先生。

潤　これ、明治時代だね、

喜　そうでがす、そうでがす。

潤　明治時代、明治時代で仙人。

喜　明治時代っしゃ。……。

潤　昔、仙人がいてね、仏四つあったって話聞いてんで。

喜　そして、あすくさそういう人だからね、自分で独立で宮作ってね、いろんな昔の神のお姿っつんだか集めてたんでがす。そして祀って自分がやってたんだね。

潤　場所どこですか？

喜　ほれ、お宮っしゃ。お宮の中なんでがす。そこ。

潤　はあ。だいたいわかった。薫人形まで入ってたね。

喜　人形ね。鎧っしゃ、あいつ着た人形でがす。鎧着た人形をね、けっつかけて祀ってたんでがす。……。

潤　恐らく七〇〇年前の鎧だったと思うんだ。

喜　わあ。なんぼなんでも。

潤　番所小屋作ったって三〇〇年だからね。

喜　はあ、当時はね。

潤　伊達藩の番所ですよね、だから番所だったらね、必ず槍持ったり、足掛けもってってね。そいで、通る人達、今日は何人

通り候、何を持ち候、書きとどめておかななんないのっしゃ。

喜　はあー。

潤　やっぱり、侍だったらそういう格好して見せておかななんないね。袴着せてやってたのは、箱根の関所でね、周りにはやっぱり皆槍持ちなんていたんだから。

喜　はあ、はあ、はあ。

潤　やっぱりね。鎧着て見せなきゃない場合もあったんですよ、そりゃ。

喜　だからそれ、今の林右衛門さんのところにね、手錠だとかねトリガラミとかなんとかあったんだけっとも、今なくしたかなぁ。あっことはあったんでがす。そしてまず、おらとこの仙人さんという人は変な人だったんだね。剣道、天狗に教えられたとかなんとか。そいから、三日月槍、槍もあんでがす。どこへしまってたんだか見るにみらんねんだね。そいな、変なことばりあった家っしゃ。カワリビト（変わり人）はカワリビトだったんだね、まず。

潤　とにかく文武両道に達してたっつことは、私、聞いてたの。おそらく、おじさんのおっしゃってるの、その方じゃないかな。

喜　ほだべね。ねんでがす。その人がね、身体不自由な人だったおね、くなくなって。

潤　くにゃくにゃって、こんにゃくのように歩いてるんだが、武道はよかったと。書は読めたという話は、私、十七、八年前に来た時聞いたんだがね。

喜　ほすか。そして、その当時、服なんてもの買って来たんだね。見たことね、なんだか変な。明治初の初代だからね。そいなもの買ってきたりね、いろんなやっぱりカワリビトだったんだね、先生。確かに平家の落人には疑いないね、こっちは。そして、伊達藩になってからは、ここのミツミネサン（三峰山）の国有林は部落のエグネトシエザンとして、自由にしてたもんだっつね、先生。そいつは、トシエザンとして、なにも禄っつうもんけらんねからね。貴様達その山を自由に伐採して、切ってねクワッツルだの細工をして売って食ってろってことになってけたんだそうだ。今でもその書類は役場にがすぺ、トセイザンとしてね。藩から給されたということにね、うらぎねんだね。そして、オナガスギってノビル（野蒜）っていったね、先生。塩へしたんだとね、そん時。木、この川流してやって薪ね、持って行って焚いたんだとっしゃ。

潤　ナガスギっていったんだすぺ？

喜　うん、ナガスギ。こっから持ってって焚いたんだとっしゃ。切ったあとと切らないとこと、区別つかってんでがす、国有林に。そして、ここの一家寺あったんでがす。今の吉岡

の中興寺、合併になったんだけっと。ここもやっぱりお寺あったんだね。

潤 イッカンツジすか？

喜 うん。升沢山中興寺。

潤 ああそうすか。

喜 そういうことになってんだから、やっぱり。そうとうな人はおったってことに違いないんだね。

潤 いや、お墓見て来たらね、なんか坊さんの墓あるんですよ。

喜 はあ。

潤 お寺あったのは見て来てんですよ。あれだなと思って。

喜 そして、そこの墓の上にね、元禄四年（一六九一）の石碑あのっしゃ。元禄四年ですと。ほいつ、今でも埋ってんだかね。元禄四年の石碑あるってことははっきりしてんのっしゃ、これは。

潤 それにはどういうこと書いてあんの？

喜 さあ。

潤 別に墓石じゃないね。

喜 墓石。人が建てたの。建てた石でがすと。墓石でがすと、元禄四年のね。だから古いのね。

潤 墓石もね、文政、天保、それから、文政だなやっぱり。寛政九年（一七九七）というやつね。あと、嘉永元年（一八四八）ってやつね。まあ、そんなとこね。元禄はそれから五〇年ほど古い。だから、元禄四年というやつは、あそこの墓場。

喜 あの墓にあるんで、くれかかっては。あんのっしゃ。

潤 墓場にあんのね。

喜 あんのっしゃ、くれかかってね。

潤 元禄四年にしたってね、私のねらってっとこ、七〇〇年ねらってんだからね。七〇〇年をねらってんだから。

喜 今から。

潤 うん。平家の落人って七〇〇年前だから。だからどこをたどってきてここさ来たかってこと。

喜 そうだね。ここさは義経来たことは疑いないしね。ここさ、ホウガンメっつとこあんだおね。ほうだから、加美郡の方からここさのぼってきたんだね。だから先生、日本が開けたつことについてはどっから開けたんだかわかんねね。やっぱり下から開けて来たんだすかや？

潤 下から来てんです。人っていうのは、海岸に来たらそこに住むわけでしょ。あとから来た人、そこに住むわけにいかないでしょ。やっぱり川上上がるんですよ。それは習性なんですよ。特に平家の落人なんていったら源氏に追いかけられて大変だと思うからなるべく不便なとこ、しかも住み良いとこっていうような、考えてみたら、ここに古い家何軒か、お宅

などのね。恐らく、水を中心に家を建てて住んだんじゃないかな、と私は推定するんだ。

喜　ははあ、ほだからね、この山みっというとね、西山だってね、何年古く歩ったもんだかや。道かたではっきりすんでがすや、先生。ほだからね、あれだけ街道、

潤　西山って松葉の方で。

喜　ほでね、船形山の。東根から定義の方さね、山形の街道っしゃ。その跡今でもはっきりしてんだから。どれだけ人間がかよったもんだかね。まず、驚いたね。

潤　それだけ信仰が厚かったかってことも。

喜　そうなんだ。まず、驚いたね。

潤　だから、ハイマツ……など歩くと気持ちいいこたね。ふわふわとして、あそこ白髭のとこなんど。

喜　ほでがす、ほでがす、先生。若け時から来ったんだおな、この山さ。

潤　あと、ここでは問題にしたいのね、ヒダナ（桧棚）ってどこにあります？

喜　桧棚こえ、ここにあります。

潤　皆そういうんだ。ほでないの。船形の近辺ね、オサワね。あるいはあの山の近辺に桧棚ってあるんです。

喜　はあ？

潤　その字はね、ヒノキ、タナと書く。

喜　なるほどねえ。

潤　私はね、イワヒバ（岩檜葉）の棚だと思うんだ。そこに天狗が住んだと。白髭大明神か、そこにいたというんだがね。あの、そのね、桧棚欲しくて、どこかなと思って。

喜　んだねや、やっぱり。岩檜葉ってやつ、石くらいまでしかねおね。

潤　畳二枚、一坪くらいっていうから、岩檜葉の大きさからしたら大したもんだね。

喜　やっぱり、変なこと。

潤　大抵、ブナ……に行くとサルノコシカケだのなんだのってあるがね。サルノコシカケはキノコの変化であってね。

喜　ははあ、あいつ癌さいいつんでないかや。

潤　そんな話あんの？そいつ言っておくから癌の先生に。

喜　どうぞ調べておいてくないん。癌さいいどって、使って持って行ってる人あんだよ、先生。

潤　おれ、癌研に通ってんだから。

喜　ほすかや。

潤　それはいいとして、桧棚っての岩檜葉の棚だと私は思うと。オゾンツァン方そんな話わかんねだろうということで、話今日になってしまうんだがね。いずれにしたってね、初めここ

に二軒あったというのと、四軒あったという話あんだがね。その軒数言ってみてくれないかな、古い方から順に。

喜　ほうだね、古いのは早坂林右衛門、それからおらとこの本家。

潤　本家、本家なんていう方ですか？

喜　ほれ、早坂国男、それから、宗右衛門。まず、これ三軒ってことは実証すんだよ。あと、ほれ、おらはベッカだ。こいつここの家のベッカ（別家）だから。まず、やっぱり、これ、三軒ってことははっきりしてんだね。最近まで、おらは大正になってからてんでになったんだから。

（中断）

喜　……流の崩れたのでがいんか。まず、流はオオクラでがいんか。オオクラ流でがいんかい。

潤　何ですか、オオクラ流って？

喜　レイセキの一つだねや。オオクラ流って、シンドウだとかチョウセイとかって、謡、謡どって、その人たちが日本の礼儀ってもの記したんでがいんか。そういうこった。そいつの崩しってもんで、

潤　それはね、婚礼の場合でしょ？

喜　婚礼の場合。

潤　いや、縁組するだんになる時ね、一番初め、私ね、吉蔵さんの家ではね、嫁は台所から入ったそうだ。

喜　うん、キノシリ（木尻）から。

潤　ダンナは上から入ったと。

喜　そいことだね。

潤　あの、三々九度やって、そしてオオクラ流ってんですか？

喜　ほでがす。三々九度して、今度なんだおね、親類名乗りすか。親類名乗り終わって今度、こうだい、トコイレ（床入れ）ってことあんだおね。それでます、ヨメゴ（嫁御）とムコ（婿）二人で床さつかせることに。決まってから、こんだアトミノシュウゲン（後見祝言）ってやって終わることになってんだね。

潤　床入れっての形式的なんでしょ。

喜　形式、形式。ただね、式、三三九度って酒、取り交わし、式するだけっしゃ。あと、床。

潤　あと帰って来て。

喜　うん。

潤　もういっぺん帰って来て、そこでこんだ、皆で歌ったり酒飲んだり。

喜　後見の祝言として皆で。そして、行った人帰って来るわけっしゃ。

潤　ザンシだなんてどのくらいなってんの？

喜　ザンシということについてはやっぱりね、親しい親戚達のご馳走をいうんだね。隣近所はよばねのっしゃ。近親だけだね。そして、今度ザンシにするわけだね。そして、今度、お里帰りっつもの、終わってから二日目か三日目に行くことになってんだね。今は、新婚夫婦でどこかに出かけてしまうんだがね。

潤　温泉旅行だおんね。

喜　今はそういうね、式だって簡単だお。昔はそいことやったんだね。

潤　それで、「おさめなりけり」にしますがね。あの、お葬式の場合にはどんな形でしますかね。

喜　葬式。んだねえ、やっぱ、和尚様、中興寺だね。和尚様わたすんだね。契約講つものあんだおね。その、講員が知らせてけるわけだね、親類達はまず関係しねと。ただ、講の人の世話によって人を葬ってしまうと、こういうことになんだね。親戚達はゴツッソ（ご馳走）なるだけだね。ただ、死んだ人、仏に対して、近親達は和尚様に、近くに、つっと合図してね。あとのその、第三者の人達はあとさ並ぶと、そういうようなシキワリになってね、過ごすわけです。

潤　その時ね、提灯、そのままあそこさ埋めるんでしょ、土葬だから。

喜　んでがす。

潤　提灯など持って行くわけでしょ。

喜　提灯、松明。

潤　昼間でもね。

喜　でがす。

潤　シカ（四花）とか、あと、位牌持ちとか、みなそういう形で入って行くわけだね。あそこまで、橋渡って。その提灯で思い出したがね、婚礼の時は提灯持って行きませんか、ここで？

喜　行くのっしゃ。

潤　やっぱ、ここ良いこと言うなあ。私、それ聞いてよかった。

喜　はあ。昔、ご祝儀振る舞い、夜に決まってたからね、先生。だから、迎えに今でこそ車で、高い昼に来っけともっしゃ、昔、徒歩であれすんだからっしゃ。どこのオフルマイ（御振舞い）だって明るいうちに入ったのオフルマイってねんだおん。最近だおね、明るい昼にやらかすの。だから、そん時の迎えってものあったのっしゃ。

潤　そんで、講の人達ってのね、その講はその葬式に関してだけですか？ここにあんのは。

喜　いや、部落のね、行事ってものだな。道の普請とか、この

屋根の普請とかね、そいような部落のおもな仕事に当たった人に手伝いに行くわけだ。

潤　はあ、ここの人全部だね。

喜　ここの人。

潤　ここの人ってのは、今、現在。

喜　二〇戸。そこの人が全部寄るわけっしゃ。

潤　はあ。

喜　忙しくね。建具屋だとかね、家建てるだとかね、その人達が寄って皆世話してくれるわけだね。部落の行事は全て講によってまかなってるわけだね、今。今「実行組合」とかね、名称変わってね。

潤　実行組合って名前使ってるの？

喜　昔は契約講なんてね。今でも契約講あっけっともね。だけっとも今の名称の方、組合ではたすことになってんのっしゃ。ただ婚礼だとか葬式だとかの場合、寄ってね世話したり、受けたり世話したりして、たいしたもんだ二〇戸だからね。おさめても二〇人だから、なんぼしたって四、五〇人の人達いる値になんだね、今でも。

潤　上手なんだな。

喜　大掛かりっしゃや。最近、船形荘でもやったんだ、孫さ。七〇人くらいの人になったんでないか？

潤　話に聞いたら、三日くらいやったって。……なんだって三日くらいになりしたって。

喜　やっぱり一週間くらいはかかんだね。どこだってそうだ。三日くらいはね。そんなことこんなとこで楽しみくらいなもんでないか、先生。今だって。

潤　楽しみってばね、お正月の行事なんてどんなことやってますか？

喜　今はほとんどがないといってもいいね、先生。昔は、かたかったっしゃ。

潤　オショウガッツァマ（お正月様）迎える時、どういう具合に餅ついて、あとは、御幣束なども、もどこどこにしなけないって決まってらした。

喜　ああ、決まってた。ここ平家の落ち人のためにね。

（テープ終了）

［3］「山内地名③」

（昭和四十五年五月一日）

登場人物　小川久五郎・吉田潤之介

小川久五郎　コンゴウサン（金剛山）という山は、ありますね。

潤之介　どの辺ですか？

小　それはね、船形って、金剛山って山は、作並から峠つたいにくる登山道があるわけっしゃ。そこから来てあの、白髭山っつのあんだね、後ろと前とね、その前白髭山に峰なり来てるわけっしゃ。その途中にあんですね。

潤　その途中に、金剛山って山ね。

小　はあ、だからね、やっぱあそこは、山形の領分でないすか？

潤　山形の領分ね。

小　はい。そのようですね。私も一回しか通らないけっともね。ところどころに道しるべがあるわけっしゃ。それで、記憶あるんです。

潤　それからね、オコモリガワっていうんですか、オコモリザワっていうんですか、そういうとこありませんか？

小　オコモリザワってのは、ちょっと聞いたことない。

潤　んで、ハタガモリは？

小　ハタガモリってのもわかんねね。カンプウヤマってのは途中にあるんですよ、カンプウザン（寒風山）ね。カンプウザンってのありますよ。

潤　地図にあるね、船形山のとこにトフナバラ（止船原）って言葉あんだがね、ト、フネ、バラ。

小　はあ、はあ。

潤　そう言う言葉使っておられるとこないですか？

小　フネバラ（船原）。ここでは、俗名にカナガシラヤマってのが、フナバラになってんだけっともねえ。

潤　カナガシラどう書くのっしゃ？

小　字はわかんねけっともね。

潤　カナガシラヤマね。カナガシラヤマがフナバラ（船原）で。そこんとこで要するにとまってたんだ。そうすっとあとは、フナガタダケ（船ヶ岳か）って言葉あんですがね。フナガトウゲ（船ヶ峠）って地名は？

小　俗名でフナガトウゲなんて言ってないんだがねえ。

潤　船形だと思うんですがね、私は。山のこと峠っていうこともあるからね。奥の院っていったら神様だすべ。イイトヨジンジャ（飯豊神社）ってないすか？

小　飯豊神社ってのは、船形山の頂上に祀られていんのっしゃ。

潤　船形に？

小　大船形山の頂上に飯豊神社祀られてんです。

潤　大船形。だったらあの、石で囲まれてっとこ？

小　はい、あの。

潤　あすこんとこ飯豊神社、

小　はい、あすこんとこ飯豊神社。

潤　はい、当たーり。そいからね、イワトカンノン（岩屋の観音か）てのご存じないですか？

小　さあ。

潤　あの、アマノイワト（天ノ岩戸）ですよ。イワトカンノン。

小　さあー。奥の院というのは、確かあれだね、ここでいうとミタキオオタキ（御滝大滝）というところに滝がありますよ、オトコダキ（男滝）、オナゴダキ（女滝）。そこがここでいう奥の院、奥の院といっているとこですよ。

潤　私伺おうとしたの、その次がメダキ（雌滝）、オダキ（雄滝）なんです。

小　はい、はい、はい。

潤　どこにあんですか？

小　それはね、山形の沢にあんですがね。

潤　山形の沢。何沢ですか？

小　これね、何沢だかなぁ。ずっと出て下流に行けばだね、下流ってまあ、上流の方はなんつ沢だかわかんねが。

潤　シロミズ（白水）が湧くとこあるね。

小　わかんね。

潤　はあ。

小　ツルコ（鶴子）の方へ出んです。

潤　ツルコ。これはね、雨冠に鶴書くんです。その、鶴子方面に行く。

小　沢なんです。はいその沢なんです、その上流なんだね。

潤　こいつは上流ね。はあ。そこんとこにね、ミズワケカンノン（水分観音）てあるかどうかって。

小　ははあ、水分観音ね。

潤　ミズワケと読むかどうかわかんねけどね、私はミズワケと読んだんです。

小　はあ、はあ。

潤　そういう観音さまのあれご存じありませんか？

小　さあ、なんにもシルシんなってねから、そこにもね、お宮あるんです。ずっーっと。そこにはね。

潤　そこって、雄滝、雌滝の。

小　はい。水分観音ってのはっしゃ、私から判断しても、このようになるわけっしゃ。ただね、略図だけ書く。例えばね、ここで書くとっしゃ。大船形がこういうふうに船形のようになってるわけだね。そこからね、陰から、裏ね、この裏の下までが来てるわけっしゃ、沢ね。それが山形の鶴子の方に出る沢なんです。ところがね、ここにもう一本沢があるわけっし

や。ここのアイクチ（合口）に神様の小さな木で作った神様が祀られているわけです。そうして神様のここでね、何神様祀られてるかわかんねの、私から判断するとね、水が、ややこっちとあっちと分かれるので水分観音ということになって祀られてんでないかと今判断したわけっしゃ。

潤　なるほど。

小　ここに御大典記念のコンクリで高い石があったんですね。山形の何総裁何総裁って、みな瀬戸のやつでね、張り付けたえらい高いね。そして、今のように御大典記念時分には、開発してでね、林道でもりっぱでない時だから、沢なり山形の人がコンクリーから山なり、砂利しょってきて建てたのね。これすこぶる難儀して建てたと思って来たのっしゃ、私ね。

潤　大きさどれくらいですか・

小　大きさ、尺くらいの厚みにね、幅が大体二尺くらいあるんでないですか。そして高さがね、六尺あまりあるね。それが今ね、何か当たったんだか倒れてこう逆さになってます。そしてね、ここで見るとっしゃ、合口に行くと、この沢のここからこういうふうに頂上の方に登ってくる分かれ道ではないけっとも、窪んだとこあるわけっしゃ。こっちも川、こっちも川ですよ、ところがここにこうしたケイセンのとこにね、こっちが雄滝こっちが雌滝とここで二つたちめるようになってんです。

潤　この位置から両方見えるようになってんだね。

小　そうです。滝ね、どっちも。そこでね、神社のあるとこで見るとどっちの滝も同じように見えるようになってんです。いくらも離れねんだから、とにかく。

潤　それで、雌滝、雄滝になってんだ。

小　はいはい、そういうことです。そして、ここにね、川が三本なるような状態になってんです。ここからまた分かれて、こういってるわけです。

潤　オマエガワってのわかりませんか？

小　さあなあ。

潤　そこへつながって来ないね。

小　つながっていねな、

潤　はい、わかりました。ギョウザザワってわかりますか？

小　ギョウザザワって聞いたことあっけっともね。ギョウザザワってあるそうです。

潤　続けて言いますよ。ギョウザザワ、テンノウザワ（天王沢）、ニョライザワ（如来沢）、ホウオウザワ（法王沢）、シンレイザワ（神霊沢）、ブッショウザワ（『手引草』によれば仏生沢だが、仏性沢か）、オサワ（御沢）とこうなってる。それからね、ベンテンザワ（弁天沢）、キツネガタ（狐形）ってい

うのかキツネザワ（狐沢）っていうのかな、弁天沢、狐沢、キツネだと思うんだがね、よくわかんねんだな。あとは、ジャガタケ（蛇ヶ嶽）とかコウジン（荒神）、アラカミサンとか、イシノドウヤマ（石ノ堂山）ってありましたね。

小 石ノ堂山っつの、なんだつけな。確かにわかんねんだな。

潤 オオタテヤマ（大楯山）てのあるんでしょ？

小 大楯山ってあるそうだね。

潤 あるそうだね。それからね、テンリョウサン、テンレイサンっていうんですか？天のミタマ、霊魂の霊ですよ、テンレイサン（天霊山）。コガネシミズ（金清水）ってのどこにあるんです？

小 金清水、聞いたことねえな。やっぱ、山形領分だべなあ。

潤 金清水だったら、こっちで聞いたことあんだけっともね。

小 はあ、はあ。

潤 フナダマヨンショ（船霊四社）って、そういうのわかんねですか？

小 聞いたことねえね、山形領分だべね。山形領分に行けばこっちの分であれば、ずっと昔の話し合いあるから、心得てるんだがね。ほとんど山形分だね。

潤 そうすっとね、そこに続いてくる山がね、サンポウザン、ミツミネ（三峰）なんですよ。

小 はあ、はあ、あります。

潤 三峰山に、ユキノジンジャ（雪ノ神社）っての祀られてあるんだが、その雪って降る雪になってんだがね。私の考えじゃね、行くね行列の行、行ノ神社って黒川に四社ありって延喜式に一二〇〇年前出てるんですよね。その行ノ神社の分身かなにかわからないけど、黒川に四社ありっていう行神社の末社かなんかじゃないかと思うんですがね。これはわからないけどね。行神社、シキジンジャってのこの小野田の方にあんです。石に精神の精書いた神社ありますよね、大石山なんだか、吉田法印の神社ありますね、

小 イシガミジンジャ（石神山精神社）ね。

潤 あれなど、黒川の四社となってね、一二〇〇年前の記録にのってんです。それの中の分社としてユキジンジャね、その行ノ神社が雪ノ神社となっていったんじゃないかと私思うんです。これ、サンポウザンでなくミツミネだね。

小 んだね、ミツミネヤマ（三峰山）です。

潤 ミミズクヤマ（木菟山）ありますか？

小 木菟山あります。サンポウザンの内なんですよ。

潤 サンポウザンの中ね。白髭はもちろんあるね。それからね、セキトウザン（石頭山）っての、石の頭の山と書いてあるんだがね、白髭山のことをいうという言い方はしてんだが、セ

キトウザンは白髭山のことだといえばそれまでかもしれないが、そういう山の名前は聞いたことありませんね。

小 ちょっと、ないね。

潤 それから材木岩なんて、これから面白くなってくるんだが。

小 はい、これは山形のオサワ（御沢）のうちにあるんです。

潤 さっき、ここに、御沢ないっていったのに、ここに御沢出てきたんじゃないですか。

小 いやいや、それは、ソウゲンにあるのっしゃ。私行ったことあります。

潤 どの辺ですか？山形の。地図でいうと。

小 地図でいうと、これからね大体そうねえ、八町は、町くらいあんであんめかなあ。

潤 ミヤワキから一〇町下？

小 はい。一〇町の上かもわかんねけっともね、その途中にあんです。

潤 十町上下にしておくからね。

小 はい。

潤 船形のミヤワキから一〇町上下に材木岩あり。こんだそこが面白くなってくんだ。材木岩のとこを流れてる川をシロミズガワ（白水川）ってんだよね。

小 はあ、なるほどね。

潤 その白水川で、弁財天がご飯炊いたとなってる。

小 はあ。

潤 そこにね、オカマガイシ（御釜石）っのあんの？

小 あります。あります。

潤 そこに白水川が流れてると。その、御釜石ってどこにあんの？

小 あのね、材木岩の上かと思うね。これをね、ここでね、御釜石って言ってる、ここの人あんまり行かねからわかんねかしれねけどね、ほんとは正面からみたときっしゃ、川の真ん中にね、大した大きなイヌくらいの大きな石なんですね。

潤 イヌくらいってどれくらいっしゃ。

小 いや、このウチのくらい。おれの家だったらこいつの三分の一くらいあるね。もっとも、……。ところがね、正面から見た場合にね、こういうく大きな石の上にねっっこかってね、いかにも手をついてガマのような恰好に見える石だおね、それでガマイシ（蝦蟇石）というように作ったわけだと。そいつはそれ、山形の人と御沢駆けして一緒になって、この石の名称はなんのだということで御釜石だということで教えられたわけです。

潤 それは、材木岩の上だとすっと、白水川だと、弁財天がご飯炊いたお釜のことを御釜石といってんだと。

小　そいつをね、ほすか。

潤　そうなってくると、ニブガワ（丹生川）の上流となってくんだが、その丹生川って？

小　さあ。

潤　ニはね仁丹の丹です、ブはね生まれる。

小　はあ。

潤　丹生川の上流に御釜石があると。それから出てくるのはね、アラチザワ（荒血沢）という。荒々しいチ（血）のサワ（沢）という。これなどご存じないですか？

小　そうねや、よっくわかんねおなあ。

潤　ゴショダイミョウジン（御所大明神）を生んだとこであると書いてある。丹生川の上流だっていうんだね。荒血沢っていうの、要するに弁財天が子ども産んだ時に血流れたとこがアラチザワというと。いろんな意味つけんだな、そんなとこわかんねけど。そいからね、そこにでる水はホウキョウクドクスイ（法鏡功徳水）と名付けてると、そんなことわかんねね？

小　わかんねね。

潤　そこに、七二ヶ所の名勝と一六ヶ所とカイサン岩の名前と、合計八八ヶ所あるとね、それと合計四八流れ、六四滝とあると、そうすると三〇〇いくつ。

小　ほう。やあ、やあ、やあ。

潤　三〇〇っつの、うんと大っきいってことだよね。昔の人書いたんだからね、ね。四八滝だったらそこにあっけっともね、四八流れなんて向こう側にござれんか？

小　んだねえ。山形の人達と話したらんで、あれでないかということあんべけど。

潤　ここでわからなかったら、私、尾花沢の観光協会に手紙出して調べてもらうと思って。どうせ、こっからあっちにぬける観光会作ってんでしょ。どうせこっちでわかんなかったら、あっちにぶつけると思ってるからね。おれみたく、あったらあるといってもらえばいいから。金華山は出てくる、羽黒山は出てくる月山、湯殿山、蔵王岳、鳥海山、駒ヶ岳まで出てくる。その次がミノワサンショ（三野輪三所）っていうの出てくるんだね。それからは、こっちの方なってくるんだがね、クツカケザカ（履掛坂）っての聞いたことがいんか？

小　履掛坂って、大衡なんでしょ。黒川郡でしょあいつね。

潤　そこんとこにね、クツカケ（履掛）を通って荒川に行ったっていうんだ、荒川にいかとね。

小　荒川さ出たって、色麻の方の川さ出たつんで……。

潤　そいで、そこを通って行くとヤマザキッパラ（山崎原）というとこあると。

小　山崎原、王城寺だね、王城寺にありますよ。
潤　王城寺すか。
小　うん、王城寺。
潤　でね、そこんとこにヨツヤノチャヤ（四ッ屋の茶や）があるってんだが、四ッ屋っての。
小　もとだからな。
潤　あと、シズノサト（清水の小里か）って、清水と書いてシズ、シズノコサトって地名は。
小　知らねな。
潤　んじゃ、こっちは、ホノガワ（鳳の川）っての知りませんか？
小　ほの川っての小栗山だから、この陰の陰にありますよ。
潤　小栗山て小さい栗ね、小栗山の陰。
小　部落へ出る沢がホノガワだね。
潤　部落へ出る沢がホノガワ。
小　ええ。
潤　オオトリオオカワ（鳳大川）ってのは。
小　オオトリノガワあんだつけな、どこだっけな。
潤　あんの？
小　あんのっしゃ。
潤　オオトリノカワでね、船形案内の鳥が、茶屋に坊さんがその坊さんっての北条時頼なんですよ、その鳥がその茶屋上を飛んでると、それがいかにもおれんとこ付いてこいっていうように飛んでると、ついたところが鳳川になったと、オオトリが案内してくれたとこを鳳と、鳳というのはホウリンのオオトリなんですよ。っていうんだが、大体どういうんだか見当？
小　ちょっとねえ。
潤　小栗山の流れに出る沢、
小　そういうんだね、合流なるんだね。
潤　合流する川、登り方がちがうんだね。
小　確かにそうです。
潤　ミツロイシヤマ（三ツ石山か）ってご存じですか？
小　ちょっとね、
潤　わかんねすか？あと、アカイシっていうんだがね、石へんにシュって書く、アカイシって読んだらいいか、シュセキだか、わかりませんか。
小　わかんねね。
潤　男石女石っていうのあんだがね。
小　それも、聞いたことあるようだけっとも、ちょっとどのへんにあるのかわかんねね、オトコイシ（男石）、オナゴイシ（女石）っつの。これは、男石っつの小栗山の裏側だかな。

確か小野田に越えるところのね、途中ではないけっとも小栗の部落の中にあると聞いたことがあるね。

潤　まあ、例えば香取鹿島には男石、女石あんですよ。ほだから、あっちこっちにあったってかまねことだがね。小栗山の人達に聞くにはどうしたらいいですか？

小　やっぱり、

潤　黒川郡ではねすぺ。

小　加美郡です。ここから二峰こえればすぐ。やはり中新田の色麻から上ってもいいわけだな。いってるかなバス？

老婆　行ってすぺ。

小　中新田の町からバスもある。

潤　そっちから聞いて行けばいいんだね。そいからね、ツルコムラ（鶴子村）ってのご存じだね。

小　はいはい、山形だね。

潤　トリイイワ（鳥井岩）ってのご存じですか？鳥井岩。

小　さあ、鳥井岩ね、

潤　これね、私本読んで、わかっていたつもりなんだがね、珍しいトリイ（鳥井）らしいね。鳥井っていうのはね、こうやってこういう作り方、それがとてつもなく太い石柱でね、幅があって低いんですよ。それが、日本に三つしかないと山形の学者が書いてあって、それがおそらくここじゃないかと思って考えてるんですがね。それは、私の推量で。鳥井岩ってのあるということは、写真にはちゃんと出てるんで。そいからね、キリイシヤマ（切石山）っていうのあんですか？

小　さあね、

潤　出てくるとこ、切石山に、小栗山と、続いて出てくるんだね。

小　小栗山。どこのこと言うんだかなあ。

潤　その次ね、ヤクシガモリ（薬師か森）。

小　薬師か森って薬來山のことじゃあんめかな。

潤　おそらくそうで、クリノコサカ（栗の小坂）ってのは？栗の小坂ってのおそらくさっきの小栗山の坂のことというんじゃないかと私思うんだがね。栗の小坂ってね。滝の沢って沢ないですか？

小　滝の沢ってのは、なんつんだっけ、おらいさ自家発電作りに来た小松ジンザブロウというのあいつ、カノハラのタキミヤってとこが、もとは滝ノ沢かもしれないのさ。

潤　そこ、場所はどこっしゃ？

小　場所は、小野田。確かそうだとおもうね。

潤　アマガオカノミネ（天か岡の峰）ってわかりますか？

小　わかんねね。

潤　サトミザワ（里辺沢か）は？

小　サトミザワもわかんねね。

潤　ツマザワガワ（妻沢川）っての？

小　はあ、それは。

潤　妻沢川、かあちゃんの妻ね。その次出てくるのハチマガモリ（八魔か森）っての、これなんですか？ハチモリと違うんですか？これね、鬼首と関係あるんじゃないかと思ってね。クスノキダイラ（椚平）ってどこですか？

小　クスノキダイラす？聞いた事ねえな。

潤　タマツクリノダイラ（玉作りか平）って？

小　タマツクリ（玉作）ってそこだね。

潤　小野田の近辺でしょ。タマツクリガダイラっていったんじゃないかと思うんだがね、その近辺にね、ニンジュウガワ（人衆川）って、人の集まる川。群衆の衆ね。ジンシュウガワだかニンシュウガワだか、それは。

小　小栗の川だか、シモニンジュウ（下人衆）、カミニンジュウ（上人衆）って人衆の川ありますよ。

潤　どこにも小栗山かかるなあ。

小　シモニンジュウ（下人衆）、カミニンジュウ（上人衆）下人衆、上人衆って沢二つあるんです。

潤　ようするに合わせて人衆川だね。

小　そうかもしれないね。

潤　小さな滝、コタキ（小滝）ってありますか？小滝、大滝。

小　あります。

潤　場所は？

小　これはね、ここから一里あんべかや、ねえな、三町行ったところの陰にあんだね。この升沢の、升沢のね。これはもとから小滝と称したんだね。大滝はそれからまた、一里以上奥なんだな。

潤　それでね、小滝の奥大滝までの間に、ビョウブイワ（屏風岩）ってのあんだが。

小　屏風岩すや？屏風岩っつの聞いたこたとねな。

潤　聞いたことね。とにかくこれだけ出てきたおんね。

［4］「山内地名④」　（昭和四十六年五月二日）

登場人物　老爺・A（男）・吉田潤之介

老爺　法印さんのマヤマ何てば、このさ、神信心したんだね。ここの何がこの人の家が消えたんだから、ここの何が古いもんだそうだね。平家の落武者だそうだ、船形山の何を切り開いたのは。なにか山形県の東根の方から最初切り開いたらしい。そうちそのうおう……。こっちから、その人だそうだね、船形山のツウコウカイサン神社となってんの。

潤之介　ツウコウカイサン神社ってどこにあんですか？

爺　やっぱり、船形の神社が建たってる少し手前にあるおんね。

A（男）　権現様の手前すか？

爺　うん、少し手前。その人が切り開いた。北条時頼すか、サイユウキ……。あの人に封じらった山だってからね。

潤　そうすか、とにかくオジサン教えてけさいん。

爺　その人がやっぱす、ここのカノハラ（鹿原）にあるコンノキゾウさんの家に窯の火焚きした人だったからね。サイギョウジトキヨリとなる前。そうしてここの、ここにゼンコウジってのある。ここのよっくなにするとこ、この北の方にあるけっとも、現在北でなく、歩ったのはやっぱ南だおんね。その証拠に黒森にず－っと……峰にね。

A　この本にはないですか？ゼンコウジは。

潤　知らないです。黒森はのってます。

爺　ここのゼンコウジは、なにのゼンコウジから移しったんだと。ここのゼンコウジと、黒川郡の吉田にもあるおんね、ゼンコウジ（禅興寺）。

潤　あります。

爺　三ゼンコウジがある。ずっと来てここになにして、やっぱし、まあ、ゼンコウジ。なにす、ここだら縄張り、なに坊かに坊ってゆうような旅籠屋みてなものがあったんだべねや。お殿様のお泊りというんで旅籠でなく、そん時、南郷のお殿様となれば竜宮からお膳を取り寄せてごっぞうするとかなんとか多大な……を取ったらしいんだね。そこに、やっぱし、聞きつけてこっちゃ来たんだらしいんね。そして、クッサレ坊主になってほれ来たれば、ゼンコウジでうんといじめらったんだとっしゃ。そうして行って何して、やっぱ、ここの船形山にもゼンコウジから来ったつうんだね。

潤　その坊主はドウゲンボウス（堂源坊主）と言わなかったすか？

爺　そこのなには何坊と言ったそうだね。今の、何坊かに坊と言ったそうだから。ここはゼンコウジのお寺があったつうことは確かだから。おら、三五年の年、さかり来てネホリって

ものしたんでがす、ワラビの根っこを掘ってなにするうちに、はなだけのなにみてな、こっただの、こん時ふっちゃけたやつ四半分ばり見つけた。

A　ゼンコウジっていうお寺あった所、ワラビの根っこ掘ってたらそれが出てきた。

潤　何が出てきたの？

爺　ハナダケ。

潤　石だね。

爺　石でなく、焼物でなくってアクユウみてな。今の模様あったもんでなく、ただのアクユウね。

潤　アクユウね。

爺　アクユウ、灰の。

潤　土師器か。

爺　こいつはあったのさ。ほんでこんでイグチ（イグネ）石のたって、何す言えば、おれは鎌倉者だから、鎌倉さ帰ったら忠誠を誓うとつうふうにと言ったんだと。そんとき、みながら、さあ鎌倉から来ったというのでわれもわれもと行ったそうだね、ここのゼンコウジにというんだね。留守居坊主が婿だったと、船形は。そして、重い者は死刑、軽い者はそこでやっぱし……。船形は留守居坊主残さったために、まあなにだったんだね。そん時、来たいったのソガミョウケンという人だったね、平家の落人。山形県の今の東根の方から来た人。カンノウジにいったったからな。

A　カンノウジ？

爺　カンノウジ（観音寺）、あっちのあっかどうだかわかんねけっとも。話に聞いた。あっちから来て、ほんでやっぱ、こっちから来て。

潤　ソガミョウケンって人が、山開きしたって……。

爺　いや、サイミョウジ作るんで封じられて来てからソガミョウケンって人が開いたって。ここの船形山は信仰した人がなにを、罰すると、売り買いのほら、よっくよっく荒れ果てたんだと。……その人のなになってから良くなった。イセボウス、イセボウズ（伊勢坊主）って言ったんだから、こいつ伊勢から来ったらしいんだね。やっぱす、友達殺してこっちの方さ逃げた人だつ。ホクシンの侍だったんだってねえ、その人は。

潤　タケマルだか、コシノジロウなんていう名前じゃなかったですか？

爺　なんだかわかんねんだね。ただソウマミョウケンて。

潤　ソウマミョウケンはわかりますがね、永平坊主ってのね、越後のジロウなんて名前じゃなかったですか？

爺　どうなってんだかわかんねんだね。永平坊主というのは、

永平の方から来た人は永平坊主といったんだべということは話あったようだね。ここの小栗山にあったんだ『多賀城軍記』とかってあったんだとっしゃ。そいつを今の遠藤リンキチさんのマタオジになってる人だね、婿に行ったんだと。その人かせるかと持っていったらしいんだと。こっちゃ戻って来ないらしいな。そいつのところに、今のこと大体詳しく調べて『多賀城軍記』の調べたやつのなには、ここの分校の先生した人でね、コマツヨエモンに譲ったわけだ。

A　写したやつあったの。

爺　あったの。

A　今でもあっぺっちゃね。

爺　今でもあっと思うね。昔のリュウヒって紙、このけぐらい厚いなんだ、確か。

A　色麻小学校の事務官してる人だおん。

潤　そしてここの四二年に一度のご開帳の観音様ねえ、調べる予定で、前調べに来たんです。その観音さまの大きさどのくらいの大きさですか？このくらいですか？

爺　見たことない。

潤　ああ、まだ。今度六月来るつもりでその前調べに今度、来たわけっしゃ。こうやっていろんなお話、文献にあんのね「小栗山峰の大栗ころころと薬師が森を伏し拝み」なんて書いてあるんですよ。やっぱり聞いてみたらそのとおりにね、クリノコサカって地名ありますか？クリノコサカって地名ありますか？クリノコサカ、ちっちゃな坂…、「竹の沢水うちわたり……」ってのはどうですか？

爺　タケノサワってのここが。

潤　タケノザワっていうと逆だ、そうするとね字名はなんていうとこですか？

爺　今そこはタケノサワ、タケノサワっていってんの。字ね

潤　オオトリガワ（鳳川）っていうんですかホウノカワって。

爺　ホウノカワ？

潤　カワはホウノカワで出てくるんですがね、オオトリガワってないんですか？

爺　聞いたことないね。

潤　鳳凰の鳳だからホウノカワだね。それでアマガワオカノ峰高くっていうの。

A　テンガオカっていうのあんのっしゃ。

潤　テンガオカっていうの？

A　テンガオカっていうのっしゃ。

潤　場所はどこっしゃ。

爺　ここさ出はっつうと。

潤　出はるとあんの。

爺　うんうん。

潤　ハラノコマチってなんですか？原っぱの小松っていう地名は、ようするに、テンガオカ（天ヶ岡）の上に小松がはえてるわけだね。

爺　うんうん。

潤　そういうふうに見ていいわけだね。

A　天ヶ岡の小松目通しだから、地名でねえね。

潤　はい、わかりました。

爺　さっき伺ったここの小松先生という人は写したようでね。向こうでも写したらしいんでね、向こうでも貸すなですんだべって言うんだね。そうして、その時代の文句でねって言うんだね。文句が、現代的に小説文句になった部分、苗字がねって言われたって。その時代の文句でねってね。

潤　あんまり新しい言葉だおんね。サトベザワだなんていうのは？

A　ああ、あります。

爺　こいつ、こいつがサトベザワって。

潤　これ字とったらクワバタね。

爺　そうです。

潤　字名はクワバタ？やんだくなるなあ、こいなバタバタあると。

爺　そうです。

潤　そうするとね、「お山の心奥深く妻沢川を渡りけり」となってんだが、妻沢川ってどこですか？

爺　どこだ？イワガザワっていうのここの上。しかし、そいつを通って行くわけないんだな。

潤　イワガザワにしても、そこんとこを渡けりね、そいで、そこを渡って行くと「ハチマガマモリ（八魔が森）をうち眺めって」。

爺　八魔が森ってこちらに。

A　ハチガモリってこっちさ。

爺　イワザワを渡りけりって、ほんでなに、ドクザワとことか？ドクザワって、毒のドク。

潤　毒と読み間違いか？毒沢のことか、毒を妻と私読んでしまった。毒沢ね、渡りけりね。「八魔が森を打ち眺め」と、やっぱりあるんだね、

爺　うん、あるんでがす。ハチガモリ。

潤　ハチガモリっていうんだね。これには、ハチマガモリと書いてあんだ。魔物のマがはいってるんだ。と申す。ゲンガイジマってどこでしょうね。

爺　ゲンガイジマす？

潤　とにかくさて、この山はハチガモリでしょ。

爺　うん。

潤　「ハチガモリを打ち眺め、さてこの山と申するは、ゲンガイジマに居住する、ハチメンキオウ（八面鬼王）と聞こえしは、この日の本に仇をなす、討ってくだりて滅ぼされ、八面のその首はこの山にこそ取り来たり。マゲンを現すそのいえに、ハチマガモリと伝えけり」と書いてあんです。

爺・A　ほー。

潤　まあ、それはいいとして。クスノキダイラ（椚平）ってどうですか？

A　椚平っていうのはす、クヌギダツのこと？

潤　え？クヌギダツ？

爺　ああ、クヌギダツのこと、椚のクヌギ、クヌギダチって言ってる。

潤　クヌギダチ？

爺　クヌギダチって言ってる。

潤　クヌギダチね。それもやっぱり、その。

爺　ええ途中にあるですよ、船形さ行く途中。

潤　そうですか、で、そして、「椚平をうち過ぎて、アラサワ（荒沢）さしかかり」・

爺　うんうん、荒沢ってある。

潤　「さしかかり、船形山をうち拝み、ニンジガワ（人衆川）をうち越えて、タマツクリガダイラ（玉作が平）に急がるる」って。玉作が平っていうんですがね、タマヅクリ（玉作）と書いてあってね、平らって字書いてある。に急がるるって。ただタマヅクリになってしまうね、あっち行ってしまうと。

爺　んだね。ニンジガワ（人衆川）を渡ると、バケモノダイラってあるんだ。

潤　ニンジガワに、ああ、バケモノダイラって。

爺　ニンジガワを渡ると、バケモノダイラって平らあるんだ。

潤　へー。バケモノダイラってね。ようするに八魔が森が関係して来るわね、化け物だものね。

爺　まあね、

潤　「急がるる、これよりコタキ（小滝）にさしかかり」、小滝っていうのは？

爺　ええ、小滝川ってあるんでがす、オオタキ（大滝）の手前にね小滝川って。

潤　やっぱり、地名になってんだね、上って行けば出てくんのね。

爺　ええ。

潤　「こっちを見ればこはいかに、一四丈あまりの悪鬼現れ滝に腰掛け壷の清水に足を冷やし、川眠りしていたりけり」と書いてあんの。一四丈あまりの悪鬼、鬼だよね、滝壷の腰掛

け足を冷やしていたん……。

爺　大滝のなにでながいんかな。大滝のトノボウダイラって、トオボウでなくトノボウ、遠くを眺めるっと。

潤　トノボウ…。大滝も出てくるんです。

A　大滝も出てくる。やっぱり。

爺　その……て、トノボウっていうやつ。

潤　そのあたりは、断巌絶壁となってる、断崖でなくて。

A　断崖絶壁でがす、そのあたりは。

潤　してね、タチスバリってどういう言葉っしゃ？タチスバリ。「断巌絶壁に屏風の如く立すバり」……。

爺　タチスバリってあいつは、

A　土地の名前でなくっしゃ、タチスバリって。

爺　タチスバリって、草の名前でないかな。草。

潤　断崖絶壁に、屏風の如く立ってることだと思うんだがね。スバリってなんだか。タチスバリってね。

爺　ああ。

潤　続けますがね、そこに大蛇が一匹いてね、ただ一口ぞ川中にその和尚さんの前に現れた、そして、その和尚さんがね、「本来ジッポウクウサンガイユイイツシン（十方空三界唯一心）とのたまえば、これも同じく消えうせて屏風岩を打ち眺め、大滝さして急がるる」と書いてある。

爺　屏風岩って手前なんだおね。ずっとね。やっぱり、書いたもんなんだおね、こんな……こんなふうな何はないだおね、ほんと言えば。

潤　祭文でないの、ね。「大滝さして急がるるね。右よりに落ちる急流は、キヨミズガワ（清水川）川水セイセイと、はや大滝に着きたもう」と、大滝に着いたとね。こっちをきっと見てあれば、南方屏風のごとくタチスバリなんだ、やっぱり、ね。南の方に。一〇丈あまりの滝の水のドウドウと響きつつ、岩につたみ梢にかかりつ、その水はげに白糸や山桜吹雪散らすが如くにて、見上げり落ちる滝壷も藍に染めたる如くにて、逆巻く水は満々と、左右をよっくみてあれば、ナメシガワマスにたる苔むして瑠璃をのべたるごとくなり、と書いてあんですよ。

爺　うん。

潤　こういうセリフなんどね、オジンツァンがたデロレンザイモンなど思いませんか？デロレンサイモンなど。

爺　ああ、祭文すか？昔のね。

潤　祭文節でいわねとだめだと思うんだ。

爺　ほだからやっぱり、うん。小松先生、写しったのこういう文句でねえもんな。

潤　そしてね、そこに行くとね、とにかくアマノイワト（天の

岩戸）って場所あんだおね。天の岩戸のエニシ（縁）を思い出されて、世はまたこのお山を開きつつミダ（弥陀）の名号輝かさんとというような言葉出て来るんだおね。話また前に、このヨツヤノチャヤにね、オサトバアサンというのいたんだてば。

爺　なあに、こいつは。ここにヨツヤってとこはあったてば。

潤　そこに、オマツとオハツとね、そこにオハツという、うんとめんこい娘いたの、一人娘。そこに、北条時頼がその娘がとってもサービスいくてね、時頼が二回来てるの。北条時頼が。そこの茶屋に、オハツというのが一人娘。その茶屋で働いてんのがオマツ。そのオマツがね、ドウゲンボウ（堂源坊）と仲良くてね。そして、堂源坊が後でね、北条時頼にやっつけられんですよ。あんまり、寺銭走って渡り銭ってね、あんまり稼ぎ取り取ったもんだから。時々オハツにちょっけかけんだけっとも、オハツは絶対ね、前にオマツっていうのと一緒になってる堂源坊を、縁を切るなら契りましょうと。でも、あんなオマツという人がいるじゃないかと、とにかく、なんつったって北条時頼、オハツさんうんと好きなんだ。そして、二回来てるんだね。そして、ハッコウクドクスイって大変美味しい水出るとこあんだおんね。そこにね、ヨツヤノチャヤんとこにね。良い水があるんで、北条時頼誉めてんですよ。

爺　まあず、小松先生写したのなくさねと思うな。やっぱりこの通りの、……。こういうふうの文句でなかった。おれ、書き上げてから……さ読んで聞かせらったから。

潤　やっぱ、これ、デロレンだおんな。

爺　ええ、祭文文句だな。川端ってとこで亡くなったと、こっちの家のなにんとこにあるん、ゴリンボトケ（五輪仏）にね。クワバタで亡くなったってこと。きこりって。

潤　五輪仏、どのへんにあんのっしゃ？一個すか？

爺　ただ、五輪の形に積んであんだ。

潤　一つだけ？

爺　五輪だから五つ。

潤　これ、山伏のお墓なんだ。

爺　ほだからなに、藤原なに、キヨツネ将軍回ってきたんだ。

潤　キヨツネ？

爺　天ヶ岡回って来たんだ。

潤　藤原の誰す？

爺・A　キヨツネ。

潤　キヨツネっていったら、こっちじゃないのすか？

爺　キヨツネ将軍、藤原鎌足から下りにという、『多賀城軍記』に書かってるんだといったんだね。

A　それ天ヶ岡に祀ってあるんだね。

爺　ううーん、五輪っつの。まだ、あるの。ここになくなったの。

A　公民館で建てたの。このごろ。

爺　そん時の、なにのなぬ、藤原のなんだっけ、藤原タマコ。その人の鏡あんの、ここに。

潤　鏡？藤原のなに？

爺　タマコでないか。これくらいばりあるね。

潤　どこなのしゃ。

爺　なあに、脇。

潤　そすか。

爺　その時代のなあに、土さ埋かってらの。土さ埋かっていたったの。こっちの家の方のなにすっときの、向こうから綱だの材木引っ張って来た時の、埋かってたやつ。

A　この前の家の。

爺　そいつなんだや、そいつ……。

潤　とにかくこりゃたまんねな。ふーん。それでね、お尋ねすんだが、センニンゴンゲン（仙人権現）なんてのご存知ないすか。

爺　知らねね。

潤　テンレエゴンゲン（天霊権現）。テンは天の天ね、レイは霊魂の霊ね、権現様。

爺　聞いたことないね。おれ。

潤　升沢に。そしてだんだん行きますとね、アオジシモリ（青鹿森）の峰伝い。青鹿森ご存知ですか？

爺　ここらへんにないね。

潤　青鹿森なしね。十三仏と書いた場所、十三ホトケ。

爺　聞いたことないね。ここの界隈では。

潤　ゴウオザワ（護應沢）のオマエガワ（御前川）なんてこっちの関係、クリカラフド（久利加羅不動）なんてのもちろんないね。リュウノタキ（龍の滝）って地名はないすか。

爺　リュウノタキっす？

潤　ええ、龍の滝。あるいはザゼンイシ（座禅石）。

爺　座禅石？あすこのヨウスイサンのとこ。

潤　材木岩っての山形にあんですよ。ようするに材木岩を打ち眺めね。

爺　材木岩ってのあっちの山形県さ、越えてからの、ゴジョウダンの方さ越えてからの。

潤　リュウノタキを上られてね、通って行ったところに、座禅石ってのあんの。タイナイホラ（胎内洞）の山倉。オカマガイシ（御釜石）なんてご存知ですか？それがね、ガマイシ（蝦蟇石）、ガマイシになってんです、今は方言で。大黒天を祀ったなんてことは、この辺、小栗山にないんでしょ。船形ね、

升沢には大黒天祀って大黒天とこ、いじめたことあんだね。今年、なるかならねかったらね、大黒さん苦しがってガラガラガラッて「なるなるなる」っていうよな音たてたっていう言い方してあるんですよ。ミナカミベンザイテン（水上弁財天）などご存知ないですね。

爺　ねえね。

潤　やっぱり、御所山の関係なってくるんだね、そうすっと。すごいんだ、いろんな描写出てきたり。天狗が岩なんてご存知ないですね。テンガイゴンゲンだの。ミナミフナバラシチホウハッサワ（南船原七峰八沢）となってる。

爺　南船原、北船原とあんの。

潤　南船原ってどのへんすか？

爺　この船形の南。

A　ふもとの。

爺　北船原って、南船原の。

潤　ああ、そうすか。トフナバラ（止船原）なんて。

爺　ええ、止船原っていうのっしゃ。

潤　南船原を。

爺　ええ。

潤　そうすか。七峰八沢って沢山？

（テープ中断）

［5］「山内地名⑤・ご開帳・サツキマイリ・小栗山①」

（昭和四十六年九月六日）

登場人物　老婆・老爺・A（男）・B（男）・吉田潤之介

老婆　何日とは、そいつも決めてねの。

潤之介　大体何日ですか、それ。

婆　田植え終わったからだからさ。

潤　要するに、この通り田植え終わりましたから、どうぞお守りください、ですね。

婆　そのようなわけでさ、サツキマイリ。田植え終わって、まず、皆んな田植え終わって、んな都合のいい日えらんでね。

潤　やっぱりサツキ、田に関することですね。

婆　んだね。

潤　そうすっとあれだね、お日待ちのお祭りとサツキ祭りとあるわけだね。

婆　んだね。お日待とサツキマイリ。

潤　そうすっと正月のお祭りとサツキのお祭り、二つになるわけだね。

婆　んだね。正月はお日待とサツキマイリって、田植え終わってからとしゃ。

潤　このお薬師様ってのは略式なんですか？

婆　うん、まあ、んだべねえ。

潤　やっぱり、それにしたって、新の正月の二十日に行ってやってるわけなんですね。

婆　あと、元朝参り、お薬師さまだからっしゃ。

潤　ああ、お薬師さん。要するにお日待ちっていうのはお正月なんだね。

婆　うーん。元朝参りとはまた違うんだね。元朝参りはガンニチ（元日）に行くんだからっしゃ。

潤　どこに行くのっしゃ？

婆　お薬師さまっしゃ。元日に行くんだからす。

潤　それから、女正月っていうのなかったですか？

婆　十五日。

潤　んで、今度二十日のお日待ちっていうのはまた別なのね。

婆　別なの。

潤　して、ウチカドマツだったのね。

婆　うん。

潤　ここの方が升沢より大分こんでるね。

婆　だって升沢の方、あいつお日待ち、なんでやらねのすか？

潤　全然やんね。

婆　サツキマイリっつのもねんだべね。

潤　うん。元朝参りしかやんね。八幡様回ってお薬師様回って

そいで帰ってくる程度だっちゃ。男の人達は元朝参りだって下の方まで下ったという話は聞いたがね。そんなにまでして、あそこんとこ雪んとこ、めったになかったって言ってましたよ。

婆　サツキマイリは権現様に行ってするわけっしゃ、毎年一回づつね。そん時は法印様お使いしてきてもらうの。

潤　何人ですか？

婆　一人っしゃ、船形法印。

潤　船形法印ね。なんかね、「ナルカナラナイカ、ナリモウス、ナリモウス」なんてあんなこと。

婆　あんなことやったんだけど、今は約したんだおね。

潤　やっぱり、升沢でもね、そんなことなくなって。昔って何年。大正くらいまではやってたんでしょ？

婆　大正って、戦前まではやってたおんね。

潤　ふーん。女正月、マユダマ上げるってこと。なんだかサカキの枝にこう団子上げるってことねすか？

婆　うん、団子って、ミズキさね。

潤　うん、ミズキ。ミズキさ団子つける。あれ、女正月じゃなかったですか？

婆　だね。

潤　女正月って十五日だね。

婆　十五日か十六日。

潤　何日までそれかけたんですか？

婆　ほれ、二十日正月まで。あと、ずっとかけてる人達もいっけどっしゃ。まず、それまで、頂いても良いってわけでね。

潤　あれ、焼いて食べるとうまかったな。そうだね。

（中断）

老爺　六二、三戸もあったんだとっしゃ、ここさね。いずれ人口っつの寺あるあたり、宿坊やってるあたりが一番の全盛時代でなかったんでなかったかって、おらいのオヤジ言ってたのね。いずれ、ガシ（餓死）と天然痘とでだんだん減ってきて、最後に七戸になったんだとっしゃ。また、ぶり返して三八戸あるけっともっしゃ。

潤　ここに早坂の名前何軒あんですか？

翁・婆　五軒。

婆　最近別家になった人もあっからね。

爺　んだね。

潤　うんと、升沢にはね、かつて一六宿坊ありと書いてある。四軒なってしまった。やっぱり、その当時、飢饉とか病気で皆んな死んでしまった。して、早坂家四つあるの。

爺　あそこに士族いねか？

潤　だから、番所。

爺　番所。

潤　二〇年前におれよく山行った。寛永時代の御番所だなんてなかったですよ。今度行ってびっくりしてね。わかったね。

爺　升沢とか小栗山とか。源氏だか平家の落ち人住んだ部落なんだよね。おら、そう聞いった。

潤　小栗山と升沢でしょ。

爺　ヤマガ（山家）だから越えてきたのと、あとほれ、藤原家の、一関の中尊寺のあそこで、戦いしたので寄り集まった部落で、私の方の先祖は、大崎義隆の家臣でウツミダンジョウマツサイの一家臣なんだとっしゃ。ウツミ家から来たんだおね、一代目。一番上の家、あの家から来てるわけっしゃ、一代目。おれで一四代め。

潤　ウツミね。

爺　あそっから来てるのっしゃ。

潤　それでだんだん分かって来た。あそこの平泉のとこにね、岩窟あるでしょ。あそこに住んでいた賊がいるですよ、アクオウマルっての。それを平らげた系統でしょう。

爺　んだべね。フジドウって藤、遠藤の藤、をもらったのね、紋所。

潤　佐藤さんもね、いずれ、藤原と、ソマビト（杣人）でね。キヨツネ公はあつかったんだと私思うんですよ。

爺　古い家なんですね。アキヤさん家はね、秋田の方から来たマタギなんだっけ。私の先祖がこのヒをつけてけたらしいんだね、維新前に。うちいさいは、ウチイドあったために、イドのイとへったらしいんだね。

潤　その秋田ってのは、考えてみっとこ士族なんです。『最上郡誌』読んでね。一夜にして一村引揚げて行ったって記録あんだ。そん時ね、ホトケも一緒になくなったと。なくなったということは、部落の守り神ですからね、そら、盗んだもなんだもないですよね。だからオホトケサンも一緒にということで、こっちの神様が升沢の神様だね。とにかく持って来たわけですよ、一村かかえて。それで、逃げて来たと。升沢ではね、なんだかおれたち平家の残党だそうだねっていうんだ。その残党って言葉やめてけれって、石川五右衛門も残党だって。落人だって言ってくれって。ここでは、なんて言ったかな。変な言い方したからね、佐藤さん家でもね。そういう言い方しねでけろって、落人って。とにかく名誉あるもんであってね、そんな、堕落したもんじゃないんだよってね。そういう言葉使わねでけろってこっちから言った。落人って悲劇的なもんですよ。

爺　士族の屋敷描いた絵図面私持って来した、元禄十年（一六九七）のやつ。タテイシ（竪石）……のヒナンダヤって、

あれね。ヒライダトウゾウチョウジって人建てたんだね。船形さんの門として石のね。あいつもカゾクの裏なんでがすとや。国土調査でもヒナンダヤっとこ。あと、おらいの……はオオヤマサマって、今キノマタにいる人だね。ヒナリタサマの子孫は世田谷にいるらしいんだね、調べてみたら。ずいぶん屋敷あんだね、イズミ……さ。なになに屋敷かのなに屋敷って。

潤　おもしぃえな。私につがせてけさいん。

爺　おらいの、お山さ行くと、スクーンとお墓もあっしね。墓石二〇位あるもんな。

A（男）　先生、ご飯。

潤　早坂さんね、お宅の紋ね、クツワモン（轡紋）だね。

爺　馬の？

A　んでがす、クツワモン。

潤　とにかく関係あるんですよ。紋のやつ全部調べておいた。いろんな紋の人が来てね、そいで、正嘉二年（一二五八）にね、船形をね、北条早雲ね（一四三二～一五一九）、あんまり、その法印がね、淫乱放逸を極めたって。そいで、フウザン（封山）を、三〇〇年の封山を命ずという記録あるんです。『吾妻鏡』を見たんですがね。時は秋にはあらねどもね、とにかくコマキコタロウ（牧野小太郎か）がね、八〇〇騎の兵隊を連れて船形封山に来たんですがね、そこに、ドウゲンボウ（堂源坊）っていう法印がここにいたんですよ。それがあんまりひどいっていうんで、三〇〇年の封山命ぜられたっていうそういう記録なんですよ。正嘉二年（一二五八）、七〇〇何年位前ですよ、鎌倉時代ですから。それが、ほんとの根本の記録に載ってない、地方記録に載ってる。ね、その記録が載ってるの、三〇〇年封山命ぜられたところがね。あたりから世の中だんだん発達してきたんですよ。だからね、三〇〇年の封山じゃもう困る、困るというわけで、また、山開きしてくれというわけで。だんだん、あと五〇〇年たって、山開きもらったんですがね。その山開きになった理由はね、あの山はとにかくよく願い事かなえてくれると。座れば座ったその場で、立てば立たぬまに、願い事がかなうという文章が書いてあるんですよ。とにかく霊験あらたかな神様であるということがわかるわけだよね。それで、お山にはね、こっちじゃ女登っちゃいけないんですよね。向こうの手引草見ますとね、男も女もそんな差別ないと、誰でもいいからとにかく有難い神様拝めと。そういう考えは浄土系の考えなんですよ。浄土教が広まったというのは、ちょうどその時代に合うんですよ。

A　そうですか。

潤　そんなもんだから、とにかく、どっちが兄神でどっちが弟神かっていう判定したいと思いましてね、早坂さんにご迷惑かけるんだが。

（中断）

潤　あの準備の仕方は、どういうにしてすすめられたんでしょうか？要するにその、人数は何人ですか？

爺　人数は、部落は三八ですかや。そして、やっぱり準備は、ほれ、今年は四二年めだってことでっさ。そして、ほれ、部落常会でっしゃ、四二年目だってことでっさ、ご開帳をやっかやんねかと、部落常会で決めたわけ。

潤　決めた時、役割とか担当とかどういう具合に。別に記録とか、あとで読ましていただいてもいいんですが。

A　別に記録とか取らないね。

潤　役職っつもの、あんだと思うんですが。

爺　ご開帳準備委員っつもん成立、ね。四二年前に参加した人達とさ、部落の役職の人達二一一人選んだわけだ、まず。

潤　名前などは、やっぱり記録に書く。

皆　この旗さ書く、旗。

潤　旗さ書くわけですね、私がこれ書けばいいわけですね。

爺　んだね。

潤　役職のなかで、一一人の方が旗に書いてあると。

爺　そしてね、行事のねだんどりしたわけですよ。

B　まず、招待とかね、あと、マカナイとかそういうあらゆる方面、ご開帳に対して。

爺　そして、準備委員会最初にして、船形さんに来てもらってっしゃ、そこさ十分お礼、やったわけなんだね。

潤　招待、招待係りと、まかない。

爺　招待来れば、その人達さ、ただで帰えさんねと。ほれ、……とか酒とか。

B　結局部落持ちよりみてなでさ、そして、……。

潤　それからもう一つなんだったですかね、どうも飲むとだめなんだな。

爺　結局部落で来ては、あと、ほの神様の方は法印様の方でやるわけ、神様の行事はさ。どんなふうにやるかはね。

潤　あとは、服装はどんなんですか。

爺　まず、普通ですね。我々九人は。別当さま、総代は白装束。

潤　要するに、早坂さんですね。

爺　はい。あと部落民は一般参拝も。

潤　で、そういうようなだんどりで、取り決めの経過が終わったわけですね。

皆　んだね。

B　この前のご開帳の記録がはっきりしてないんで、ずいぶ

ん……したのっしゃ、ね。

潤　とにかく招待とかなんとかいう基準は、どういうとこにおかれたんですか。

B　あのね、一番先は神様お参りのことですから、実は招待ってこと考えていなかったのっしゃ、前はね。一応四二年のご開帳であると。だから、皆んな来て拝んでもらいたいという、有線放送通じてＰＲしてもらおうと。そして、なるたけなら ば多少の参詣来ていただきたいという趣旨だったんですね、始めは。それが、たまたま、商工会とか船形観光開発とかね、そういうこともかみ合わせて、議員とか各部落の区長さんね、それから公民館長さんとかそういう役職をもった方を招待して、その観光開発とかみ合わせたところで、ほの招待者もね、村長はじめ、公民館長、共同組合長、ＪＡ、区長さん、営林所長さんとかね。それからね、駐在所さんとか、国有林の中にあるもんですから、国有林担当区さんとかね、そういう方々を。

潤　政治的な、社会的な立場をあれしてやったわけですね。

B　そうですね。

爺　やっぱりほらね、部落としては、あんまり招待者を出さないようにしたのね。

B　村長さんとさ、委員の人達行って相談したところが、船形観光開発もあっしさ、招待したこったら、結局、ただも来まいということになってさ。

潤　ああ、そうですか。

爺　観光開発もほれ、この色麻口が利用すると一番楽に登れるんですね。んで、今、船形には天然のブナの原生林が、そっちこっち、これくらいあるって。ブナの原生林ある山ねんだおね、このくらいブナって。

潤　あそこんとこね、ハタサカ（旗坂）登って行くところブナだけだからね。そうですか。一般の人達では、人格者とか町の隠れた指導者なんかも中に入っているんですね。

爺　んだね。

潤　んじゃ、ここの代表的な方々が一応全部ここに入っている。

爺　んだね。

潤　その役職にかかわらず、これ、有難いことだな。それから、そのお籠もりに参加する方々はどの程度になってんですか？

爺　まず、部落一戸一人は参加することになってんだね。

潤　部落は何人？

爺　だから、三八。

潤　私はいかされるんですか？

皆　いかす。

爺　お籠もりに参加していただける人は全部準備してありますから、おらほで全部。

B　隣の部落からもそうとう来る。

爺　隣の部落だって全部準備してますからね。

B　まず、天気の方一番。

爺　そして、お籠もりに六尺四方に木積んで火つけて、あれ、なんていいますか？

B　タイマツ（松明）ね。

爺　お護摩とかなんとか、それ焚くつもりなんです。

潤　こりゃ、なかなか問題だね。お護摩焚くのんじゃ、わかりました。なぜ、護摩焚くかってこと、お籠もりん時お話申し上げます。

爺　どうぞ、教えてけらいん。おら、この前もね、参加した時もお護摩焚いてね、そん時ほれ、十六夜だったおね。

潤　お供え物どんなもんになってんですか？

A　お供え物。

爺　お堂があんまり大きくないもんでね。

潤　どのくらいの大きさですか？

A　一間半あんべか。

B　ねえよ、まずな。

潤　こういうお堂ですか、こういうとこ壇なって。

爺　そうです。

潤　で、神明造りのやつですね。

爺　んだね。

潤　その建物、もう何年くらいになってんです？

爺　その建物、昭和十年にね、この小野田町にね、仏閣のね、法印みてな人ね、精神のおかしな人でね。そのお堂、冬のうちに皆行かねうちに、みなほぐさったの。持って行かったの。たかってんのでっさ。昭和十年です。その年改築して、そん時も新築ご開帳して、ね。

A　供え物はね、お洗米、米といだやつだね。こいつは船形さんいったんだからっしゃ、洗米七合だとっしゃ。野菜、大根、昆布一束、果物一盛りだね。菓子一盛り、あと、塩だね。水、だいたい六つか七つ。ほんな程度だね。

爺　あと、キノコなんかあればキノコだね。

A　ただ、上っさ、上げる場所が。

B　並ばないんだ、お膳っこ。お薬師さまくらいしかねえおん。

潤　台持って行ってあげたらいいじゃないですか。

A　だから台持って行かなけないと思ってたのっさ。

潤　とにかく、にぎにぎしくお祭りしてやらないと。

爺　あの、あいっさ、錠かかってたっけ。錠あっかや。

A　権現さまさかかってるね、こっち薬師様はかかってないん

だっけ。

爺　あいつのさ、中にこれぐれえに扉っこ二つあって、そいつの中さ飾んのだからや、ご本尊さま。

潤　その錠は、エビジョウ（海老錠）ですか？

爺　んでなく、ただの錠だっけね。

潤　ただの錠ってどんな錠。

A　こんなまるっこい。箱の錠じゃなくてっしゃ。

爺　もとは大っきな錠はかかってたんじゃないすか、カンヌキ（閂）。

A　あいつは外の錠。あいつはみな腐れてきかないんだ。開けらんねかったんだ。今ふさいであけられっからっしゃ。さて、あいつなや、困った。あいつ中さは入ってねかや。

爺　ほだって、飾んに開けなけない、あの中さ飾んに。

A　錠破ってか、はずさねない錠。

潤　外すよりほかないね。ドライバーでも持って行って、こっちの方外すよりほかないね。

A　んだね。

B　道具持って行かいん。まず、ご本尊さまはこっちゃの方、外すほかないさ。

潤　それから、お堂の中、七つだか八つあるっていってましたね。

爺　あたりにね、十二シンブツサマ（神仏様）が飾って……。

潤　それだ、それだ。

爺　十二不動さんみたいなやつさ、船形十二社。

潤　普通、社ともいいますがね、普通、所。ロクショゴンゲン（六所権現）、ジュウニショゴンゲン（十二所権現）、サンジョゴンゲン（三所権現）。

爺　こっちさ、こっちさ、先頃、何でできてるかトタン替えてみたんだ。そしたら木でやっぱり。

潤　御所山なんていうからやっぱり、ショ、所ですからすね、十二所権現。ジュウニブッサンなんて、さっき、オジサンおっしゃいましたがね、これ、十二神将。

爺　やっぱり、ご開帳の、船形十二所権現なんて書かったのあんだおね。

潤　有難いこと。升沢は十二神将なんですね。こっちは、ジュウニブッサンといったが、十二所権現なんですね。

爺　十二所。

潤　十二所権現、だんだんわかってきたな。あとは、誠に言いにくい話なんですが、費用はどれくらい？

爺　費用はたいしたことない。

潤　大体私、一〇〇万とみたんですがね、これくらいの人数じゃ。どれ位なんですか？……、んじゃ、七〇万とみましょ

うか？

B　五〇万位です。

潤　五〇万じゃきかないでしょう、この人数じゃ。五〇万から七〇万と言っておきましょうね、大きい方がいいじゃないですか。

B　ちゃっこいよりいかす。

爺　人足みればね、ヒマダレ見ればやっぱり。

潤　やっぱり、くるいなかったな、おれの見立て。

B　三五、六人で丸二日するからな。

潤　やっぱりそんなの、出したらね。

爺　一〇〇〇円でも一〇〇人だら一〇〇万だ。

A　神社の手入れすか。

潤　それから、お籠もりの順序ってのはこちらで決めてあるわけでしょ。

A　普通の神様、水垢離とってだな、まず、身体を清めて。

爺　垢離とり場ってあんでがす、そこちょっと登って登り口に。

A　鳥居くぐってな。

爺　石の樋三本かかってね、今、水どんどん入ってがす。

潤　かあちゃん聞いたらそんなのねって。

皆　あんの、あんの。

潤　ほの川でね、禊でもして行くのかなと思って。

爺　ほでねえの。行く途中にある。鳥居の上に中段くらいにね。垢離取り場って、石の樋三本かかってんの。水どんどん、丁度ね人立って、こう垢離とるようなね。

B　そこちょっと行くと石の地蔵さんみてなのあんでがす。

B　おれ、まだ垢離取り場見たことね。

皆　なんだや。

爺　こんだすっかり、掃除してっしゃ。五尺くれの滝になってっから。

潤　そこんとこ写真撮りたいとおもいますから。

皆　どうぞ。

爺　あつくもっとこっちの方っさ、落葉植えたとっから見えるようにしろって言ったのさ。

B　明日いいさ。

爺　明日、明日。

B　法印様たちっさ、そこで垢離とってっさ。

潤　して、法印様たち何人。

爺　四人っさ。

潤　法印の名前は、船形法印、それから。

B　石塚法印、高崎法印、千葉法印って中新田の鹿島様の法印だべ。

潤　伊達神社からはいらっしゃらないんですか？

B　高崎法印。
潤　そうか。四。で、別当一人。総指揮官だ。
婆　その時別当、どういう衣装、
爺　この前ヅンツァン白装束だったど。白装束でご神体抱いて。
潤　やっぱ、白装束で仏さんやんなきゃ。
爺　んだ、こういく抱いて。
潤　なるべく見えないように持ってこなけ。納めてお祈り終わってからご開帳になるんだから。
B　隠すの上手な別当さんだおね。
B　フタキロクロウ。二五だか、今、六五、六、丁度良い年頃だおね。
爺　ここの上に館あんでがす。小栗山舘っていう。
潤　なんていう別当？
B　フタキ、フタキ。
潤　二、木と書いた、二木ロクロウね。
B　こいつ見たことあるすぺ、ね、先生、。『加美郡誌』。
潤　ええ。
爺　こいつ着て朝から。こいつ着てご神体抱いたんだ。
A　昔、ほの、羽黒山参り月山参り、みなこいつ着たんだ。
潤　して、裏側にみな書いてもらって判押して帰ってくるんだおね。
爺　四九度かけたおらいのオンツァマいたんだ。来たたんび、蝋燭たてるクイッコきたもんだ。して、正月なると、四九本蝋燭して拝んだもんだ。
B　神信心、仏信心したもんだ。だから、ほの、いづだいか、
潤　あとは、残りは、お籠もりやったところで判断して行かないが。あとは、祝詞ですね。
爺　祝詞はここさちゃんと張ってっから。
潤　どこさ張ってあるの？
爺　お堂の前さちゃんと。
潤　そうですか。
B　あと、オノト（祝詞）もちゃんと書かってっしね。
潤　オノ……？
A　船形さんの、船形さんのオウタだね、神社の。
潤　うたってみさいん、ちょっと。
皆　あーやみ、あーやみ、くすすきたーひと、ふながたみやまの、かみのみまえを、ほのかみまーつる。（三回繰り返す）
B　今なかなかおしょしがってはうたわなくなったもの。……なんだ、もうたってたもんだおな。若い人達後ろでクスクスと笑って。
潤　これプリントにして渡さねけないですよ。

爺　プリントにしてな、んだ。してもらった方いいな。漢字でちゃんと書かってんだ。

潤　これしきで書いてやって、あと写真で写してやればいいんだから。今のだったら、三行か四行で終わるんだから。これくれだったら、あと、ばっさり真中から切れば。

爺　ハライノコトバ（祓いの詞）、もろもろの。……とれから、オノト。

潤　それを言ってから、法印の祝詞始まるわけですね。

爺　そうです。

潤　今度その法印の祝詞書いたやつ見せてけさいん。んで、だいたい。今度、観音様の写真なんとか写させて。具合悪かったら、よそ人が入ってこないうちか帰ってからとかっていうような時さしてもらえれば、参考資料にさせて頂くから。

爺　新聞社の人達だと盗まれる可能性が……、先生だったら。

潤　おれ、写したらね、あれ写させてなぜ写させね、となる。あるいは総代さんがね、誰写してもいいとなれば、そこのところはよく、宜しくとりはからっていただきます。

爺　新聞社なんかにはね。公なっから、ここのあれだから。

B　んだよ。今あれうんと流行ってるから。

潤　船形神社と関係を調べるもんであって、発表する場合は必ず了解を得て、これであるというお許し得てから発表するんで、そうでなければ、私持っててあと絶対口外しませんからね。口外もなにもしませんからね。違うとこはここ違った。しかし私には他には見せられない許可得られなかったと、でも、ここは違ったと。エンブダゴン（閻浮檀金）じゃないですか？

爺　閻浮檀金。

潤　ところが升沢、早坂吉蔵氏がね、閻浮檀金言ったら、私行って見たらばね、ちっとも閻浮檀金じゃないですよ。で、どうなったんだといったら。そうすかや、なんて言ったが。そうじゃいけないと思うんですよ。閻浮檀金でもね、時代が経ってくれば箔が落ちること間違いないんですよ。だから、そりゃもう、むしろ素肌をみればなおそうですがね。昔から閻浮檀金、閻浮檀金と伝えられたとそりゃ間違いないですね。升沢さんも、閻浮檀金なんですから。

B　八幡様も閻浮檀金だおね。

潤　とにかくこの色が閻浮檀金ですよ。

爺　んだね。ちょっと緑色がかったね。

潤　ほんとはね、金色を張ったのが閻浮檀金って。それが、時間たつにしたがって、はげてくるの当たり前なの。例えば、京都太秦の弥勒、あの、指切られた観音様あるでしょ。ところが、……尼寺のやっぱり弥勒菩薩あるんですけど、これ

など、二〇〇年位前に、徳川時代に、漆塗っちゃったんです。太秦の方の観音様はね、素肌出てるために非常にわかりやすい、だから、法隆寺にある尼寺の観音様の方、あと二〇〇年位するとはげますからね、そこ待って見るより他ないんです。

B　ほお。

潤　そんなもんだから、肌がね、大事なんです。だから、金がなくたって関係ないことです。形がどういう、金の色はなかったですか？

B　あるってばあるようなもんだね。

潤　ところどころね。まさしく閻浮檀金です。しかし、質問の仕方これでいいのかなあ。とにかく、あと仏さんにぶつかるしかないんだから。これのプリントこれしかないんですか？いいんですか？

爺　まだあんでないんか。いいんでないんか。

潤　別当さんにあと譲って頂くから。みな資料ですから。とにかく升沢部落では、誰が死んだとかね、どこの家が一軒増えたとかみな報告もらうんですよ。そうでないと、あんた達だれするんだって。私だって氏子だどって、東京の真中でみな調べてるんだからって。とにかく、年賀状だって、みな一軒一軒出します。ハウスのナンバーまでつけてるんだから、上の方から一、二、三、四、五って、そいつ二一軒だった。

B　どっち姉だかまだわかんねのすか、先生、升沢とこっちとは。

B　人っていうのはね、海洋民族なんです。で。

（中断）

爺　タマヨリヒメノミコト（玉依姫命）って。ここ、神様だって。

潤　玉依姫命ってのはね、ワニゾクなんです。

B　はあ。

潤　その玉依姫命があとで神武天皇産んだんですがね、玉依姫命が産屋に入って初めてお産みなさるとき、この小屋覗いてならんぞって。ところが覗いたんですよ、ダンナがね。それが非常に怒りと恥でね。で、産んだまま海に帰っちゃうんです。ウガヤ葺き終わんねうちにもう出て行って、神武天皇がウガヤフキアエズノミコト（鸕鷀草葺不合尊）になってんですがね。その文章ですとね、ウガヤフキアイセズノミコトとなってますよ。という次第で、玉依姫命というのは、オジサンが言った通りね、その手引き草の中に確かに書いています。だから、海洋民族なんです。

（中断）

爺　オショウザンってね、そこさ、そこに石建たって。

潤　どういう字書いてあんのっしゃ。

爺　あの、

A　御・所か？

爺　んでなく、オン。

潤　五つの所すか？問題はね、五の方ですか、オンの方ですか？

爺　御

潤　オンの方だったら京都の「御所」の方だね。

爺　御所。

潤　あとね、五つの聖とも書くんですね、五聖山。

爺　んでねく、御の方だね。御所山と。そこは沢の中にタイナイ（胎内）あってね。胎内くぐってね、そこね、あんでがすや。沢に。御所山下りって。おら方ではゴショウザンってね。そっちにこう隠れ場所のね、

潤　できるわけですか？はああ、そうですか。ちゃんとね、御所山ってね書いてあるんです。ところがね、吉田東伍って明治四十年に作った『大日本地誌辞書』っていうのあんですよ。こんな八冊位のこんなやつ。そんとこにね、五つのところ、御所山は陸前加美郡にてアラカミサン（荒神山）というのと同じ。

爺　ほだね、そしてそっからね。

潤　ほだねって言われると困ってしまうんです。御所山と荒神さんと同じすか？

爺　ほんでないんだね。

潤　同じ……か、と書いてあるんです。だからあの辞書直さねけないと思って。みんなね、おれたちは荒神山と御所山違うからね。

皆　違うね。

潤　加美郡にては、と加美郡まで入れてるんだからね。

爺　加美郡は同じに呼んでるっつこと。

潤　ええ。

爺　加美郡と、荒神山、加美郡のあいつだおね。

B　御所山とあれは違うんだなや。

爺　違うっちゃね。

B　御所山は御所山、荒神山は荒神山でお参りしたんだおね。

潤　ところが、御所山と荒神山の間に丸い高い石あるでしょ、下って北側に、こう下って。

B　うん。

潤　あそこんとこにね、なんだかカイショ神社って神社だかっていう、神社。

婆　あるある。

爺　おら方にもあんでがす。鏡ケ池からこう登るとね、カイサン神社っていうとこさ上がるんだ。

潤　あるの？そこんとこ大っきな石でもなってんの？

爺　ちょっとしたこう石の盛りっこあってね。

潤　はあ。あるの？

爺　ええ、カイサン神社ってね。

B　鏡ヶ池から上がったとこか。

爺　それからずっと峰伝いに来てあと頂上さいくんだ。

B　んだ、んだ。

B　おれ、神様かわかんねけっと、あの上さあがって眺めた、あれ、良いとこだおんや。

B　そいつは、峰どおり、

爺　よっぽど行かねと頂上さ上んねおんな。

潤　鏡ヶ池の近くにね、祠ありすか？

B　祠。

潤　神社。小っちゃな神社。それを御所山というと書いてあるの、これに。

B　はあ、

潤　実にその点は、でたらめな感じがするんだがね。

爺　結局御所山だらやっぱり、山形側の、結局、タイナイ（胎内）みたいなとこであんめえか。胎内ったって、よっぽど長いよ。そこ金鎖で行くような、んだな、五、六間のあれだ。

B　聞いたことねえ、ね。

潤　そりゃ、おかしいと思うしね、どこだっけな、薬莱山のことも、みな書いて来たんだからね。……シカラノハラ（鹿原）の奥に荒神山あり、奥羽の境として南はフナダケ、北は銀山を得、オキナトウゲ（翁峠）に連なる、ということは間違いないですね？

爺　んだね、こっからこう行くと北村山、常盤村さ行くの。ツンノコ（鶴子）ってとこさ、そして、みな超えっつと、銀山は玉野村だったから元は。

潤　ジンガモリ（陣ヶ森）ってとこご存知ねすか？

爺　陳ヶ森っつは、あいつっさ。

潤　鳴瀬川、升沢川と。

爺　ほだね、升沢とあいつの色麻の。

B　王城寺の陳ヶ森でねの？

潤　王城寺の西の方の一つの峰を陳ヶ森というと。

爺　ほだから、あの西の方の……のちょっとあすくを陳ヶ森という。

B　みな森描かってたんだ、元禄絵図に。読まんねんだ、そにかくほの字では、変体仮名だから。ホノガワ（鳳川）中心として、ほして、南と北の山を見ながら。

潤　ホノガワもね、ホウノガワですよ。風の中にね、鳳と書いた字。

B　鳳凰の鳳。

B　陳ヶ森は、おれ、王城寺の陳ヶ森でないかと。

潤　王城寺の陳ヶ森、なんか鉱物出てね、鉱坑ありと書いてあるん。なんか、穴掘ったとこでもありすか？

B　さあ。

潤　見れば見る程難しくなってくるなあ。それからね、カミイワ神社っていうのあるとなってんだがね。今はヤチモリにありと書いてあるんだが、これご存知ない？

爺　ヤチモリ、

B　ヤチモリといえば、あっちのオオダの方に。

潤　そのヤチモリはね、八つの森と書くとも書いてある。これ、なに、野山ね。ああ、テンガモリ、テンガクラといったの、なんと書いてんですか、ここは。

B　権現と。

潤　これ、何山ですか？これ。あのね、昔の人方向感覚わかんねんだから。とにかく鏡ヶ池二つになってるんだからね。あ、山形側にも鏡ヶ池ってのある。鏡ヶ池っての一つしかないんだけどね。千本松ね。んで、おれのと比べて、これ、宝暦二年（一七五二）の地図だから。

B　これ、元禄一〇年（一六九七）だお。

（中断）

［6］「山内地名⑥・嘉太神の伝説・炭焼き①」

（昭和四十六年十一月）

登場人物　老爺（爺）・A（男）・吉田潤之介

潤之介　どうもお世話さんでございます。船形のね、いわれ聞きてんだが、もう年寄りの人でねとわかんねんだ。

爺　いわれすか？

潤　あと、帰りは安田茶屋のオバンチャンね。おら、先程行ったんだタカハシケンヤといっしょに。だが、オバンチャンいなかったんだ、仙台に行って、晩方帰ってくるからというから。まず、とにかくお宅でいろんなことお伺いして。もう今年で切り上げようと思って。四年、五年かかってるんだ。もうあと、ひしゃましては、なじょしたらいいかと思って。山の話では聞きてなと思って、宜しくお願いします。

A　升沢の方ね、いろいろ来たんだとっしゃ。そしたらね、船形の由来因縁ってやつでどうも嘉太神ってやつがひっかかるってわけっしゃ。どうもここになにかあんでないかってわけっしゃ。地名とかね、あるいは伝説みてなものとか。そういうもの知ってたら教えてもらいたいってことなのっしゃ。

潤　言い伝えだな。

爺　まず、ほら、おれ分かってて昔の人から聞いた言い伝えではね、ほの、やっぱ、船形さんっつのは、ゴケガガ（後家ガガ）に追われてね、そして牛さぬって（乗って）ぼわったんだと。コウサイガガ（後妻ガガ）さぼわれてね、牛さ乗ってこの辺逃れていったんだべね。ほんで、ほの、この辺は豆播かんないわけっしゃ。苗代だの田んぼのクロ（畦）さね、こいつがなぜてば、うんと来るなて逃げるために、牛に追われて、道路通ればほれ、牛にかっつかれっすぺ、ほら。だからほら、田んぼだのそいとこ逃げるすぺ、その当時くんなって走らんねかったの。その意味でわかんねの。そしてね、昔からまあ、今でもおら達播いてねの。

A　播いてないの？

爺　うん。あと、ゴマすか。

A　やっぱりゴマだね。おらほも……もゴマなんだ。やっぱりそいなことでね、おれもよくはわかんねけど、ぼわって逃げて行く時ね、ゴマの刈りば、刈りあとでフンヌキしたとかなんとかつて、ゴマってだめだっつんだなぁ。

爺　そういうことは、聞かせられんだね、昔。ここは、それで牛も飼わんなかった、始めはね。今はほれ飼うようになったけど。

潤　ベコも飼わんなかったの。

爺　うん、ベコにぼわったためにね。ほで、ずっと堅くて、テ

ッショウヅンツァマって初めてベコって飼ったの。

A ここで。

爺 ここでって、升沢でさ。

A ああ、こっから奥で。

爺 ああ。

A なんのテッショウっつの。

爺 テシロ（手代）つと、今、チョンツァンのヅンツァン。

A チョンツァンっていうとウズラバシ？

爺 んでねく、テシロ。ソネチョンツァン（曽根長治さん）のヅンツァマさ。

潤 曽根さんって升沢にいる曽根さん？

爺 ええ。

A 曽根さんのテツシロウ（手代）っつ人が飼ったわけ？

爺 うん。

A 曽根テツショウっつ人が？

爺 うんだね。

潤 それ以来牛が飼えたんだ。

爺 それから、ほれ、あの人は脇から来た人だからね。

A なるほど、関係ねんだ。

爺 関係ねんだおん。

潤 で、升沢に追われていったわけだ。

爺 うん。そしてやっぱり、ずっと行って、フネこしらえしていたとこさ行って、助け求めたんだとっしゃ。してどうもまず、キコリみてなもんだからね、助けようないために、そのフネ彫ってた、ほの、新ブネ。形とって彫ってたんだね、ほいつ、ひっくり返して、ほの、下さ隠したんだね、中さね。そしてまず、やっぱり、いいずり来たったんだべ、追って。だけっつども、来ねといって知らんぷりしてなんなく、ほいつ帰って行ったんだべ。帰って行ったから、今度、フネ起して見たったば、神様になっていたったって。

潤 それが船形のご神体。

爺 うん。そう聞いてるんだね。

潤 こうだね。エンブダゴン（閻浮檀金）って言ったんだね。

爺 だね。

A やっぱり、そういう話ってのはやっぱりずっと続いてきてんだね。

潤 ほんでね、ヅンツァン、今ゴケガガっていったね。ゴケガガってなにっしゃ。

爺 コウサイ（後妻）だね。後妻の子供なんだね。先妻の子供なんだおん、ぼわったのは。

A 神様が。

爺 うん、神様が。

潤　ああ、先妻の子供が、先妻の子供を後家ガガが追っかけたと。このやろ、にくたらしいやろだと。追っかけていって。ぼったくられたとき。後家ガガが先妻の子供を追かっけたと、子供が逃げて行ったらフネさ隠してけろといったら隠してやった。そしてひっくり返して見たらば観音様になってたと。

爺　そう。だから、オナゴはお参りしらんねとね。

A　そこの神社さ上がらんねの？

爺　うん、昔。

潤　いつごろっしゃ、昔って？まず、明治頃でしょ？

爺　おら達ちっちゃいころだからね。明治から大正。お参りするのもね、ナカマで一人で、一週間。こっちではまず、一人で煮炊きして食って行ったもんだおね。

潤　ああ、お籠もりだ。七日すか？

爺　七日ね。

潤　ベツヤに入って。

爺　そうだね。

潤　そのベツヤのこと何ていうのっしゃ？

爺　ベツヤって、大抵ほれ、ナカマっつのは神様祀っておくからね、早く言えばここが一番美しいってわけなんだね。

潤　うん。早く言えばお宅の、自分の家のどこかを決めて、設定して、そこんとこに一週間のお籠もりしたわけだね。

爺　オナゴの側だのね、オナゴのやっけいになんねで。

潤　食い物だの全部自分たちでして。

爺　全部自分で。

潤　それくらい清浄ってこと考えたんだな。いい話聞きしたや、やっぱ、年寄りって有難いな。

爺　そして、やっぱ、清めてね、早く言えば。ほして、権現様にオコマイシってあんの。ほいつオナゴがね、無理にオコマって人がお参りすんべと思って行ったら石になったってっつ言い伝え。

潤　そいつ場所どこにあんのっしゃ。

爺　ほだね、中段ごろであんめかな。

潤　コマイシっつの？

A　コマ、オコマという人がお参りして石にされてしまったという、オコマイシって石。

潤　女が石になったのね。

A　うん。中段あたりにあんのす？

爺　うん。

A　あれ、登って行ってね。

潤　鎖の手前すか？

爺　うん。

潤　これ、吉田法印わかんねな。オコマイシ、オコマっていう

女だね。

爺　うん。

潤　そうですか。そいからね、センジョウイワ（千畳岩）ってこのへんにないですか？

A　千畳岩、この辺にですか？

潤　一番手前の地名かかってるとこさ、升沢とフタコヤマ（二子山）とあったでしょ、あそこんとこミササギ（陵）あったでしょ。その手前んとこに船形権現。

A　ああ、山の名前なんだけっともさ、センジョウ（千畳）なんつような名前つかったの。

爺　千畳敷っつのは

潤　千畳敷ってのは、山の上の方だおね、千畳岩だお。

爺　知らないな。

潤　種沢近辺からね、この辺かけて升沢と荒川はさんだこっち側の山なんですよ。升沢、荒川、そこんとこに千畳岩ってのあんですよ。

爺　千畳っつんでないけどもね、畳石っつのそこにあったのさ。アサイナサブロウ（朝日奈三郎）たび……した時ね。あの、休んだとこが、足跡つかったってね。大きな石があったのさ、大きい石。平らの。

A　こいつダムなったのすか？

爺　ほだね。中心あたり。あとは、ねえおんね。

潤　地図みたら升沢権現みてに、こういう岩にしてあんだからね。

A　なんだっけあの山、オオクラ（大倉）。オオクラっての千畳くらい崩れる山なんだからね、だぁーっと木立ってっしゃ。その石がひっくりかえってきてね、川を埋めて、そのためにあそこに伏流水あんだから、ほの、石に埋まってしまって。

爺　北泉の北はずれっしゃ。

A　だから、あの地図とはなんぼしたって合うわけなんだっちゃ。断層なんです。恐らくそれだと思ってる。

潤　だいたいそうだな。

爺　あそこはそうとうなクラだね。

A　クラっつんだおね。

爺　そうだね。

潤　あのへんね、オオクラっていうの？今ね、ただ、クラって言ったのどういうこと？

A　デグラとかっしゃ、オオクラがあるし、あと。

潤　ナクラってのは？ナベクラ（鍋倉）は？

A　そいつはちょっと違うんだね。デグラにね、そいから、マクラ？そいな名前つかったクラ一つある、あそこに。断層にこう出てるんだっちゃ。デグラとね、記憶力悪いんだな。

潤　ナクラ、ナベクラ、ヒワクラ、そいからね、アククラってのしゃねすか？

爺　アカクラ？

潤　アククラ。

A　アカクラ山ってあったいちゃ。ほんで、あそこにクラあるな、一つな。アカクラヤマっての、あいつだ。あいつのことだ、断崖のこと言ってるな。クラだクラ、断崖だ。

潤　アカクラ（赤倉）、ヒワクラってのあんだ。そいつシバクラ（柴倉）だと思うんだ。

A　シバクラっつのあるよ、あそこに。升沢にあるシバクラ（柴倉）。

爺　ここではほれ、タネザワクラ（種沢倉）ってサルいっとこです。

A　種沢から入っていったとこすか？

爺　ほでねえの。ほこの、この林道の終点の向かえ。そこの下、マンノウダキ（マンノウ滝）って滝あるしね。

A　マンノウダキんとこか？

爺　うん。マンノウダキって下のほうね。

潤　今何クラっていった？

爺　タネザワクラ（種沢倉）。

潤　それからマンノウダキ。

爺　うん、マンノウダキ。三つあんだお、上、中、下と、滝。

潤　このマンノウに？

爺　うん、中マンノウ、上マンノウってね。ほっちがわ、ヤンビツダキ（乱飛滝か）ってあんだお。そうとう大きい滝。

A　あれは、ヤンビオニだ。あいつが、ヤンビツダキはヤンビョウのイドと違う、こっちにもヤンビってある。ヤンビってどういう意味なんだかな。

潤　これアイヌ語ですよ。あるいは朝鮮語かもしれない。

爺　嘉太神っつのは、なんだお。戸籍にねんだおね。

潤　神様でも祀ったとこですか？

爺　だからね、ここの、ほれ、いわば逃げて来た連中だから、こっそり暮らして神祀って。右大臣と左大臣をそのね、ここが左大臣こっちが右大臣さ。だから、加わったとこって、だから、加わる大神と。

潤　加わるオオカミ、大神ね。これが加大神ね。そんで左大臣は？

A　右大臣と左大臣足さった。

爺　右大臣と左大臣別にある。

潤　左大臣はどう書くのっしゃ？

爺　同じだね。

潤　太い神？

爺　うん。

潤　それから右大臣、やっぱり太い神？

爺　うん。

A　二つ足さって、この辺嘉太神。

爺　ほんとはサンパタ（三畑）っていうんだ。

A　ほんとの地名は、サンパタ、三つの畑と書くんだね。

爺　ええ。

A　三畑ってどうして言ったんだ？

爺　おら、こう聞いてたんだ、加太神と升沢と欠入と三畑と言ったって。

潤　種沢入らないわけ？

爺　種沢って、升沢さ入ってたの。

潤　升沢分だね、種沢って。

爺　いずれ畑で収穫してたのね、そのあたりは。

A　んだべね。田んぼってのなかったんだね。

爺　ねかったの。あるわけねんだお、ガス（餓死）のばりなってね。取れねんだおん、早く言えば。今ガスはね、品種の改良で取れるけっともね、三年に一回はガスだったもの。

潤　それは、明治のころね。

爺　んだね。

潤　その前は何食べてたんだべね、皆。

爺　ヒエだとかアワだとか食べてたんでがいんか。

潤　ヒエだとかアワ、五穀の一つだからいいとしてね、そいから。

爺　やっぱ、なんぼしたってジャガイモは取れたんだべね。

A　寒いとこ取れんだジャガイモ。

潤　あ、ハタイモ取れるからな七つ森ではな。

爺　サツマイモなんつのも、昭和になってからだおな。

A　あいつ新しい。

爺　ハクサイ漬け取れなかった昔。

潤　ハクシャイってなにっしゃ？

A　ハクサイ（白菜）。

潤　ああ白菜、これは上等なあれだから。

A　この辺で取れた畑のなにって何っしゃ？ホウレンソウなんてなかったべし。

爺　んだね、やっぱ、豆とかね。

潤　豆にアワにヒエ。

A　やっぱ畑のもんだね。

潤　米なんてめったに手に入んなかったんだね。

爺　昔はそうだったね。

A　して、いっそ山でやってたんだべからね。炭焼き。

爺　炭焼きなんてずっとあとからなんだな。

A　それまで何しったんだかね。

爺　なにしてたって、やっと生きったんだべね。

潤　だって、寒いから炭くらいは作ったさ。なんぼしたって。

爺　自分で作ってた食べけっとも、商いなんつものはねんだ。いずれ落ち人だお。

A　交渉がねかったんだな。

爺　あと。

A　徳次郎さんらちゃっこい時って、どんどん炭は焼いてたんだね。

爺　ほだね、おらん時は。全部炭焼き。

A　炭焼きで食ってたんだべからね。

爺　そうだね。

潤　炭焼きでもね、オヅンツァン、作る形から順序から教えて貰いたいんだほんとは。

爺　今しねな。

潤　んだから、そこんとこ残しておかねけ。炭焼きの窯のぶちかたとか土の重ね方とか、そんなの丹念に、私、記録しておかねけと。なんぼ公民館頑張ったって、そこまで仕事してくれない。残してくれるの誰、残してくれるの、昔の苦労した人ね。炭を焼きながら暮らしたっての。炭を作る順序っての、やっぱり私は大事だと思うんだよね。

爺　炭はほれ、始め窯ぶちにかかるのね。ほんであの……。

A　この辺では、いっそ黒い炭でしょ。白炭でなく、黒炭ね。

爺　そうすっと、土で作る。

爺　うん。土でほれ、まず、一〇尺に。普通は七、八尺に一〇尺にぶつ。先と、今は、ちょっと大きいのぶつんだ。

潤　して、一窯から何俵くらいとったのっしゃ。

爺　まず、先にはね、二〇俵か二五俵くらいだね。

潤　んで、だんだん進歩してから、七〇俵くらいとったの？

爺　んだね、六五俵から。

A　七〇位とれんのすかや。

爺　取れるんだね。

潤　まず、炭焼きの方はあとでまた、ゆっくりとみんなから聞いて順序から作り方から全部整理しておかなきゃないからいいとして。升沢っていうのは、いつころから出てきたか、今オンツァンから聞いた。後家ガガに追っかけらった子供ってのは、そもそも何の子供なんだいね。

爺　それがわかんねんだおな。

潤　ヨシミツってことば聞いたことがいんか？

爺　聞いたことないね。

潤　おらいのバンツァンにはね、ヨシミツ、ヨシミツと呼ばれたんだとっしゃ。そのフネ開けてみたらね、誰もいないんだ

からとにかく。そのフネ開けてみたらばね。あ、開けてみる前だ、フネの中からおれを呼ぶ声が聞こえた。開けてみたらば観音様になってたと。ヨシミツなるものが、おそらく先妻の子だと思うんだ。で後家ガガに追っかけられてね、ヨシミツっていうのは、要するに異民族なんだな。

A　この辺にゼンコウっていうような名前の地名ないかい？

爺　ゼンコウ、ないな。

A　センとかゼンとか。

爺　ねんでねかな。

A　ちょっと違うんだな。

爺　そいつなににつまり。

A　船形のね、いろいろな。例えば蔵王山がこういうふうにして出来たという由来、伝説、みなあるわけだっちゃ。船形のやつ何にもねえわけだっちゃ。それ言い伝えだけでは、そいつもう少し詳しくこういうふうなことであったろうということをね、皆から聞いて一つにまとめたいということやってるわけっしゃ。ずんずんと、皆忘れられて行くわけだからね。

潤　そいから、この辺にクマノっていうようなつくとこがいんか？

A　熊野神社ってない？熊野様ってのは？

爺　ここにはねえね。

潤　熊野……とか。

爺　ねえね。

A　山とか川とか？

爺　熊っつの、ついてねおんな。

潤　蔵王って山ねんだよ。刈田岳とね、刈田峰神社と熊野岳と、それを称して蔵王って言ってるの。そういうことでね。熊野系が入ってるんでねえかなと思ってるんだが。

A　あとっしゃ、この辺にカノクソってとこない、

爺　カナクソはある。

A　ある？どこですか？

爺　カナクズはね、あれ、区長さんの家のあのとこカナクズ。

A　カマドあったってことねんですか、鉄溶かしたとかっしゃ。ここでなにか作ったってことねすか？

爺　だから、大きなフイゴあったのす。オオカミにね、フイゴで砂鉄溶かしたんだおね。

潤　それだ。

A　砂鉄とれる場所あったんですか、ここで。

爺　あったんだとや、やっぱし。

A　山掘って、岩掘ってやったんではねすか？

爺　ほでねえの、

A　砂鉄？

爺　うん。テッツァン家がそうだおね。
A　ああ、テッツァンのあそこはカナクソとは違うんだね。
爺　カナクソっしゃ。テッツァン家の屋敷からタカヤブからみなカナクソ。
A　近くなんだ。
爺　昔の製法だからね、うんと鉄分残ってんのっしゃ。
A　今みてに、ぎりぎり取るんでねえからね。
爺　カナクズザワってとこ、あすくも、取ったんだね。
潤　鉄山とカナクズは違うんだね。
爺　違うの。
潤　鉄山とカナクザワこれ別だ。
A　どの辺から砂鉄とったかつことわかんねんだね。
潤　流して、一〇〇分の三だよ。
爺　天然の沢から、えらいフイゴあったんだお。んだね、六尺の上からあったんだお。
潤　長さ？幅は？三尺？
爺　うん。三尺までは、
潤　一尺五寸ね。
爺　うん。
潤　それから、高さは？
爺　そうとう高いな。五尺位あったんであんめか。
潤　もうこれで決まった。
A　そして、なじょなことしたのす。
爺　ぼうぼうと、カザアナあるような大型のね。
潤　んで、大分進歩したんだな。タタラだなんて地名ないすか？
爺　タタラ？
潤　これの代わりね、足で踏んで空気送ったんだ。
爺　はいはい、んだな。
潤　タタラって地名残ってればね、鉄山の意味がカナクザワの意味がはっきり出てくるんだ。フイゴってのは、ずいぶん技術が発達してからだかんね、足で踏んで風送るほうだかんね。しかし、どっちが技術進歩してるもんだかね。
A　足で踏んでが難しいと思うな、作んのにな。フイゴとか
爺　あれ、薄こいからね、ふっちゃいたんだ。古いったら古い。おらもほら、ちっちゃい時だからな、三年生位の時一〇位の時。
潤　明治の半ば頃ね。
爺　明治でねえ、大正。
潤　ああ、ごく最近。
A　おれだって、大正生まれだから。やっぱり、そういうふうな仕事はいうなれば最近まであったつことだな、ここでね。どこさ持ってたの？

（中断）

潤　ドウキ（土器）今ここにありすか？カワラケって、とにかく欠けたのんでいいんだ。

爺　法印さんは……。

潤　吉田法印ね。黙ってて集めてけさいんて。

爺　ずいぶん集めて。あとちゃっこい、……みてなのね。神様みてなのね。そいつ畑さ。

潤　そいつ見せてけさいん。

爺　持ってね。

A　持ってねって、そいつ法印さん持ってねかな。

爺　法印さま持ってね。

不明　土、赤土。

不明　ヤノネっていうのすか？赤土のね。

A　ヤジリ（鏃）だね、鏃。

爺　鏃みてなのはね、赤石もいろいろだね。石も。

潤　そいつあったらね、一つでも二つでも、そいつ証明になんだから、集めててくないんか。おれ、五月一日に来んだから、お祭りに来んだから。

爺　いがす。

潤　その人形っこ、誰かもってないか？

A　なじょな作りだかなあ。そいつは今まで見たことないおんね。

（中断）

A　そいうふうな、昔のお墓んとこ掘ってみつやつもいないべけんとも、そういうとこから出てくるっつことねえか？

爺　掘んねね。

A　そうすると畑んとことかそういうとこで作り方してたんだろうな、やっぱり。

潤　そして、悪いやつは捨てたんだ。

A　はねたんだ、でいいやつは取ったんだ。

爺　個人個人のお墓だ、ここは。

潤　個人個人としてね。そして、お宅はね、屋敷神ってあるすか？

爺　あるね。

潤　お明神様？

爺　山の神さまとね。

潤　え？屋敷神だよ。

爺　うん。山の神とね、三つだね。

潤　山の神とお明神とそれから？

爺　あと、カネガミ様。金、神とかく。ほんで、三つ。

A　一つのお堂さ？

爺　んでねえ、てんで。

潤　嘉太神の人達はみな屋敷神あるの？

爺　みんなっつわけではねえな。古い家だらば大抵あるんでねか。

潤　要するにこの、三つね、山の神、明神、金神ね。カンガミ、カネガミ？

爺　カネガミ。

A　やっぱり、ここなんかあんだな。そいう、トウキの。

潤　金ですよ。

A　なにかやっぱり、地図にそういうトウキが出てくればな。夕べな電話でもすっかと思ったのっしゃ、遅かったしね。そして今朝、なんぼしてもおれ、来てみてなと思ったのっしゃ。

爺　どこだかにあったな。

〈中断〉

A　地名でね、アカサカ、アカクラってアカついたような地名ないか？

爺　ここアカクラ（赤倉）っつのは……。

A　アカサカってのは？アカクズレヤマ（赤崩山）ってのは？

爺　アカッチャカっていうのは、こっちゃずっとずいっと。チョウジャエキ、もとの道路で升沢に行く時、駅っこみてな平らな。

潤　ある。

A　ヤツ（谷地）。

爺　ヤツ、あそこ平らで。

潤　そこんとこなんて言うのっしゃ。

爺　赤坂っていうんだね。

潤　いっぺでてきた。チョウジャっていうのね、どういう言われあんのしゃ、チョウジャってのは。

爺　昔、長者いて、あそこ池にしったんだとやなんて。

A　庭にしった。

潤　完全に庭にしてたんですよ、あの木の植え方みたら。植えた木ですよ。自然にはえた木じゃないですよ。

A　おれもあそこ歩くとさ、いい庭あるなと歩いて行くと池あるおん。左側でしょ。

爺　うん、うん、うん。

潤　んで、芭蕉など咲いてたんだから。その長者なるものはなにかって。

爺　わかんねね、そいつ。

潤　ヨシズミの家来でね、金売り吉次って知らんねか？あれのもんでねかという判断はしてんです。あと、タワラトウタ（俵藤太）って名前知らね？

爺　俵藤太っていう名前、なんだか聞いたような気すんな。

潤　俵藤太っていうのがね、金売り吉次の倅なんだ。とにかく

俵藤太が炭焼きやってんの。金売り吉次が、炭なけりゃとにかく金できんぺ？そして、金を作ってあっちこっちばらまいて売って歩った。だから、ここがおそらくアカクツリだのカナクズだの考えてみたら、そのヒデツグ、あの、金売り吉次のコースじゃなかったかな、と考えるわけ。だって、炭は絶対必要なんだからね、そういう点では。だから、アカってのは水銀の出るとこなんだね。

爺　水源出てんだな、ここで、清水。

潤　水源じゃないの水銀。

爺　水銀すか？

潤　要するに、エンブダゴン（閻浮檀金）なんて知ってすぺ。水銀塗ってから金はらないと閻浮檀金出来上がらないの。水銀がアカってとこに、シュとかついてるところに水銀がよく出ると。そういうことが統計上出てんだね。だからアカクツリとかアカサカとかね、統計学上当たってくるわけだ。あと、ここにオオタとかフトタとかいうような名前とか地名がいんか？

爺　オオタはないな。

潤　あと、オオタでもタイとかいた嘉太神の太と書いた人の名前とか地名ないね。

爺　ないね、苗字。オオダイラ（大平）ってのだけだね。そいつは、種沢の前タゲザカの陰だね。

A　タゲザカ、種沢の方だね。

爺　うん。はやくいえば長者舘からずっと行った峰の陰だね。

A　あとね、スイショウ（水晶）みたいなもの取れるの聞いたことないか？

爺　スイショウでねんだ、スイショウっこみたいに、……とねばってるのそこさあんのさ。

A　どこに？

爺　右大臣様に。

潤　完全結晶まだしないやつだ。

爺　んだから、あそこももとは海だったんだおんね。貝ねばってんだお。

潤　どのくらいの貝ねばってんの？

爺　うんとちゃっこいの。

潤　シジミみてなの？

爺　うん。

潤　じゃ、うんと浅い海だったんだな。

A　それからね、昔のっしゃ、何様かのお墓あるなんて。オオクラあたりに、昔の盗賊のお墓だなんてこと聞いたことがいんか？

爺　エゾ住んでたとか、盗賊生きてたべとかの洞穴なんぞは聞

いたが、そいなの聞かねな。

潤　陵なんつのは？

爺　聞かねな。そいなの聞かねな。

A　どうもわかんねな。

潤　とにかく嘉太神に関しては必ず陵が関係してくる。

A　うんと古い神社とかお寺の後とかこの辺に？

爺　そいな古い寺ってのはやっぱ升沢だな。

A　升沢に寺あんの？どの辺っしゃ？

爺　りっぱなお寺、寺山ってね、今のお墓の上だ。

A　そうすっと川の向こう側だな？

爺　うん。升沢の。

A　升沢ここにあってっしゃ、後ろ川流れてるさ、荒川って。

爺　うん、川の北っしゃ。

A　対岸。

爺　うん。

A　今お墓は升沢は一ヵ寺だね。

爺　うん、一ヵ寺。

A　寺山なんて見たことないけんども。

爺　堀まわってんださ、堀だか石垣。

潤　的場の方か？

爺　的場でねく、弓張り場さ行く手前っしゃ。川っぷちさ。

A　学校の向かえだお。

潤　ああそうか。

A　川越えて。

爺　そうでなく、後ろ側。林ちゃん家のね、もちから入って行くとこ、川あんの。橋あって、弓張り場さ行くって前、そこ寺山っていうんだね、お墓んとこ。

潤　寺ってね、今のお寺と、もう一つ墓地あんだよ。

爺　ええ。

潤　そこんとこすか？

爺　ええ。

潤　元禄以前の地名だかんね、寺山って。もし、寺山って確かにあるんだったら、元禄以前の墓地なんだから。今の墓地はまた別になったんだから。

A　寺山っていたのすか？

爺　んだね。

A　升沢の人さっぱり教えてけねおんな。

爺　だからね、曹洞宗だからね、だからお念仏っていうの、特殊なのあんだおね、升沢に。ほいつおれわかんねんだ。やっぱりね、覚えてて。

潤　小川さいっしゃ、入れて貰った。

爺　あいつっしゃ。ね。特殊な。

潤　んで、三、七、二十一日、いっぺんでやってしまうって。

爺　んだね。あいつあそこだってないんだね。なんでかんであそこで亡くなって、部落の人達拝むんだ。どこのかくにもあるもんでね。クドキあんだお。

A　なんかしゃべるやつだね。

爺　うん。

潤　クドキある？オジサン教えなよ、それ、クドキってなにっしゃ？

A　クドキって、ただ、アニャモニャじゃねくてね。

爺　南無阿弥陀仏ばりじゃなくてね、三途の川渡ったとかね、蓮華の花開いたとかね。

潤　それね、とにかく七回くりかえすんだ。

爺　うん。

潤　そいことね、クドキっつのは。

爺　うん。

潤　蓮華の花だ。

爺　一本開いた。

潤　一本から七本まで行くんだお。

爺　うん。

潤　そして三回繰り返すと、三、七、二十一やったことになんだお。それをクドキっていうの？

爺　んだね。

A　普通、クドキっつよ。ナミアミダブツ（南無阿弥陀仏）だけでなくね、そのしゃべることをクドキって。クドクって、こぼすっていうんだか。この辺でね、いうなればね、ぐずもずと、くどくっつか。

潤　ぐずもずとね、くどくことだな。

A　本人が、ほなんだかもしゃね。

潤　これがほんとの仏さんに対するね、クドキって。

A　この辺には、そいのはねんだね。

爺　ここにはねんだね。

A　はあ。

爺　だから、それがね、寺山っていうお寺、なんつんだかわかんね。そのお寺が伝えたもんだね。

潤　ケイウンジ。

A　京都、みてるなったんだ。

爺　京都のどこがしゅだっつんだ、おしょさんが。

潤　おしょさんって、どこのおしょさんすか？

爺　中興寺。

潤　んで、わかった。おしょさんに行って聞けばわかる。

爺　吉田だって、嘉太神、沢渡で三軒だけっと、嘉太神からこっちで中興寺、檀家。

潤　このごろおしょさん来すか？

爺　来すや。

潤　帰り行くかな。なかなか面白い話聞いた。

A　あとは地名でなんかねえのすか？こういうふうなことっての、断片的にしかないから、それを繋ぎ合わすてみっと出てくんだ。それが、なんにもねんだな、船形なんかにね。なにさも出てないんだ。

潤　その寺山っての壇の下の上にあるんだすぺ？

爺　檀の下の上っつんでもねえ。下だな。

潤　檀の下っていったら荒川越えたすぐ升沢の入り口のとこ、壇の下っていうんでしょ。

A　んだから、檀の下ってブンケンだお、囲い割だもんね。

潤　そうか。檀の下の中にあるのが寺山とまず見ていいんだね。

爺　んだね。一部ね。

A　あとこの辺さ、昔のもの伝わってないかね。ほいなのいたんだとや、とか。

爺　なんだかね。ゆっくり聞かんねと。

潤　例えばね、ケモノね、ケモノとりすぺ、ケモノ取った皮どいな扱い方すか？

爺　覚えあるの、大抵売ったおんや。

潤　売ってしまった？

爺　ああ。

潤　魔よけに使ったとかっていうのなかった？

爺　ねえね。

A　この辺ではないね。昔っしゃ、門松さカモシカ取った時、剥製みたいにした首、そいつさぶら下げておくなんてことはねえね。

爺　ねえね。ただ、昔の人だな、鹿の皮。

（中断。テープ反転。）

潤　それは防寒用だおんね、ようはね。

爺　防寒って、あいつは一つの礼服のようなものでねかったかな、おれ思うには。

潤　なんか模様でもつけたの？

爺　模様、あんまりねんだな。

A　格式ばった時そいつを着たわけさ。

爺　ああ。

潤　お宅の紋付はどういうなに紋っしゃ？

爺　橘。

潤　橘だったら、源氏だおな。

A　この辺で、どいな紋つかってる？あとは。

爺　大抵、大抵って、高橋はマツカサ。

潤　三階松？

爺　違うんだね、重なったような。こいな。

潤　鷹羽。

爺　鷹羽すか、あいつ。

潤　うん。

A　二枚重なってるやつですか？

爺　うん。

潤　鷹羽だ。

爺　ほれくれえ。それ以外。

A　橘。

爺　うん。

潤　あの、吉田のね、ウズラバシエナキチっつのいたね。あれなど、平家の落人といってるんだから。ところで、お宅のカマドにカマドガミサン（竈神）ありすか？こいなの。

A　面だ、面。

爺　あったんだけっとね。

潤　あった？んで間違いない。これ、平家だよ。平家でしか使わないという言われあんだ。非常に新しい伝承持って来たわけですよ。

爺　まず、平家の落ち武者であんめか、ここは。

A　平家ってのなんか特別なものあんですか？平家を表すものさ。

潤　え？ベンベンって、唄さ要するに。それからもう一つ伺うが、昔ね、万歳など来したか？

爺　万歳ってのは来ねね。

潤　それから、なんつんだいね、法印だど、後ろに仏しょって、観音などしょって、ことってたとか、そういうのがいんか。

爺　そういうの、山伏みてなの。そいのは聞いたね。

潤　そして五輪の塔なんてのねすか？石重ねたやつ。

爺　あいつは墓にあるね、そこらあたりの墓にあるね。

潤　なんだい、ほんだら、ここ昔の山伏の家だっちゃ。

爺　なんだか。

潤　いや、山伏でなきゃ作らんねんだから。

爺　はあ。あるね、ナカムラのショウイッツアン家ね。右大臣さまの畑の根っこだから、お墓。

A　あっちが境でしょ。

潤　こっちが舎弟、兄。左の方が。

爺　もとあったんだけっともね、誰とはいわんねけど創価学会の人だったか、ぶん投げてしまったね。

潤　それ、左大臣の方すか？

爺　うん。

潤　大きさどれくらい？一尺？

爺　一尺くれはあんべな。一尺の上だな。

潤　一尺五寸？

爺　うん。

潤　それから、直径は？四角すか丸すか？

爺　んでねえの。角だったおね。

A　何年か祀ったのすか？

爺　祀んねえの。

潤　右大臣にはなに祀ったのすか？

爺　石の、お堂だね。

潤　大きさは？

爺　上少し四角の平らになって、こういうのかぶせてた。おらたちの神様もそうだおね。そしてね、ずっーと長くなって胴あってね、

潤　うん、ドウ（胴）、サオ（棹）っていうんだおね。

爺　そっちさ飛び上がっていくんだおね、立てるようにね。

潤　それはちょっと面白いね。

爺　おらたちのは塔立ってねんだ。

潤　その右大臣の石の高さどれくらいっしゃ。

爺　二尺。

潤　して、四角になってんでしょ。お堂っこみてに切れ上がって開くようになってんだね。

A　んだね。

潤　ずいぶん精巧だな。

爺　石もこんなん厚いんだ一寸くらいある。

A　何時作ったなんて書いてないんでしょ。

爺　そいつはおら。

潤　なかに入ってんの開いてバチあたるってことでがいんか？

爺　大抵開いてると思うね。

潤　とにかく拝んで開ければいいわけだね。

爺　うん。

（歩きながら―足音）

潤　でもこれ、小栗山より新しいね。そんな技術だったら。小栗山は崩れてんだから十あるうち満足なのないんだから。

A　だってそれだって、後から作り直したかもわかんねんだおな。

潤　ノミの入れ方だよの、あと石のはたのぐあい。あの林右衛門さんの……。

（中断）

爺　ソウゼンクヨウ（蒼前供養）だとか、あと馬頭観音だとか。

潤　庚申塚もあるし、日待ちだのお日待ちだのっていうこと、若衆たち昔やったんだが、オヅンツァン達やんなかったすか？

爺　昔やったんだね。

潤　あとは月待ちってしなかった？

爺　月待ちはしなかったね。あとはやっぱり、何神様の年越しだのって、うんとあったんだおね。

潤　あの、お日待ちの日にちは何日になってたのっしゃ？

爺　お日待ちたって、その必ずってのでもねんだ。お日待ちっつのしたのは月山参りに行くとかね、そいう時だね。

A　ここにみなしてお参りする神様ねえのすか？

爺　ほだから、こいつなんだね。

A　右大臣様。

爺　うん。

A　お祭りの前の日にはお日待ちしないのすか？

爺　ほだね。

A　昔からしねのすか？

爺　うん。お日待ちっつのは三山参りね、おらいで二人行くこったらば無事にほのお参りしてくるとね、行って来るうちみなしてやっているもんだね。

A　精進潔斎のことだな。

潤　そりゃいい話だ。

A　それから、あの、マンノウダキの方の何か伝説など聞いたことねすか？あそこに神様みてなのねのすか、あの滝のふちに。

爺　マンノウダキでなく、お不動様。こっちヤンビダキ（乱飛滝）にお不動様あんだね。あの、石室あんだね。

A　石室あんの？

爺　あの滝のわきのワグッとなったとこにあんだっちゃ。

潤　そのヤンビダキのお不動様の高さどれくらいっしゃ？

爺　不動様、なんだねや。

A　彫らってんのすか？

爺　石のなにだね。

A　なにも書かってないの？

爺　うん。

A　気づかないな、やっぱり。その気してみねとわかんねんだな。

爺　一昨年だっけ、お参りして来たのな。普通で行かんねっけおんな。ここんとこ欠けてね、滝つぼさ落ちて行くから。

潤　マンノウダキには不動さんねすか？

爺　不動さまねんでないか。……には、なんだ、昔あったつんだけどな。

潤　昔ね。

爺　杉の木一本あって。

A　マンノウダキって一つしかねんでないかと思ってたのっしゃ、新しく林道つけらったっちゃ、あの橋渡って、鉄の橋渡っ

て。あいつからずっといって、ぶっついたとこに滝あるべっちゃ。

爺　あいつは何マンノウなの？

潤　あいつ、ナカマンノウであんめかな。

A　なんぼ高いの？

潤　一五mばりあっかね。

爺　カミマンノウの滝はどれくらいあるの？

潤　小さいね。

A　五m位すか？

爺　二、三間あんの？

潤　んだね。

爺　シモマンノウの滝は？

潤　こいつちっちゃいんだね。

爺　二、三m位？

潤　うん。二、三m位だね。

A　ナカマンノウと近いのすか？

爺　んでねぇ。

潤　同じに入ってくるのね、その流れは何流れっていうのっしゃ。

爺　川すか？

潤　うん。

爺　何沢っていうんだか？あいつ吉田川の本流になってんだおね。

A　マンノウは本流だ。ほいつ吉田川の本流だ。

爺　あと、手前んのはシロコザワ（白子沢）っつんだ。

潤　白いコ？

爺　うん。……流れてんだな白くなって。鉱泉みて。

A　硫黄だな、んで。昔は鉱泉だったのすか？小屋など作ってたの？

爺　ほいつはねんだけども、しぬけの人達など。

潤　水溜めて風呂にして入ってたのね。

爺　うん。なにすか？二六……。

A　こいつ大和の有線に行くのすか？

（電話している）

潤　月山参りするのに何日かかったのすか？

爺　二〇日位かかったんであんまいか？

潤　その間家の人達精進してたのね。無事に行くようにね。

爺　家の人達ばりでねんだ、部落の人達ね親類。

潤　で、帰って来た後、その人は家に入る前に左大臣すか、無事に帰って来ましたって報告しますか？

爺　右大臣だね。

潤　無事帰って来ましたって、家に帰る前にやるわけ……家に入る前にやるわけだね。

爺　ほだね。右大臣様に長床あったんだね、休むために。そのためにあそこ使ったんだね。

潤　無事帰って来たことを報告したんだね。その水垢離とった場所はどこっしゃ？

爺　吉田川の、近いんだね、ここから。

潤　水垢離ってのは水で身体拭いたのすか、かぶったのすか？

爺　かぶったの。

潤　夏でなきゃできねえな。水被りね。

爺　ええ。お幣束、川に立ててね。

潤　それからね、ここでホトケだなんてことば使わねすか？

爺　まず、死んだ人のこと。

潤　この目のこと、黒い目のことは？

爺　こいつクロッタマ。

潤　クロッタマだの、瞳だのって。

爺　うん。

潤　んじゃね、ナベグミなんてこと。

爺　ナベグミっつのは、早くいえば、いあんべなジジコどもとか、フンダノナベっつ。

潤　今で言えば自由結婚？

爺　ああ。

潤　そういなことば残ってる？

爺　ああ、残ってる。

潤　こりゃあれだ、小栗山でも残ってる。

爺　正式な籍に入んねのナベグミっつ。

潤　いい言葉だって褒めてきたの。

爺　ああ。

潤　それから、アクドナガレなんて。

爺　アクドナガレ……。

潤　言わね？

爺　うん。

潤　要するに下から流れて来たの、アクドナガレなんてね。

爺　はあ。あんまり聞かねね。

潤　ああ、オンツァンあんまり新しくなってしまって、昔のこと忘れてるな、おれの方知ってるわね。ナベグミっつのあんた知ってるか？

A　ナベグミっつの知ってるっつ。

潤　どういうこと？

A　そっちのこっちのはずれたの一緒になんにって。

爺　スキズキさ、ねばったらナベグミさ。

A　そうすかや。おらほで言ってるナベグミっつのはね、あの、こっち離婚した、離婚した、一緒なっちまう。

潤　ああ、離婚同士が？

A　うん。

潤　それあんたこう書くんだよ。ナベグミと。これ宜しいという意味。

A　この辺に道祖神様ねえか？

爺　ここねえね。道祖神様はおれのタッコにあっから。

A　タッコにある？

爺　キクンツァイ。

A　そいつ、ミョウオウザカから入ったとこでないすか？あそこからの道路昔の林道みてな。

爺　んでなく、オシャ道路ずっと行くっとキクンツァイある、タッコ。タッコのイグネのおらいの屋敷なんだ。おれ、キクンツァイ……。この辺にはねえな。

（続いて放送番組の録音。）

［7］「山内地名⑦・船形山故事①」（昭和四十八年五月一日）

登場人物　老爺(爺)・老婆(婆)・男・吉田潤之介(潤)

老爺　そうしてやっぱりぼわれて……して上ったんだつけね、ここさ。

潤　はあー、田尻から来たてす？

爺か婆　多賀城。多賀城の人達ね、四六人。ほれ、老人会やら、したもんで。

婆　どういうとこだか見たくて。あっち八十四になる人登ったんだね、船形に。あと、バスで来てあいつしていったった。

潤　小栗山のお仏さん、どっからぼわれて来たってす？

爺　小栗山から権現様姉様と間悪くて、ほて、ここさぼわれて来たんだと。

男　ぼった人はなになんだおね。なんだ、定義公でなく、えらいきかない神様だったんだおんね。その人にぼわれてここさ来たんだおね。ほれで、今でもゴンボ畑ですめって、わかんなくて。

婆　ゴンボ畑は穴あかって、うと難儀したんだと。ほんで、ゴンボ作んねことにしていたったのさ、ここではね。

潤　ここではね。

爺　んでね、多賀城でもっしゃ。ゴンボ作んねのっしゃ。

婆　多賀城ではね、カラドリ畑、

爺　んだ。

婆　カラドリ畑ですんなめって転び転び、うんと難儀して来たっどってね。今だらカラドリっつうもん作んねんだと、あれ、カラドリ。多賀城は土のあいつでとってもネバネバして旨いんだと。旨いけっともそういうなにあんのだら、今だら作んねことにしてるんだと、そいつのために。やあ、そいつを聞いて。

男or爺　ごめんね、今から縄はんなきゃないんだ。

潤　いがすいがす、あとでゆっくり。

（中断）

潤　去年も大変お世話んなってね。

爺　いいや。

潤　吉蔵さん、なんか書き物見付けしたか？

婆　なんだか、年末ジイチャン。

潤　見つかった？

婆　なんだかねえ。

潤　探しておっからは、なんて言ってたからね、またお伺いすっかと思って。

婆　どうぞ、お伺いしてけらいん。おらいのジイチャン、老人会長になって今年ばりも三回、吉岡公民館さ行きしたわ。あ

と昨日は敬老会でね。

潤　まあ、こっちに帰って来るとなつかしいわ。それからね、升沢のオバンチャンでね、

（爺は電話中。）

潤　ニラうまいな、ニラなんど喰ったことね、食べたいな。

婆　ニラ、おひたしあと卵とじね。

潤　ここで出るもんだったらなんでも有難い。

（電話中の声と婆の声が重なり、聞き取り不能。）

潤　ああやって、食べ物上げて来んの？（電話の内容に関して尋ねているらしい）

しかし、升沢も便利になったなあ。

（中断）

婆　ん、み、髪の毛だの、あいつね。みんな、マナグ（眼）悪い時っしゃ、薬師様さ上げたんだよ。髪いっぺに入ってしたもん、お堂中に。こいなみ、みよけだるあげたんだ、年の数だけ上げればいいとか、そだとかこうだとかって。

潤　年の数だけ上げんのすか？

婆　よけ書いて上げた人もあんべし、いやんべ書いて上げた人もあんべし。頭こういくマナク書いてね、マナク書いて上げた人もあるしっしゃ、様々。

潤　そして、書いて上げっと治ったのすか？

婆　やっぱり、いいから。治ったから上げたのっしゃ。

潤　上げっすと治るのすか？治っと上げるのすか？

婆　上げると治るのっしゃ。

潤　何日位で治るのすか？

婆　んだねえ、おいおいに、日数に治るんだねやっぱり。

潤　もっともね、こう炉辺で薪の火やりながらいたったんで、目悪くなるの当たり前だったんだね。

婆　あのあたり、メクサ（眼腐れ）流行ったんだね。マナク、ゴローゴローって開かなかったんだメクサ、ハヤリメ（流行目）、あいつみんな、悪くなってまっかりした後。

潤　私ね、国男さんとこで見たのね、縦に目、目、目、目、七つ、横に目、目、目、七つずっと書いてあるんだよね。そうすっと、七、七、四九になんだよね。なにかその七つ七つってなにかカケゴトがあんでないのかと思ってね。

婆　年の数だけ上げたんでないんか。その人四〇何ぼで。年の位上げるとマナグなにして良いんだとやって聞いたつや。

潤　年の数。やはり、お医者さんいねからね。そいつしたり、あとは拝んでもらって治したりね。おら、何度もあのシイタケ屋のオバンツァンの所に行って拝んでもらってね、米などを紙に包んでもらって米など貰って来たもんだおね。そうすっと不思議に熱など下がったりするんだな。だんだんだんだ

ん、そいなのなくなって行くからね、そいうの覚えておくといいなと思って。

（中断）

（拍手をうつ音に続き祝詞。）

（中断）

潤　そっからいがす、ハイ、ハイ。

爺　私はね、こいうふうに聞いてたのっしゃ。船形さはね、女の神様来てっしゃ。ここにね、フネをね、あの当時あんな大っきな木、がすぺっちゃ、だいてた岩。

潤　お山に？

爺　うん、あの木を倒してあそこで船こしゃえった人あんだとっしゃ。どこのか人来て、奥山、どこにも人いねんでしょ、升沢に人などいね時で。パカッパカッて船こしゃえて、そしたら女の人来たんだと。「どうぞ、おらとこ助けてくれ」「なんさ来た」っと、「身を隠してくないん」「ここさ入ってろ」って、船どーんとかぶせったと。あとから誰か来たと。「オナゴ来ねか」「来ね」と。「来たはずだ」「絶対来ね」。とうとう戻って行ったということ聞いったんです。そうして帰ったから船開けて見た、船作ってた人が。そうすると神様になっていたっと聞いてたんです。この船形の歴史はね、うそだかなんだかわかんねけど。昔の人からそのまま聞いったのはっしゃ。ほうして、船形山というのは初めて山さも名前も付いたし、ほで、これはこうしておくからということになって祀っておくことになったんだということ聞いていたのっしゃ。

潤　そのぼった人誰っしゃ？

爺　はっきりしたこと分かんねんだ。

潤　分わかんねのね。足がらみになっからゴボウ植えてだめだとかっていう言い方なんだっけ？ここの升沢は。

爺　ゴマ、ゴマとね、あと、女の人ね逃げて来っ時足さからまって転んだりまっかりした。

男　キュウリ植えらんねとこあんだね。

潤　ここでですか？

男　ほでねえの、吉田で。富谷の熊谷でも作らないのあんだね。あすこでも神様つんむけえした、神様女の神様。逃げて来た女の人。

潤　熊谷が追って行ったと、なんか熊谷ハチロウの家でね。おら船形さんさ登らんねんだとって。

男　そうですよ、熊谷という人は昔はここさ来らんねかった。

潤　ところがね、明治時代に来た別当様に熊谷って別当様いたんだね。あれは、どういう関係になるんだと聞いたらそれもだめんなってしまったがね。熊谷だっていろいろあるんだから。

男　結婚するって、どういうのか、お嫁さんを世話するって。ところが升沢という所は船形さん時の、熊谷という人と結婚しらんねって。縁組はだめだということになってね、結局取りやめになったことあんだね。

男　おらもそいうこと聞いったよ。

爺　熊谷という人とは相性あわねと。

男　昔の言葉だから分かんねけっともね。

潤　吉蔵さんとこにいるキチジさん、オバアサンね。あの方小栗山から来たんだおね。名前変えたんだおね。お嫁さんに来っとき。そいこと聞いてわあ、これは面白いと思ってね。

男　あれは、んでも。

男　ヅンイチっつんだっけかな。

潤　返って名前変えてよかったね。

男　そいこともありしと。

男　チトセっていうんだ。

潤　良い名前だね。繊細な。

男　オコマイシっつのめっけかねたなや。

男　オコマイシっつのは、もはや8合目なんだ、右側。

男　右側すか？おら、左側ばりあるって、左側のような気がしった。

男　こいこと聞いてたのっしゃ。あの升沢さオナゴお参りに行かんないだと、そなことあっか、おら達人だどっつて、かまねで来たんだと、そしたらあそこさ来たらばガターンて石んなったんだとっしゃ。名前はオコマ、それでオコマイシとつけた。

潤　そのオコマイシってどこにあんのっしゃ。

男　だから今言った、神社さ上るとこの八合目だね。

男　右っかわにあんだね。

婆　なげーくこうなって。

男　んだね、長く。

潤　鎖過ぎてから？鎖過ぎてから？

男　昔はオナゴ、ババチャン「今日来たど」て言うからさ、ババチャンそれは昔のこった、升沢権現ということは権現様なんだからオナゴ来らんねんだっと。神社だからね、オナゴ来たって何来たっていいんで。

男　権現っつ、オナゴ行かんねの？

男　だめですよ。

男　昔は船形権現つったんだ。

男　権現様さオナゴ絶対行かんねど。

婆　んだけっとも、なんぼ昔の世の中だって、神様拝む気持ちで行ったんだって。石になったなんて、そんなばかなことねえよ。だれ、人間石になるってことねえよ。

男　だってバアチャン、そん時はそん時だ、仕方ねんだってば。

男　だけっともそういうスタイル話題にしておかねば、神様値打ちってことねんだってば。

男　権現だからね、山形だって権現の時オナゴ行かんねよ。あそこだって、今神社だからほだからオナゴどんどん行くんですよ。

男　北条っつうのエンコウタイシ様だって、喰うと稼ぐの好かねと、ほだから寝てばりいて、臼の姿だおね、お掛け図、臼だよ。あいつも何かあんだ。

婆　エンコウダイシサマっつ人、うんとほっちこっち歩いて腹へって来たんだと。そして、おらいみたいな貧しい家さ「泊めてくないん」って言った。おれみてなババア「ああ、おらいみてな古い家でいいこって、泊まらい」って泊めたんだと。そしたら、次の日おらいでまくればりいっから、田掘んないでいずれ荒していたんだべ、おらいみてなとこで。そうしたっけ、寝ったうちに、その家の人達寝ったうちさ、ちゃんと田掘っていたんだ。ほしたら隣の家の福しい人、おらいのうちも……やって来たと。そしたら、おらいの家さ泊まんなさい、泊まんなさいって、そこの家にいたんだけっと、ぎりぎり引っ張って行ったんだと。そして、ベコんなって稼げ、ウシんなって稼げっつったんだと。そしたらわれら牛んなった。ほなことするもんでねと言ったんでがすと。

男　そいつのことでがすと、神様なんつもの。自分が常日頃拝んでいれば、神様守ってくれますよ、おらはそう思う。

婆　人のものただとって、我ら楽して人を稼がせて金とってと、そんなことしたからだって。

男　神様そこを見てんのが神様だおんね。人より神様の方。

婆　神様でなくとも人のもの取ったりしなければ、そんなことしなければ。

男　おれ悪いことしたの知れねようにしてくれろって。神様だって馬鹿語れ、神様怒られますよ、神様に。なんさ来た、このやろうって怒られますよ。

婆　んだからこっちから半分ベコで、あと下の方……お姿ね。

男　角ね、牛の頭なんだ。そいつがご本尊様のお掛け図。

男　悪いことばりするとほんとに良い事ないど。神様見てますよ。

潤：知ってるのは自分だしね。

婆　んだ。知ってるの自分ばりだし。

男　常にね神様拝んでりゃ、悪いことしらんねんだ。

潤　でも拝むのいろいろあってね、大阪の商人でね高利貸しがね、もう家出たら悪鬼の如き利子集めして歩く高利貸しいったったと。その朝行く時は、仏さんのとこに座って一生懸命

拝むそうだ。拝み終わってから鬼の如く利子を取って歩く、これも拝み方だおね一つの。ようするに、自分は悪いことやってんだよね、高利貸しやってんだから。朝に悪いこと知って、神様にお許しを願うわけだ。そして今度終わったら、鬼んなってとそういう拝み方もあんだおね。

（中断）

潤　小栗山を通って行って船形のどこに上がりきったとこっしゃ？

爺　だから、あの、小栗山はね、ユヤチ（湯谷地）を通ってそれから沢づたいに登って、登り詰めて尾根に上がった所がカイサン神社って。

潤　そうすか。

爺　それからちょっと左の尾根づたいに行ってあの、頂上に出るわけっしゃ。

潤　千畳敷はどこに入るのっしゃ。

爺　千畳敷は加美郡分だけっと、おら方の登山口の、

潤　そうすっと、カイサン神社は登山口のどの辺になるわけっしゃ。

爺　うんと、西角だね。

潤　通り越して行くわけだね、過ぎてからだね。ああ、あすこ神社あんのすか？

爺　神社ってないの、あの、石を。

男　神様で祀ってんだべ、石。お名はないんですよ。

潤　その小野川からね升沢に行く間のカイズやったのはね、ソガミョウケンて人、ソガミョウケンって人が山開いたと言ってんだな、小栗山で。ソガミョウケン、ミョウケンってったら確かに偉い名前だおね。ミョウケンボシって名前あっからね。そこには六口六方ありって書いてあんだおね、船形山の。ようするに六つの方向があるってこと、だから六方なんていうとね、山伏修行が歩く歩き方を六方を踏むだなんて言葉あんですよ。そういうとこにひっかけて言ってんじゃないかなって思ってんですよ。

男　こっちからもこっちからも、こっちからも山さ登る街道があるという意味だすぺ。

潤　ええ、向こう側ね、鶴子川とね、観音寺と定義山と、それから、ほの川上って升沢通ってそれから、同じくカノハラ通って行くのと、小野田方面通って行くのと、あともひとつどこ……

男　あと、根白石から行く。

潤　そいつ大倉の方通って定義通って来るやつじゃないのすか。

男　違うの。それとまた別。

潤　ああ、それで六口。なるほどね。

男　定義は定義でまたあるんだから。さもなければあれだね。今切り払ったけっとも作並から来るのあんだね。

潤　はあ、作並。

男　はい。今、六方以上あんね。

男　んで、八方か。

男　もはや、八方だね。

男　タキ……山から来るのもあんだ。

男　スキーコースまであっからね。

男　八方美人、なんて言わっと困っからね。

潤　なんだか知らねけっとも、昔の人書いたのから聞こうだなんて思ったけれども、今、大分なくなってんだおんね。

男　古いのはね、古いのほどいいんでがすと。

男　これ船形観光開発のあれね、赤い印は全部登山道だから。みんなに説明してやってんの。

潤　こん中でグラビ沢（クラビ沢）ってありますね。

男　ありますよ。

潤　グラビってどういう意味っしゃ？

男　どういう意味かわかんねけっともね、グラビ沢ってありますよ。これはね、アラカミ（荒神）行くコースなんだね、グラビ沢。グラビ沢にはね、ガマイシとかそれからロウソクイワとか材木岩ね、それからイタチオダキ、シチフクジンそれからムラサキダキ（紫滝）、ビョウブガタキ（屏風ヶ滝）ね、シライトノタキ（白糸滝）、大した名勝ありますよ。

潤　四十なん滝のひとつだな。

婆　紫滝、紫に流れてんの？そいつ。

男　土が紫になってんだ。丁度サンボンザカの粘土のようなズワ色んなったと水流れてそれが紫滝。それから屏風ヶ滝っつうの水の落ちっとこ滝の側までゆかねとその落ち口わかんねと。山がちゃんとなにして隠れてんだお。そして屏風ヶ岳となってんだ。

男　誰が名前付けたもんだかなあ。

潤　それからね、「今宵はここについやして神も仏の落合の、胎内洞の岩枕、明けて急げばほどもなく座禅石、業の滝をも拝しつつ、お釜が石をうちすぎて、八万八千仏を礼拝し、白水川を打ち眺め、愛染明王庚申仏急ぎ給えば天照皇大神、大黒天、毘沙門天、数の仏神拝しつつ、左にあたりてはアラチザワ（荒血沢）、七滝タイセイフドウミョウオウ（大聖不動明王）を拝しつつ、登ればほどなく水上大弁財天、五所大明神を打ち拝み、拝し分かれてそれよりも、御所山に急がるる」とそいこと「はやゴホウゼン（御宝前）にもなりしかば」

男　うん、御宝前。

男　御宝前というのは御滝大滝、そいつ御宝前というんだ。

潤　それからね、「垢離やうがいや身を清め」垢離だね垢離をとってね、うがいして身を清め、オマエガワってのあんのすかや？御前川と書いてあんだね。

男　うーん、あっかもわかんねね。

潤　ようするに川のことなんだな。

男　ほだね。

潤　「八水神、御滝は大聖不動明王、ご本尊は南都の大日如来」となってる。わかんねんだ、こうなってくるとね。あのミナミフナバラ（南船原）に大日如来を祀るということは書いてあったんだがね。南都の大日如来っつのちょっとわかんねんだな。

男　んだら、胎内ってやつはどういうふうに出てたの？

潤　タイナイホラ（胎内洞）とだけ書いてある。

男　うん、胎内洞っつうの、山がズーッと続いててね、そこを潜って落ちて歩くんだから。

潤　どれくらいの穴になってるの？

男　そうねえ、直径だいたい七、八間はあるんじゃないかね。一〇間あるかもしゃねね。

潤　長さは？

男　一〇間。

潤　周りは？

男　まわりは、ほだね、この台所くれえだ。

潤　んで、じゃまになんねね。

男　じゃまになりん。そこをね、それが石、そこの下に大昔、金の梯子あったんだと。川さ落ちるとこ胎内から、それが洪水の場合にね、足をさらわれてそこの下さ金の梯子埋ってる。白糸の滝のとこさなんか、最近一〇年か一二、三年前に作った。こういう金の鎖、岩に穴ほって金棒さして、そいつさ金の梯子さがって。山形の人、とてもとても、とてもじゃないが熱心なんだ。金の鎖。よくまあ、ああいうの背負ってきたと思って。あすくに来てから繋いだもんだかなんだかわかんねけっとも。まず、親方等もいってっかもしゃねども、ようするに恐らくおさわがせするの。そいとこ案内けろっつ言われた時には、恐らくおればりだから歩ったの。だあれ、おれ、三日も四日も一週間も案内してけろって言われた時、みなおらいさ回っと山さ行ってした。突然、今日いけるすべと言ったっておれやんだからわ。食料もねし、ワラジも切れたっと。「いがす、ワラジだの食料持って来た、家さ回ったっけ、案内して山さ行ったって言うから、途中であうべから語ってみらいってバンチャンに言われてきたからって、こっから戻ってまた案内してけろ」って言われて、やんだけんどもね、また戻って案内したことありすと。そいつ全部大沢、なにかか

けてアラカみたいな全部掛けて来るんだよね。その頃、なんか山さ泊まり、泊まりだおんやー。なんにも無いとこ、テントも無い時だから。……だって泊まってだおん。

男　仙台カゴヤマ（仙台カゴ）、山形カゴヤマ（最上カゴ）って山があるわけだね、石山。仙台カゴ、山形カゴっつう、そこを通って。

潤　最上カゴ、最上。

男　最上郡になってるね。

潤　最上カゴって。最上カゴ、仙台カゴ。

男　うん、最上カゴ、そうなってるの。

潤　その前の名前は出羽カゴってなってる。もう一つはただのカゴとなってる。だから仙台藩とね、最上藩の以前の地名は、ただカゴとね、出羽カゴと二つある。出羽は出羽の方の持ち物だから、仙台藩の方はただのカゴになってる。

男　そこもこわして行くっと、クロボシヤマ（黒伏山）という。

潤　今なんて言いした？

男　クロボシ、

潤　うーん、これが本当の言い方なんだ。クロブシでねんだ。クロボシ。

男　クロボシ。そこの下を通ってマギノムラ（間木野村）へ出んだから。観音寺高崎のね。

潤　マギノ（間木野）ね。

男　今は町になったかなんだかわかんねけっともね、そこへ出るんです。そこが部落であって、そこはタバコを作ってるんです、全部。そこが一番のつっかかりだね。そこを下って行くっつと、観音寺高崎のね、大きな御所山さ上がった石を採れる所へ。

潤　ああ、それトリイイワ（鳥居岩）っつんじゃないですか？

男　そうかもしれんね。

潤　その鳥居どういう格好っしゃ？やっぱり鳥みたいな、

男　そうだな鳥居っしゃ。

潤　柱太くて横にこういう長いやつ。

男　ん、そうだね。

潤　普通の鳥居、こういうなってこういう感じでしょ。逆にこうなってこういう鳥居でしょ。

男　うんそいつはよく気づかないけど。

潤　日本三鳥居って有名なってるの。

男　まず、大きな鳥居だよ。

潤　大分大きいらしいね。

男　石の鳥居立ってるからね。

潤　幅どれくらいあんのっしゃ？

男　幅そうだね、二間以上あるかもわかんねね。

潤　高さそれに対して、高さも二間以上あんの？

男　ああ、二間以上どこでないよ。

潤　あれ、写真見っと違うなあ。

男　大きな鳥居だよ、小さい鳥居でねえから。登山入り口となってね、そこから観音寺高崎のね、

潤　これがね、鳥居岩と、小栗のね女石男石を繋ぐ束と西の結び道と書いてあるんです。

男　ああなるほどね。

潤　こんなとこ出て来ましたよ。あの、わたしたまいてそれよりも、山中ここに守るべし、われこそはシラオカ、白い岡とかいてある。大明神とビャッコの形を現したもう、白い狐と書いてあるのね。白狐の形を現したもう。春の末、夏の始めその頃に、白狐の形を現せるいわれはかくと伝えたりとこれで狐語ってそこから出てくるんだね。

男　山形の方さそう見えるんだなあ。

潤　いや、そうじゃねですよ。

男　こっちから見るんですか？

潤　そうじゃないですか。だって、狐形っていうのは山形側にあるんじゃないんです。こっちのトウフナバラ（止船原）の方にある山の名前でね。それからすごいんだね。聖武天皇、聖武皇帝御宝祚万安聖徳無窮天下太平国土安穏五穀成就一切安楽の御勅願を奉げつつ、別当寺院を定められお山繁昌をなしたもう」と書いてある。

男　なるほど。

潤　別当寺院だって、たいしたもんだね。それからゴロウザワ（五郎沢）知ってすぺ？

男　ああ、ゴロウザワってあつけね。

潤　それがね、ゴロウザワって面白い字書いてあるんですよ。ゴは堀籠の籠、今、三郎五郎の字になってけっとも。こういう字書いてんだね。そんなんで、話してるうちにだんだんね。それよりも「五〇〇年のその間お山繁昌一切利益のそのうちにフウザン（封山）なりし因縁を詳しく尋ね奉つるに出羽国村山郡と聞こえしが、ツロク村の山奥に」ここんとこアマブタ（雨蓋）つうところ通って来てんだおね。こういう言い方してんだおなぁ、やっぱ一回山形の方通って見ないとだめだおな。そして、だんだんだんだん、マキノコタロウ（牧野小太郎）って鎌倉からね、侍が来て封山命じられるいきさつ書いてあんだがね、

男　うーん。

潤　でも、知識や照合してみると、大分ねなるほどなるほどと思うこと沢山出て来ましたよ。

男　うん。

潤　よっぽど、この別当か法印かわかんねけど知識のある人書いたんだね。ああ、出羽の国ミブムラ（丹生村）ミヤウチ（宮内）に鎮座したもんが、五所大明神だと書いてある。願望大神だとも言ってる。願う願望ね、願望大明神と仰ぎ奉ると書いてある。

男　だからやっぱり山形で「ここおらほの山だ」と。

男　昔、山形にすごい伝承があんでがす。山形の人達に聞いたらなんだおね。

潤　昭和四十八年三月三十一日の午前〇時十五分に書き終わったと書いてある。これ、三回か四回書き直した。そしてこうやってね、

男　こういうことをっしゃ、一人の人に聞いたってわかんねから、そっちから聞くとまた変わったこともあっからっしゃ。今聞かったって、おわかんねからっしゃ。話が残ってっから今しゃべってっけどしゃ。

（中断）

潤　ほんでなにす？

爺　あのね、カメイシザワからね上がってっしゃ、サイソウっていうと草花んとこあんですよ、そこにね、何百年といういつでも水が切れない水溜りがあんですよ。そこがすぐねわきが、オニが走ってるとこがあれなんですよ、ジャガタケ（蛇ヶ岳）っていうんですよ、そこなんですよ、水溜り。だから、今そういうこと聞くとあれがやっぱりジャヌマとかね、

潤　採草地ってずっとすべること出来るとこですか？

爺　そうそうそうそう。

潤　じゃあ、あすこんとこ。

爺　あの右側が蛇ヶ岳だから。

潤　草で滑る事出来る奥のほうが池になってるんですか？

爺　ありますよ。ちょっと上がったとこ、これは何百年という絶対に切れないね、本当の谷地のような所に水溜まってるんだね。ほれから、その南にもまた水溜りあっから。それは、なんていう名前付いてかどうかははっきりわかんねけど。私がそこ一人で、熊ぼって歩く自分にね、そこ横断してるから、全部水溜りでもミミズククラ（木菟倉）でも分かってる。

潤　やっと熊の話出て来た。なかなか話聞けなかった。いつ話してくれんのかと思ってた。炭焼き、あと、熊獲りの話ね。とにかく……に、あといねんだからね。そいつ話、聞かせてもらいてなぁと思って。そこで、一〇〇日、百ヶ日ね、鉦をたたいてそのヘビを殺した霊を慰めてやったんだって。その石がぱっかり割れてね、そこから黄金が出て来たんだって。その黄金を持ってね、たった一人のお母さんがヘビに噛まれて死んでそいで、息子がね、その金を持って京都に上ってそ

して勉強して、そして偉いね、公家のお使い役人になったつうこと書いてあるんですよ。その名前は高橋。だから、この書いた人は一二〇、三〇年前の人だから誰か知ってる人いねかなと思ってね。引っかかりのあるような誰かだね。

爺　読めないところもあるし。

潤　その裏をもっていかないとね。ただ、興味本位で読んでしまってから、なんだこんなことかとなってしまう場所もある。そういう年号とか人の名前とか出来事とかだんだんだんだん、こう、調べていかないとなんねなと。

爺　大した収穫ね。

潤　それ、一〇日位かかったかね。

爺　一〇日位す？

潤　学校から帰ってから書くんだから。一日二時間か三時間だおね、せいぜい。

爺　これは北条時頼公の御所山、アラカミサン（荒神山）そうした所の山伝えのことしか全部ないよだね。

潤　荒神山ってとにかく京都辺りまで知られてた山なんだね。そこに修験道があったらしいね。

爺　船あったんだと、それがね、倒れてね、……の下に潰されたんだとっしゃ。そこに、今でもね、こんなケンが岩の上に横になってありますよ。そして、そこを拝むためにね、お払いとか賽銭とか石の上にあがってありますよ。そこに行く時にね、胎内っての。そこに石が割れたんだね、大きな石が。ほだからその割れた石の所にね、行くまでの前に小さなカネ（金）の梯子があるよ、こんな幅で。それを上がって。

潤　何mくらいの。

爺　そうねー、九尺位あるかな。

潤　そうですか。

爺　それ上がって行ってね、胎内、石が割れたとこっしゃ、パックリ、上は立ってんだよ。そこなんだ、ここに梯子かかってて、ここ潜っていかれっかやと思うんだ、そこさ行くと。ところが行って潜って行くと、やっぱり行かれるんだ。そして、出るとこの上にお宮がある。ところが高い岩がね、真っ白い岩がドーンといつかの時代に倒れて、お宮が潰されてしまったらしい。

潤　あったんだな。

爺　あった、あったの。

潤　あそこに……。あってもなんにもならないと思ったがね。

爺　あそこをこっちから行く時は、石拝んで戻って尾根伝いに下って行くと、ホットゴヤ、フノコヤ。

潤　フノコヤと書いて、ホットゴヤと読むんで。

爺　ええ、ホットゴヤです。フノコヤと書いてホットゴヤです。

そこにも出て来たことあんだから。まず、熊獲り。そういうところの沢でもなんでも、あらゆる一人で歩ったんだから。

潤　全部で熊何匹くらい獲りした？

爺　今までに、仲間の方も行ったけど私。現在私、打ってるやつは四頭だね。

潤　仲間の人達と合わせると何頭。

爺　一〇頭。

潤　熊の配分の仕方、どうなってんですか？

爺　配分は。

潤　一人で獲れば自分のものだね。

爺　一人では獲らんねね。二人で獲ったことと、五人で獲ったこともあるしね。それ以上で獲ったこともあるし。

潤　そういう時どんな分け方するのっしゃ。

爺　それはやっぱり、多くもらったんだね。

潤　命中率でか。

爺　なぜてばね、部落に回してかせるってこと、あるいは営林署、警察にやるってこと、ここの山で獲ったんだからっしゃ。その配分によって私が回してやった。だからしていつでも、あるいは親熊と子熊と獲った場合にはね、私、配分いらねからって、肉だけは貰ったけっともしゃ、皮だけの代金の配分はいらないと。そして、四貫目あった熊の皮だけ貰ったことある。そいつ着て歩ったんだから。そなもの着て歩ったら熊だっていって、他の人にぶんなぐられんだど、なんて言われながらね。でも、毛抜けるまで、今のようなその油を取ってなめさないような時代だからね。やはりそういう面でね、虫に食われてしまったことあるね。

潤　おしいな。

爺　今でも残ってて、スキーした連中、あるいは、県の方から来られた時なんか、本当は、前に私、河北新聞（『河北新報』）か朝日新聞かに升沢の熊獲り名人のクマキュウ（熊久）という名目で新聞に出されたことあるおんね。

潤　はあ、久五郎さんの「久」取って？

爺　はい、升沢の熊久。それが、今亡くなったけっとも富谷のウチガセにタクロウという人がね、新聞記者だったの、うん、タックン、あの人があれだったの。その前に獲った自分には……さ上げらったおね。そうして、熊獲りの由来を聞かせろっていうからね、そいつをほんとにね、新聞さ出したおね。

潤　新聞で読めばまとまってるわけですか？

爺　うん、そうだおね。今でがいんかおね。

潤　そなことね。

（終了）

［8］「山内地名⑧」

（採録時期不詳）

登場人物　老爺・老婆・吉田潤之介

潤之介　その石の大きさは？

老爺　大きさは風呂場くらいはある。一間半に、それ位はあがす。材木石つうとこありますわね、それはまた、材木の角がたってね。一本二本じゃなくね、重ねたように見えるとこあるんです。またね、立てたようなすこぶる材木屋の材料みたいにっしゃ、立てたようになってるとこがある、そこが材木石っていうんです。下がって行くとガマイシがあるんです。

潤　川の名前何て言うの？

爺　川の名前は何て言うんだか、山形の人ならわかんべが。

潤　シロミズガワ（白水川）なんていわねすか？

爺　あれはね、鶴子へ下がる川だから。尾花沢へ出るんです。

潤　トフナバラ（止船原）というのご存知ねすか？

爺　トウフナバラというの、大船形山の右の方にトウフナバラってあります。

潤　やっぱり、それが間違いなかった。そこのところにキツネガタって山ある。

爺　ほぉー。

潤　キツネガタ。狐の形。それがね、オバアチャンに今聞いたらね、トウヒガタっていうやつね、沢はありすね。こういうふうになってね、両方の沢がっしゃ、集まった所がトウヒのような羽根になって、雪が残るです。キヌね、ムギだ。

爺　トウヒガタっていうじゃないかって。

潤　そういう具合に雪が残った頃、田植え出来るという言われがあると。ところが吉田法印はね、それは、猿の形に似てるというようになった時、田植え始めてよいと。トウヒにしたって猿にしたって大体似たようなもんだおんね。

爺　いろいろありますよ。あっちの沢だとね。

潤　船形とトフナバラね、御所山、ニッテン（日天）、ガッテン（月天）。

爺　日天、月天ってありますっけね。

潤　そういう具合に名前残ってます。六〇〇年ばりの地図に載ってたの。泉ヶ岳ね、フタツダケ（二ツ岳）と言ってます。

爺　フタツダケと言ってんです。

潤　やっぱり

爺　フタツダケというのはね、南泉岳と北泉岳を合わせたものを言ってるんです。

潤　もうひとつね、ここと種沢のあいだにミササギ（御陵）ってのあるんです。御陵ですよ。

爺　陵ね。

潤　なんかね、石が積んであるか、土盛りしてあるかね、その形があるって地図に書いてあるんです。それはね、私の憶測では、仁徳天皇ね、あの方の分骨した所じゃないかって感じするんです。もしか、向こうの方にね、塚みたいな所あったら確かめておいてもらいたいと思ってね。

爺　ほすか。

潤　今から、六〇五年位の地図だね、宝治二年（一二四八）だから。

爺　種沢の近辺にあるわけだね。

潤　種沢だと、とにかく穀物の出た場所ですからね。

爺　そうだね。

潤　十分あずけると思うんです。まあ、そういうことで、今年は船形のことで大体まとまりつけたし、もうひとつは、小栗山船形の方ね、これはとにかく大分文献あんですよ。だから、こういう文献じゃいけないからって、私文献整理をしてあげつからというつもりで、今度資料見せて頂くつもり、明日お祭り終わったら小栗山の方に下りるつもりです。

爺　向こうの方には確かに何かあるね。

潤　この辺歩く途中にね、赤い石の出るとこないですか？

爺　ねーおんね。たまにね、赤い石ぽつっと見つけて来る人あんだね。沢山あんではないんだね。

潤　テンメイゴンゲンがね、その仙人にね、この山のお守りしなさいってわけで約束の意味で石を与えるんだ。シルシイシ（印石）っていう、昔の石の信仰ね、おろそかにできないと思うんです。だから、昔の人たちの言い伝え方記録なんてこと、ないがしろにできないと思うから、そういう言葉があるかなと思って一応伺ってみた次第です。ところが、小栗山に行きますと、石ころころ転がってる所あるそうです。

爺　ほぉ、赤い石がね、

潤　ええ、今、そっちかな、こっちかなと思ってね、判断に困ってるとこなんだが。

爺　誰か小栗山の人分かってるかね。

潤　とにかく田村将軍が来たって記録もあるしね、田村将軍、蝦夷征伐から帰ってから岩清水、京都ですね。岩清水八幡を作ったと、その境内の作り方全然同じに色麻にあるんですね。岩清水八幡という名前で。その礎石の作り方が小型にしただけで、形が残ってるの。だから、田村将軍との関係もあるし。

爺　エゾヅカとは違うのすか。

潤　エゾヅカ、どの辺にあるのすか？

爺　色麻にあるんだね。石でカマのように作ってね。

潤　エゾヅカっていうのとね、王城寺の方にもやっぱり塚あるんだね。それは先住民族の塚なんですよ。おそらく、エゾヅ

カと王城寺の塚同じだと思うんですがね。ようするに、二〇〇〇年位前の人たちの塚だと思うんですよ。

爺　ほぉ、その塚は人間が亡くなった時埋めた塚なんですか。

潤　埋めた場合と、昔は風葬ってのあるんですよ。昔は、風にさらして鳥に食わせてしまうって。天に帰すと地に帰す、そういう意味で塚もあるし、それから、本当の塚始まったの仁徳天皇の頃からですからね。ですから、一五〇〇年くらい前ですよ。その塚どういう形してるか、前の方丸くて後ろが四角の塚あるんですよ。前方後円墳ってね。まかり間違えば、その中に鏡入ってるかどうかね。考古学者が調べねばなんとも言われませんがね、塚とか非常に大事だと思うんですよ。そいから、もうひとつ、ユウヤチ（湯谷地）ね、あすこにね、もし、小川さんついてあったら、三尺位土掘ってみてもらいたいんだがね。

爺　あのね、ユジン（湯神）と書かったんだかな、石立ってるとこあんですよ。

潤　湯谷地に。

爺　ヤチユジン（谷地湯神）ですよ。

潤　谷地、長いのね。

爺　一尺七、八寸はあるね。

潤　ユガミと、湯の神と書いてあるんだね。

爺　んだね。

潤　というのは動物、あそこに雪あんまり積もんないそうだね。

爺　雪はあんまりないんです。

潤　だから、動物など行ってとにかく天然鉱泉なんだか、塩分入ってるはずだと思うんです。動物は塩分必要ですからね、舐めに行ったりなんだりあと病気になって死んだりしているかもしれないし。ひどい考え方かもしれないけど、長野県あたりに姥捨て山というのあんですよ。年取って喰うに困ると、そのオバサンとこ背負って行って、米おいて帰ってくるんですわ、ゴクツブシだからって言ってね。そういうことがなかったかなあと思ってね。お湯のそばだから、これでもう生きて行けると。それで拝んで帰ってくるという姥捨て山というのあんですよ、信州にね。湯谷地にも人の骨など埋まっていやしないかなという感じするんだがね。もしあったら大発見でね。大推定が当たったということでね。もしあったら。

爺　広い谷地だからね。ただ、神様たってるとこにあるかね。はっきりわかねけどもしゃ。

潤　どのくらい広いんですか。

爺　家の前、この道路からずっとね。

潤　大学から土掘りに来てたんじゃないですか。小渕って先生きて研究したはずだがね。

爺　その時はなんにもなかったんでないかな。

潤　オバンチャンに聞きたいんだがね、あんか、祟りあったとかなんとかいうことございんか。

婆　聞いたことないね、おら。

爺　神様の祟りすか。

潤　そいからね、よくこういう部落で、女の人が山に入って行くんですよ。帰ってこないっていうの。

爺・婆　聞いたことないね。この部落ではね。

潤　岩手県あたりではよくあるんです。

婆　はぁ。

潤　山奥の人達がね、山の霊に引かれていって帰って来なかったりするって。昔の話など読んだことあるもんだから。ここだって古い昔もってるとこです。恐らく私は、一〇〇〇年くらいもってると思うんですよ。ほんだから、そんな推定もしてみたんだが、非常に安穏なね。とにかくここは、ここの神様争いごとの嫌いな神様でね。そいから普通山登りっていったら、普通女人禁制ですよ。ところがここは女でも上って宜しいというタイレイゴンゲン（大霊権現）のお許し得てるんですよ。大霊権現っていうのね、あそこの小学校の前にね、石ありましたよ。大霊神っていうの。それは、お熊野さまです。紀州の熊野神社の熊野権現なんですよ、大霊ってのは。そういうのだんだん推定してきてね。役行者がここまで来て舟形開いて、早く人々を衆生済度しなさいという命令で役行者来たということ、資料に書いてあるんですよ。そんなもんで、役行者って修験ですからね、山伏のはしり。そういうような昔語りがあるもんだから、一応確かめておいた方が良いなと思って。

爺　浅井さんは何の方調べってっか。大和町の役場の図書館にしょっちゅう行ってますね。私、役場さ行った度毎にいろいろそういうようなこと「升沢さ行きたいけっともやー」なんて。

潤　うまいなぁ。

爺　うまがすか。そいつ、コゴミね。今それだけだおんね出てんの。

（中断）

爺　来たりに、夜ワリにお月夜出ったんだおんね、ところがそん時雪ある時だからね、春だからっしゃ。山ね、そうすると間違って寝はぐらかしたように川底の方さ寄るんだってね。戻ってね、あんまり左の方さ来たから右の方へいんから右の……言ったれば、教えらったけどもね。みんなオコモリして、上にあるんですね、社務所の。先に皆休んでおったが、風あってガタンガタン、ガタンガタンて皆逃げてだったけど

もね。

潤　神さんどんな神さんでしたか？

爺　神さんね、夜だったから、夜だからだめだったおんね。

潤　とにかく、見てみてけさい。

爺　これ小栗山のすか？

潤　小栗山、まだ。六月だから。これ御所山の船形の升沢神社の観音様。

爺　はぁー。写したのすか？はぁー。

潤　今度もっと良いカメラ借りて来たから、もっとはっきり写そうと思って。

爺　これがここの権現様だね、はぁー。

潤　吉蔵さんに聞きゃね、エンブダンゴン（閻浮檀金）になってたて見たら、閻浮檀金でねえもんね。

爺　閻浮檀金でねぇべね。

潤　何百年かたってっからね、閻浮檀金だ閻浮檀金だ言ってても、金の箔がとれてしまったのかもしれないですよ。これは銅と鉄、鉄の感じがするよな観音様だね。大分古いことは古いですよ。東北大学の仏教美術の先生が言ってますよね。

婆　……来て騒いでっけど、来ねおんね。

爺　来ねね。

潤　しかし、良い観音様ですね。百済観音です。

爺　はぁ。確かにこのお姿だおんね。

婆　ここの権現様？こいなの見たことね、おら。お祭りの時出すのだべ、見たことねえべっちゃや。

爺　行ったことないかんな。

婆　行かんねおん。今は行かんねっつことないべけっとも。

爺　信じられてると書かってるおん、こいつさ。

潤　え？

爺　あの、おなごの人は、上ると石になると……

婆　昔は、おなごの人は行かんなかった。

潤　女は上ってだめだってことないことになってんだから。ちゃんと神さま言ってんだから。

爺　明日はおれ祭典さ行くかと思ってたんだけっとも。

潤　楽しみだな明日行くの。

婆　金縁の……。

（中断）

爺　ここの大船形山の、あんですか。タテイシ（竪石）。

潤　山形側の方にあるの、と思うの。というのは、山形山岳会に聞いたらね、タテイシ船形山権現というのがあるとはっきり出て来たからね。山形だと思うんです。

（中断）

[9]「自家発電・タタラ・祟り」

（昭和四十七年四月三十日）

登場人物　老婆1・老婆2・潤之介

（歩きながら話している。鶯の声。）

老婆1　ここ通るしだいに、電気あって暗いとこ歩くことある。まあず、この山はほんとにたから山だと思って眺めていることいるな。また、その部落ども我々だの若いしょくばりでどうもならねべっちゃ。かすかな銭だべっちゃ、二万、三万あんのしったもんだべや。四万と五万の金だべや、分けたってさ。吉田いっぱんじんこう（ぎんこう？）さ分ければね、それを、利用されたためにこういうセンを引いたんだ。ほんなこたまずまず。それをおらいのジンチャン、部落の村長である……様の銭……たりお世話んなって、なにもかにも議員なったから頑張って貰うのさ。そうでなけりゃ、この道路も県道においつなはなるというけっとも、なかなかそれをすっかりするまでほど遠いかったや。誰もさきだっなんて、お墓半分わたしても、……。なんにもないことで、……眺めたばりで。なかなかや、生活もおどけでねことになんでないかとや。おら時代はいいんだ、子どもや孫はあずましいな。今の若い人たち脇入ってこないっとなんとか、……ほういいんでないかなと。オヤジは出稼ぎ、ガガどもあっちゃ行ってお茶のみ、あっちゃ行ってお茶のみ、あることねこと語って。まとまるこってねえわなーと、と思ってんのさ、おらはな。おれだけの考えでだよ。

（中断）

婆1　松の根っこを取ってきて、しじゅうカンの上さつっこけて、こんな鍋ぶっちゃけ鍋さアク（灰）ひいて。そいっつさ、マツ灯してほころびを縫ったり、スゴ編んだり、縄なったりしていたんだっちゃ。今度は下げランプでなくて、わかんねなんては、下げランプになって。ほしたら今度、自家発電っつもの起こして、あつくの林右衛門さいの沢さ、……いて、電気とぼして、ほれから、今度、六年たいた。

（中断）

潤之介　イズミアササブロウ？昔からそいな話あったの？

老婆2（婆1より少し若そう）　んだとさ、んだからその穴を訪ねて来なかねえどってさ、おれのオッピさら歩ってたんだ。そこさアカス（明かり）つけてくと、ずっと行くと、空気通わねえからさ。ぽっぽっとアカス消えて、わかんねかったとさ。昔はほれ、エンツってものねえっちゃ。だからほれ、なんぼ深いもんだかわかんね穴だったって、ほれ言ったの。ほれ、数年前だおな、おらいのオヤンツァマと船形荘のヅンツ

ァンとあと、孫と三人して行って見つけたんだっちゃ。

潤　その穴、どれくらいの大きな穴っしゃ？

老爺　なに、入り口おらいの家くれある。

婆2　なんぼもあんだと、入り口ね。ほだから、おってったって、おっかねくって入っていかんねんだと。先には、ライトの火だけでさ、ガソリンなくなっとわかんねどって。見っとこだって見らんねかったってね。

潤　ほすか。とにかくそれあとの調査だな。ライターじゃだめなのね、ライターも持っていかないけどね。炭酸ガスあるからね。火持っていかなだめ。ロウソクだったらすぐ消えるからね。

婆2　んだとね。オッピサンが行った時は、入ってみたんだべけっとも、火消えてわかんねかったんだと。

潤　はあ、やっぱし。

婆2　どんなに深いもんだか、どこまで通ってるもんだかわかんねだって。おらいのトウサら見て来たとき、なんぼも枝道あんだけとって。五、六畳間一間くれえあったりさ、8畳間一間くれえあったりってさ。

婆2　なんだもねえっていいす。このけぐれえのとこさちゃかっとかかってたりね、

潤　そこミササギ（御陵）っていうんでないかなぁ。ミササギって。要するに溶岩でそこんとこだけ穴出てしまったんですよ。

婆2　つくろうわけないからそいなが穴出たんだいっちゃ。そいつ見つけてそこの穴さ入ったからそいうなにでたんでないすか？おらいの息子、そいなの好きだから人の語るの聞いててさ。去年一昨年か、鳴子から来た人そいうの調べてさ、……の、あの、嘉太神の鉄くず出るとこ行って調べて。

潤　あれ砂鉄。

婆2　ここさ来て話しして、いろんな話したんだから。あそこの家の奥さん、ててってけろ、ててってけろっていうんだ。おら昔の話知らねけっとも。

潤　いろんな話聞いておけばね。

婆2　こっちとほれ、聞いたりなんだりしてっから。なんぼかほれ、話くっつかって語ったりもったりするとほれ、んだいっちゃ。その人も必ずててきてけろっていうけっとも、やんだいちゃおらも。カナクソっていうんだか？あんなんも持って来たんだその人。

潤　東北大の研究で今分析させてん。

爺　キンパタ（金畑）って金クツもある。

潤　キンパタってある。

爺　金のクツもあるっちゃね。

潤　んだから、あの、金取りとかね、金、とにかく。だから嘉太神の意味がそこに出てくるの。嘉っていう字はね、非常にいろんな物を作った人がそこにいたんですよ。刀作ったりね、そいから、カワラケ作ってみたり、なんでも、技術者だったんですよ。それから、りっぱな人がいるから、カダイジン、サダイジンとかってね、右大臣とか左大臣とかってね。そのくらい神様扱いされた人がいるって考えられるわけね。テツサン、カナクザワ、カナクソね、アカグツビ。アカグツビってとこ水銀でるの。ちゃんと決まってるの。そういう鉱物合わせてね、やりうるから嘉って出て来たの。その嘉っていうの。

（中断）

潤　祭りの前の日、青い火花ってどこから出るの？

爺　あの峠ごろからなや。

婆2　そんなこと聞いた。

爺　おら聞いたんでね、見たんだ。見たことある。

潤　青い火花ってなんのために出るの？お祭りの前の日……。

爺　前の晩だったかな。

潤　前の晩当然です。そして、出るって。

爺　おら見たんだ。

潤　何年頃？

爺　小学校の時なんだな。

潤　戦後だな、戦後。戦後の十年頃だな。

（中断）

婆2　ほしてここんとこポツポツっておってこの。水タッタッタッタって落ちるつうからな、その穴ん中にや。だけっとも見たよし何にもありそうでねと言うんだっけ。去年見た人。ずっと入っていって、だからあんまりおっかねくて見らんねんでねえのか？

（中断）

潤　ほして、臼。

婆2　臼で作ったお堂。

潤　大きさどれくらい？

婆2　これくらいぐれあるね。

潤　三〇センチに四〇センチ位ね。

婆2　そんなに高くない。

潤　三〇センチ四方位ね。中ホラになってるの？

婆2　んでねの、そこさ石で作った臼、臼っこ、そいつがお姿だべって。

潤　お椀。お椀だっちゃ。

婆2　お椀すかや、そうすかや。

潤　そいつに餅、洗い米でも上げたんだいっちゃ。それ、左大

臣、右大臣に上げますよ。

婆2　こう、臼みてにクビッレコついてんだよ。

潤　ああ、クビレはついてない。お椀になってる。こうなってクビレッコついてんの？

婆2　うん。

潤　そいつはやっぱり臼だ。

婆2　そいつほら、すっかり祀ってもらったんだっちゃ、そこで炭焼きやってたからうちで。そしてなんにもタタリもなにもないと思っていたいっちゃ、おら達ほれ、なんだりかんだり体あんべ悪くてっしゃ。医者だのなんだのって歩ったけっとも、とっても医者ばりってあいつよりも、カミサマ拝んでもらったらなんじよだべってね、拝んで貰ったの。したっけね、そのカミサマ、うんときかねカミサマなのね。

潤　んで、荒神様だっちゃ。

婆2　なんだかね。

潤　そのカミサマどこにあんの？

婆2　別にどこさも置くとこねから、うちでほれあいつ明神様のとこさ持ってきて。

潤　納めてあんの？

婆2　うん納めてある。法印様に拝んでもらって、あっちで一旦拝んで、こっちさ上がって、あと人頼んで、上がって来たんだっちゃ。

潤　有難いことですねぇ。そうしてもらえばいいんです。ちゃんと歴史が残った。

婆2　んだけっともねぇ。えらくきかねカミサマ来てね、うんと人を殺すことばり出てるカミサマだって。拝んだればっしゃ、そう出たんだっちゃ。

潤　法印が？

婆2　うん、そこの縁でっしゃ。なんてかって、早死にばりすっちゃ、ウチで。拝んでもらったった。オッピサンもほれ……、四十九日すごしたばりでは、次の日から寝込んで先生に見て貰った。そしたら、年……から教えるとこさ教えろって言わったんだっちゃ。二人死んだ後でさ。ほして、そこへ持ってきて自分も弱くて稼がんねっちゃ。拝んで貰ったっけそう出たんだっちゃ。どこまでも、人を喰ってもうカミサマだっていうっちゃ。なんであんなにね、拝んで貰って祀ってて貰ってタタんだって言ったんだ。ほのカミサマは吉田さんになつかせてもらうなんていたったの。そのうちにほれなんぼでも良くなってかまねでいたったけども。

潤　いや、あのね、カミサマっていうのはね、人をいじめるようにはできてないです、人をいじめるようには出来ておりません、世界に。タタルとかなんとかというのは間違い。カミ

サマに誠意がないことから逆な作用が出てくるの。だから、カミサマの拝み方知らねかったら、カミサマの前で手を合わせることだけで、それでいいですよ。どうぞ、世の中幸福であるように、体丈夫であるように、みんなに迷惑かけねように。そういう自分の気持ちカミに訴えればですよ、お互いカミと人間とつながりあったんだからね、昔は。カミの言葉は人の言葉であってね、カミサマ、皆聞いてくれたんだから。升沢さんそう思ってんだから。毎日、おら、茶碗に水入れて拝んでますよ。南無阿弥陀仏も言わなけりゃ、毎日「おはようございます」って茶碗に水入れて拝んでますよ。一日の始まり、それ。カミサマの拝み方知りませんよ、私。でも、カミサマを敬うって気持ちは忘れちゃならない。毎日水を取り替えてね、私今ここにいるが、私の代わりにおそらく私の倅取り替えてるだろうと思うんです。うちの倅はね、……、そんなことちゃんちゃらおかしいと言ってるかもしれんがね。おれのいる間はおれのやってたこと続けろって言ってあるんだから。だから、それでいい、続けなかったらね、それはおれの不徳のいたりでこれは自分が悪いと思えばそれでいいことであると。なにも、絶対おまえこれ拝めとかこれやれとか言う言い方はしない。カミサマは敬わなければいけないという考え方は絶対必要ですよ。とにかく、私、升沢様でこうして命ささえてんだからね、知らない日本の歴史教えてくれたですよ。

（中断）

［10］「船形山故事②」（昭和四十五年九月二十一日」（A面）

登場人物　早坂吉蔵・A（男）。吉田潤之助（潤）

潤之介　そいで天照大神怒ってね。お月さん昼間照らんねことになって夜しかいっぺんしか出らんねことなって。そう言う具合になって、仲悪かったんだね。仲悪いために、うんと……。

吉蔵　追われて逃げて来たためにだね、だから、来る時はなにっしゃ、木だりどねだりっしゃ。

潤　どねだりってなにっしゃ？

吉　こういう太い木の幹のようなのね、みんな、ほの、はばけたもんだおね、祭りの……だから。なあに、ハシ（橋）ははずしね。

潤　ハシ？

吉　昔の橋だからっしゃ、今のようでないからね。ほれ、丸木橋だり厚み板だからね、はずしたもんでがすや。あとは土橋のようなものね。

潤　どういうわけではずしたの？

吉　……や、逃げて来んのさ。

潤　なるほど。あとから追っかけらんねよに？

吉　追っかけらんねよに。して、そのここではゴンボウ（ゴボウ）とゴマ播かんねことになってんだね。

潤　そうそうそう、それも聞かなくてなかったんだ。

吉　なぜてばっしゃ、ほれ、ゴンボウ畑さ、足ひっからんでっしゃ、転んだりまったりして来たんだおね。それが……播かんねことなってんだ。

潤　そういうことよくあるんだおんね。あの、ゴマだめだとかね、屋敷にね。

A（男）　ゴンボウもそうすかや？

吉　ゴンボウもやっぱり、たててもすればやっぱり、ほれ、やっぱり容易でねわけっしゃ。

潤　困ってしまったなあ、ここで、小栗山船形わかんねでしまうと、シキマ（色麻）村の高崎法印に行かなかないわけだね。そいでお祭りする時は、その観音様別に高崎法印持ってるわけだね。

吉　そうだと思うんでがす、あっちのね。

潤　なら、筋通るんですよ。今、話し聞いたら、別当の観音様をそっち小栗山の方さ持って行くという話聞いたがね。だったらね、話がどっかのこっちの升沢、船形升沢神社の方のどっかに隠し、お隠ししてあるんだから、こっち持って来るってことありえないもんね、年に一回しかねんだから。別々なら話わかんの。妹神っていうのツキヨガミだと思うんだこれ。

吉　小栗のほうは姉貴、こっちは妹だっつね。
潤　こっちの方が妹？船形の方妹？こっちが妹？
吉　ああ。こっちが妹。
潤　船形妹すかや？
吉　あっちなんでがすと、石の鳥居のつくーんとたってるんだおね。
潤　あー、どれくらいの高さのっしゃ？
吉　そうだねや、ちょうど……なんでがす。
潤　高さ？
吉　んだな。
潤　石の鳥居ね。
吉　ヒャッコイシ……。
潤　ヒャッコイシ高さ一五尺位あるおんね。
吉　んでがす。ちょうど、ここの盛り上がりよりなんぼか下がってんだ。
潤　この方向すか？盛り上がってんの。
吉　うん、この方向でがす。
潤　はあ。とにかく年寄りでないとわかんねんでねか。あの、本家ね、お宅の本家、お宅の本家はね、あの、船形さんのお祭りの時、人泊めてたんだね。
吉　そうでがす。
潤　国男さんの家でも泊めてだんだ。
吉　ここはね。
潤　ここでも泊めてたんでしょ。それから、向かいの家は？ベッカ（別家）だかなんだかつうの。
吉　向かいの家では、んだなぁ。ベッカなったのね、おらなんぼの時だべなあ、十四、五ん時だから。
潤　明治なってからだね。
吉　そうっしゃ。大正なってからなんだお。
潤　ああ大正ね、そうすか。
吉　ほんでもなんぼか泊めたんだね、ここでも。
潤　お陰さんでね、国男さんのとっから見せらった中にね、どっか家によって郡の泊まる人が決まっていたらしいね。
吉　うん、そうでがす。おら家さは栗原郡の人達ね。
潤　栗原。
吉　うん、そいから、国男さん家には白石（現仙台市泉区根白石）が多かったね。
潤　白石ね。
吉　白石、朴沢の方の。
潤　それからもう一軒は、御番所あたりでは泊めてなかったのね。
吉　ほこでは泊めなかったおね、そのあたりは。

潤　その名前みなのんでね。それから、あとはもう一つ調べてみたら、ここは明治の三十年前後あたりね三尺だの三尺五寸だなんて木あったんだね。木の名前なんの木っしゃ。

吉　主には栗、ナラだね。

潤　栗、ナラ。そんなに太かったの？あれ、あすこに荒川に下りて行く時のあれ木何の木っしゃ？

吉　あそこにある木は…イタヤ（板谷楓）だね。

潤　イタヤだね。だって、あのイタヤも本当は保存しなきゃないおんね。しめ縄巻かなきゃないすよ、あのくらいになったら。

吉　キリ（桐）だってね、こういうくらいのあったんですよ、この辺に。こういうだから、今でも根っこあるけっともね。……おら家の別家建てた辺りもね、こいう木倒れていたもんでがすや。しばらくあったんだが、そいつも。

潤　そいから、グンジョシカネなんて人知りませんか。軍隊の軍、そいからジは人べんにこういう字、二男のジ、

吉　わかんねな。

潤　わかんね。おそらくユタキだかセタキ仙人じゃないですか？

吉　あの、やっぱりなんだおな、ユタキ仙人だと言ってたもんだおね。国男さいのオヅンツァンは。

潤　ミヨキチ（三代吉）さんって人と……。

吉　ミヨジって人。

潤　ミヨジって人と、三代吉って人いんだおね。

吉　その人達が法印やってたもんだおね。

潤　それ終わってから吉田法印になったの？

吉　そうでないのっしゃ。

潤　別なの。

吉　吉田法印は前からのだったおね。

潤　別当の。

吉　別当も前からだったおね。

潤　だったら、ミヨジさん三代吉さんやってたとき、別当には。

吉　船形には関係ないのっしゃ。ウチガミ（内神）を守ってたんだね。

潤　あの八幡様って言ったね。

吉　はあ、はあ。あれを守ってたんだね。

潤　あの八幡様、なに八幡様っていうのっしゃ。もっともあそこの家のバアサマ聞いたらわかっけともね。

吉　うだね。

潤　八幡様、八幡様でいいんだね。

吉　んだね。

潤　なぜ、弓張り場とか、的場っていったらわかりすか？こっ

ちでわかってんだよ、んだからね、囲いのね今度囲いのね、名前知りたくなったの今度、私。

吉　はあ。

潤　まず、一つの解釈としては、弓張り場とか的場とかってのは、魔よけの為にね、正月の十五日とか十四日、あんときこれ鳴らしたんだね。あの吉岡の悪口しつた、高田のヤロウメラなしとばつ（？）かぶて、おけたってぼえねでね、悪口言ったの。あれ魔よけなんですよ。あとあのここでやってすか？木の根っこたたいて「ナルカナラネカ」あたりで、こなこと「ナリモウス、ナリモウス」なんていった。

吉　昔、やったね。

潤　それなんだよ。昔、夏なって萌えて来る虫をね、ムシタタキの例なんですよこれ、

吉　今ではやんねけどね、昔やったんでがす。

潤　ええ、俺達木の周りにいて「ナリモウス、ナリモウス」なんてやってたんだね。松葉、ここんとこの八幡様にね、サイデン（祭田）ないかと思って、お祭りの田。ようするに誰のためでもない、お祭りを経営するための田、なかったかと。あの、囲いの名前。あのお墓んとこは、なんて名前になってんでがす？

吉　お墓んとこに、やっぱり、田あったんだね。なんぼなー、一反分までないくらいっしゃ。

潤　それから、私ねらってんのね、御番所の林右衛門さんとこにね、裏の田の畦の境に三角石あんですよ。その三角石の北側に梵字で、梵字、あのインドの言葉でなんか彫らってるあとあんですよ。恐らく、あすくんとこが神様用の田んぼじゃなかったかっと。

吉　はあ。

潤　というような感じするんですよ。囲いの名前知りたいんですよ、あすくんとこの。あと、林右衛門さんとこ行って聞きゃわかっからね。ここんとこは、升沢何番地になってますか？お宅んとこは。

吉　おらとこは一九番ね。

潤　一九番地。

吉　うん。

潤　明治時代に二回変わってっからね、番地が。

吉　していまえはね、おらとこ七三番とかなってんだ。

潤　ところが、船形升沢さまね、あそこんとこも番地あんだから。

吉　んでがして。

潤　そこんとこは、オンツアンよりもおれ詳しくなったね。古いのが皆なくなって行くからね、ここで留めておかないと後

の人が困るから。それだけなんですよ、私は。

（中断）

吉　すっかり落ちたんだおんなや。

潤　八月十五日だから、丁度、九月の十五日ですよ、大体ね、お彼岸ですよ。一二二年前だ。三十三回忌と五十回忌で人って終わりだかんね。法事ってのは、

吉　もとはね。

潤　もとって、オンツアン、何回忌までやってっす？三十三回忌でだいたい終わりでねの？

吉　んでがす。

潤　五十回忌なんて、めったにしねもんね。うち高清水の兄んとこで五十回忌なんて和尚さんに言われてね、この春。丁度私この山下りて行った時、五十回忌だっていうからよったんだが、五十回忌なんてほとんどやんないですよ。

吉　まず、そうだね。

潤　坊主、悪く言えば、坊主丸儲けするつもりで、お宅は五十回忌ですよって言って来るんだから。祀んね、法事しねわけにいかねから。本当は三十三回忌で終わり。

吉　んでがす。

潤　それね、一二二年前のに書いてあったんだからね、これ。これ最高ですよ、升沢でね。

吉　んだべね。

潤　こんなね、とにかく子供ですよ。明治ですからね。童ですよ。これ、幽霊の幽って字書いてあるんですよ。幽っていうのはね、ものには陰陽あるんですよ、陰と陽ね。太陽と月という対称のようにね。顕っていう現れるっていうのと幽っていう隠れるのね。幽って要するに隠れたってことなんですよ。幽霊の幽じゃないですよ。隠れた、世の中から隠れてしまったって意味で。今じゃ霊って言葉使いません。魂ね、霊って。その頃で幽いとあるのは使えるのかと、和尚さんに聞いたんですよ。この夏手紙書いてやって、使い得るというんで。もう、じゃ曹洞宗じゃ、無事通過する位牌の名前だなって思いましてね、とにかくその通りに判断して来たんです。これだけでも私、ほっとしましたよ。仏さんに、全然見えないんだから。それから昔のオカミサンね、ぬらしてた時、なんだかじめらってたの。

吉　うん。んだけね、先生。

潤　ね、して、私が国立博物館の古文書係やってる課長さんの方にね、見てもらったんです。また。そしたらね、オヅンツアンあたり庭に出てってね、こうして見てましたよ。あの弓張りの瞬間に光るんだってね。さずが商売がらは商売がらで違うなあと思って、確かにこれで間違いなしというわけです

から。とにかくね、国立博物館の古文書専攻やってる課長さんが太鼓判押したんですからね。だからこっち字の方は科学でね、赤外線写真で字浮かばせて出てきたのがここにあると、科学的に分析したのと、それから古文書課長がね、この字はそうであると、これで絶対間違いないですよ。だから先年から、ここの方のご好意に報いることが出来ると思いましてね。それから、栗原郡でね、お宅で屋根裏に栗原郡の殿様の額あるって、字が真っ黒けのけで字が見えねってなってる額あるはずじゃねすか？栗原郡のあれだったら。栗原の殿様ね、あの、大崎っていうんですよ。その前柴っていう殿様なんですよ。それあの、義経時代の殿様なんだがね。ようするにこの八幡様っていうの気になった八幡様っだっていう解釈なんだね。

吉　やっぱりそうだおや、あの当時でやっぱり村会議員の人達どしどし来たもんだなや、三〇人来たもんだな。

潤　はあ、栗原の方から。

吉　その人達、先なって来てね、団体で。そして大きな旗になんだおね、二本。四丈の旗とそれから四丈五尺かな。

潤　はあ。それからハタサカ（旗坂？）のハタはどういう字使うのっしゃ。……旗の旗、八幡様の旗でねの？

吉　んでね。

潤　……さついてくとき、いちいちその名前……するんだ。

（以下、回転早く聴き取り不能）

［11］「船形山故事③・番所①」　（採録時期不詳）

登場人物　男・老婆（婆）・潤之介

＊録音状態不良。中断もしくは、聴き取り不能ヶ所が多数有り。話者は潤之介氏と他二、三名の年配の男性と中年の男性であるが、潤之介氏以外の発言者の同定はできず。

（途中から始まる。）

潤之介　浅井清三郎さんのとこにおれ行きたくないの。ここのオンツァンのそばで。浅井清三郎なんてわしゃ、知らね。

男　学者だから。

潤　学者だろうが何だろうがそら、升沢での資料がこうだってはっきりつかみたいの。向こうの人達調べたから向こうにあるって言って言われて、これから七、八時間あんだからなんでも一冊でも二冊でもいいから見せてけんか？

＊この間、赤ん坊の泣き声と「おっぱいか、おっぱいか……」という女性の声。以後、テープ終了まで赤ん坊の声。

男　それでは、ここにはね、昔は人住んでるかどうであったかというね、

潤　陸前の浜の方調べ上げたの、ここんとこだけ穴あいてんの。

男　浅井さんの調査とは違うんだね。おれ、こう思ってんだばさ、大船形山とね小船山とさ、昔さ北条時頼の時その当時ね、あんまり入るて封鎖してしまったのさ、この山ねその時の帝、ジントクテンノウ（順徳天皇）がね、このお山さ来てね山眺めたんだと、順徳天皇の陵日本に三ヵ所あるんだそうだね山形にもあるっていうね。

潤　んだから、御所山ってね。

男　ほだつ、そこにあるどってね、おらいとこのヅンツァマね、大船形山の頂上さねその故事ねければ官幣大社になっつってね、ヅンツァマ建て方にいったんだね、おれもいっぺんててかったんだね。石倉掘んだおんね、あいつにや。確かに埋かってるっていうんだ。おら、早く行った当時には、線香つけて所々さおくんだおんや。そして探し方てんだ。そのねお姿が船形さ持ってきたと思うんだ、利口な人がね。お姿が確かに大船形山に祀ってあった、それをね、こっちゃ持っきて小船形となった。たしかにそう思うんだ。探した死んだ骨をね、探すと官幣大社になるっていってね、物好きだおらいのヅンツァン、たねしさ。

潤　死んだまでの話はないけっともね、佐渡からお連れ申し上げたというのね、山形ね。山形からお連れ申し上げてだから御所山って。

男　だすぺ、やっぱり、んだからここの山に屍納まったということになってるんだ。ほだから誰か気のある人がああいう物

体を作って安置したと、おれ思うのっしゃ。それを簡単に整備してしましまった、なくなってしまった、関係する人がさ。お山の人がうすくなったために、加美郡だか黒川だかわかんねけっとも、気のある人が持ってきて、やっぱり納めたと思うんだな。船形山、ここさね。薬師様と一緒になってるんだからね。そいつ、ほら、言い伝えに臼ほら、隠れたとか何とか伝説ね、船形さんのさ。んだけっともそいつあまり信じないんだ。確かにあいつ向こうから持ってきたに違いないと思うんだ、なあ先生。

潤　鶴子の方から上がって来たという話はある。

男　そうそうそう、そういう話はある。あってんだ。

潤　はぁ。

男　おかしいな、と考えてんだ。シッショ別当などさ。うそばりってな。臼の下さ隠してなんてさ、伝説って皆さ聞かせてたんだ。それが、果たしてそうじゃなくて、今の権現様の物体は向こうにあんでなかったかと思って。その物体なるもの実地研究した人に聞く言うよりも、キンブツ（金仏）でもねえらしいな。

男　なんだかね、昨日見た人達に聞くとね、なんだか欠けたりもったりしたっていうのね、お賽銭にぶつかって、欠けるような物でないと思ってたんだがね。

男　だから必ず金仏でないと言ってる人あんです、気のある人。そいつほれ、金のなんのて調べてみたんだがね。そして、果して今お山さ納めておくんでなくて、やっぱり県の国宝にしておくってこと聞いたことあんだな。法印さまさ。昨日、お山から出してきたんだっけ、なんだっけ。

男　いかねおん。わかんね。

潤　注連張ってっしゃ、そこんとこ別当おりて行ってね。枡持って山下りてった。木のどこかにあるって、しまってあるって。

男　昔は山さ納めたんだね。今は納めねでそういうことになって、県の保存会の方で管理してるって聞きました。

潤　そして、あっちにあった神様なにっしゃ。

男　んで、行く必要ないんでないかって思うんだけど、昔から伝統的な行事だからって果してそいつそういう風にせざるを得ないんでないかと、考えんのっしゃ。

男　前は、南川にあるといったもんだっちゃね。いったもんだおんね、こっちさ。今ねんだとさ、こっちさ行く。

潤　やっぱ、船形側の方の。

男　やっぱ、機能しねがすてか、書かってんだ。

男　県の保存会の方で保管するとだめだな。

潤　そうすっと、二つあんの二つ。

男　人間の人間の参詣人の迷信をね、惑わさないために昔の伝統的なやり方を執行するために、必ず本物の方はあっちゃ納まってるんだ。

潤　本物返してもらわないと困る。だって、来年梵天祭り、NHK東京からのNHKね、仙台からのNHKでなく東京からのNHKに出したいと思うんだ、おれ。できっかどうかわかんねけっともね。そんな、本体あっちにおいてて別の仏さん祀り上げてるんでは本来お山繁昌も五穀豊穣もとんでもない。

男　んだ、んだ。

男　その権現様を持ってるシショ別当というもんは、落ちぶれてね、生活に困ることになったのさ。ところだがね、……ショウジっていう俺のオジいんでがす、そこさ持って行って買ってけろっていうことになったんだ、権現様さ。聞くんだった、昔。

男　んだね。

男　いかんべ、ということになったって言うんだな。おれジジイの話はね。買ったから買ってどこさ置くべと自分でそう思ったというんだな。今度買う約束はしたがさ、神様だとまさだとまさかうつってらんねということになったて。気いつけね方いいどって氏子総代に相談したわけだね。売るの買うのって止めてもらわなけないということになって、止めたということになって、山さ納めたということになったってね。当時大正十一、二年の頃のこと、その頃の金で二〇〇円。おらとこのオジ物好きなオジだったから。集めるの大好きなオジだったから。

潤　二〇〇円だったら六畳四畳半二つの一軒やだな。

男　なんじょなことなってっか、わかんねことするね。

潤　とにかくあそこのお堂二つあるおんね上にね。そこにジュウニシンショウ（十二神将）そして、こっち側の枡に納めてある仏様の方がね、十一面観音の一つ、ね、そこ、十一面観音と十二神将、十二神将というのは大日如来を守った神様だから、大日如来っていうのは一番偉いんだから、それを守ったんだから。その隣に十一面観音さまね、左の方奥の方ね枡に納めた所の場所、あそこのところで観音様拝ませてもらって、別当様抱いてね、衣の上にこう抱いてね私写真撮って貰ったの。事実このとおりだということ写してきたの。十一面観音の一つだということだけ間違いないですよ。高さ一四センチの二センチの台あってね、一六尺の観音様の上に上げんの丁度良い配合だおんね。ここの東北大の亀田先生というのね、百済観音の系統だというのも間違いなし。百済観音だっていうとね、一二〇〇年前だかんね。

婆　ありやりやりや……。

男　観音様というのどこから来られたもんですかや、支那からかや。

潤　観音様というの、そもそもインドから来たのっしゃ。インド、パミール、ダッタン、シナを越えて朝鮮を渡ってそして日本に入って来たのっしゃ。

男　やっぱり、てえした……。確かに権現様の創造はシナの昔の仕事だということ表現しましたね。

潤　私ら、学校で教えられた仏像の形は、確かに百済系の観音様です。

男　はぁ。

潤　その同じかっこうのがね、奈良の正倉院の御物として、百済観音様って歴史の教科書に載ってんだからその写真。その観音様よりここの観音様良い観音様だ。

男　観音様あんのっしゃ、おらいにね。ここの裏山にね、お墓の隣に祀ってたのさ。

潤　何か仏さんあんのすか？

男　あんのっしゃ。

潤　行きましょう。

婆　お宮つぶれたのさ。杉切ってから、つぶれてしまったの。

男　つぶれてからこっちに移したの。移したけっとも妹持ってって持ってこねの。学校の東のババア持ってんだ。

婆　まだ、持ってんの。

男　持ってる。石の観音様あっかや。

婆　あんでないかや。

男　そいつは、おれとこのヅンツァマがつぶれてしまってはね、破損してしまってから別に石を切ってね、神像を納める計画でいたったけどね、こっちの方ではね部落の人達薄らいでしまったからね、そのまま放置してしまったのさ。

潤　昔じゃなく、新しく？

男　昔のものは昔のものであんの。その昔のもの壊れないど。おらいの妹がサイセキして持って来てあんのっしゃ、おらいの妹が。

潤　学校の東にあるわけ。

男　うーん。あるわけ。こいつもやっぱりいいんだとや。

婆　家焼けた時、焼けた神様なんつ。

男　焼けたってたが、焼けねの。

婆　そうして、おらいのオッピサンがいた時、観音様あいつしてけっからって、自分が持っていって拝んでセンサクした神様はここにあんの。納まってるの。オッピサンいたうちに聞いたの。

潤　そこのお堂ね、あと拝ませてもらうからね。

婆　なにもかにもみな壊れては。

男　あとこっちに下げっとこさ、槍あったんだなや。そいつ売ったんでないかと思ったけど、売んねってな。親父ほれセイシンなね、そういう金物は置かんねとこなんだ。

婆　あっちのナゲシさ上げてたんだ、そいつねんだ。どこさか、そういう人たち随分来っから。

男　三人くらい来たんだおんね。山さ持って行って隠していたんだか。

婆　死んだ人だからわかんねんだ。

男　地蔵観音様と観音様あんだおんね。その仏像もまず、普段見なけないんだ。そいつおぼこなすだけどって、観音様ね……。でおらいでは、おぼこなすのなんつことないとね、いいした。

潤　利右衛門オンツァンとこにこれから行んから。

男　なにす、おらいすか。神様すか。

潤　見て確かめねければわかんね、なんでかんで。

男　公民館でブンヤさんって人来て皆調べて行ったんだか、調べねで行ったんだか。

潤　ああ、ブンヤさん。

男　とにかく皆見てったんだか、見てないんだか。調べてね行ったんだ……っつこと。

潤　とにかくでたらめ調べられっと、かえって粉々になって皆散って行くかんね。絶対に渡さねでけさいん。

（中断）

潤　どのくらい大っきいのっしゃ。

男　んだねー、一間あっぺかな。

潤　それはずっと後になってから作ったんだね。それは、昔イッキノカミなど作ることない。

男　まず、大っきいことは大っきい。ここら近くのお山ではね、それから、なんだね、

（聴き取り不能）

男　んだからあいつ倒れたんだな。

男　ふっとばされたんだな。

男　前にあんなもんでなかったおんね。ほだ、なんだおんや、皆崩れてね。

潤　場所どこっしゃ。崩れた場所。あの囲いになってとこすか。

男　うん、ずっと高いんだもんね、入り口ね。そういうような伝承あったためにね、気のある人は来てみたすけね、先生。

潤　あそこん中にお堂入ってるね、そこんとこ崩したのすかや、もう。

男　崩した。お堂の脇。お堂にはおかま……。

潤　おれ、あったよ。何時頃崩したの。

男　さぁ、明治時代ね。明治時代からあったのっしゃ。

潤　明治時代崩したの？おれ言ってるお堂と違うな。雪か風のために囲ってあるだけ。

男　ほんでねえなぁ、やっぱり大正時代だ。

男　お宮なんつうもんは何べん建替えてっかわかんねど。だれ、一回二回でないの。風で破損、参詣来た人はぶっつぁくしね。

潤　小林、コダマの仲間のね、佐々木……だなんてね。山の頂上で寝たことあんだから。そん時、中ねみんなおんだしてしまって、自分寝たことあんだから。とんでもない不調法なことしたんだからね、やろうどもね。

男　おらも入ったことあんです。なんでかっつうとね、行く時はとっても元気良くて登ってっしゃ。五人ばり行ったんでがすや。一升の酒持って行ってしゃ、飲み行くままに荒れて来てしゃ、ヒョウなんだおんね。とってもいらんなくてお堂の中に。

潤　そん時のお堂は今のお堂より大っきかったすぺ。

男　ずっと大っきいのっしゃ。みな入ったんだから。そして、二時間位いて、すっかり晴れてっしゃ。そん時の眺めのいいことなんだもねかったね。

潤　日本海も見えしたぺ、太平洋も見えしたべ。

男　うん、すっかり見えした。

（テープ中断）

（テープB面。初め聴き取り困難。）

男　高田のね、ウンナンジンジャ（運難神社）って古いんだ。

潤　高田ってここっしゃ。

男　吉岡村だね。

潤　ああ、吉岡の高田川の。

男　んでがす。そばにね運難神社ってあんだね。高田の人達はウナギかんねってどね。

潤　あれ、虚空像様でないのすか。

男　虚空像様だね。

潤　あそこの人達言う、アブラガップ喰ったおんおら。

男　役場ではそう言ってるんだね、古い神様だって。

（雑音）

男　やっぱり本木ゾンツァマ持って行ったべし。

男　出入りうんといたの。おらいのヒロマにいたんだから。この西に、やっかいになってて、おらいの三代吉ゾンツァマも舎弟子だったんだおん、ユハチの。そしてほれ、新田さ別家に出してやったんだ。それから、下原二軒あったっちゃ。あいつも早坂三代吉の。

婆　どっから来た人だったつとや、本木ゾンツァマのオヤジサマ。

男　山形だっつたな。

潤　山形だ。

男　山形とは出入りしたことあんだとや。

男　んだからやっぱ、ここは山形と出入りしたんだおんね。

男　ほだから、今あるって言う

男　おらいのマンキチもや、山形から来たんだとや。沢渡からヨメゴに。

男　バアサンの先祖も山形から。

婆　おらの先祖様、どっから来た人だかわかんねけっとも。

潤　なんておっしゃる方すか？

男　本家。本家になってるわけ。

潤　本家、本家だったら京都ですから、間違いなしに。

男　こっち本家、おら別家だから。

婆　なにもかにも年寄りだって早く死んでしまったしね。元のことなどあんまりね、聞いたことねえから。ただ、本木ヅンツァマずっとの親ってのが、なんだか山形さ道路築きたくとかなんとかっていたとき、その、どっから貰ったのっしゃ。金の盃頂いたどって、そいつ、おらいさ……置いたんだって。

男　そいつがすか？今、売ったのすか？

婆　売ったようなもんだな、まず。戦争の時、そいなの持っていらんねから、後でかってみながらほら、供出かけらってな や、オトサンなどそん時みな亡くなって、おら一人なったもの。そん時、ひっかけらってからやは、そんなの持ってな、皆んなに、おおいかぶ仕事してわかんね。なにでもカラガネの火鉢でも宝物あってても持ってわかんね。知られては大変なことになるってから、そんではなと思ったから。それ、オナゴのことだからね、皆すっかり出してしまったからね。

潤　だた、それね。盃の良い物にね、何のための記念と書いておいてさえもらえば後に残んの。本物は供出したと書いてもらえばそれでいいのに、なして書いてもらわねのすか。

婆　何にもわかんねおんね。わけわかんねからね。集める人達がただ集めればいいと思って集めて行ったりすっからわ、そのままなにわ。なんぼ貰ったせいかなわ。そしてはね、りっぱなあいつどっから貰ったのすかや、あいつ桐の紋がついてんだわや。

潤　桐の紋は天皇。

婆　そいつほら、おらいさスズン（？）置いたってど、おらいのオヅンツァンとこさ、そのなに、納めてしまったんだとさ。その道路開く時貰った盃、桐の箱さ入れて大事にしてしまってたのさ、オヅンツァンが大事にして。みながら、そいつまでもと思ったけど。でも、しまってはわかんねって言うん

だな、そんで。

男　明治になってからだべね、貰ったの。

婆　明治だべね。

男　今の道路なした時だべから。

男　その時イエハルなる者が測量してひいたんでねえの。昔ほれ、歩った道路を。

男　キリハルってトモがへったから。

男　そうそうそう。切り開いたことになってしまったことだな。

男　そしてほら、今度、臼を引っ張るようにね。砥石だり荷。それからなんだおんね。

男　引き山から。

婆　どういうふうにして人歩くように道路形つけたんだすぺ。山形さね。

男　うだから、番所ここさ出ったわけさ。

男　出った。番所はそのためにあるわけなのさ。

婆　何にもそういう古いことはなんぼか話の端こ。おらいのオッピサンの語りだ。オッピサンだって脇から嫁ゴに来た人だからね、だから、古い人達になんぼか端こ聞いたぐれえのことだな。そんなこと語っていたことわずか聞いてたくれえのことだから、おれ、何にも古いことわかんね。

男　記憶いかったおんね。

婆　記憶の良い人でね。聞いたってから、いつまでも語ってる人だったおんね。

男　んだ。んだ。

男　イリダのキュウスケ?から来たんだ。

男　んだおん。皆大工の人達だった。

男　そのイリダの人達も南部だかなんだかから。すぐ吉田村の人でねんだおんね。

男　新たには相違ない。皆、吉田にいっから山形から来たって。

男　御法印もだしね。

婆　どっから来たんでがす、吉蔵さん。……

男　天明年間のたいした飢饉だったって、ガスだった。まだ、そういうことねえんでねえかね。このことは、おれ、覚えあるうち。

男　なんぼガス（餓死）になったって、……よりほか米でねかったんだってや。死ぬ他ねえわけだ。そういうことだ。

婆　おらいのオッピサンのオヤンツアマも士族なのいた。

男　なんだおんや、米とってた方いいや、百姓や。ジなんねんだ。

潤　ちょっと待ってけさいん。オッピサンって本家だね。本家のオッピサン士族流れ。

婆　そう言った。そうだけっとも、どこで出てて何した人だか、

そいつさっぱりわかんねの。

潤　だからね、もういっぺん早坂家の紋調べて行けばね、どこの士族の系統に入って行くかわかりすから。それ見せていただきゃいいんだから。

婆　オッピサンてなんだかほら、家なじょになった人だかわかんねんだね。他の家で育てらった人がここさお嫁に来たんだから。

男　そいつわかんねんだ。どっからどこまで。

婆　イリダの人に育てられて、いずれもオヤンツァマが破産したもんだかなんだかして、ほして、人に育ててもらったようなこと聞いてたんだがね。そしては、イリダっていうとこの人が、スギドっていうとこさ、あの、里悪くてはみながら死に絶えたり、家なくなったりした後さ来て、そうしてほら辛抱してだんだんに良くなって、そうしてほら、そこの家で育てらったどって、そして、嫁に貰われたんだから。でも、先のことはさっぱりわかんねね。

男　イリダには殿さまいたんだから、イリダゴンノカミって。そいつ伊達政宗たいてカミサマみな潰してしまったんだから、そして政宗の世紀になったんだから。

潤　明治サンタツ領主

男　ゴロウヅンツァマあいつもどこからか、

婆　あの人ここで生まれた人でないんでがすぺ。

男　ねえのねえの。

婆　ナラナス。

男　ナラナスってね、生まれた所はいかんべけっともね、そいつ転々とナワモリしたって婿に来たって語る人も、どっちなんだか、南郷から来たの本当だと。

男　南郷から来たの本当だと。

男　ゴロヅンツァン。

男　ほだと。

男　ナラナスでは、生まったのさ。おらの三代ヅンツァンもこの人でないよ。ハニウから、バッバだのしょっぱい、集めてもらって育ててもらってそこらさ来たの。

男　すいぶん昔はそいことあったの。人ひきみたいなことあったんでないかや。

男　んだから。

婆　昔はやっぱりなー。

男　おれのエンキもそうだおんな。南郷から来たんだけっとも住んでねんだな。生まれは、みな違うんだ。人足ばり来たもんだね、ここさは。そして、平家の落ち武者でここさ落ち着いたのは早坂ヒデンノカミっていった。定義のは貞義公っていうんだ。ここさ寄ったのは早坂ヒデンノカミっていった。

それがために、早坂って言った。ほだから、ここの升沢部落の人は、いずれにしても百年に達したことは、脇と出入りしねから村内で何でもまかなって生きていたって。そういうこった。だからほれ、何もクビキネエカラ、伊達政宗公が……、イグネトセイダンだんとして、自由に売ったり買ったりして切れるようになってんの。そいつは、……りっぱな役割なんだ……トセイダンとして貰って何した。ここさなったっていうか。升沢の偉い人いねからね、……持っていかったんだとひどいもんだ。

潤　それと同時にね、自分のものにすると税金かかるっていんで、俺の山でない俺の山でないといった。

男　そいつもあんだ。

男　そしてほら、ずっと繋いできたのはおれのゾンツァン。みながらやめて？？したっちゃ。

男　オッピ、浅井ゾンツァマ。

男　うーん。バガバガってやってたもんだ。

男　やってたもんだ。

男　あの人の写真、持って行かれたんでないかや、県庁さ、図書館さ、クワッペラ。持って行かったような記憶あるようだな。

男　おらいのマンキチやったんだな。

潤　要するに今でいう入会権を持ってたんだね。

男　そうだ、入会権。

男　やっぱそいつ、浅井清三郎、県庁だか調べに来て、……、村役場にも書類があるっていう。

男　流すにしたって、こっから切って、昔の人達むちゃなことやったんだよ。そして仕事取ったんだ。

男　サンボウロクスン（三方六寸）あんだおんね。

潤　三方六寸す？

男　なにしゃ、三尺に切ってね、みな割ってっしゃ。六寸六寸に割ってったのしゃ。そんで三方六寸っていったのっしゃ。木の良いとこしゃ、ドンドンと割れないとこばかり切って持って行ったのっしゃ。節のあっとこ全然持ってかないね。

男　そいつを川流していったんだかあらね。

男　このごろまでなんぼか木の質あったんだね。真っ黒になって川から出はったもんです。

男　昔は火たいて煮詰めたんだからね、塩。塩田さ。

潤　塩煮詰めたのすか？

男　うん、釜で焚くのその薪を焚くためにね、こっから出た薪。

潤　向こうでね。あのね、テンシン七代の本にね、ウエジニノカミという塩の神様祀られているんですよ、シオノチュウジョウノカミ、シオノオウナノカミって。それが、ここの山に

あるし、それから、塩釜にあるしね。そういう系統のやつ日本に一一〇ある。さっき行ったワニゾクってそれなんですよ。もっとも塩ないと生きらんねすからね。

（中断）

男　まっくれえからね、隠れるにうんといいとこだったんだ。

潤　だから何と言ったの？

男　カクレボッチョというんだね。子供の時ね。

（中断）

潤　私ここで教わったんだよ。この目の黒いとこホトケっていうの。

男・婆　はぁ。

男　瞳さ。瞳のこと。

（中断）

男　この山を仁王様のやつキンサマくれんだとってね、キンサマ抑えどこ行ったっていう言い伝えによってよりけねえとそういうこと言ってんだ。そういうこと語ってんだ、山形の方だ。宮城県でねんだ。

潤　そのカミ水上のほうはね、蔵王にみなかみもってんですよ。くれないって。現に今クレナイ川って出てんですよ。その周囲をまわりゃ三〇〇里と書いてあんだかんね、大した大きな場所なんだから、この高天原というところは。

（中断）

男　コメジルシはね、里寸にすれば六町一里さ。コメジルシで語っとこもあっしね。

男　あんだおん。

潤　一駄っていうのも教わったしね。一駄の単価も教わったしね。

（中断）

婆　その人のお父さんがここさ家を建てて建てばなしだったと語っていたんだ。そういう話だけ聞いていたんだから。その先は、どっからきた人かは聞いたことねんだおんね。何代目は、ほれ、建てばなしにしたヅンツァン、浅井ヅンツァンとタイチのヅンツァン、吉右衛門ヅンツァン、カンド役（？）の役の宗右衛門と六代目になってるんだ、その舎弟の人どこから来たんだか聞かねでしまった。

（中断）

男　ここから半里ばかり東のね、ダンノハラ（檀ノ原）ちゅうとこさあったってね。そしてほれ、ガシ（餓死）の時につどいたためにね、ホウザワ（朴沢）という所によったんだとさ。だから、檀ノ原というとこから来たんだとさ。喜左衛門さんとこが早かったんだか、おらいがここさ早かったんだかわかんねの。どっちどだか。

婆　喜左衛門というのこっちの家のゾンツァンでなかったのすか？

男　んでないの。喜左衛門っていうんだ。舎弟の……、そして、升沢に別家出したんだからおらえより、本家より先に出したんでないかって。

婆　はぁ、西の家は。そいつわかんねだから。

男　うん、西の家は。そしてね、俵でもなんでもさ、西の家後ろになってる西の家の土地をおらいの本家で持ってたんだ。ほだからね、確かにそこんとこ升沢に来たのは舎弟の方が早かったっと思うんだ。

潤　はぁ、升沢さ来たの。

男　うん。ここさ来たのは。ほだから西の家をこういく建てる、檀ノ原けたんだと。

男　そう聞いてたね、昔。だから古いんでがすと。

男　もぬけじる、だから、こっちの家はそうでないんだおんね。

男　そうでがす。おらいの家はそれから、

婆　こっちの家でけてやった家すかや？

男　うん、陰の家はそうだと。檀ノ原からけてやったんだと。建てる為にいらなくなったから。火事で焼けたんだと。

婆　焼けたというからその先から建ってた家だと思って。

男　ほでね。

男　それを貰って建てたのだ。番所してた時の家は焼けてしまったわけさ。あいつはあんのっしゃ。今、後ろの。あいつはやっぱり昔からの番所なんだおんね。

男　ああ、あの家でやったんだね。

男　あの家でやったんだね。裏板上がって床前あってっしゃ。

婆　西のコエ。

男　うん。コエ。

婆　ふーん。ヒロマね。

男　今は作業場にしてっけっともっしゃ。だから、狼藉だって歩く人達はこんなしのきになってんだおんね。裏狼藉ね。横になってけっともね。あれ、狼藉だったんだね。

男　おら、ちゃっこい頃ヤロッコん時まで、表の方つくろって。

男　おらいはその後から出た。だから、昔と違ってずっといんだわや。カンナ使ってんだ。

潤　しかし、好ましい家だな。ツルツルの柱使ってんだ。大黒柱てのね。こんな。

男　上だがって、下みえんでがすと、下。だから太てえ。昔の家は皆太いんだどこだって。カトサンにもあんだ。番所ってね。だからそうとうあんだ。番所、小野田にもあるし……番所。こういうんだ大っきくて。この材料切るのオオバヤシから来たの。

潤　オオバヤシってどこすか。

男　東、別家。

男　なに、ここら全部、……林だったべね。

潤　カンナ削りって言ったね。どういう削り方っしゃ。

男　オノ削りだね。ネンジョナでやったんだね、昔は。

潤　チョウナでやったんだね。チョウナってああいう削り方するの？

男　いや。これは、西の家っしゃ。

男　ここはなんぼか使ってっけとも、大体綺麗に作ったんだね。

男　三重にめど通してんだ、穴あかって。

潤　昔は何に使ってたんですか？

男　物置場としてっしゃ。

潤　お宅は馬だったいか。

男　馬っしゃ、飼ったの。昔は馬でがす。ここは。

潤　昔は馬やね。南部は曲家なんてあっけともね。

男　ここは冬できねの。だから全部こういうふう家の中してた。

男　おら家は曲家でがすと。

男　曲家使ってんだな。

男　使ってんだ。あれは、なんだいや、白石（現在の仙台市泉区根白石）の方から来てんだといってたな。

（雑音）

男　金借りて、借金してとかなんとか。

潤　なにす？

男　タニとね、タニっていうんだね、あの合わせ口の方、外なって、そこ水流れて来てね、腐れてきて、金借金して、切りしなけない。

男　三年に一回葺かねけねえのっしゃ。雨降るとそこさよっからね、腐れやすいのさ。

（雑音）

男　今の人の考えと全く異なってるからね。だから、全くおそろしもんで。だけどね、喰うものなどね、相撲取りなど一日に五回も六回もやった、そいでも一日五升飯食った、そいつはやぱり、米食わねばわかんねべし。ああいう人達一日に五升飯食ったって、そいことね。確かにそうだね。豪傑者米食ねで豪傑者いらんねね。

潤　昔、食べたのね、八貫の鎧を背負って戦に出たというのね、あれ、玄米食ってたからよ。白米食ってたんでは体弱くなったんだ。

（牛の声）

男　おれ、回想してね、たぶんそうだと思ってね。米かねとなんねもんでね。まず、聞いてみて驚いた。一人で五升位食うんだ。酒だって五升位。昔は、一升飯食わねば疲れるとした。

手間取りの人達、喰わね者はだめだとした。今はそんなことねえもん、喰わね方喜んでるもんだ。だから、米あまんだ。

（複数の声）

潤　今オジンツァンなんぼっしゃ？

男　今、七十三。

潤　少なくともあと一〇年生きてもらわなくて。私ね、ここの死んだ人の年月皆書いておいたんだから。一番多いの八十一だおんね。三人いた。

男　タカダ（？）さんでないか。

潤　それ、ここ始まってからすか？始まる前だすぺ？

（聴き取り不能）

男　吉蔵さんとこのゾンツァンだ。

潤　ちょっと待ってけさいん。おれの写し間違ってしまった。

男　浅井のゾンツァンだ。なんだっけ三十八なんぼだ。

男　んだ。

潤　昭和四十三年二月七日ね。手代またいさんが享年八十一で終わってんだ。その、八十四っていうの入ってねえな。五つで死んだり、十五で死んだ人、気の毒だねえ。

男　……おら本家から出た人でね、種沢でがす。オジサンだおんね。

潤　ロクシャク（六尺）、シラセ（知らせ）、マチヅカイ（町使い）だ。ここの講の中で長生きする人の記録しなけないんでね。一番始め穴掘りから始まってね、講が二〇人と人数数えたらちゃんとあったね。

潤　早坂喜代治さんすか？

婆　五年なるでしょ。ことしで。八十一で死んだの。

潤　八十一で亡くなったの、早坂はなさんって方だね。

婆　いやす、おらいのね。

男　こった家のババだおんね。

［12］「船形山の故事④」　（録音時期不詳）

登場人物　老爺（爺）・男・女・吉田潤之介（潤）

老爺　一八代か、反正天皇時代に祀ってたんだということは、聞いてたんだ。だからそうとう古いことは古いんだな、これは。

男　それからね、反正天皇の事はわかりましたけどね、神社の伝説的なことが載ってる、あるはずなんだけっとも、そういう伝説的なこと、どっちの方から来た神様か、どういう系統の神様か、そいつ、オンツァン知ってる限り……。

爺　わかんねんだおな。

男　伝説でもかまわねから。

爺　なに、話しあれ、熊谷に、追われてほれ、ひっこんだんだ、デマだおな、そういう話しは。

男　熊谷イのなにですか？

爺　熊谷の権現様でもねし、なんだか神様あんだ。

男　その男の神様に追われて、どこどこ通ったんだかはっきり……。

爺　腹すいてたから、みな歩ったんだおな。

男　あのこの、ヤシダ（八志田）でゴボウ掘ったんで、逃げらんねくなって、ゴボウは作らんねって話しありますしね、そいから、沢渡でなに、ヤブなに……、なんだか作らんねって話し随分ありますね。今はそうでもないですがね。ゴマ、ゴボウだのゴマだの、そういうの伝説的にはオヤジから聞いてることは聞いてるんです。オンツァンの方が詳しいと思って。

爺　升沢の方に行って何年目だかわかんねけども、升沢でフネ作りやったつもんな、ワラビ根掘る、フネだと。そうしたれば、来たんだっつな。ぼってった男、こういう者こねか言ったら来ね、その前には、どこにもやるとこねから、ここなかへるどっていって、してふたんと伏せては、昔ワラビ根する、そしてそのフネきざんでいたったんだど。ほしてそこさ、ぼってきたやつが、こいもん来なかったかな、来ねとなって言ってそして、過ぎて行ったれば、フネを開けてみたれば観音さまになって神様になっていたっていう話は聞いていたんだ。

潤　誰を追っかけたのっしゃ。

男　あのね、今の神様っての、誰を追っかけたって、女の人追っかけられたのっしゃ。それであの、行く途中ね、八志田とか沢渡で苦労して、八志田風早ヤすぎる時ですね、あまり暑いので、あそこにカシワ（柏）の木ですか、カシワの木、あの大っきい葉っぱの、ありますね。カシワの木折ってさし

て行ったって、そのさして行った所からカシワの木がずーっと生えてるんです。そういうふうに、もっていったかもわからないですけども……。そして、そこで升沢通り越してですね、あの、暑くなって、升沢ちょっと手前だっか、通り越して、枝を下ろした所で切れてるんです。その伝説的なの、カシワの木が生えてたとこですね。それから、升沢の今の神社のちょっと手前にですね、池があるんです。

潤　青沼？

男　青沼でないんです。小さな池がね。昔、オンツァン、化粧なおした、女の人が化粧なおした池はなんつったんだ？

爺　あいつは……。

男　神社の下の、今は小さくなってるんだ。

爺　青沼。

男　青沼でなく、小さなほら……、化粧。オンツァン忘れたすかわ。

爺　忘れたな、

男　沼あるんだおね、小さいのね。化粧なおして、髪だのなおして行ったところがあるらしいんですね。そして、オンツァン、今話した通り、なおして、あの追っかけられてるからってあんまり乱れてるんで、なおして行ったら、今の神社のあたりで、恐らくその話にもとづいては、船形越えて逃げるわけでなかったかと思うんですがね。伝説ですがね、その時うちの先祖っていうんですかね、オヤジから聞いたところ、オンツァンから聞いた所で言えばですね、その先祖が、フネ、なにのフネだかわかんねんですよ。

潤　オンツァンが、ワラビのフネ。

爺　ワラビのフネ、ワラビ掘るときフネなくてわかんねかったんだ。

男　そのフネの中に、追っかけられてるから隠してくれといわれてフネの中に隠したらしいんですね。そして、隠してあと、その神様が追ってきていないって言われて、その、帰ったか何処行ったかわかんねんですね。

爺　帰ったんだべな。

男　帰って行ったとすれば、こっちの落ち着いてから帰って行ったのかも分かりませんけど。

潤　そのね、追った人の名前なんて人っしゃ。

男　追ってった人の神様ですか？前の。

潤　神様が追ってったの？

男　ええ、伝説では神様になってんです。

潤　やあ、フネん中開けて見たら神様になってんでしょ？

男　その逃げて来た女の人が神様になってたの。

潤　うん、フネん中被さってた人が神様になって。

男　ええ。

潤　あとから追っかけた人誰っしゃ？

男　追っかけた人、オンツァン、あれ、なんつったっけ？

爺　熊谷の……。

男　熊谷の、男の神様ですね。

潤　熊野でないの？

男　わかんないですね、そいつ。

爺　昔はほれ、熊谷っつやつは、拝みに行かんないっと言ったんだおね。今でも、そんな。

男　富谷の熊谷でしょ？宮床通って逃げてきたんだおね。

爺　いや、みな歩ったんだ。

男　うん、あちこち逃げて歩ったらしいですね。ほいで、あの、船形さんの由来がフネから出てるらしいですね。

潤　フネからね。

男　ええ。フネの彫ってて隠したところで。

潤　私聞いたの、追っかけたのがヨシミツと聞いたんだ。

爺　ヨシミツ、はあ。

男　熊谷とは聞いてましたが、わかんないですね、そいつ。

潤　そいで、とにかく、追っかけられたもんで、フネひっくりかえして隠れたんだね、そして、いねってことわかって、帰ったわけだ。あとで、

男　あとで、作ってた人が、開けたらご神体になってたってことで、この、あれしたわけだね。

爺　んだね。

男　あとは、その後はわかんないですね、ただ、オヤジが、オンツァン聞いたあれ、何天皇の時かね、うんと、神社の一番古いのは、えーっと、反正すか、反正天皇って自分わかんないんですがね。

潤　わかります、反正、随分古い話。

男　反正天皇って、随分古い話ですかね。

爺　一八代。

男　年号一八代って、今、オンツァン言いましたけどね。

潤　ずーっと続いてるわけなんだね。

男　えーっと、家の家系が、恐らくずっとあったんでしょうね、寺の焼けない前は、オンツァンね。

爺　なにす？

男　家系図かなにか、あったんでしょうね……、ずっと古いやつが。

爺　焼かねでしまったんだけっとな、なに書いてあるのかわかんね、はっぱり。

男　資料の、『黒川郡誌』作るとき、資料ほとんど持って行かれたって話ですけどね、『黒川郡誌』作った時ですね。

潤　大正八年。

男　ええ、だから誰か持ってると思いますけどね。恐らく誰か持って行ったのと、焼いたのと。オンツァンが焼かないというんなら、オンツァン、まだ七つ八つの頃でしょ？焼けたのは。

爺　十だおな。

男　十，十でまだ覚えてるものね。

爺　おれのババ四つの時だおな。

男　すっと、おれのオヤンツァマが十二、三すか？オンツァンと一つ違いでしょ。

爺　んだな。明治二十三年生まれだね。その時寺のドウシャってのはわかんないそうですけど。おれもわかんないけど、どういうわけで持って来たかは。テラノドウってとこあんですよ。

潤　寺の野原の野。

男　ええ。

潤　ドウはお堂の堂ね。

男　どっちのドウだ？野原の野でしょ。

爺　野。

男　ドウは？寺のドウシャのドウ。

爺　テラノドウ（寺野堂）。

男　寺はお寺の堂、シャは社（やしろ）の社。こっから、家の先祖代々の墓がですね、今は、あの、今ねドングリってとこご存じですか？ドングリの陰にあるんですよ。今、誰も行きませんけどね。そこに、梵字だの書かったの、石だのなんだのうんとあるね。随分古いお墓だね。シンハカ（新墓）は、オヤジの、要するに自分達のオヅンツァンすか、オヅンツァンって人がこっちに移したんだね。して、オヤジの代までは、オッピサン埋まってるんだおや。そっちにって、一年に一回くらいはお墓掃除に行ったもんですね。

潤　何年ぐらいなったなんて話聞いてないですか？

男　何年ぐらいって、随分古いね。明治時代の墓よりもっと古い墓あったね。

爺　明治十年。

男　一〇年前すか？

潤　随分古いって、墓の年号、どれくらいすか？

男　さあ……、よくわかんないね。寛永、寛文なんてのはざらですね。自分覚えあります、まだ十五，六年前まで行ったので。

潤　寛永だとね、三二二年くれ。

男　こいつは新しいでしょ、寛文だから。

潤　二〇〇年くらいだね。

男　こいつ二〇〇年たってんですか？

潤　うん。あの、年号表もってるから。あと、見ますから。だいたいそうなってんですか？

男　あとオンツァンわかるとこないすか？

爺　わかんね、年取るとわかんね。

潤　神様に申し上げる言葉などないですか？

男　えーっと、オヤジ。オンツァン、覚えてねえ？

爺　なにや？

男　神様に、ようするに祝詞をあげるとかなんとかって、オンツァン拝むときに申し上げる言葉わかんねすか？

爺　わかんねなぁ。

男　自分のオヤジがね、家開けて満鉄にいたんですよ。兵隊で行って。その間オンツァンがやってたんですよ。ご存じですか？そいつ。

潤　うん、

男　だから、オンツァンしってるはずなんだけっとも。

爺　……親方が吉蔵なってたんだ、そいつが二七、八年の戦争に大工になって、ほんときなっていたんだお。そして、一人前になって、そうして朝鮮さ神殿建てんのさ行ったもんだ。そうして五、六年いたんでねかな。ほうして家さ戻って来て、あそこさきて、遊んでたんだと。ほうしてほの、大工の手の良い方だったから、あすくで教えらって大工してて、オカタ持ったのさ。子ども二人あって、そこで死んだのさ。おれ、昭和四年に行った時、まだ生きてらったんだから。昭和七、八年新しくなったのさ。そこで、アキラチャンのオヤジが朝鮮に、満州にいたんだから。家督相続してほれ、引き受けたのさ、だけどもおれ、ちょっこら喰いらんねと、わかんねっつわけでいたのさ、朝鮮。その間だれも見る人あんめ。仕方なくて、ここさ、氏子総代の人と相談して、お前がやってけろと。……もらってんだから、大正十五年からやってんだから。アキラチャンの、引き上げて来る、引き上げて二年ばりしたね。三年目だか……さった。

男　ただ、昔から覚えてんのはですね、オヤジのオヤジですけどね、セイノシンていうんですよ。そのまえは代々全部セイシロウで通ってんですね。セイシロウ清い四の四郎ですね。清四郎別当っていったんですね。ドングリの後ろにあるやつも、清四郎の墓となってるね。

潤　それが、寛永寛文のあたりね。

男　清四郎となって、名字もついてるから、明治の前のやつですね、恐らく家の先祖は名字、要するに、別当だかなんだかわかんねけど。

潤　その名字は何て言うのっしゃ。

男　堀籠ですね。あと、オンツァンね、山で聞いたんだけっとも、高橋っていう、吉田で一番古い家はどこですか？台が森ですか、それともタキネすか？

爺　……別家なってんだ。

男　すと、台が森が一番古いのね、高橋は。

潤　あの、オジンツァン祝詞の言葉でどこか覚えてるとこござりんか？

男　そいつが、もとのことばね。うちのオヤジのオヤジの代から祝詞上げなくなったって、ね。いや、上げなくなったっていうのは、他に、今まで上げてたんだけっとも、あんまりお賽銭も上がるし、一人でやりきれなくなって任せたらしいんですね、お札関係とかそういうのね。それで祝詞も上げなくなったから、吉田さんのオヤジが生きてればわかるはずなんだね。その当時のこと、要するに吉田さん。

潤　要するに……だ。

男　ええ、ええ、そして自分は別当職だけやったわけだ。そういう話。

潤　……法印なんてのはね、法師に近いもんだね。なんぼしたってこの座は崩して……、別当さんは、別当さんだからね。

男　ただね、あれですね、ご神体オヤジから受け継いだんだけっとも、あいつで家になるものがね、家は別に勤めていますがね、一時騒いだんですよ。要するに、あの、お祭りするたんびに赤字になるんですよ。神様すたれて来て、全部お頼みしたもんだから。全部こちらに引き取ってこちらにやるという話が出たんですよ。……オヤジが死んでしまってから、自分達はこういうものみんなのために毎年やるだけだし、こいつて喰おうと思ってないから、解決的なことになりますがね。ほんで、お祭りだけはやって、そして吉田さんの方でほいつやってくれと、そういうふうになってしまったんですね。で、自分あの、塩竈神社に神官養成所ありますね、あそこに神官の試験受けにいったんですよ。そしたら、要するに口頭試問最後の試験終わってから、同じ村に二人いらないというわけですよ、神官が……。セイコウさん先に入ってたわけですよ。

潤　セイコウさんて？

男　吉田さん。セイコウっていうんですよ、あの人。清い、高い、って、高校の高ですか（石上山精神社宮司の吉田清孝氏のこと）。そいで、……くっちゃったんですよ。その当時入っていれば、今から二二、三年前だね、引き上げてきてから古川の学校終わってからですね。高校終わってからだから二八年ですね。

潤　昭和二十八年。

男　ええ。んで、だめだっていうのでほんでいかんべと、自分定職もったわけです。

（中断）

男　ほんなわけだから、お社も壊れてきたんだし、なおすやつもなおすことからなにから全部復旧するのにね、自分の力じゃどうにもならないから、そういう方面をもってってやろうと思ったんです。それができなくなってしまって、オヤジが一ヶ月ばりかかって集めてあったやつで、今のお社建てたんです。今で二十五年になってるんですね。

潤　今の社って、あの、小さい、マスのあった方の社ね。

男　ええ。

潤　それ作ったの、何年前っしゃ？

男　二五年ですね。

潤　昭和二十五年？

男　ええ。だから、あの、写真にかかってましたけど写真に撮っていかれましたね。

潤　ああそうか、じゃ、ここに入ってるから大丈夫だ。

男　去年の五月の八日でしたね。五月の八日、旧暦だったね、五月の八日。旧暦の五月の八日にこちらで刻んで、あの時の松下カイツッァンに、今生きてますけど、お堂建てた人ですよ。その前に建てたの、明治何年すか？大正すか？明治時代に建てたのが残ってたよ、中に一枚。あの、のってたんですよ、その前がこいつらしいですよ、鞘堂にあるの。こいつ少し消えましたね。下の方少し消えましたね。もってったもんだかわかんねんですね。

女　宮司もってるんでしょ？

潤　おら学校で見た。

男　ここにありますよ。ありますけれど。

潤　ただ、『黒川郡誌』に載ってる内容は……。

男　内容のね、資料集めた、おそらく家の方から集めて行ったと思うんですがね、オヤジの実家からね。資料がどこにどう持って行ったんだか、オンツァンの話ではね、役場だっていう話ですがね。

潤　それ、ハタヤタツノスケ。

女　ウメハラリョウキチさんなんかはこういうのに全然タッチしてないんですか？

男　ここに見えましたよ。昔ものの意地ですね。金がかかるのに、ようするに山も全部、土地まで全部、要するに国有林になったんでは困るから、木を残してくれと営林署に頼んでですね、そういうものだら残しましょうということで残ってる。あそこは、神社の物になってる、現在は。

潤　そのね、あの。

男　神社のものが国有林になったの、わからねすか？

爺　ああ、……。

男　神社のものだったんだけっともね、国有林にやったのは明治時代すか？

爺　ほんだべなあ。

男　こっちの役場の資料では、国有林になったの明治の初期なんですよ。

爺　なんだお……。

男　番地だのなんだのは、吉田さんの方がよくわかってますよ。加美郡の色麻との境界争いにも船形神社がちょっとかみあってるんですよ。あのですね、その当時国有林になったやつ。話ですけどね、こいつ聞いた話ですけどね、国有林になったときのいきさつがわかんねために、未だかつてあそこの境界決まってないんですよ。神社のものであればこっちだし、神社のものでねければあっちだって構わね。ねえ、オンツァンね。昔の神社のものであれば吉田の分だと、神社のものでなければ色麻のものになってんだと。そいつが、文献によるものしかわかんねと。

潤　文献でなくてね、ただ木一本はえたとかね、特別な木あったとかね。

男　文献に残ってなければ自分達わかんね、

潤　それ言い伝えだ。

男　ええ。して、大船形神社と小船形・前船形、ようするに今の船形神社ですね、大船形神社が栄えたということは言えますけど、その国有林の関係で、ああでもないこうでもないと今だに境決まってないんですね。今、騒いでんですよ。船形さんが加美郡色麻村のもんだか、片一方はこっち吉田の分だ、升沢の分だと。前に升沢村といいましたからね。まだ、確立しないんでないすか？

（中断）

潤　伊達藩のなにす？

男　伊達藩の三〇石取りの士分だってことはわかってんです。

潤　聞いてみればわかるね。

男　県の図書館に行けばわかると思います。そいつだけは、オヤジと二人で調べて、ぴたっと止まってしまったの。全部調べることできなかったんだ、我々の力で。ただ、亀田博士が言われたことですね。

潤　百済。

男　そいつとあと、文化財指定とかなんとか言われたことで、調べ始まったんです。それ以上漢文の知識もなにも、オヤジより自分下ですから、オヤジは昔の人間でないですからね、

オヤジは年とってるし、自分はオートバイでそうとうはねまわったんですがね、どうにもならなくなって止めてしまったんです。

（中断）

男　ようするに二つあるうちの一つが今残ってるやつで、一つは五升の重さあったって、米五升の重さ。は？

爺　……木の、木で。あとでこしゃえたものなんだおや。

男　二つあって、大きい方が後でこしゃえたやつ？わかんねの？

爺　お姿だべ？大っきいのってどこにあるもんだ？あんめっちゃや。

男　一つしかない？

爺　うん。

潤　五升の重さって。

男　だからゴショサンって言ったんですか？

潤　いや。

男　五升の重さのご神体があったっつってんだ。

爺　ああ、ほだほだほだ。

女　升沢でオンツァンより覚えてる人いないよね。

爺　なんだべか、……あっちゃよりこっちゃよりしてみなぶっちゃけてしまったっけっと。

男　あったんです、木彫りの大黒様ってあったんです、あそこ。あの下のオナガドコロって。

爺　二つあったおんね。

男　二つあったやつで、そっちやりこっちやりして……ったんです。昔の作ですけどね。木彫りのやつですけどね。あいつ五升くらいの重さありましたね、自分一度いじったことあるおん。ないでしょね。

（中断）

潤　タテってどこ？

男　あのですね、吉田さんの、吉田清孝さんの裏の山なんですよ。

潤　あそこ神社があるんでないの。

男　ええ、あそこタテっていうんですよ。

潤　ああ、神社がタテになってるの。

男　フモトダテっていうんですね、伊達政宗公が……。

（テープ終了）

［13］「道路開発」　（採録年月日不詳）

登場人物　男・女・吉田潤之介

潤之介　本木栄八の孫ですか？

男　いや、孫さんでねく、本木栄八って人だよ。

潤　本木栄八そのものの方、銀杯もらったの？

男　はい、もらったんです。

潤　こりゃ、調べなきゃなんねぇ、こら、銀杯もらった。要するに、道路開発のために、功労者であって。

男　そうでがす。

潤　ははぁ、こら新しいね、こらぁ。銀杯なんつぅたら、新しい話だね。

男　ああ、そーうだね。新しいこた新しいんだね。今、もんちゃん家、ねぇんだべな。出したんだべな。

女　どこでもらったの、もんちゃん家で。

男　ほんでねぐよ。本木栄八っつ人が、この大船形の、道路を開いて……。

女　でも、本木親父の、あいつ親父御さんだべ？

男　親父、親父。

女　じゃ、焼けたべっちゃや。

男　焼けねぇよ。

女　どこさ置いたの。

男　ほいつ、吉右衛門親父家さ……。だから、もんちゃん家にあったもんだ。

女　ああ、でも、ねぇべなぁ。

男　この位のあったよ、この位な。

女　ねぇべなぁ。ねぇな、もんちゃん家。

男　ねければはなぁ、あのなんだ、戦争当時、出しちまったんだ。「金銀出せ」なんっつわったから。

女　出さねぇ、……ほんなもの。

潤　いやぁ、それはね、ともかく銀杯もらったって話までは、これ、記録に載ってるはずだからね。

男　そうでがすと。

潤　もうそれは、刊行物だから、有る無しは別として、そうゆう事実があったって事だけは、こらぁ、私らが調べれば分かることなんで、本木栄八っつぁんは、今、下っ原すか？

男　種沢です。種沢新田。

潤　あ、種沢、種沢ね。また、あっち行がねけね。

女　おら、ちゃっこい時、聞いではあれしたけっど、ねぇかもしんね、もんちゃん家。もんちゃん家にあっこど聞いだことねぇもの。

（中断）

［14］「本家分家関係・嫁いびり」　（採録時期不詳）

登場人物　早坂喜一郎（喜）・老婆（婆）・吉田潤之介（潤）

喜一郎　明治四十年四十五年、大正になってからでないか、増えたのつのは。

潤之介　ああ、大正になってからね。

喜　おら、明治の四十三年の東北の方の大洪水の時、カザッパリの方の学校行ってらったから。そん時いねんだから、やっぱ大正になってからねや、増えたの。明治なってからふえたのっつの、福島サン家のキッツ……、それで四軒なったわけすか、西の家とおらいと。

潤　西の家っつのようするに。

喜　林右衛門さ。それから、おらいの本家、トシム、国男。

潤　本家ってのは、国男さんね。

喜　それからこっちは宗右衛門。

潤　宗右衛門さんは東の家すか？

喜　こっちはやっぱし、中間だからね、ナカ（中）。

潤　中。宗右衛門さんが。

喜　それから、ほれ、吉蔵さん。こっちからベッカ（別家）なったんだおんね。

潤　吉蔵さん、ヒガシノウチ（東の家）っつの。

喜　そういうことだね。

潤　こっちはなに？

喜　おらいすか？おらいは、やっぱし、ナカだね、先生。

潤　中、ヒガイナカ。

喜　そうだね。

潤　それで、国男さんとこから別家なったんだすぺ？

喜　うん。

潤　別家なったの、いつ頃っしゃ？

喜　さあ、おれ十六になった時だから、明治四十四、五年頃だね、別家んなったの。

潤　別家になる前までは、四軒しかなかったってこと。

喜　そうそう、そうそう、そういわけね。

潤　吉蔵さんの家は、その前は。

喜　ほだから、あの人の場合は明治何年頃だべな、別家なったの。

潤　やっぱ、明治になってから。

喜　なってからっしゃ。

潤　んで、先生間違って聞いてったな。

喜　だれ、明治なってからっしゃ、ここの別家は。

潤　そこの前をたどって行けばね、国男さんの家と林右衛門さんの家とそれから宗右衛門さんの家と三軒だおね。それが別

当。

喜 うん、別当宿、こっちの家は。

潤 本家は別当宿。

喜 うん。神様のね、別当宿。

潤 それから国男さんの家は？

喜 おらとこの家は別当宿ではなかったおんねや。ただ、人ひろやせてるだけでね。

潤 そうか、お祭りだのなんとかてね。

喜 ここの部落の肝煎りだのなんだって、昔のショウヤクだね。そういうことやってたんだ、喜三郎さんは、偉かったのっしゃ。

潤 偉いの偉いの、学問あったしね。

喜 んだけっとも仙人さんでは負けたね。こんな変わった者でたっての。

潤 勉強すりゃ、そのくらいのこと当たり前ですよ。

喜 四三で死んだのすかや、仙人さんって人ね。オカタ（御方）持たないっけ。肉食断って。魚は喰ったたべか、かねんでねか、あんまりね。

潤 イワナでも喰ったんでねのすか？だって、ゲッケンなど出来ねおん、動物のもの食わねねと。

喜 そしてね、ゲッケンした、トコドロっしゃ。トコドロだってね、昔、しねっつことねも。コクドウ削って、そして、袋さ納めてね、そん時、キレエシタたちきずをね、三箇所だか四箇所あったんだ。そのコクドウねえな、誰持って行ったんだか。ねえな。袋さ入れて安置してたんだが。これまた、うそでねし、絶対にたまげた人だったんだなあ。

潤 して西側家っての、本家から分かれた行ったわけでないでしょ。

喜 分かれたんでねくって、昔からあったんでがいんか。

潤 本家は本家として、西は西と。

喜 ほだね。西の家っつのは。

潤 別に別家とかなんとかっつう関係じゃなくって。

喜 うん。関係ねのっしゃ。

潤 あそこ家は、とにかく御番所だったんだからね。

喜 そうそうそう。そして、もとおらとこの家っつのダンノハラにあったんだおんね。

潤 ダンノハラ（檀ノ原）って。国男さんの家すか？

喜 そうそうそう。

潤 もとっていつ頃の話すか？

喜 さあ、ほだねや、何年あたりか、寛永だべかなぁ。

潤 寛永すか。

喜 うん寛永、カンエイだかカエ……。なにしろ、その頃あ

っちに居たんだね。先生。

潤　だったら、こっちの林右衛門さんとこでもだいたい寛永時代だかんね。

喜　ほでがすぺど。ほすて、西の家っつものいっぺん火事になって焼けたんだおね。そして、焼けた家が、おらとこの本家の檀ノ原にあった家持ってきて、けたんだとっしゃ。そこを作って入ってんだから、現在。おらとこの家は新しいわけっしゃ。こっちの家も焼けてね、また建てたんだから。んだから後ろの家の杉の太さったら六尺七尺ほどのめぐり。杉あったんでがす。これは、必ず古いってこと、こっちでわかってるんで。おらとこは檀ノ原だっつこと、ちゃんとわかってんだから。ガス（餓死）んなって、人がいなくなったとこでもってね、升沢に人いねから檀ノ原ラにこっちゃことなって、そして、升沢さ来たのっしゃ。そん時、升沢に来た時、そのおらとこの本家の人が、今ミネオさんいっとこね、あすくさ西の家さ別家出してたんだおね、檀ノ原から。その人、出してた、家のシンショウ（身上）、今度ほれ、おらとこの本家帰ってきたからは、潰れてしまったから別家。その財産を引き受けたのっしゃ、喜代三郎が。そしてほれ、あっちから来たから何もないんだから、ここのジョウヨウチをみな分けて自分のものにしたんでがすぺ。このさいにね。

潤　吉田法印のとこにね、升沢の人別帳見たら、たった親子四人しかいねね時あったんだからね。

喜　はあ、なるほど。

潤　トウチャンとカアチャンとセガレね、八つだか十の娘と、ヤロッコね。それっきりしかいない戸籍帳あったんだ。それくらい病気だか飢饉だかしゃねけっとも、がたがたと亡くなった時代あったんだ。その後だな、とにかく檀ノ原から来てその升沢の最小限度の三戸の家、三戸の家なんぼかをここでかためたんだね。

喜　そうなんでがす。もと何軒か、一七軒とか二〇軒とかあったんだべから、ここの升沢に。そいつ、潰れてしまっては、三軒の二軒しか残んねんだ。

潤　一七軒とか二〇軒とかってのソウボウ（僧坊）なのすか？

喜　そうだねえ、

潤　坊宿なのすか？

喜　その当時、坊宿あったもんだかねかったもん……、そのテンミョウ(天明)年間っつの、大飢饉の時だかなんだかわかんねけっとも、潰れたのっしゃ。その後ずっと潰れて。

潤　潰れたの正嘉二年（一二五八）。

喜　正嘉二年。テンミョウの何年？

潤　今からさかのぼる事のだいたい七〇〇年前、おれちゃんと

書き物みたんだから。

喜　ほう、そいことあったんだな、生き残ったの三軒しかなくなってしまったんだ。

潤　潰れた理由は北条時頼ね。

喜　はあ、そいなんだな。

潤　僧坊がそれだけあったてのね。あったっての、それだけ山登りをした人いたってこと。沢山いたってことは、お山繁昌してたってこと。お山繁昌してたってゆうんで、繁昌した理由はね、あんまりこう法印連中がね、寺銭ハッセンワタリセンってね、案内、道案内するんでね、通りすぎたんでね、あそこんとこは生意気だから潰してしまえっていうんでね、小牧小太郎っていうんかな、鎌倉から来てね、そいで、秋田ぐちから雨蓋のツルマキッパラ（鶴巻原）を通って、雨蓋からね、荒神を攻めてね、船形封山、一二クラあったそうだホウゾウが。その一二クラを全部焼き払ったんだと。お寺が船形さんどっかにあったっていう話だが、聞いたことござらんか？

喜　お寺？

潤　久五郎さんに聞いたらね、荒神山のとこに潰された跡があるって。

喜　ああ、あっつだおね、こっつでねおんね、山形。

潤　地図見たらね、寺と書いてあるんだ、何の寺だかわかんね。小野田本郷から小栗山から鶴子から、観音寺から定義から升沢から行く途中の山々出てんだがね、あっちこっちに小屋あったんだな。小屋あったつことは炭焼きの小屋かね、それとも修験の坊主たちの小屋かわかんねけっとも。すいぶんあったんでねすか、あっちこっちに。そんなもんでね、いろんなこと勉強したが、基本となったの国男さんの家のいろんな書き物っしゃ。って言っても明治以降の書き物だがね。

喜　んでがす、んでがす。およそ仙人さんっつ人が出てから集めたものだから。

潤　あの仙人さんって大した人でね、雪、冬なっとね、雪見にござってけさいんなんて手紙書いてんだからね。そういう風流な人だったんだから。

喜　かなり変人っつんだかな。

潤　変人じゃないですよ。そのくらい風雅な人ね。『論語』、『孟子』の本まだあんだからあそこの家に。そいな本勉強しながらね、やってたんだね、雪見の宴にお招き候ね、やったっておらおしょしくねえと。

喜　コウキョウ開くでもね、『孟子』、『大学』、『論語』あったんだお、そろってんだ。あったの、あったの。

潤　だからなんかな、升沢のダンプだのね、吉蔵さんのとっか

らね、イタヤかなこんな幅広い板ね、一枚貰ってった。銭、金払うのおしょしいからね、貰ってった。その代わり名前書いてけさいんてね、その板の裏に名前書いて持ってって、机にして勉強してっけっともっしゃ。とにかく升沢にあるもの身の回りに置いて、升沢神社のお札もみな上げて置いて、そして、勉強してんだけっとも。国男さんのとっからもなにか払い下げてもらいてなと思って。船形権現のあの額など、私勉強の間譲ってもらわんねんだべか？お金など出さんねけっともね、一升瓶くらいは出せっけっともね。

喜　まだまだあるんでがいんか、亡くなったんでねんだおん。そいもの、初めてそいもの使ってもらえばこそ価値あるもの。

潤　そう思っていただければ、例えばさ、おれ勉強終わるまでもいいから。申し上げたって良いと思うんだ。なにもそれをもって利益にするわけじゃないんだから。そいでもね、オンツァン、これはおれだけの考えでね、国男さんどう考えてるかわかんねんだよ。

喜　ほんとにね、おれ、本気だからっしゃ。なにかにね、ここさ残したいと思って考えてんだけどね。ただし、升沢にあるおらいにある神様、それを祀ってもらう心がけのある人なら誰でも良いからやってもらいたいと、こう思ってる。こういうわけ、祖先の為にね。

潤　ただね、そういう船形権現のね、額縁預かったとしてだよ、国男さんになんら報いることできねんだよ、おら。報いること出来るのはね、早坂国男っていう名前が残る。俺の書いたものには、この文献は早坂国男家、この文献は早坂喜一郎氏、この文献は小川久五郎氏、ちゃんとそこには正直に書くからね。そうでなけりゃ、いかにも俺やった、口ぬぐったらおしょしがすと。

喜　したからね、あの船形権現の。

潤　しかもね。

喜　どんなわけで、おらいのあの大っきな家さ納まったかってことだねや。

潤　仙人様っしゃ。あの人が神様だから。

喜　あの人が、集めたんだいっちゃ。

潤　そうですよ。だから、十二神将の一つ。あそこに一番立派なのあんだからね。国男さんのとこに。あれだって、升沢神社にもう一つあるに納まれば、あそこにあるうちで一番整ってる仏さんだからね。だから、一番整ってるの仙人様取り上げたのっしゃ。

喜　小栗山あったつんでないか、十二神将、

潤　小栗山、十二ブッサン、仏さん。十二社権現って言って。

喜　ほすか。小栗山の十二神って聞いったことは聞いったんだ。

おら、行ってみてえ行ってみてえと思ったんだ。

潤　十二神将は船形。十二ブッサンは小栗山。

喜　はあ、そういうわけすかや。

潤　だからね、なかなかおもしぇなと思って。一王子、二王子、三王子なんて名前つけて山に登って行くんだおんね。そして十二王子まで付けて。なんだか、馬頭観世音なんてこいなの王子様一つすかやっていったら、これはだめっしゃなんて。逆に隠したりすんだからね、でたらめ名前つけといて……、おもしぇんだあっちの連中は。

喜　ここにも権現様の登り口に、馬頭観音あったのっしゃ。

潤　どの辺っしゃ。

喜　登って行くくにっぷちに、どっち側だっけなぁ。上がり口、

潤　ゴガンドウ（？）過ぎてから？

喜　そこさへってから、

潤　登りかけたとこすか？

喜　どこだか、オラもあいたなあ。街道ね、街道の道路わきにちゃんと建ってあったのっしゃ。あったんだ。

潤　いずれにしてもね、船形さんのもの身の回りに置いてね、ランプのはてまでね、ぶら下げてんだから。そして、張り合いにしようとしてんだから。

喜　そして今度、川魚の孵化場でんだっつってんだから、あすくさ。ほだから今度いよもって船形さんは調べてくっと思ってんだ。なおかつ、今年あたりオナゴの人参詣したとなればね、あすくさは。

婆　オナゴ登ったのすかや。

潤　登りした。

喜　どこだって今。

潤　登っていいんですよ、なにも女登ってだめだってことはね、女登って。

（テープ中断）

潤　あのね、お日待ちってこと何月す？

喜　一月の八日。

潤　する人達はどういう人っしゃ。

喜　家内全部、家内全部でっしゃ。

潤　どういう精進するのっしゃ？

喜　精進って、いっさい火を新しくぶっかえね、別屋さ行って。別屋さ炉あっから。昔のね、炉あったんだから。そこさ行って、煮炊きして喰って神様さ上げるわけだね、精進して。

潤　普通の炉辺じゃ使わないの？

喜　使わねの、魚だりなんだり。

潤　別の炉辺ってどこにあんのっしゃ？

喜　ウチカタとかナカマとか、昔みな炉あんだっちゃ、寒いか

らね。今こそストーブだの使ってっけともっしゃ、昔は焚き火いっそだから。別炉で過ごしたの。

潤 煮炊きやってそこで食べて、一日すか？

喜 うん、一日。精進潔斎するわけっしゃ。

潤 どういうもの食べたのっしゃ？

喜 ナマグサモノかねのっしゃ。

潤 んで、ニラなど絶対、

喜 かんねー。ニラなんつものねぇ、先生。

潤 そいから、ニンニクは？

喜 ニンニクはかねのっしゃ。

潤 そういう、臭い物は喰わねの？葱など食ったの？

喜 うん、葱も喰わねの。すかねおん。

潤 食ったものだけ。

喜 喰ったものはね、デエコン（大根）とかね、それから、干し物だね、山菜の。漬物、大根菜っ葉、豆腐、豆腐は自分でこしゃえたんだから。

潤 で、油揚げはいいんだね？

喜 うん、油揚げは、買って使ったもんだか、豆腐だけは作って。

潤 そういうふうなもの食べて一日終わりね。ご飯は。

喜 小豆ご飯だね、炊いて。精進したわけっしゃ。お正月だから餅はあったったね。お餅もお正月餅つきへきして八日は。

潤 お日待ちってのは、一月八日だけに決まった日なんだね。

喜 ほでねえの、八日、八日はみな精進っしゃ。

潤 八日、八日はみな精進？。

喜 うーん。昔はね、今だってそうでがす。八日八日は魚かねことにしておくんだね。精進しねけね。

潤 そういう話が大事なんですよ。

喜 どこの家だって八日、八日は精進してんだけっとも、今はかまわねおんね。ほとんど。おらいのババアがいうんだべな、そいこと、きちんと今でもやかましく自分でやってんだ。今の人達かまわねのっしゃ。

潤 仏さんの、掃いたゴミまで捨てらんねんだ、このバアチャンには。おら、おこらった、この間。

喜 いじめられんのさ、ガガアはね、こういっくやかましいから。やあ、几帳面なんだから。言ったこと語ったこと曲げないんだから絶対。あくまでも。おらん時までは、そうだけっともね、今はかまわね今の人達、全然かまわねね。

（中断）

喜 出羽三山。

潤 まず出発すっとき。

喜 一週間前から精進して。

潤　行って。

喜　行く時ね、ほれ、三日くらいかかったんだから。そして四日目にお山登りだとこういうふうになってるべ。そん時ほれ、部落の人達よせて精進とかね、酒だとか餅ついてね、水垢離とってもらったのっしゃ、ごっつおして。そして、ほれ、カケオロシしてからは水垢離そいなことしねけっとも、駈ける日にはしてもらったの。

潤　場所はどこでやったのっしゃ。

喜　ほだね、大体荒川でがいいんかや。小川君の前だね。

潤　精進潔斎で食べる場所はどこだったのっしゃ。

喜　川で食って来んのっしゃ。精進してもらうだけね、一日一食だから。

潤　精進潔斎する人達は若い人達すか？残ってる人すか？

喜　全部でがいいんかや。

潤　全部。

喜　オコモリ、参詣すっ時。

潤　女の人達、

喜　いいさ、女の人達だって、行ってやって、たぶん、穢れてる人達行かねけっともね。

潤　水かぶりしたの？女も？男は褌だすぺ？女は？腰巻？

喜　んだね。水かぶって。

潤　それは明治？

喜　大正、おらなってからも行ったんだおな。おら七年に行ってそれから帰って来たんだから。大正時代はずっとそいなんだったでないかや。大正なってもそういうしきたりなどあったんでがいいんかや。今はかまわねけっともね。

潤　そういう、昔、といってもつい最近まであったのね。みんな忘れて行ったんでは困ると思ってね、何とか記録に留めておけばね。

喜　あと、参詣に行く時はね、白装束。脚半から籠手から、それから頭陀袋っつうもの賽銭入れる袋、神さんさ上げるね、一切白装束してったもんだね。して、被るものはゴザとカサ、そいなんして行ったのっしゃ。オナゴなんつもの一人も行かね、オナゴ参詣する時期でなかったから。してほれ、帰って来て一週間精進さへってるわけっしゃ。そして初めて家の中に上がるわけっしゃ。

潤　帰って来て何処にいるわけっしゃ？

喜　家にいっけっとも、精進だけはきちっとやってるわけっしゃ。

潤　なるほど、なるほどね。

喜　かてもんだった。

潤　越えて行く時、船形越えて行ったの？

喜　オラすか？船形越していっぺん行ったことあるっし。あとは汽車出てね、汽車でね、山形行って。

潤　いっぺん仙台に出てね。

喜　ほでがす、そして狩川さ行って、そして羽黒さ行った。トウゲ（手向）さね、狩川から手向村さね。そして、参詣して、手向村で行って泊まって、そして一日に駈けるわけさ、一五里って言ったんでがいんか。手向から湯殿山まで駈けおろしてタムギさ泊まったんだから。

潤　どこさ泊まったのすか？

喜　タムギ。帰ってくっと、こっちから行ってね。

潤　タムギ？タムケじゃないすか？

喜　うんタムケっしゃ。

潤　タムケトウゲ。

喜　んでがす、手向から発ってね、タムケトウゲからね、

潤　その、タムケトウゲで何しした？

喜　帰りは山だから酒飲んでね、盛大に祝ってもらって来たのっしゃ。登る方の人達ね、精進潔斎してかたくなって来たんだから。おらは帰って来たんだからわ。

潤　その登る方が問題なんだから。そのタムケトウゲでね、どういうことしたか。

喜　そうだねや、

潤　まず、ワラジの履き替えだすぺや、

喜　ほでがす、ほでがす、

潤　そして、そこで拝んで拝む時。

喜　ほんでね、帰る時、湯殿の人やとわってくるんだから。湯殿が駈け終わりだから、帰ってくるんだから。来るわけっしゃ。この前、息子にててがってった時、今宿などしてねようだっけ。清水旅館っつ旅館に泊まったんだから。あといっぺん庄内から行ったんだよ、私。庄内からね、これは湯殿山から羽黒山駈けて終わるんだよ、庄内口は。こっち羽黒から帰ってくると湯殿山から……におちるわけだからね。あと、尾花沢の方で米沢に行く口あるんだっけ、そいつ行ったことねおんね。八方八口って八方から登ることになってんだから。向こうのお山はね、こっちは……。

潤　船形六方六口。

喜　ほすか。

（中断）

婆　あの八幡様、八幡様八幡様ね、麓からなにからみな駆けていったおん。

潤　麓からどこっしゃ、その次。

婆　反町、吉田。安田は駆けた覚えねえな。反町は駆けたよ、シオナミ八幡様。

潤　シオナミね。

婆　こんだ、大衡に行ってあっちゃ行って駆けたね。

潤　大衡すか？大衡っていったらシオナミでがすぺ。

婆　んだかや、ずっと行って国道行って。ほで、おしまいだおんな。

婆　ヤハチハチマン（八八幡）。

婆　反町、あとミネの上なんつんだ、八幡様。ミネの上行くっと、ずっと北さ行くっと。あすく駆けたし、麓、吉岡の八幡。一度に駆けたの。あと、升沢はてんでに駆けたんだおん。升沢一日楽に駆けたの。

潤　升沢の八幡様みたことねすや。どこにあんのっしゃ。

婆　升沢八幡様はね、早坂かずえさんの、今のダンナドノ、かずえさんの上でがす

潤　杉の。

婆　杉一本植えったとこの少し西でがす。お堂あんだから。私お堂拝んでるよ。私、昨日のっしゃ船形さんのお祭りで、おらおぼこなし、おらいの娘三〇、一ヶ月なんぼになっからわね、今まで拝まねけっと。昨日はほれ、ここの薬師様に、観音様、ねえとこ、ホウキイサマさま、山の神様、八幡様、船形さんみな駆けたんでがす。あと私の生まれたとこの神様たち。

潤　ああ、薬師様。

婆　はい。みなほれ行った、だって毎月拝んでっからね。一週間に、三日月（みっかづき）、一〇日(八日?)にお精進してんでがす、一人して。家内の者ひとりしてもって、一週間にいっかぎり一回してお精進してんの。オサカさ行ってババチャンおかねたりいかんべと思ったけっとも、朝と昼間を食べてそうしてほの、お精進したの。きのなもお精進したっけともトウシかけて、昼間んなって忘れて喰ったんだ、船形さんで。お精進すったんや。

喜　どーこに、ほんな忘れる人あんまいちゃ。忘れて喰ったって。

婆　神さんみなあがんだけっと、なんだと思ってはっぱりわかんねけっかたこれこめ出たのしゃ、ああ、これお精進だったなやと思ったのさ。もはやほれお昼になる近くだからわね。だけんとも、昨日、法印様とっしゃ、こういくしてんでがす。

潤　ああ、大変……。

婆　私、神信心、小さな神さんだからね、私の嫁に来ねうち七つ八つからで神信心したんだからっしゃ。

潤　嫁さん来ねうち、どこにいたのっしゃ？

婆　私の実家。実家はね、加美郡小野田村西小野田字原台さ。二十歳のね、二十歳になった旧暦二月二十八日に来した私は。

潤　んだくて、やんだくて来たんだおんね。

婆　やんだと思ったけっとも、親にけらったからねや。おらいの親ね、酒とたばこ飲まねのでそれで娘けたの。昔の兵隊だからね、酒とたばこ飲まねの、それでけたの。来てみればっしゃ、いもと(妹)はひどい、両親はひどいっしゃ、この人もかっぱじだったんだから。かっぱらで、えらく難儀したど。おら今日行くか今日行くかとばり思ったてば。妹ひどいし、妹ども二人だったからね。妹どもはひどいし、両親はひどいし……。

潤　別家んなってからすか？こっち移ってから。

喜　そです。

婆　……うんと返事したけっと、ほんでも、えらく難儀だったからっしゃ、えらく難儀したす、先生。家と……子供いたしわ、子供もぞいからね。二才ごなってっと、一年に一回やっとこ行くのだしっしゃ。子供は出たし。ほん時の姉様の難儀かたがた、食い物からなにやらこめみて私ねたの。今だに私、忘らんねがす。夜もね頭何回起きてみんだか、十二時頃起きて、いじらったんでがすと。

潤　なにすか、いじらったって。

婆　十二時頃しずかが起きんの、ね。ご飯焚きに。時でも無い時だよ。ほいつこんだ、ケイイチも起きんでがす。私、十二時に、夜遅く寝んだもん、十二時に起きらんねがす、おら。なんぼだってね。一時間二時間寝たばりで、ほうすっつ、朝に早く暗いうちに起きんだけっともね、ちゃんと火焚いてんでがすおん。ほうすっと、来る人さおらいの嫁が遅くばり起きてなんだつうだ。まあ、ねんぎばり語って、私のことでがす。この人は炭焼きいっぽうで、朝に弁当ばり持って暗くなってからでねとこ来ねの。おら、誰も頼る人んでがす。おら家さ行くだって家遠いだ。山だりなんでありとても一人で行かんねだ。なんぼにも忘れねがすと。あと、オコサマ（蚕置くから十二時頃起きると、寝る暇ねんでがすと。今のオコサマは今置かねけんども、朝に起きてから、かせるばりだし。おらん時、なんでもかんでも夜中、十二時頃、オコサマかいたもんだよ。なんでもかんでも起こさんねで。起こさんねければオカタの……だから、起こさんねうちに起きたのは、十二時前に。先生、ほいって、オコサマかいたのは。笑ってっけっと、私は忘れたんだよ、ほんとにほれ。

潤　勇ましくて、勇ましくて。

婆　寝たのは、絶対忘れねよ。ほんだの今の船形荘の旦那殿、バンサマ、難儀したのわかってる、バンサマ難儀したの。バンサマえらく難儀したの。あのゾンサマ言いす、こいく、誰も知らね人ねんだからなや。こいくだったんでがす。

潤　やんだくて、やんだくて。とうとう出て行かねかったんだおね。

婆　行かんねのっしゃ。行かんねお、山で。今みてに、車ドンドン……ったら行きすや。今だらは行けんだ。畑では、畑では一人でばり稼いでですと、私。嫁貰ってから、私うんと難儀してっから、……人みな頼んで金出して。私の、だれも頼むてない、妹と孫。私、姑ガガ四〇なって来たの。私四〇なっとき来たんだよ。私の両親が四〇なっ時来たんだよ、嫁。ジイチャンは舅オヤジはね、四六（？）、そん時私は嫁に来たの。はじめて、ほしてはっぱり稼いですけないんだよ。三反歩あんのから田んぼから畑から、一人で稼いでからなじょになりすすや。今度アカンボ出たべっちゃや、アカンボ出たって今こそ、今の人達とかねんでがす、この辺だって。おらん時ね七つも八つもあるくれな鉄鍋で、とろとろ灰汁で溶いたんだよ。こうしてこんだ板の上ふいて。ほうして出はっと、アカンボ、イツコさ上げっとケツとっかえったばりで、おれの休みはねんだよ。すぐにおっぱい飲ませてイツコさ入れて出はんでがすと。夜は夜、ご飯焚きに上がんねんねがずぺ。馬にかせて、昼間は昼間十二時になれば、行って、オツケ温めて、皆んなさかせてそうしてイタノメエふいて（板の間拭いて）、今はイタノメエふくことがいん、ほれこの通りみながら敷いて。升沢で私……難儀したの。ヨメゴがいん、嘘でねんだから。あとのものくろかけぬけばりふだだから。あと小川さんの娘は家の娘で語りたいこと語って、ガガと喧嘩しいしい、寝たい時寝て起きてと、歩きてとこ歩ってでがすと。裏の娘、いっそオナゴばり三人だから、いっそ、その人達は寝て時ねて、起きたい時起きて歩きたいとこ歩ってね。ほういくしていたっと、あと、東の家のこう……は、姑ガガもなにも死んだとして、はっぱり稼いだこともなにも苦労しゃねんだからっしゃ、今のバンサマ。あとのバンサマだって、あの飯屋のバンサマだって、昨日な行ったバンサマねやいしたべ。小川さんの。あのバンサマだってなんだって、両親がいね、キイス一人だおん。寝たい時寝て起きたい時起きてオマンマ喰いたい時喰って、歩きたい時歩って。遊びたい時、夜だり、晩方だの、自由勝手だ。おれの難儀したのいねね、妹二人いたし。おらいのチュウジおんつぁん、今の旦那ガガね、国男のガガね、あの人はね、オヤジだってガガだって静かで、そんなヨメゴいじめるのでがいん。妹どもだっていねしね。あの、おらいの国男ガガなどえらーく楽したど。さんに三回みてもさせねのさ、はんとにやめて。おら冬に来たんでがすと、冬に……寝ったのであんめいどってね、家さ来いって言われたって子供ぶんなげて行かんねがすぺ。こ

うさいんの（？）出た子供預けらんねっちゃ。ほんとに一から十まで泣き泣きいたのでがす、先生。先生も神様信じてっから、神様拝んでみればわかんべけっともっしゃ。ほんと、おら、神様に守らって、今だに神経痛痛てだ。オボコナシからなにから、オボコ一週間で三日で出たらどって、一週間こえればオマンマ焚きしろ、板の間拭け、あと、鍋釜とぎ、灰汁つんだか水すか、一週間くれたばりで。マナグだって体だって悪くなるんでいらんねでがいんか。なんで、かんで知らんねでいらんねんでがいんか、畑掘ったりなんだりかんだり皆しなけないんだし。ほだから私いくいく難儀したからね。鍬だってね、四〇なんぼに……なっておら畑掘られたことがいんと、昔イネコキしたべあの踏んだの、……おもわねで……したことがいんと、私なんて。難儀してっから。だあれ、一週間で、スゴ編みしろ、縄ない。どこに、一週間でがすと、たったオボコなしてから。オマンマね焚き一週間、羽釜ね大っきな一升焚き羽釜ねたがくっつと、オリ下りって来るの。オリモノして来るの、まだ二一日固まんねからね。おらえらーく難儀して難儀した。いしたあすくに一人、あの家のいじめられした。あと……いっそ告げ口してね、ガガにあることねことほいってね、おらいのヅンツアマしったの、嘘でねんだから、……ほんとに……嘘でもねってでもね、……のバンツァンみてにホラも語って何語って……んだから。私が……したの見せんだからっしゃ。ほうして、ほういくしてムコもらったんでがす。学校にいたおらいのヅウチャンの妹ね、おらの妹が今七十六でがす、おらより二つよけいだから。ほしてその妹ムコ貰って、おらとこ出はって行けつんだ、ムコと娘置くから、家督。おらとここっから出はって行けっつんだ。長男いてんでがすと、ほいくやったんだよ。ほんでまず、畑作んの、おれのくれ畑さ畑作んの。あと田作んの。早坂ツヨンツァンは知ってんの、先生、死んだからわな。ほの人の……なんの、オカサンに頼まったから畑作んの、……、あんたにそんなことやられる筋合いはね、ほんで晩に山さ来っから皆んないっとこで話すっからと、……。おらうんと言われてそうして負けて行ったおん。そういうふうに、そん時は、……。こいなの、べたっとしてて、オツケとオマンマあるいくくらいの箸ね、おらの両親のヅンツァマここさ下向きにねまる。ここさムコと娘……ねまる。シュウトガガここさねまるんでがすと。おれとこの人は西つる向きにここさねまってね。そういて、あさ、タマナ、魚の煮付けだなんだって皿二つもなんぼ並べてんの。おらのはお膳に何一つないの、オツケばり一つ、あとなは茶碗も、何一つねの。そんでおれね、苦い顔もしねで喰って、腹

減ったって、まだオボコ出ねかったからね、オボコ出たってなにかねでいらんねから、オマンマとオツケだけくってね、稼いでたのね。なんぼいじらったってっしゃ。こっちさも告げ口しねしね。告げ口したって妹と思うから、両親あっただんねからっしゃ、嫁は……朝から晩までこの人いないのだからっしゃ。……コウコあててて親子二人して喰って、姉さん食えってこと、よこさねの。かんねんでがすと、私なんぼ腹減ったって。そうして今度、お昼だから上がって来たっちゃわ、そしたら、おつけは温めてね、何にもね、そしてはちゃんと喰って、イタノメエふいて、馬いたら馬にもかせて、オマンマくんべと思っていらば、姑ガガさま、遊びさ行って来て、「あや、みんな馬の喰ったんだとわ、まさよ」オマンマ洗ってけったからこれで喰えっつもんだ。昔ウマダラ……。ウマダラそいつさオマンマね、オマンマ黄色く赤くなったんでがすとわ。そいつ黄色くなったオマンマと赤くなったオマンマと、なんぼ洗ったってそいつ食ったら腹病みすんでがすとや。医者は遠いがすべし、実家は遠いがすべし、オマンマかねで稼いだことなんぼもがすと。先生。こいで、一番ひどかったの、なあにね、魚だって煮付けくかなんだっていんでがすと、このオマンマ食えったってあとなにとりないん……、これおれ、一番苦しかった。かねでかせいだ。ある時おれ、ナンドさおれ、この人達のはね三食温ったかいんでがすと、だれ、私のはね、夕べの朝に、ここいっ……苦しいのって、ナンドさ行っておれ、子供出はっぺと思ったけっともいつこだけってただこういくして横になったばりね、まだそんなに産褥もなんにも寝たこってないけっとも。そんな馬鹿でないから……とうきはねけっともこういったら。何だからアワだのキミ……た時だけっとも、こういったアワだのキミね。そいついあんべに抜くのにきついこた、みな糞でしか……、一人でしねけね、まず、出はんねと思って、足袋はいたのね。したれば姑ガガさん、風呂場さっかけね、コガの……、火ひってやの、先生。おら起きて来たばりで、雨は降んねど曇って、火ひてやったの。おれ忘れねがすと、そんなおれ、風呂、寝たことね、三〇分も寝たことね、火へてだおん風呂さね、……。なんつ言わったっていいと、自分が仕事する……、カラスはガーガー鳴く。毎日カラスと私が泣かね日はねえもんだなと思って泣きながら、……と思って……。この人朝から晩まで炭焼きだおんや、ね。したればなや、そんな時間、そんなおれ馬鹿嫁だって……、三〇分も寝たこったね、早くこの雲上げて、姑ガガさこのテントサマばりも見せて下さいと、おれ、神様お願いしたの。そしたら、だんだんにすぐに、雲ね、すっかり

テントサマ出てきたの。それからおらいのバンサマね、……遊びさ行って暗くなっても来ねのは。ほうしておれ、毎日毎日、……姑ガガ四〇の年に来たんでがすと、ヅンツアンは四十四つ、ほういってこねの。……そうしておら難儀して。そしてある時法印様来たんだおなや、法印様来たの。泉ヶ岳さ。おらいさ泊まったの、熊谷シントだ。……。ゴク（穀）かねの、そして、そばだの。

喜　穀断ちしてたの、……はいってから。

婆　……、その人たちどういな、見てつと、片栗粉な二本くらい煮るの大きな袋のな、そうして練って。そういて鍋、掛けて焚き火だから、グタグタ煮立つんだ。ほういた、餅にこさえ、……入れんの。おれ、いやしいからねかせらんねから、ぶんぶんと煮立つんだっちゃ、片栗だから。うけんだっちゃ、片栗だから煮立つと。今度なじょなことすっぺと思って、贅沢してお昼だりなんだりチコ飲ませて、ひともり上げてオボコちょさねんねから見てたわけだ。そうすっとね、真っ青い青いきなこを買って、昔青い豆も出たんだから、そいつどっさりかけて、豆ごさまぶって、片栗餅さこいな皿さどっさりお膳さ、そいつの上さまた白い砂糖かけて。そいつのうまそうなこと。ヨメゴよだれたれてみったんだなあ。カツカツカツカツ、シントウサマ喰うんだなあ。ほういなバンツァマ熊谷法印様さ上げたから喰ってもみろともなんにも、おらもこいなの……ても、おれに味みろともなんにも……ほいなの。味みろという必要ないもん、なヨメゴさ。いつか煮て喰うべ、いつか煮て喰うべといやしい心がヨメゴん時みてきたんだけっとも、二十歳ん時から、……来たんだけっとも、自分がこの年、七十二、私、明治三十五年生まれだから、ずっと通して来たの。ほんでもね、自分が昔のこと忘れて、喰いたい喰いたいという心一つも出ね。今だに、喰ったためしねど。そん時うんと喰いたくてヨダレたらして見ったの。今喰いたい喰いたいということねえよ。魚などさっぱりかせらんねからっしゃ。……金など……この人、正直なヅンツァマだから。おれ、ヤマナシ喰いたいと思った時、この人、おれクセしたときヤマナシなど喰いたいと思ってもヤマナシ採って来てかせる人でないんだから。……。いつかいつか、銭っこなんぼあったか、今の油紙ほいつなんだか、づんつぁま、買って来たんだか売りさ来たんだか……。ほんなにいやしく生まれた、農家で、おれも農家で財産のあっとこから来たからっしゃ、そうしてまずキッツあったって、こんなにきっつあったってかんねよ。一つか一つ半食ったきり。こんなにかんねやつ、一つかなんぼかあったの、そん時はうんとうまいと思って喰ったの、今だらそんなにかんねけ

ど。そんなして、ヨメゴに来て難儀してがいんと、妹どもはっしゃ、ガガだの……、二月、三月頃……、姉さ畑ほらいいんと、なんぼ畑掘ってけろって言わったって、鍬も受けつけねとこさ……。なんぼ教えられたって、誰も掘らんねだから、ばんばんとすがはって、すめてんだからっしゃ。歩くも歩けられないんだから、おらそいなことすねがすって言った。一から十までほいななんだも、……そういうふうに、私、神様仏様に守らって生きてきたんでがすと、先生。おれくれ難儀したのいね。……。一〇人もらったって二〇人貰ったってヨメゴ勤める人いねと言わったど。私、そいくやりしたど。裏の家のね。ガガさまど、オカタのたかのさん家のガガだのオヤジに面倒みらってね、ずいぶんしゃ。そういく生きてきたんだど、先生。今だら三日もいね。そういうふうに難儀して子供こしゃえて、……、おれのガガでなく、オヤジここにけたんだからっしゃ、ここにいて炭焼きだのやぬけで来たんだからっしゃ。やぬけの私の親に親しんきだったからね、私の親、頼まって来て。たばこと酒飲まねとこけらった。けろけろけろっていってなんだもないんだ。

潤　その妹さんたちってなんぼでお嫁に行ったのっしゃ。

婆　嫁ゴもなにもねえす、その妹ね。昔の家建てる時ね、大工になってたのとねばったの、くっついたの。娘とでえくさまに来たのと。なんの行って帰って来たんでがす、りょうしもなにもいないんだお、大工は死んだけどもっしゃわ。女の人泣かせるものでねえんでがす、いつかバチかぶっからね。人いじめらったりは忘れねからっしゃわ。あと、あっちに行ったのも……とっくになくしたんだからっしゃわ。亡くして苦労ししたべ。オラは黙ってけっともしゃ。さっぱと、ないんでがすと。田畑だり山だりさっぱとなくさ、布団は……、畳っこぼろぼろって、……瀬戸物からなにから私全部用意したんでがすと、お膳椀からなにから。一番先、土から買ったんでがす、あと屋敷、中村マンベイまで行って。私そん時、泊まって。オッピバアサン……まさよと喜一郎さけっから……、オッピバアサンんたちごっしゃいて。オッピサンが死んだら糞あげろしょんべん上げろって言ったんだから、この人のオヤジが。麓のハタホイから来た人、なに人でねんだよ、先生。今こそこうしてお茶飲んでけっとも、お茶飲む暇もね。皆してお茶飲んでるうち、……して、山でお金取んなくてかせがんねから、娘、人並みにけてやって嫁ゴにならせて、どんどんと手間取り置いたの、私。私だけだよ、子供六人もったけっと。手間取り一人おかねしね、1年も半日も。苦労したことがいんと。あることやってね、銭なんぼなんぼいわってねこんとき、学校やっときも、……揃えて

て……、そうして子どもには難儀苦労かけねで、自分では食いたいもの食わねでかせたんだよ。履き物だって足袋のはてからワラジのはて、そうしてこの人とかせたんだよ、この人と。自分が嫁ゴん時どっさり持って来たけんと六人おがしたんだおん。今度、配給で木綿買わんねんだ。自分の持ってきた衣裳ばりといて着せねんねがすぺ、そいくやった。ほうして、そいくしてやって、……。……まさか亭主がボロ着てやってたら、私笑われっからね。区長さまだってなんだって役やったからね、……貧乏で自分が一人で稼いだみな……たんだからっしゃ。こんだ、だんだんに……稼ぎしもって役場さ行くから、営林署の人達、役場から、米検査全部私、

（テープ中断）

［15］「梵天ばやい」　（採録時期不詳）

登場人物　小川氏(小)・たかの(た)・A・B・C・D・不明・潤之介(潤)

潤之介　あれなしてっしゃ、

小川氏　あれはやっぱり、一番に対して法印様ははっきりわかっていると思うけっとも。それから養蚕する人は桑を持って来て桑の枝、桑っ葉ね、そうしたようなの。人によって、必ず馬に喰わせるという意味でもなく、よくわかんねけっとも法印様はわかると思うんでがす。それを上げて拝んで、そして頂いて来る。それから、梵天の竹、紙ね、竹に付いてる。祭が終わると梵天の竹の紙が付いてる。サヤド（鞘堂）ってありましたね、お宮の脇に。その柱に梵天を縛るんです、両方さちゃんと。ほうすると、それを玉垣があって、そこさのっかて紙をみんなでむしったもんです。皆、紙が欲しくって。ところがあんまりむしられると、その梵天の縄解いて、ボーンと、こう参詣人がいたとこに投げてやる。ほうすっと、お互いにそれを取りようとしてばやるわけですが、そして最後に、負けた勝ったという勝敗はどういうふうになるかっつと、やっぱり組があってね、例えば升沢組だとかあるいは栗原郡だとか……組だとか。梵天を取った場合に、二、三人の組の方で、まっすぐに立ててたが勝敗のもとになっている。そして、そうなれば、また行って取り返すということはあまりやらないんですね。無理してやると、押しかけてってどこまでも押して行って、勝ったんだと言っても聞かないで、引っ張り合いして押し合って行って、お薬師様の上がり口の北の方の勾配きついとこから、押してまくってやったものですね。そうすると勝った方かあるいは負けた方の組がね、どっちかがまくれて行くわけです。梵天の竹にすがってはガラガラ、ガラガラとね。それでも、私が思いあるようになってから何年となく大した怪我した人ないんですね。例えばこの少しへん血が出た。だいぶ下のほうに石もあるんだけども、割合あそこはコシバンが出ててね、今日行って見るとわかりすが、あまり怪我して医者にかかったなんてことないんです。特別にかたき同士になって、梵天の関係でね、帰って来る途中とかここへ来てから喧嘩したっつうと、お互いにはたかれて、マナグすぐるほど黒血よったとかなんとか、そんなことはあったけどもね。でも、私が覚えあるうち、一年だかそんなことあったきり、大した事ないんですね。

潤　そうすっと、今の梵天こうヌサ（幣）つけてね、こう投げるね。

小　うんでなくて、幣は幣、梵天は梵天、別だったんだね。今

はもう、あんまりそういう掛け合いはしなくね。例えば、法印様に、私ら方で今年ね作が良くなるようにお借りしてってね、来年二本で返済しますというような申し込みによってあんまり、梵天ばやんなくなったんだね。ほすると警察では、ややもすると前には喧嘩じゃないかということで止めさせたほう良いということで。

潤　本にはね、警官が鉄砲まで持ってったと書いてある。

小　前にはね。私はちょっとだけ覚えがあるんだけど、火縄銃二丁くらいに、あと槍があったもんだね。そして、祭典の場合神主がだね、お姿をお迎えに行って、縄に紙をはさんだものが、エマって言いますか、あれをそこから普通の人は入ってなんねと、今日も張ると思いますけど、お宮の後ろに張るんです。そうして、別当さんがお姿をお枡に抱えて来るとね、別当さんがお姿抱えて来るとね、コグリヤマ（小栗山）の方向に向かってですね、下の方向に向かって、鉄砲をズドンと撃ったものですね。そして、槍をね、こっちの方のお客さん達のずーっといる方に向けったもんですね。鉄砲はドーンと空を向かしてぶってね、ということは私の伝えには、非常にその、小栗山の権現様は姉さまで、こっつが妹さんで仲が悪いために逃げて来たんだと。喧嘩をして、その際に追いかけられるためにね、追ってやるんだというような意味に、こう代々伝われていたんですな。ほうすっとほれ、お姿を迎えて来るから、結局、小栗山の姉様の方が、追っかけて来てはならんというふうの意味だと思うんですね。それで鉄砲をボンと撃ったというような昔からの私ら、言い伝えで。

た　今、そいなのないんだべっちゃな。先の別当シシベットウ言うんだっけか、そいつがみながら撃って、みな危ねがった。権現様まで危ぶねがったと言いしたんだ、おらいのゴロジジイ。

小　そしてこの間、古屋敷に炭置いてけねかと言われたから行った時に、ここもこう言う風に切り払っていたというんで、あそこにやっぱりお薬師様の十二神様が一組お姿あるね。コンシンサマとな、見て来た、たんがえて見て来た。十二神様というの吉田法印様が預かって持って行った。こっちに一つありますよ。とにかく、ここに一つある。見て来た。

潤　あれは、大黒さんでしょ。とにかくあの、ツタか何かでおせったような姿なってた。帝釈天か毘沙門天でしょ。

小　そうだね。みてきた。全部持ってってしまってる、吉田さ。……学校で掃除方に行くあたり、みなあそこにあったんでがすと、みな、あっちに。

潤　虫喰ってね、吉田法印心配してるんだ。何とかしてがいんかって。

小　なんぼあるかな一尺あるか、袴もはいたようなかっこう。頭がこう三角になったような頭で顔ついてね。

潤　オシラサマでないべか、オシラサマ。

小　なんでかわかんないが、船形山の十二神さんのお堂が両脇にあって、そこにこう二つずつ入っていたもんだ。その形の木造の刻んだもの一つあります。

潤　小栗山のほうは十二神将、こっちは十二神様。……ジュウニジンサマとおら教えらった。

潤　やっぱり、あそこに石の灯籠などあったんだな。一つ台だかなんだか下の方さまくれて行ってた。銘でもきらってないかと行ってみたが、見たが、今の升沢さまね、女の人登ってだめなんだか。

た　昔は、そう言ったけど、今はかまわねね。ある、途中にね、こういくずーっと長くなってんだ。そいつをオナゴ登らんねと何で登らんねっことないどって言って、ここまで来たら石になったんだとやって教えらって。でも、おら阿部先生に教えらったあたり、学校生徒皆掃除方に行ったから、行ったもんだ。このごろ吉田の二〇人ばり青年団も来る、大和町の。東北六県のテレビ映して見せるっつんだと、十月……。この間ＮＨＫ来て行ったと。

（船形山祭礼現場での録音）

潤　槍使う人は誰っしゃ。

Ａ　やっぱり、応援にここさ来る人だったね。

潤　何本くらいっしゃ。

Ａ　五、六本あったね。あと、向こうから（法螺貝を）吹いて来たのだね。

潤　どう言うやり方やってたのっしゃ。

Ａ　神様道具は馬で付けて来たんだおんね。

潤　梵天ばやいはどうやってやってたのっしゃ。

Ａ　お堂に結わえ付けた、お堂の周りに梵天結わえ付けて、それをばやってたんだね。

潤　だからお堂ぶっ壊れたっちゃ。

Ａ　壊れはしないんだね、別当様がそいつを解いて、参拝者のとこさよこすわけだね。そいつをばやってたんだねお薬師様の屋敷のうちさ。先に、あっちさ神様行くんだね。

潤　何人くらい集まったものっしゃ。

Ａ　二、三〇〇人は集まったね。宮城県のうち八方から来たんだね。今はたぶん地元の人たちばりだがね。

潤　フセセンゾウ（布施千造）という方ご存知ないですか。明治二十九年の本にお升沢様のこと書いてあるのっしゃ。鉄砲だの槍だのってこと書いてある。奪いやい方どのようにした

のかなって。その頃は。観音様拝み申すが、昔とどのように違うか今度みてていただきたい。

（祝詞始まる）

（録音場所変わる）

B　前はねじり鉢巻でやった、横っちょのほうさ結んでね。今日カドワキすればよかったと思った。今までのうちで一番おもしぇかったね。いっぺんだけ見たことあんの、ばやいさ。そのときは人少ねからね。今日はおもしぇかった。杉の木さぶっからんでさ、木なんぼか切るくらいにさ、竹まで分けんだから。

潤　もとは、何本くらいの梵天投げたの。

B　やっぱり、四、五本くらいは上がった。たんねかったんだべから。最高のときは一〇本くらい上がったときある。

C　カラダケ（唐竹）だ。孟宗竹でいいのかや。

CかB　お祭だという気持ち残しておくべきだと思うね。気持ち良いっちゃー。ほしてね、「おっ今年豊作だ」とか話にするのがいいのんや。

潤　ボウズダケ（坊主岳）す、どこにあんの、

D　ミツミネヤマ（三峰山）って言うんだ。三峰どこにミミズククラって言うんだ、表の方にクラんなってる、昔からミミズククラって言うんだ。

潤　耳に木に兎と書くんだ。それで、ミミズクと読む。

D　ツバクラ、オオクラ（大倉）、コクラ、ソバクラ……ナベタケ（鍋岳）は嘉太神。

潤　キンハタ（金畑）、嘉太神で見つけた。カナバタケという。早坂さんとこの畑はカナバタケという。

潤　お姿ってなんなの。

不明　古い、古い。

た　金でないの？

D　金張りだったのね。山さおかねことは事実だ。なんでかというとね、私ら小さい時、山さ置いてるとね、年々その年の気候によってっしゃ、本当に山さおく為にお姿にね緑青だのなんだのはえてね、その年の気候によってあのお姿が変わってたもんだおんね。

た　金だから変わんねというんだ、オレのジンツァマ。

D　今はね、家さ持ってっておくから絶対に変わってないわけしゃ。元はみな変わってるわけさ。しゃかふいったから、今年日照りだとか暗くなって雨年だとか、そういう判断をしたもんでがす。現在はね、誰が見たって、乾いて同じ色で。山さ上げた時は、やはり色が変わっていたの。じめじめしていたようなからだ、あるいは緑青はえったりね、山さおくんだから。カビっていうか、今は同じだから、がけずれ、そこさ

おくんだ。

潤　今日は、山から持って来たの。山に行く時持ってくの。

D　あんな雨降っても、穴さ置くんだから。どこさ隠すか知ってる人一人しかいないんだ。探す人いないのさ、おれは、あそこへね、……けっとも行くんだけど、一つもどこにもねえよ。

潤　別当さまひょこっと亡くなったら、探さんねえよ。

D　ちゃんと申し送りしてんだ。昔は、申し送ってたんだけど、今は山さおかねから。

た　おらいのジイサマ別当様さついて歩るったんだから、前のトウチャン。満州に行ってからだおんね、五〇年位になる。おらいのヅンツァン、おれが十三なるとき死んだんたおん。ここさおかねで、家さ持っててっておくとさかんでいしたんだ。そして、昔は、おれのヅンツァマしか、あの枡つうもんこしゃえなかったんづだ。今はこしゃえねおんね。昔は一升枡こしゃえて売ったんだと。売るやつもこしゃえたんだとね、何ぼって決めてね。今年の年は二〇とか一八とか決めてね。

D　みんな、お姿取ってちょして見たっけさ、前はさ、お堂の前で、お姿をこういく、後ろ向きになってさ、こういうくしたもんさ、そうすると、ヤァーと五〇〇人も一〇〇〇人もいた人がさ、お金さ、バラバラ、バラバラとみながらお枡さぶつけたもんだ。そうしたものだ。神様落ちるから斜めにした。後ろ向きになって。ぶつけたもんだ。米はトウシ持って行って通したもんだ。金は金で持って来たもんだ。一〇〇〇年以上だ。

潤　明治二十九年十一月号の『東京人類学雑誌』に「お升沢さまについて」というのが書いてあった。「升沢の娘達は正装してビッキの金を乞う」と書いてあった。オバアチャンに聞いてわかったわけさ。

た　キコザ着て笠かぶって歩いたもんだから、「銭けろ」っていうと、けたくない人などガンガンいんだ。くつかりくっつかりしたのさ。「やろーけねっとな、作悪いんだから」など悪口したもんだ。必ずけてったもんだ。こっちさ戻っても、けてった。二銭銅貨だおんね。

D　びっきてなにす。

潤　オレが解釈したわけさ、ひいきの金ということ。

D　まだまだ大昔はね、青沼という堤がヤブでない時分に、あそこに旧道あるく時分に、あそこにお金をぶっこんで行ったんだとや。干したときに、あったおんね、カマスで集めた。ぶっこむときにね、作悪いとか、ぶっこみようむときの音でさ、ぺちゃんと落ちるとぽちゃんと落ちると、たとえば、餅つく時にアイドリするとき、すっかり水回してのし上げてぽ

んと落ちすぺ。そん時に音良いとああ男だ、ベタッつうとあ
あ、おなごだと言ったもんでね。そのようなものでね、沼さ
ポンと入れっと、カポンというと、お作良いということで
ね、あるいは下さ落ちるとベタッというかね、真っ青な沼で
さ、とても良い沼だった。

［16］「小栗山②」　（採録時期不詳）

登場人物　A・吉田潤之介（潤）

A　エンギショウ一巻つうのあるはずなんだ。

潤之介　うん。

A　それが現在どうなったかっつの、実際私も伺ってないんですね。というのは、シンギョウジ（信楽寺）が明治十一年（一八七八）に焼失した時、宮床の信楽寺です、今発掘やってる……。

潤　はあ、はあ、はあ。

A　あれが、船形の本当の別当寺なんですから。

潤　はあ。

A　ここの、堀籠君は別当じゃなくて守子なんですから。あの方。

潤　はあ、なるほど。

A　そうなんです。だいたい信楽寺というのは、船形神社の祭りに携わってあったんだという。

潤　はあ。

A　明治十一年に焼けて、四年に結局、神仏分離をやる時に、結局神社の分というのは、ショウゼンイン（正善院）という、これも宮床の宮中八幡（鶴ヶ峰八幡神社）に使えた修験道なんで、これが引き継いだはずなんです。それが結局、私と親戚であったし、それから、その人が大体やっておったんですが、子どもが竹駒神社の宮司になって出てしまったんで、宮床は神主を全然なくしたわけです。その間、総代に一任しておったので、結局、その分の資料が今もって総代してる人にいくらか残ってると。

潤　総代といいますと？

A　イイモリジ（井伊盛治）さんって人。

潤　どこにいらっしゃる？

A　宮床、これは、山田というとこです。

潤　山田といいますと、当時はどうですか？

A　明治十五年（一八八二）以降、私の祖先が船形神社の別当に戻りましたんで、その間二、三年っていうのは、社掌と祠官って、オカっていう、あの、親の別当さんと二人でやったというかっこうなんでね。

潤　オカって、吉岡ですか？

A　そうです、オカサカエという祠官。

潤　オカさん、シカンってどう書くんですか？

A　衣偏に司、です。

潤　祠、カンってこのカン（官）ね。

A　そうです。祠官と社掌とね。両方の責任でやったというこ

とで。あとは、だいたい、明治十四、五年からやったんですね。十一年までは、一応信楽寺がやって来てますからね、焼けた年まで。最後の別当は亘理に行って還俗してしまった、高橋という別当だそうです。信楽寺の、さっき申し上げました井伊さんの家に行くと、古文書残ってましてね、わずかなんですけどね。社守させたやつが、勝手にご開帳させたんで困るという怒りつけた文書だのなんだの、往復文書だの謝罪文書だの残ってるんです。だいたい守子なんです、あの方は別当じゃなくて。

潤 はあ、うん。

A まあ、別当さん別当さんって言ってけっとも、古い。明治時代のノボリ見ても守子なんです。

潤 イイさんってどういう字書くんですか？

A えーと、

潤 井伊大老の井伊？

A そうです、そうです。

潤 名前なんておっしゃる？

A モリジっていうおじいさんいらっしゃいますから。

潤 モリジってどう書く？守る？

A 盛り、盛りです。

潤 盛、治まる？

A そうです。そうです。

潤 盛治さんね、これ、往復文書が一番の証拠だろうね、こうなりゃね。

A ええ。信楽寺関係の文書だの、明治十一年に火事になった時、浅野タツノスケさんだのなんだの、火事んなった時持ち出して、結局、ほの、別当が逃げ出したわけですね、結局ほの、檀徒もない寺ですからね、結局、お金、天下泰平を祈願したお寺ですからね、勅願寺なんで。信楽寺は全然。

潤 どなたの勅願寺？

A 光孝天皇と、信楽寺は勅願寺なんです。七堂伽藍を備えたといわれた。

潤 光孝天皇の勅願、随分古いんだね。

A はい。

潤 天平白鳳以前のあれじゃないですか？

A 光孝天皇だっていうなんにもなくてね。光孝天皇だっつうの、書出しにボコッと出てくるんですね。その前の文章全然ないという。

（中断）

潤 これは、だめな文献、だめな文献と、大変きつい評価をしてらっしゃるんだがね、私、その本は読んでないんだ、まだ。私、コウガクイン（光学院）という所がね、下馬にあったん

ですよ。伊達さんの三代か四代がね、塩竈神社の境内に入れてしまったの。して、別のひやしこいてしまったの。そのため、べつのひやしこというようないきさつになってしまったという資料読んだんです。そして、カンムリガワ（冠川）がね、高天原から下って来たというような言い方してんだよね、して、塩竈神社近辺がいわば、テンシンシチダイ（天神七代）、チシンゴダイ（地神五代）、あの辺が高天原だというような言い方してた文献もあるというようなことが書いてあったんだが、私はそれは妄説ではないと思ってる。確かにあの時代をたどってみれば、新井白石叢書の中に入ってるからね。高天原があそこにあったってことがね。信じていたって構わねと思ってるがね。まあ、その光学院がね、京都に本山があるというのも、私読んだんだが、その、さっき申した高橋という方がね、京都に行って非常に偉い人になったっていう物語みたいなのも読んだことある。私の考え方としては、船形さんに関しては、非常にまとまらない資料ばかりなんでね。どうしてってのは、一応、お断りしておきますがね、私は学者じゃないんです。こういう資料がある、こういう資料がある、あとは、煮て喰ったり焼いて喰ったりは、そういう職人だからね、先生方調査すりゃいいことだがね、一応そう言うことに関する文献だけは網羅してみようと思ってね、私、考えてるんですよ。そん中には、あの、ドウゲン（堂源）。ドウゲン、イナクラヤマ（稲倉山）だなんていう山も出てくるんだがね、イナクラヘクリ（稲倉ヘクリ）なんていう言葉などもね。それは山形からの言葉なんだよね、最上家に対してなんか候文で書いてる中で、そこんとこヘクリなんていうそこんとこカタカナで書いてあるという、なになにいって件如なんて書いてある文献など出てきたもんで、これ、山形の方から出てきた文献だなと思って一応みてるんだがね。とにかく修験道にかんする関係はあるんじゃないかと、私、推定はしてる。そんで、法印さんから聞いてると修験道に関係してるという話一応聞いたんだが、光学院というのは、京都が本山であるというような資料についてご存じありませんか？

A　えーとね、ここは、ちょうど、聖護院、当山派ですか、それからあの、結局羽黒派と、仙台では、あの、龍宝寺とそれから、あそこっしゃ、裁判所のとこ。

潤　リョウカクイン（良覚院）

A　良覚院とが、修験道の采配を握ったわけですね、入山掟っていうのには、全部そこんとこ通じてあるわけです。それであの、黒川に対してはあれは、頭巾ですね、ズキン頭が結局あの正善院でやってたわけですね。

潤　正善院てどこっしゃ？

A　さっき言った宮床の鶴峯八幡の別当寺と。配下同族というのがわかんですね。

潤　大分、この、分かってくるような気するな。私調べてる調査資料は、第三次くらいのかもしれないしね。まあ、いずれにしたって、いっぺんは世の中にご恩返しで出さなけりゃないと思ってんですよ。そんなもんで、もちろん、『黒川郡誌』に出るのは有難いと思ってるんで、私は私の資料編成やってみたいと思っているんで、写させていただけりゃ大変ありがたいと思ってるんですが。

A　結構です。あのね、この信楽寺さんの由来書だのつけてですね、明治七年に焼けた時に、一〇年の間、三年の間、結局あのあれなんです、先生、あの小林君の文章さ、あの、大切なお宮であの、おれの家がっしゃ、社格上げねで勝手に無各社にしたっていうけっともっしゃ、そういう手紙、小林君がよこした手紙、読んだんだけっともっしゃ、そういうふうに先生ご存じのようですがね、実際そうでないんです。こういう文章つけて払い下げおこしてね、官幣社にしてくれっていうこと頼んでるんですここで。ゴシンリョウカクイショとしてね、

潤　んじゃあ、押し方たんねかったわけだ。

A　私の家に来る前にね、大事なものだから官幣社にしてくてってこと、

潤　だいたい、一の宮、塩竈以上じゃないですか、ほんとんとこ言えば。

A　ええ。どういう関係か、結局一の宮以上であったはずなんですがね。鶴峯八幡が中世の一の宮なんです。鶴峯八幡とサイドウ祭りってこれ有名なんですけどね。それが結局、四代の宮床から出た伊達吉村さんという殿様が、オヤジの綱村さんが立派な社殿を造ったので、奥州一の宮という名前をつけたので、一の宮という名前が紛らわしいというので、宮中八幡という名前にしてしまったわけです。

潤　私、読めるかどうか。

A　大丈夫ですよ、先生。國學院出てずっとやってきてるんだから。

潤　私、國學院でもね、私、バルカン史なんだ。日本語読み始めたのね、去年からなんだ。読んだところが、こういう文献見つかったんで、こういう文献読み始めたんで。

A　船形つうのね、御陵の修繕料としてもらったっつんだね。山はね、この、船形山、反別三〇〇何十町歩っつうやつ。九三三〇〇……、なにから……ちょっとわかりませんがね。

潤　あの、金剛山っつう山ご存じですか？白髭、三峰、船形合わせて金剛山って言ったって。ね。だから文献から言ったら

すこしまやかしかも知れないがね、金剛山と申してそこが高天原となってたの、要するに役行者がね、の関係で、金峰山の関係で金剛山という名前つけたんだと私は思うんですがね……。いずれにしたって、山形側からの文献だけじゃいけないし、こちらからの文献も合わせていかなけりゃいけないしね。それで、あなたからお話伺うと、明治以降の話とコウトク、淳和の間の、いわば、間に入ったのが北条時頼だけが間に入ったんで、その中間の間の資料ってご存じないですか？

A　はい、結局、ずっと中間ってのがどういう？

潤　中間ってのは要するにね、時頼に一二宝蔵焼き払われてしまったですよ。そして封山を命じらったとなってる、三〇〇年。すっと、正嘉二年（一二五八）に封山を命じられたのね、一二五八年。すっと三〇〇年たつとね、一六五八年（一五五八年の誤り）ぐらいになる。ちょうどその頃、あの、御番所ね、あそこを利用し山形と野蒜がね交通しあう時間が来てるんですよ。それで人が頻繁になったので、また、お山繁昌しうるようになったんじゃないかと私思ってるんですよ。そういうふうな仮定を一応してるわけなんだが、山形側ではサバネトウゲを越えない、それからあの、笹谷ウヤムヤトウゲを越えない、一番直線のやつここだっていう、名前は出してないんですがね、なんかな、それから、峠として使える場所はここなんですよね。ただ物資を運んで、京都に送ってやって最上川を下したものよりも、宮城県黒川の方に入ってきて石巻か野蒜、あの辺から輸送してやった方が、人夫賃が安くなって大変助かったと。で、最上川っての流れが非常に激しくて船ひっくり返ったりして、人殺してしまったり物流してしまったりで非常に、損害莫大だというわけで、サバネ、ウヤムヤ以外の所を、そこんとこはっきり書いてないんですよ。はっきり書いていないってことはここが入ることになってくるわけですがね。せめて、あそこの林右衛門さんのところに、人一人通り申候とか二人通り申候とかっていうふうなね、文献さえ出てくればバンザイだと思ったんだがないんだね。ところがあの、ウヤムヤの関の場合にはね二人通り申候とかっていう文献出てんですよ。あそこは、番所でね。ところがこっちの一人通ったとか二人通ったとか書いてないしね、なんとかして、そこんとこ通って行けば船形が大分人の繁昌に条件がね、商業的バックとして、往復された関係上升沢さんが繁昌していったという推定が、交通史の見方からすればね、貿易の仕方からすれば船形のあり方がだいたい位置づけられるのではないかという、私の推定があるんでね、なんとかして、いろんな資料集めてみてみたいなあと思ってみて。つ

いでに、升沢の講ね、講なども調査して来ましたよ。誰が何日に死んだまで記録して来ましたがね、始め、種沢、下原で一四人の講だったそうだが、その後三五年以降、初めて升沢だけで二〇人の講ができたと。私もう番号うってきたんです、戸数番号ね。そんな状態で升沢に関する文献なら全部入れておこうかなという考え持ってるし、それから、升沢神社の縁起をついでに積み上げて行きたいと思いますしね、なんとかこう、学者研究の道具、っていうと語弊あるけっとも、とにかく材料に作ってみたいなと思いますけど。この八月までに私、作ってみたいと思うんですよ。そんなんで、大分気分的にも、こんで、これが私の最後だと思ってるしね。皆さん方のご援助得ていろんな資料集めして編成してみたいなと思ってるんだが、そういう次第で法印様にお願いに来たんですよ。

A 大した資料って、安永三年の「書出し」なんかには、ちょこっとしか載ってないんですよね。船形神社に対してはね。どうして？

潤 やっぱり、縁起っていえば、そこんとこ北条時頼一二宝蔵やられたっつことは共通するわけですな。

A そうでしょうね、これなんか見ると、結局閉山されたってことは……。

潤 書いてあるの？

A 信楽寺縁起のような、閉山なったってことだけは書いてありますかね。

潤 やっぱり、これは、廃寺にさせて。

A それが、結局移っておればですね、三年間の間どうなったかわかりませんけど、私の家でやり始まったのは、だいたい明治十年あたりから。

潤 はあ。

A その前に、升沢の船形さんだけお宮はやらないで、あとはあそこにある熊野神社だのなんだのっていうのは全部、あの、私の家でまつりをやってるわけです。

潤 ああそうですか。熊野さんっていうとどこっしゃ？

A 種沢だの升沢だのに山の神さんだのって別にあるわけ。

潤 あそこの、小学校の向かえのとこに石あるね、山神、それから、雷神、水神、真ん中に三霊神となってるね。三霊神ってのここでしょ。大山祇の神のことでしょ恐らく。

A そうです。

潤 山祇神と読んできたと言ったら吉蔵さんびっくりしていたがね、あれ、間違いないね。

A そうです。

潤 とにかく、つながるような気がするね、その文献拝見して

みると。

A　書出しなんかみると、「社寺書出し」と「村書出し」と残ってるんですがね、今その写し、それなんか見ると、あれですね。私の家は至徳年間の出で、大越っていうのが、あの、ノノタケ（篦峯）のね、別当も大越ってついてる人が何人かおんです。

潤　はあ。

（中断）

潤　あのかどっぱらのとこのお宮さんがナンゾウインっていうの？

A　いやあいつはお稲荷さんだけっとも、あの、別当寺がナンゾウインっていったの。

潤　はあ、

A　イイザカから出て来て。

潤　はあ、

A　ここさ、延宝年間に、良覚院から通知来てるんです。こいつは、安永二年、三年の書出し。これさはね、やっぱり、むこうだっつので載せていないんですね。金峰山、蔵王山。

潤　やっぱり金峰山出てんだね。

A　金峰山あの、石櫃の山でね、頂上に石櫃ってのあんです。石櫃っつんですかね、石櫃でねんですかね。四角いすごく大きな九尺、一丈ちかくの石が山の上にころっと。、

潤　丈六じゃないの？

A　丈六、あっかねえ？

潤　丈六って記録は私見たの。

A　そこんとこですかね、岩坂です。

潤　そうですか。

A　ええ。

潤　いや、蔵王権現の高さはね、一丈六尺あっからね、だから、それじゃないかと、いう言い方したんだがね。

A　吉田にある神社全部、これ、社寺書出しにあんの、先生の、ヨシノサワに神明社って。

潤　ヨシノサワんとこにクマンドウ（熊野堂）あるね、クマンドウ、沢んとこに。

A　シンメイシャ。

潤　はあ。

A　升沢に八幡さん。別当が私の家、ミョウガクイン。

潤　八幡様っての、セタキ仙人とこにある八幡様と違うのすか。

A　クニオさんっていうんですか、早坂国男さん。あれ、八幡さんでないんですね。新しいたてもんでね、行人がご祈祷したとこだって、女の尼さんでなくて、

潤　下の病と書いてある。

A　ええ。升沢屋敷ヨサブロウ？山つつみ……つつみ……に候以上、とこう書いてある。あと、升沢に稲荷さんがあるんですね。書き入れ帳に…

潤　西宮って入っていませんか？

A　西宮っつのないですね。

潤　ナントニョライってのの入っていませんか？

A　ねえね、そいなのね。

潤　ないね。大分修験関係のあれなんだが、山々に、こっち側には何神、あっち側には何神と一つの山に、一〇も二〇も向き守ってるというような言い方してるんだが、そういうことあるんですか？

A　そういうとこ吉田にねえね。

潤　そういう文献にある。

A　はあ。

潤　どういう発想でそういうことするかということ、一つの問題であってね、

A　キュウキってのちょと腑に落ちないんだけっとも。

潤　キュウキってどういう字すか。

A　古い書き物って。

潤　旧記じゃないの？

A　旧記、旧記。

潤　クジキ（旧事記）じゃねすか？

A　私の家てのは、オオゴエ家法印ホッシュ、ホッショウがね、至徳年中に開基と旧記に御座候と書いてあるね。何年何月と申候は、相知れ申さず候、至徳元年（一三八四）より当安永三年（一七七四）まで、三九一年に相上り候。ブッショウニュウシュク、永享二年（一四三〇）四月二十四日よりおり候。永享二年より安永三年まで三四四年に相成り、と。カミョウインとも言ったというのはね、これは修験道のあれにのってるんですね、袴を許すとか何を許すとか。

潤　あ、なるほど。

A　一応、マッポウ本山のことに対しては、奥州羽黒山のジャッコウジのショウレンボウに……。近代は武州東叡山輪王寺一本、になんだかしてると。ジャッコウジ法印代々の御支配受け、……。

潤　大事な資料だな。

A　載ってきて、ここさきて、結局、ヤガミ、ヤマスミの、とずっと書いてある。で、これを見るとね、しよかんかずないどっていうんで、升沢からね種沢ね、船形さん載ってないんですよ、これにはね。ですけど、ほの、村書出しさちょこっと載ってんです、一行だけ。この辺、どの辺だっけかな。私の家ここの家が新しい屋敷なんです、古屋敷つのはイワガイ

ザワって、向こうの方にあるんです。そこんとこの墓ってのは一九代まで向こうの方に。

潤　はあ。

A　この書出し、他に、船形さんに関係ないんです。村書出しの、大倉、ハチクラ、釜房サ、鎌倉森という。

潤　カマなにす？カマ、

A　カマフサって、俗にカマクラっつんです。カマフサ　前はこのハチ書いてんです、今は刺す蜂書いてっけっと、前はオハチの鉢書いたんです。肝入、チュウガイ、メイダイ、検断、……調査に来たってんですね。

（テープ終了）

【17】「小栗山③」　（昭和四十六年九月七日）

登場人物　太田・A（男）・滝口先生・吉田潤之介

太田　あれから向こうは霊地であるという。普通の社会との境目ですと、そしてあすこはイチノキド（一ノ木戸）って。

潤之介　イチノ、はあはあ。クロボシ（黒伏）とタテイシ（竪石）は。

太　クロボシとタテイシは、クロボシの霊地とこっちっていうか、みんなの住まいしてる場所との境目です。

潤　はあ。すと、クロボシの方が霊地？

太　クロボシが霊地。

潤　はあ、そうですか。あの、タテイシゴンゲン（竪石権現）ってのはいつごろから。

太　さあ、私はわからないです。まあ何千年になるか、まあ、ちょっと考えてみても一三〇〇年ゆうだと思います。

潤　だいたい近いですね。そうですか。

太　和銅二年（七〇九）に行基が裏山のこすいを……。ここに引かせようと、そして、あそこごとを切り抜いたと、今尚お年よりに言い伝えています。その時に、ここに来たんです、ここの部落。ここはもと、今はモトウシロザワ、ウシロザワ村でしたんだ。今はモトつかったんだ。ウシロザワムラ。

A（男）　現在はモトつけておくんであって、ウシロザワ村とその当時は呼んだんですね。

太　そして、ここに来て寺建てて一一年間っつものここで巣くったんです。木を切って。

潤　木ですか？

太　木、ヒノキ。

A　大きさは六尺七寸と聞いておったな。

潤　大分大きいですね。

A　大きいですよ。ヒノキの一本造り。

潤　ああ、一刀彫りですな。それを六尺七寸の十一面観音に作られたわけですね。

太　そうです。そしてそれがクロブシの前別に作ってある。信仰したの、クロブシを奥の院にしたの。

潤　奥の院になるの、はあ。

太　もっともクロブシは、その当時は、最近に至るまで山は女人禁制でした。山の上には女の人登れなかったと。

潤　はあ。いつまで竪石権現よりも黒伏権現の方もっと古いわけですね。

太　同じだと思います。竪石権現は麓。

潤　要するに一ノ木戸。

太　はい、一ノ木戸です。そして、今、黒伏山には方々に岩に

名前がありますが、それは神仏混合の時代か、昔の名前です全部。

潤　どういう名前あんですか？

太　神社の下にはマリシテン（摩利支天）という、左の方の岩はサンボウコウジン（三宝荒神）といいます。

潤　三つの宝ですね、アラカミ（荒神）。

太　そうです。その手前にはテングモリ（天狗森）といいます。

潤　ああこれですか。テンガモリ。

太　テンガモリ、これです。テンガモリ、テンガモリと呼んでるんです。

潤　ああ、やっと、これ、地図に見つけましたよ。テングガモリ、テングガモリとどこに？

そうですか？

太　あれ、車の終点のとこの左になってんです。して、あそこまでは、神社までは、一里四キロきりねんだす。近いんです。そんなに近いところでいいきとしており、なお女人禁制をしておったと。あそこは、修験、修養道場でした。

潤　して、クロブセ（黒伏）になっちゃった。ほんとはクロボシなんです。

太　いや、クロ……。

潤　ほんとはクロボシなんです。

太　そうですか。ボシなんですか。

潤　修験が入ってからクロブシになったと思うんです。

太　そうですか。

潤　六〇二年前の地図にクロボシとなってます。これ正しいと思います。よくそいな名前ついたなと思って私よろこんでるんですけども。なしてそいな名前なったか分かりませんか？

太　語源から来たという学者もいるんですけど。クロ、フシとか、カタカナで書いたのあるんですね。ほして、クロフシは京都の方に向いておると。山の西に何ぼか傾いてる。ずっと行くと薬師如来と、それから普賢菩薩、次は熊野権現。上に行くと天照大神それから八幡大神、それから春日大神。そして奥の院には、クロブシ地蔵権現といったし。

潤　だんだん面白くなってきたな。これやっぱり神仏混合の。やっぱり一三〇〇年。

太　そして、まがかげの陰の岩には大黒岩といいますが、大国主命を祀ったといってますが。

太　先生それからなに聞けばよかったですかね、私。

滝口先生　あの、太田さんは、大分、昔の先達っていうか、山案内やってくれてますしね。鏡ヶ池のちょうどそばにあった、先生さっきいった、あの聞いてもわかるんでないかな、地名。

潤　ははあ。

（中断）

太　みんな、心を清浄にして登ると。そして、心の、せめをしてそれから散歩すると。

潤　そいで、太田さん先達になってからの系図はどういうふうになっておりますか？

太　私の先祖から先達したんです。四代目です。

潤　四代目だと明治になってからですか？

太　私は明治になってから。それは、初代ですか？初代は明治ちょっと前からです。

潤　そうですね、四代といいますと。

太　はあ。

潤　その前は？

太　その前はこの部落に何人かの先達があったそうです。

滝　ここはイズミゴウ部落です。

潤　イズミゴウ部落の先達の四代目。その前はお寺か神社かあったんですか？

太　社務所。

滝　御所神社社務所って。

潤　御所神社社務所がここにあったの。はあそうですか。これは、社務所って言葉は最近のもので、神社があったわけですね。要するに四代前の先達が御所神社でやったわけですね。

太　そうです。

潤　その系図などないですか？この衣を着ていいとか、金のあれ入った袈裟かけていいとか、権僧正の位与えるとか。そいのないんですか。

太　ないんです。オヤジ来た着物あるんですけど。それから旗、何時の時代の旗だか読めない旗あるし。約三間まえあるのかな、二つある。

潤　それ系列の書き物あったらお見せ頂きたいんですけど、いかがでしょうか？

太　それは、明治三十七年の洪水の時に、名主の蔵にあったんです、それが全部流れてしまったんです。

潤　お流れですか。

滝　太田さんとこさ、そいなんでなくとも、昔の古文書みてな。

太　明治十六年からの、年々祭典した帳簿はあったの。

滝　祭典帳簿な。

太　明治十六年から明治三十年何年まで継続してんの、ずっと。それから、その後、大正十四年から（昭和）四十五年までは、一年もたがわず続いてんの。

潤　洪水は何年ですか？

太　明治三十七年です。

潤　消失ですな。明治時代になってからは竪石権現のことはみ

んなクロボシ権現でやったわけですね。祝詞などございませんか？

太　祝詞。

潤　なるべく古い祝詞が、でもいいし。とにかく竪石権現は、一応お祭りはするわけでしょ？

太　一緒に。

潤　一緒ですか。はあはあ。クロボシとタテイシは一緒に祝詞上げるわけなんですね。

滝　そうです。

潤　クロボシはクロボシ、タテイシはタテイシと分けないでやってるわけですね。したがって、祝詞も一緒と。

太　そうです。

潤　祝詞を拝見させていただきたいんですが。というのは、祝詞を見るとだいたいこのいきさつがわかるんですね。太田さんがおっしゃったお話と祝詞の内容を組み合わせてゆきますと、沢山あるとおっしゃったね。一番この、毎年毎年同じなんですか、それとも違うんですか？

太　ここの例祭の時は同じ。

潤　例祭といいますと？

太　今は新暦で十二月十日にしてます。もとは十一月の十日です。

潤　例祭でない時の祝詞はどういう具合になるんですか？

太　それはその都度その都度作文しますから。

潤　はい。例祭でないときのお祭りは、どういう時のお祭りなんですか？

太　人に頼まれた時のお祭り。

潤　それが、権現としてのじゃない。要するにお祭りの時のを拝見させていただきたい。

太　そうですか。

（中断）

太　それから、二五間中さ今年、銅版の社殿を安置しました。

潤　そこんとこ、ギョウニワっていうんですか？

太　そばです。神社から約五町まであるかもしれないな。

滝　ねえな。

太　普通で二〇分、山登りして。

潤　それから、祭事のことで伺いますがね、例祭するときどういう神社で準備なさるんですか？どういう役割でなさるんですか？

太　今は私らが、習ったことだけでやるんですけど。

潤　例えば、お祭りする時、氏子総代とかなんとかが参加するわけでしょ。その人数は何人くらいですか？

滝　一〇〇人くらい、今年。

潤　役職があるわけでしょ。そういう役職はどういう役職になってますか？

太　それは、チョウバの他に、個人でやる。

潤　一〇〇人のなかの誰かがやるわけですね。

太　……サイシは仲間の人がおりますからね。タナガなんつのは全部の人が。

潤　タナガ？なんですか？

太　ケイセン（献膳）するときの役割。

潤　ケイセン？なんですか？

太　お供え物する時の役割。

潤　お供え役ですね。取り決めの役はそういう具合になってるわけですね。

太　省略して、神様に始めお供えしておいてからお祭り始めるわけ。

潤　要するに、準備の仕方は太田さんがああしなさい、こうしなさいとするわけね。

太　打ち合わせ。

潤　はあ。そして、担当者を決めるわけですね。お供えする人は何人おりますか？

太　大抵、私と三人。

潤　宮司さんも一緒なってやるわけですか？

太　あまり、あつめないから、ケイセンといいますが、先にやっておいて。それから始めるんです。始める時には山に登る気持ちで参拝していただきたいと思うので、今年もお山のぼりのカケネンブツ（掛念仏）で。

滝　掛念仏、あれいかったな。

潤　掛念仏、それ教えて下さい。

太　昔のものは、私わかんないんです。

潤　昔のはいいんです。さあ。

太　最近のものだね。

「あまつかみ、くにつかみ、とうかにえみたみ、はらいたまい、きよめたもう、
てんかたいへい、ごこくほうじょう、ばんみんかいらく、しょがんじょうじゅ、
まもりたまい、さきわいたもう」

それから、ちょっとまてよ。

「かないあんぜん、しんたいけんご、しょうばいはんじょう」が入るわけです。そして、

「しょがんじょうじゅ、まもりたまい」

となるわけです。

そして、

「なんまいだ、なんまいだ」。

潤　節つけていうんでしょ。節つけてお願いします。太田さんひとつ。

（太田さん節つけてうたう。）

太　あとは大抵節っていう節ではないんですね。

滝　あとは同じ節を繰り返してうたうんですね。

潤　「てんかたいへい」、も一つ。

（太田さん節つけてうたう。滝口先生も合わせてうたう。）

潤　ありがとうございます。

太　これ歩きながらだから。

潤　これくらいのスピードですか、読み方？

滝　そうです。

潤　その時、太田さん、くさぐさものも机にあげるの。どういうもの上げて行くんですか？

太　洗米、御酒、鏡餅、ここであまり金のかかるもの上げなかったんだ。あとは、スルメ、葱、大根、海藻、昆布とか、それから果樹。

滝　リンゴとか果物ね。

太　それから菓子。

潤　塩は？山菜は？

滝　山菜は使わねね。塩は使うね。

太　使います。

潤　水は？

太　使います。塩と水は　しおだつ……の材料に使います。それから、護摩は焚きます。ここの護摩壇は、昔から、あれ危険だというんですけれども、あれ木です、薪。木の箱です。

潤　組んでしょ。

太　容器は木の箱です。

潤　どれくらい大きいんですか？三尺四方くらいですか？

太　三尺ねえな。三尺ちょっと。

潤　そうですか。

太　その中には石油缶一つ入れてんです、その中に焼けないように灰入れて、三分の二位、それにゴマギ（護摩木）といいますな、それ入れてイゲタに組んでそして、中に初めてたきつけるものを入れてやります。

潤　高さどれくらいですか？

太　これくらい。

潤　これくらいって、だいたい三〇センチですね。

太　火力は。

潤　木の太さはどれくらいですか？

太　石油缶赤くなります。そして私、長年の経験で自分のここが曇りを生じだ場合は、この辺に火つくんだね。自分の心に曇りがあれば、火が荒れるというか。

潤　火が荒れる、荒れるということは横に火がつくということですか？

太　そうです。精神が緊張してるから、周りが赤くなっても木には付かないと。

潤　はあ、はあ、はあ。イゲタに組んだわけでしょ。一斗缶入れて中にゴマ油。

太　ゴマ油でね、護摩木。

潤　そして火は、あの、なんですか。本殿から持って来た火を投じて。

太　そうです。

潤　そうすると、ゴマが燃えて行くわけですね。

太　そうです。護摩木が燃えると。

潤　と、このあの、イゲタが燃えないと。

太　燃えます。

潤　すっと燃えるのはなんですか？

太　辺りの護摩壇。護摩壇といいますね。

滝　この辺でいいますと、一つの囲炉裏っていうかね、炉淵って。その中に一斗缶を入れるんです、太田さんの場合ね、その中に少し灰を入れるんです。その上に護摩木を積むんです。だからこれが、とぷんと入ってるもんだから、これが真っ赤くなっても周囲には決して燃え移らないとなってるわけ。

潤　はあ、はあはあ。このグリーンのやつは木の枠ですか？これが三尺くらい。

滝　そうです。そしてその中に、

潤　石油缶、ドラム缶のが入って。要するに火が燃える。で、澄んでない時、こっちの方に火がつくと。なかなかいいこだ。やっぱりクロボシだ。

太　昔から、昔のもんです。祖先が作った。

滝　これ、外でなくって、この家でやるんですから。

潤　ここで？この家で？

太　そうです。

潤　その火、どのくらい火ボヤ（？）あがるんですか？

滝　かなり上がりますよ。三尺位は上がるんです。大丈夫です。

太　それに使うのは水と塩とゴマとそれから、私あの、セリを使います。

滝　社殿拝見させていただきますか？

潤　その前に、クロボシ神社に十二っていう数つかった言葉ありませんか、十二社とか十二所とか十二神將とか。

太　ここは、あまり使わないな。ゴギョウノカミ（五行の神）をいう場合あるがな。

潤　五行の神。

太　これは、東西南北と中。

潤　十二の数の言葉はないですか？

太　十二支のことは。

潤　それは、クロボシであって、竪石権現は一ノ木戸となって、結局クロボシも一緒だという解釈になってしまうんですがね、かつて、竪石権現で十二という言葉使ったような習わしってのは記憶にございませんか？

太　知らないです。

潤　これだけは残念でしたね。十二が欲しいんです。小栗山十二所権現、それから、升沢権現が十二神将と、だからタテイシ権現は十二なにか、十二仏とか出てくればいいんですが。だから今晩喜寿のお祝いで思い出していただければいいんです。

太　ここは、先生は、コノボウつかいましたか？昔が御所山は五つ所の山と書いたんです。それが、ジュントクジョウコウ（順徳上皇）がここにおいでなされてから。

潤　京都の御所の御所になったんですね。

太　そうです。それは、七五〇年位になると思います。

潤　そのくらいになりますね。七〇三年、仏像は七〇〇年。だいたい近いですね。先程おっしゃった一三〇〇年を下るまいという話。

太　一三〇〇年以前から、その頃はこの坊です。それから、五つの坊を添えたんです。

潤　五つの山というと。

太　クロボシ（黒伏）を土台にして、それから、シロモリ（白森）、アラカミ（荒神）、ゴショ（御所）、これは御、所です、それからフナガタ（船形）、これは山の名前です。それで五つの山です。

潤　ニッテン（日天）ガッテン（月天）なんてのなかったですか？

滝　それあります。

太　あります。

潤　どこに入るんですか？

太　シロモリ（白森）はニチ（日）といったんだな。

潤　月天は？わからない。

滝　白森は確かに日天だな。

太　白森は日天です。

潤　白髭がそこに出てくるんです。

太　白髭はここに二つあります。前白髭と後白髭。

潤　そうです、そうです。白髭はヒャクサイというんです、百済なんです。ハクをヒャクというんです。そうなってきたら面白いでしょ、先生。民族移動の経過がわかってくるでしょ。

滝　ああ。

潤　だから、ハク、ゼンとなってるでしょ、今。スとなってたり、須くのスとなってたり、再びという字になってたりするんですよ。再びなるとゼンなんですよね。サイサンの、サイ。そういう結びつきが私の回答になってくるんですよ。そうするとこういう神々がクニツカミ（国つ神）がどういう具合にここの山に来たかということの結果になってくるんですよ。あまり少しほら吹くようでうまくないですがね、嘉太神の意味もそこに出て来るんですよ。カンダイジンじゃない、

太　私の解釈では、ゴショをクロといったかクラタキをクロと言ったかまずはっきりわかんないんですよ。黒滝、屏風沢って、屏風のように立ってるからそういうふうにいいますが。

潤　屏風沢ですか。黒滝を屏風沢。それから御所山を五つのヒジリ（聖）とも書いてんですね。『大日本地名辞書』に出てるんです。ゴセイ（五聖）と、それでゴショザン（五聖山）と。難しいんです、なかなか。だから、土地の方々のいろんな話を聞いて、それで東西南北、それと中というんだったら。それで例えば北、毘沙門天とそれから南の方大日如来とか、真中は帝釈天とかそういう具合に分け方していかないと、五つの聖出てこないんです。

滝　ダイニチヤマ（大日山）ってのあるね。ちょうどシロモリの横に。

潤　そうですか。

滝　大日山。そうとう古い名前だなと思って。

潤　随分あのことば、随分入ってきてるね。

滝　それから、根拠になるような一三〇〇年前ということになると、そこの竪石権現のちょっと先、クロボシ神社の下の原から縄文土器が出はんですよ。

潤　ああそうですか。

太　今ブルで掘ってるから細かくなって。

潤　はあ。

滝　だから先住民族が確かにここに住んでおったという根拠にならないとだめなんだな。

（中断）

潤　船玉四社を祀るとなってんです。船玉四社ってのはどういう資格の神々なんでしょうか？これやめておいて。

（中断）

A　シオジノオジ、塩釜神社の菩提寺の一人、シオジノオジ。

潤　それから。

A　あとは住吉三神。

潤　どこの神ですか？

A　摂津の住吉。

潤　それから、なんですか？

（中断）

A　なんとなれば、アラヤシキ。ご承知の通り、うちのいわゆる神話とかそういう事実をみな国内にあてたでしょ。例えば、高天原が日立にあるとか近江の国にあるとか。これは後世の学者はシマを正しく理解するあまりに、国内にやったというのはいけないんだ、と批判されてるでしょ。

潤　それはそうと、だから私は、当時の学者の説をくんでやったらそれでいいと思うんです。だからそこに高天原が出来たと。冠川通って来たっていいんですから。それで、ここが高天原になったっていうのが一つ。それからもうひとつ、物語になって行くんですが、シワヒコ（志波彦）さんが。そこにコウガクインというのがありましてね、そこで勉強したと書いてある。それで、偉い先達になったという記録書いてあるんです。そんなもんですから、船形神社と塩釜神社と関係あり、というような引出し形が、資料としては、宮司さん、第三次第二次かもしらないと、もんくはものはしらないと思うと言いながら書いてるんですから。あの辺のことについては全然資料ないんですから。そりゃあとは先生方が研究してもらうしかないんですから。それ、関係あり。それから、もう一つですね、『多賀城軍記』というのあるんです。『多賀城軍記』にフジワラノキヨツネ（藤原清経）、藤原鎌足の九代の孫、葛西、大崎ですね、藤原清経が謀反おこされたことあるんです。それで多賀城守ってたんですが、そのころ、清経公と息子が京都にいたんです。その間をねらってですね、ガンセキマル（巌石丸）、土地の人達はイワイシマル（岩石丸）、岩石丸といって。その岩石丸が氾濫を起こすんです。多賀城を占領するんです。それを、早馬で来て帰ってくるわけです。帰って来たとき、その息子の方の奥さんをアヤメノマイというんですが、それを籠絡しようとするんです、その賊が、おれの言うことを聞かなかったら殺すぞと。そうしたところが、その伯母ですね、付き添い伯母なんですが、伯母と二人で逃げるんです。して、逃げた所が、この近辺のソマヤ（杣家）に来たんです。杣家にきて追いかけられてるから助けてくれと、そうしたところがおじいさんが出てきて、隠れていろと、アバラヤですがね。その後に追っ手が来ましてね、居るとこないから、この辺だろうということで、おじいさんの家に入り込もうとしたんです。「ちょっとまて、我にとってはこのウチコはアバラヤではあるが、一城と同じである」とカッと睨みつけるんです。カッというのはイキと書いて在りました。そしたら、さずがの軍兵どももたじたじとなったんです。で、そのアヤメノマイとクモが出て来ましてね、ようするにクモっていうのは夜なんですね。そのクモに乗せられて、清

経息子のサエモンノジョウが世をはかなんでですね。清経公はもう色麻のテンガオカ（天ヶ岡）というところに五輪の塔に祀られてます。その息子のサエモンノジョウが世をはかなんで、多賀城にいたんですが、そこんとこに偶然に会ったんです、アヤメノマイ。、ところが、どうしてお前おれんとこわかって来たと言ったところが、知らないうちにこのおじいさんに連れられて来たと言ったところが、そしたら、そのおじいさんがですね、クモに乗って帰るんですが、そのおじいさんが「われはシオガマダイミョウジン（塩竈大明神）なるぞ」と言って帰ってゆくんです。そういういきさつが書いてあるんです。

A　『多賀城軍記』ね。

潤　ええ。そんなもんで。、

（中断）

[18]「悟りを開いた話」

（採録時期不詳）

登場人物　老婆・吉田潤之介

婆　石巻いがったやー、こえー、こえーが、その、変わってくっからほれ、なんだべな先生（潤之介）、どうやって聞けばいんだべなっと、またほれ、まっていられっからいいけっともね。遠くってとおっていらってっとだめなんでがす。

潤之介　そういうこと。こっちから勝手なこと言ってしまってから、オバンチャンの心乱れっと思ってね。んだから私は遠慮しながら……伺ってるんだ……。

婆　わがってんだから、オレ。センセの学歴と……。ほだからね、学歴ある人と話、わたしのね、たんねとこ、ほして、なんの神様でもゴシン、発してけられすっぺっちゃ。誰、守ってたからババ守んねは、なんていう神様がいんから。はぁーえがった、泣き別れ観音でがす。自分ち裏の。

潤　もう一つ神様のお伺いすっけっともね。ここの升沢にね、ヒコジャ権現という神様あったんだよね。この神様なんですか？

婆　何すや。

潤　ヒコジャ権現、ちゃんと石碑に書いてあったんだ。……位しか歩かなかったからね。ちゃんとノートに三行くらい書いてある。だいたいヒコと読むかどうかはわかんねけどね。ジャという、蛇という字が……。

婆　そいつ竜神様かいたと。

潤　石、石に彫ってあんの。

婆　私のシュゴジン（守護神）、ヒコジャの神でがす。

潤　やっぱり、ヒコジャっていうの。あの字ヒコって言う字に読めなかったおん。ジャは読めけっともね、蛇だから、ヒコジャ権現っていうのは本体なんなんですか？

婆　だから、ジャでがす。

潤　うん、ジャ。桑沼ですか？

婆　オレね、一番はしめて、んでね、先生さ、かくしてけ……。あのー、鞍馬山から八咫烏というもの飛んで来て、羽は二間な、そして、髪はカラスの濡れ羽色ということピカピカて、残雪で、こういうとこいうとこさパタパタて、そいつのなーんも、ほんとにオレ、なんーにつことないけど、心になったかわかんねね、鞍馬山。飛んで来られっとき、なるほどいいんでがす。ズーと、ひまつここさ来て、息つかれねから、やっぱりそのためぬ、ハッと息はいて、ハッとハッと。こういうくしてると、三六五羽息つきはきするわね、そういなの見ながらはじげだったんでがす。それがらだな、履物とってきて、なんでかんでも、朝にコップで水飲んで……、はてな、

私バカだからね、ほして　コップさ水汲んで、いつだった……、一寸ぐれえのね、かたかなでホシ、紫の、紫ちゅうんでちゃんとうかんだんでがす。それから悟りひらいたんでがす。

潤　それいつの時っしゃ？

婆　四十九の時だ。そして今度、三日ばりくさしたとき、また、そうやっておてんとさま、おてんとさまにらめっこと、一時間にらめたって、瞬きしなくなりした、そいつ二番目の実よ。教えられ、そうしたれば、われの姿が……。

（中断）

[19]「歌念仏」

（採録年月日不詳）

登場人物　小川久五郎・吉田潤之介

久五郎　これは、あの、まあ、歌わねぇで、話すんだけっどもしゃ。「ナムアミダブツ（南無阿弥陀仏）」をね、七回やるわけさ、最初ね。それから、やって。それから今度は、この文句を言うわけっしゃ。

潤　ああ、その文句の言い方、なんて言うんだか。

久　これすか？

潤　はい。

久　そうだね。こうゆうにやるんですよ。

（節をつけて）

ゴクラクノー　ショーレガイケニ
レンゲガ　イッポン　ヒライテ　ホトケ
とこうやんです。
タイザン　タイメン　モース
ニセイノ　オヤニ　タイメン　モーオス
ヨーイニ　カンノン
ヨナカニ　コクゾウ
アカツキ　ジゾウ
イーシノ　ミョーゴー
オシャカニ　ライハイ
ナムアミダー

とこのようにやるんです、はあ。そしてね、今度は、これをやって。これは、一から七まであるわけなんです。

潤　はあ、一から七って、七種類ですか？　七回……。

久　七種類って、おんなじ事の様なんですけどね。今度はここにね、「一本開いて」っつのが、今度「二本」なるわけなんです。

潤　ああ、そうすか。そして七本なるわけ。ああ、なるほど。

久　はい、そうです。それが七回終わるとね、今度は「南無阿弥陀仏」を七回ずつ三回やるわけなんです。はあ、そうするとね、始まったときと、三回、七回ずつやったので、それで三・七、二一日の供養をすると、こういう意味になるわけです。

潤　いいこど聞ぐなぁ。

久　そゆことなんです、はい。ほんで、やっぱりこれ、しょっちゅうあるもんでないからね。みんながやっぱりね、覚えてる人、少ねぇわけっしゃ。で現在、講長の跡取りでまずね、鉦を打って、打つ人は打つ、調子に合わしてね。そして私が題出しをして、それにみんな後ついてるわけ。で若い人はそんだことやんだからね、やらねぇわけっしゃぁ。（笑）

潤　ああ、そうですか。

久　はい。

［20］「宿・番所②」　（昭和五十七年八月十五日）

登場人物　早坂吉蔵(吉)。吉田潤之介(潤)

＊吉田潤之介氏と早坂吉蔵さんの会話、お酒を飲みながら、終盤はかなり酔っている。

（突然開始。テレビの歌謡曲と女の子の声が聞こえる。）

吉蔵　祭りんときね、はぁ、ご祝儀くれろご祝儀くれろってうんともっらったもんだほんとに。

潤之介　なんぼもらったの？

吉　あのあたりね、一文二文だけっともしゃ、一文銭も大分使ったからね、ほだから。なになんだ、すがってから絶対はなんねから(離れない)、ほれ、昔はキコザ（着莫蔴）だから、莫蔴ね。そいつぶっつぁかれっから。ほれ、なんでかんでけるわけっしゃ。

潤　うんと繁昌しったってのね。明治大正昭和とみて、昭和も戦前ね……。

吉　大正ん時、なんぼか、やっぱり、ズーッと下がったおんね。

潤　大正には下がったのね、もう。明治時代が一番そういう具合だったんだね。

吉　んだね。

潤　本家だったかな国男さん家だったか、お参りするお客さんで部屋いっぺ泊めたったって。ご飯炊くのに、ご飯ザルで炊いたって。

吉　ザルっしゃ。あのね、マガマ(馬釜)でしゃ、常にね、馬に水沸かして飲ませてたのしゃ。そいっちゃ火ドンドンと焚いて、こういうザルでがすた。今でもあのね、ご飯上げた頃ね、大きな飯ギリあんでがすと。そうしてね、ザルで焚いてね、ほしてね、オモスのは。その大きな飯ギリに入れてあけたとこをもってオモスのっしゃ。ほいて、ほんな黒椀で、ごっつおだって。なあに、そのあたりは、ほれっしゃ、魚ってないから精進料理だから。ワラビとかシドケとかウドいえば山菜っしゃ。ほんで、喰ったんだからなや。味噌汁一杯きりで。魚肉全然つかないんだから。ほんでね、前の二階のこういうまっ暗なとこさ泊まったんだからね、皆、いっぺ（一杯）なって。

潤　どっちから来た人、どことか決まってたのすか？

吉　大体ね、おら家はクリバラ（栗原）やっぱし多かったね。ほれから、こっちはなんだ塩釜だか石巻ね。その隣はなにっしゃ白石の人達、根白石ね。ほこでは、ほんだおんな、大きく泊めたのは、四軒すか。

潤　ああ、やっぱりね。その他にもやっぱり、家あったことはあったのすか？四軒の他に。

吉　今の林右衛門さんだけだおん。ここではやっぱしそういうこたやんねでしまったね。

潤　侍ね。

吉　そのころはねやっぱり、家に居たり居ねかったりしたことなんぼもあった。

潤　ああ、そういうことでね。林右衛門さんのオジイチャンのあたりすか？

吉　オッピだね。

潤　オッピサンね。

吉　オゾンツァンの時もしねからな。全然しねでしまったから。

潤　ようするに番所代々やってたわけね。林右衛門さんとこは。

吉　番所やめたの、おらわかんねおんね。

潤　代々引き継ぎ……。

吉　代々でもなかったんだね。

潤　うーん、ねがったの。番所やるんだったらね、苗字帯刀でも許されたったんではねえのすかや？

吉　んだべねぇ。早坂でやったんでは大したもんだ。

潤　早坂っていうのは、やっぱ、本家から分かれていった早坂とみて良いわけね。

吉　本家から分かれたんでもないんだおね。

潤　あ、そうでもないの？本家から分かれたのお宅？

吉　ほだね。……一番ならここで。

潤　国男さんとこは同じ早坂でもなにっしゃ。

吉　ベツ（別）したやつ。

潤　本家でも別？ほんと、大っきいと違うんだな。そいから、喜一郎さんは？

吉　喜一郎さんは、やっぱ国男さん家から別れたのっしゃ。

潤　ああ、喜一郎さんは国男さん。それで、お宅は本家から……。

吉　うん。

潤　ああ、そういう二系列ね。同じ早坂でも三本の系統があったんだね。

吉　ほんだね。おら家も別れたのっしゃ。おれで四代だから、四代前の人が。ほれ、来たんだおね、ここさ。マンキチ（万吉）って人。今では五代だけどっしゃ、おらいでは、今に六代になるんだけっとも。やっぱりね、おら家は四軒でも一番新しいわけさ、ほだから。

潤　一番新しいにしたって、随分イグネ太かったね。

吉　イグネすか？イグネってものおがるもんだねや。一回切ったんでがすと。アオマンから財産受けっ時っしゃ。とってもおれ金つまんなくてしゃ。だから、イグネだけ切ってもらったわけっしゃ。イグネばりなんだおんや。あん時の金で七万

にむすばったからね。とっても、おれね、その七万の金ね、だれ、先生、なんだおんや三六万だおんや、昭和二十四年だいっちゃ。で、おれ、とってもわかんねと思ったのっしゃ。だけっと、おれのババアほれ、トウチャンこのさい財産が買わなかったら一生求めらんねから何とかして、なんぼなにしてもいいから、やっぱ買わなけないと、おれ、切に言わったので、おれ、ほんと、買ったおんね。ババいねけら買わんなかったね。

潤 バアチャン偉かったんだな。

吉 んだ。あのババいねけら、おれ、全然やっぱだめだったね。だからね、女もっしゃ、力なっときゃあるもんだと思ったね、おれね。だぁれ、昭和二十四年に決めて、満金払ったの、やっぱ二十五年に、皆払ったからね。

潤 その位にしたって、あのイグネだって五、六〇年たって、少なくとも五、六〇年ですぺ。あの頃で一〇〇年位だすぺ。

吉 一〇〇年たったのは。だれ、おれのオッピの。

潤 ああ、そうか、そうか。本家の家あたりはイグネなかったのすか？

吉 あったの。だあれ先生、こういうの皆切ったんだ。

潤 皆切ったのね。

吉 やぁ、ヨゴだった。ほとんど六尺あったおね。

潤 すごかったんだなあ。

吉 ほんとに、だけっともね、あの当時みな財産やっぱり沈めたんだおね。

潤 とにかくしょうがなかったね。貨幣の価値が違ったんだから。

吉 それからなんだお、ほれ、安く財産求めてこんだなんだ、四年前に一戸建てはいんにゃだった。ほだから、満足な一戸できねわけっしゃ。ショウ出して。なあに、ねえのだお。ユウコウギョウ建てたようなもんだ。三六万だおんね、なにすると思ったね。

潤 三六万借りてこの家作ってしまったわけね。

吉 ほねえのっしゃ。財産買うに三六万だから、家作るのにまるきちねえのっしゃ。

潤 何買うのに三六万す？

吉 山買う……。

潤 山か、山買うに三六万。ふーん。

吉 田んぼと畑はえかったの。ほんで、おれ、ほんとはニオケに建てたのさ、ほれ。財産たったくて。そいつは楽でがした。山だけはわかんねかったおね。

潤 頑張ったんだな、トウチャンもな。

吉 ほんとにね、今考えるとしゃ、だめだね、おれ。とうとう

これまでやって来てさ、前から、なにしゃ、銀行の信用あって、おれほんとに助かったおね。山買うんだこったらいいからなんぼでも出してやっから儲けずて言わったおん。止めらったほういいね、銀行さ。困ってそうすて、用たしたから良かったの。だけりゃ、おれ、わかんねかったね。人から借りたんでやっぱりきばったもんね、おれ。それから、今んだ一家建てっとなったお。カヤ葺いたから。スゲ山でも何でもほれ、なんでがすぺ、なんぼかあったからね、葺いたのしゃ。して、こんだ、また、二年目三年目になった。こんだ、別家二軒出さねけねえし。だからね、やればやんねえもんだね、先生、やんねければなにも出ねえ。

潤 確かにそりゃそうだな。だから、おれはどっかいって一〇年かかってけっとも、何か出来上がりますか？

吉 できすわやー。すくんだったおんは。

潤 とにかくおれは、生涯をかけますと皆んなに言ったんだから。

吉 よくほんとにこいって、夢みてなもんだね、今考えってみっとしゃ。

潤 全くそうだね、話聞くとね。

吉 夢だね。ほだからね、あたりからっしゃ、こばまったの、うんと。なじょなことしたか、ほれ、うーん。先生、今ひとつやらいん。

潤 話聞いった方いいんだおん。これ以上飲むと目見えなくなんだおん。

吉 さぁー、ほんとに苦労もしてみたし、もっともなやっつからご飯焚きしたんだからね。だれ、ほれ、なにすぺ、ババ死に、自分のね、お袋死んだお。ほだから、女なしになってね。オバとオジとね、オヤジとオッピだお。オバの厄介にうんとなったの、ほだから、おれはね。

潤 オバチャンはこの辺にいんのすか？

吉 なにしゃ、種沢さ行ったった。亡くなりしたおんわ。

潤 はぁー。

吉 なにしゃ、なんだお、そのしたたいて、ほれ。

潤 その種沢にいる人が、四十才前後、五十才前後だか、よく年わかんねけど、オバサンの娘じゃないのすか？

吉 おれの娘だお。オバ行ってるために、おれの娘貰われたわけだお。今いるの。

潤 そうか、なんかお店やってる家すぺ。

吉 え？種沢だから何もやってないの。

潤 なんかおれ、記憶違いなんだな。なんか、おたなんとこできちんと座って話し聞いたんだが。どっかこう食い違ってんだな、おれの記憶な。その種沢のね、娘まではわかったんだ

がね。今度はおたながありすぺなんてくっつかってくんだね、なんかおれ、おかしいんだな。ここ車でいかれんの？

吉　通りじき見えるおん、先生。

潤　え？

吉　なにっしゃ、川向けえだおん。

潤　川向けえ？川向けえなら床屋でねえの？

吉　んでがいん、いや、種沢だって。床屋からちょっと上んなけないだおん。

潤　新しい道路の方？

吉　そうそう。

潤　ふーん。なるほどね。

吉　おもしぇもんだやこんで。やっぱ、やってみればやられけっともしゃ、やんねとなにも出ねんだね。

潤　確かにそりゃそうだね。

吉　だからおれだって、この家建ててこんだ、別家二軒だおず。

潤　宮内ってとこご存知ですか？　山形の。

吉　わかんねね。

潤　宮内の熊野権現は地方の古刹なりと、米沢なんとかは、宮内町に熊野権現なんとかセイショウグウあり、社領五石鰐口のなんとかに、宮内にあるのがね、船形権現の元なんだよね。ちゃんとこういう字引写してんだから。

吉　もっともね、山形では、御所山だからだけどもね。山形の方ずるいんだおね。ほんとは宮城県側。あっち強いの。

潤　してそこんとこをね、宮内にある権現さまをね、ガンモウダイミョウジン（願望大明神）ていったんだって。願うこと全部叶えてくれるって。もっともね、立って祈れば立たぬまに、座って祈れば座ったままお願いが出来たという、船形山という山はそれくらい、霊験のあるお山だって具合に書いてある。

吉　ほー、ほすかや。

潤　立ってれば立たぬまに、座っていれば座ったままで願がかなったって。ほだから、皆行ったって。

吉　んだからっしゃ。おれもしゃ、十六からね、なんぼ行ったかわかんね、数えつけらんねんだから。ほいつね、書いとければよかったのさ、ほでねんだおん、おれ。一年にもね五回も六回も登ったことある。しょっちゅうだったから。

潤　我庭だおんね。

吉　我庭だお、ほだからなぁにほれ、おらね、学がねえからっしゃ、書くなんて。書物なかったおんね、ほでおれ失敗したね。だれ、先生、おれくれえ学のねえのないんだおん、ここに。

潤　学か。

吉　なあじょに、学校する暇ねんだおん。ご飯焚きさ、あと、山さすっぱって行かねないすぺ。だからね、稼ぐのだけはおれね、まず。やっぱ十六からっしゃ、イチニンメエ（一人前）になってしゃ。だあれ、なにっしゃ、山さ行けばね。なんだおんや、横尺の六尺しゃ、二棚切って終わって済んでちゃんと来んによかったおん。ほだからほれ、おれな家なんて苦しかったんだべな、稼ぎ一方でおらやったからね。ほだから、なにもかにもわかんねもんね。

潤　稼ぐ一方にはね、稼ぐ者には貧乏追いつく暇なしって。ほんとだな。

吉　ほんとでがす。

潤　何にも考えなくたって働いてりゃね、貧乏追っつかないって言うんだよね。

吉　ほんとにや、誰に聞かったっていいからおれ。ほんでも、なんだおねや、今の人達っしゃ、皆んな子供みたいなもの語るっしゃ。自慢語る時ばりいっていわれっけっとも、自慢でもなんでもないんだ。おら、ほんとに。

潤　そういう努力、わかんなくなってきてるんだおんね。

吉　わかんねね。

潤　なあに、自慢話って言ってしまっては。

吉　あぁ。

婆　ご飯やる？

潤　軽く、軽くいただきす。

（中断）

吉　やーや。

潤　さっき来た時、若い人達ずーっといたの、あの方達なにっしゃ？

吉　女達すか？

潤　ううーん、男、男の若い連中。

吉　ここのね、なにしゃ。内水面のしゃ。

潤　工事やってる人？

吉　うん、今魚飼ってるとこのね、今三階建て建てるのばりしゃ。あの人、若いんだけっとも、

潤　ふーん。

吉　酒はおれの半分も飲まないし。

潤　だって、おかずこんなん食べたんだよ。これ、明日の朝食べっから残して置いてね、いたましいから。こんなん食べたことねんだから。食べらんなかったおん……。美味しいわ。

吉　ダムでばさ、ほとんど沈むんだお、沢っぷちしゃ、こっちやさ、だあれこいな杉なってんだみな。なんぼか金っこになんでべししゃ。

潤　それ、取れね、切れば。

吉　うん。そいつ考えてたんだ、おれ。

潤　何反歩くれえあるの？

吉　何反歩じゃあねえ。

潤　何町歩。

吉　うん、んからだおれ、そいつ。

潤　材は杉すか？

吉　うだおん。杉さ。

潤　三〇年か五〇年位？

吉　んだねね。あとなんだおね。こっちさ道路でてしゃ、土地おいたもんだこんだ。だいたいほだから。分けたお、後は。だからね、そんなもんでもあればなんとか出来っかなと思って。ねえとはしゃ、金持ちに相談してやったようなもん。わかつうこた分かってんだ。

潤　やろうとすんには、どういうやり方すんのっしゃ？

吉　だからね、まずもって、一回はケンでやってみたんだから、なにっしゃほれ、シケンボウでね。三五〇ヘイダで四づつあんだから、ほんで止めてしまったんだから、ケンキュウしゃ。

潤　場所どの辺？

吉　場所はちょっとここの方だ。どうせやんならわが土地さやっかと思って。向こうでやったのは、財産……取ったから。あそこね、ほんな高くないけどもね、……やっぱ、高いとこでやった。ここさもね、あんだおね。ほちつやりたいと思ってるんだおん。

潤　少し低めの土地考えればいいの？

吉　うん、あんまりつがねえもんだから、あいつ。ずっとひろけんだおらいんとこ。ここは、平坦でがすぺ。

潤　今の話聞いて、ユヤチ（湯谷地）からでも引いて来るのかと思ったんだ。

吉　そんなことすっこたね。いっくらでも沸くんだここ。あすこから持って来るんで、何億って金いるおん。なんとか、考えて。

潤　とにかく浴場は鏡の間にしてけさいん。

吉　だね、これからは。

潤　一番綺麗だ鏡つけると、ずーっと壁に。

吉　大きい鏡ね。

潤　どうせ、湯気でよく見えねんだから。

吉　あれもなんだね、四方につけた方いいのね。

潤　そう。

吉　これね、湯治はしねけっとも温泉だけはどこでもててかったから。これからは、ほんと……。

潤　その年にしてそういう考えしてんだから、おれもうかうかできね。

吉　先生なまだ大っきい考えある。

潤　そうじゃないんだ、世の中にいっぺんご恩返しだ、ささやかに。皆んなの話はこうでしたということでね。だって、文献にないんだお。

吉　先生はね、全部社会さ知らせてもらわねけないな。

潤　うん、必ず国会図書館に納本しますからね。

吉　そいつが一番だ。たいしたもんだ、あんた。本作ったこったらなんだもね。何百万だか何十万だかわかんね。おらわかる。

潤　売るとしたら何千万、いや何十万で売らねと元とれねぇお。何十万でなど買えっこないから。かえって儲ける気しねけ、いい。ただ恩返しなんだ。あの、金五郎さんのことばそのまま入ってんのあっしね。こうやって吉蔵さんのそのまま入っからね。

吉　おれのはしねぇでけさいん。おれ、どもりなんだよ、先生、だから困んだよ。

潤　抜いてけばいいんだおん。つながるの。

吉　おれね、若い時さ、真似しったんだおね。下駄屋いたったおんね。その人うんともごな人でっしゃ。その人の真似うんとしたもんだっつうもんな。ほんではやっぱ、結局、いくねえんだおね、あれ、真似すんのは。どもりの真似はするもんでないどや。なってみてほんとそう思った。学はねえし、孫、嫁に負けんだおんや。

潤　あ、これなんて読むんだって知ってる者には教わんの、何も恥ずかしくねえよ。

吉　ほんだもね、今の人達はなんだ、高校すない人はいねんだおね。おれみたいな者はいないんだ。だけっとも、なんだか、やっぱり気持ちいかったんだかなんだか、まあず、どこまでも使われした。七十五までぎっちり使われたから。だからおれ、どうだんで……役場さ行って。……疲れて来るさ。返ってダメなんだね。次から次、役でもっしゃ、村会議員よりまだまだひどいあるね、民生委員とか保護司とかね、重大責任でがす。おれほんとに、こいってねえんだ。学はねえし、うんでもね、一三年勤めたおれ。

潤　そういうのはやっぱ、信用あっから頼まれるんでやむをえないね。

吉　だと思うんだね。出る出ないでねんだね、あいつね。やっぱり信用の問題だね。おれ、苦労したど、ほんとに。なんぼ信用あったって、やっぱ学一番でがす。学さえあればなんじよなことでも出来る。

潤　学だっていろんな学あっからね。おれみたいにガクガクしてんのばっかりでは困るおん。

吉　んだんだ、そいつも困るけっともね。

潤　そういう話はそれとしてね、とにかく、こう心がほんとにあったまる感じするんだね。あの碁盤だよな。こう足などやって彫って貰ったでしょ、あと、チドメんとこなど作ってもらったでしょ、チダマリっていうのかな、あんなのほんとに、商売人だったらね、ああこりゃ、商売人のあれだ、素人があれだけできるのちょっとないんだよね。それからスミビキね、普通だったら刀で入れんだよね、それ、ただのあれで入れてけたんでしょ。あれが、他にないってことが大切なの。宝なんだよね。宝っていうのはね……。

吉　なあ先生、また欲出ったから、先生。

潤　あんの？うん。泣かせるー。ダメよそんなこと言ったって、名前書かなきゃだめ。何歳と。

吉　ほんだら、おれ書くよおれ。

潤　名前書いたら頂く、おれ宝物だから、吉蔵さんのやつはみな。

吉　あれ書かなかったいちゃ。

潤　碁盤はね、私お金ねえから恥ずかしいっていったの。そしたらね、いらねっていうんだよね。

吉　んだいっちゃ、だーあれ。

潤　ほんだら名前頂すって言ったの、私。そして名前書いてもらったの。まあびっくりしてるよ。碁盤ね、こういういろんな節の模様の美しさどうだって。ひっくり返してやっとびっくりしてんだ、えーなんて。

吉　おれはやっぱり好きなんだね。今はテーブルも作ってる。小指っこをね、

潤　頂いた板ね。カンナもなにもつけねえよ。木の肌一番大事だって。

吉　あいつすかや。

潤　そいでね、でも、使うとすりゃそこんとこにネルを置いて、その上からビニールっこ置いたらしとっとした机になるの。台など箱置けば台になんだから。そんでね、おれの机の上にその板上げてんの、それで勉強机だよ今。ほだから、広々としてとっても感じいいの。時々それでご飯食ったりしてんだから。

［21］「薪山・番所③・炭焼き②・軍隊」　録音時期の詳細不明）

登場人物　小川久五郎・小川たかの・吉田潤之介

久五郎　少し下がって街道あったんだおんな。

たかの　鴫原先生に教えらったんだ。関所あった……、ここさ出はった、原っぱ歩いてそこさ出はったんだ、昔。

久　こっち、今度作った道路だからね。

た　ニノミヤさんのとこでないの。んでねえの、昔はね、ここさあったんだと。昔は何してたのというか知らねけど、おら、親父から聞いてた。

久　山越えて山形さ行った。

た　こいつ歩ったの、杉藪通って。

潤　船形のてっぺん越えて行ったの。

久　てっぺんでないの、登山小屋にはいっとこに、登山小屋さ回ってはいっとこさ、新しく、登山小屋の落ち口のとこから、新しくあんの。

た　関所あったんだ。オレ親から聞いてた。

久　山越えて山形さ行った。船形の登山小屋さ入ったとこ、登山口の落ち口から、タガラモリの南通った、一番低いとこ。

た　御番所とかなんとかつうもんはここにあったんだ、ここに。

久　御番所やっぱり、タダオちゃいの西のウチ。

た　西のウチはよそから入ったっつおん。おら、ジジに聞きしたのはここにあったんだと聞きした。

久　ここにあったのは、ウチっしゃ。伊達政宗公の薪山といって、北泉の大倉の上からっしゃ、ジミョウジの、あれから目通しの、あれからこっちはね、ここのタキギザン（薪山）といって、伊達政宗公の薪山をもらったものだったつおんね。書類もあったものださ、そいつをな、何してなくなったかというと、種沢の今区長してるオッピだな、……が、おらいで、例えば、借金なって一応この家をその去った時分あったんだとしゃ、吉岡のツルマキという下駄屋から借りがあって、借りのその代わりに取らったというようなでね。そいつをね、オレが買うとか、あるいは金を取って来て払うということで、……がおらいの家さ入ったことあんだとさ、おらいの家さ。そん時にそういった大切な巻物あったんだとしゃ。

た　んでないの、伊藤ハンベイという人に借金あたったんだ。

久　アチノハンベイ。

た　アチノハンベイか。

久　ジュウゴジイツから大倉の北泉の峰、それから、薪山といって、ここ部落で貰ってたもんだ、書類あんだつとや。青森営林局にあったと聞いた。書類いないから今度ね、とっけさったもんさ。あんだよ。大倉まで目どうし、こっちは升沢の

薪山。伊達政宗公が焚く薪をこっから持って行った。サンボウロクスン（三方六寸）とね、三角に割ってとったもんだつね、三尺の長さにして、こっちゃも六寸こっちゃも六寸、こっちゃも六寸にちゃんとキッパつけて割って、切ったもんだつおんね、それが三方六寸。

潤　六寸の三角ね。

久　それを出すた時にね、おれのバアチャンが言ってた建物がしゃ、お侍さんがそこで、お役所にしてた家があったの。御番所はやっぱり、タダオちゃいの西の家にあったの。

た　おれ、ここにあったと聞いてたおんな。その人達が、なあ、ジイチャン。その人達が泊まったのな、裏の池のとこにあったんだと。

久　そいつあったかもしんないな。

た　そういう偉い人が泊まったの、裏に池があるんでがす。そこにあったんだと、それはおれの親父に聞いてたんだ。家の床下さ魚をね、こうへって（入れて）やって見せてたんだと。そういう偉い人が泊まってたんだと。

潤　喜代三郎さんすか。三代吉さんすか。

た　おらいの親父は、ゾンツァマは五郎吉、親父はレンジロウという人だから。

久　川流すてやったのね。条件付けてここの部落ん人二人出した。薪山として。ここの部落のものだった。その書類あるらしいね。

た　偉い人たちはね、タダオちゃいの西の家あっぺちゃ、そっから入って裏さ出たもんだと。

潤　今では、吉岡に行ったり来たりけんとも、そうでなかったんだな。

久　その伊達さんからの書類ね、吉田村の役場に在るとキエモンさん言ったよ、大和町の役場にいってるはずだと。浅井清三郎さんわかってるかしれない。

た　おら、青森営林局にいったと聞いてた。

潤　しかし、大ざっぱなこと言ってたんだなや、あっちからこっちへの目通しなんて。

た　イエサブロウという人が、山形から来ておらいにいたんだたっと、おらいの仲間にね。おらいのゴロシチが、いっそ子供ばりいて、子供に喰いつぶされてなんぼかせてもわかんなくて、家だの屋敷売ったと。そして、あすくの落ち口に山あんでがす、おらいの。そこんとこ我の家、土地に小屋建てて入ったんだと。そん時何にもいらんから家さおいてさったんだと。その時、イサブロウという人がみながら持っていたんだと書類。

久　そん時は、船形神社の今日の祭典のような時、刀でも槍で

も鉄砲でも、みなね、何でもあったんだと。その時ね、升沢部落でなく升沢宿坊というもんだおんね。升沢宿坊。宿坊と言ったんだ。

た　偉い人泊まっただから今の西の家っこでも、裏板あがってさ、押し入れでも何でもあったんだよ。みな壊してっけっとも。

た　一升枡も作って売ったんだとや。今なんか……、さらっとしたもんだ。前は、やっぱり作って来くんの。

た　だからおらいでおれの親父が生きてるうちはね、ここの台所からかっしゃ(上)でオボコナシすんなって、おらいでは。

久　んだ、ニワでな。お枡作る尊い家だから。ほいで、物置きでばりなした。

た　オラ、物置でばりなしたんだ。

潤　やかましいものだったんだね。

久　おれのヅンツァマがやかましかったね。血を座敷に上げわかんねといってね。

た　やかましいヅンツァンだった、おらいのヅンツァン。肉類かねってんかったね、死ぬまで肉類かねかった。山さ行っても、にしは、ほいもの喰うからて、四足二足は絶対かねかったね。ほいもの喰うからあんべ悪いって薬飲むだ、オレは死ぬまで薬は飲まねってね、もっとも薬飲んだの見たことねえもんね。死ぬまで薬飲まねで死んだ、八十一で死んだ。チュウショウたかって、五年生きて死んだっけども、薬飲んだの、おら、見たことね。自分の息子が鉄砲ぶち好きでね。獲ってきて煮っつうと「やぁ、りんきやー」と言いした、われーの息子さや、「りんきや、ここで煮んなや」「何でー、外で煮なけね、われ家で煮っつとね」って言われっつとね、「困った息子だー」と言いすたね。

久　「今日はまず、熊煮た鍋投げてくっと思ってました」なんていんだから。「なんぼ言ったってわかんね、おらいの息子」

た　「箸なんかかねでくんつぇ、」そしてね、箸なんか竹こで削って、おれの箸と混ぜられっと大変でがすって、箸ね。箸なんか竹っこで削って、長く四角に作って喰ってけした。混ぜられっと困っから、かてかったんだ。

久　私らが現在六十七才だから、だいたい、学校に行ってる時分から、えーと、升沢分校、大正十三年かや阿部先生いたの、な、大正五年頃か、まだ升沢分校というもの設立してないんです。その時は、やっぱり、早坂国男さんとこにね、西にあったんだ。升沢部落としてのね、だいたい何戸だ一二、根本つぁい一軒在ったから五軒くらいあったんだね、その頃、五軒くらい在ったのは、大正よりずっと前ですよ、明治ぐらい。その頃にギョヤ（行屋）というものあったんだね。行屋とい

うもの何だというと、例えば、お正月の八日お精進かね、何か病人が出来た場合、そう言うよな場合、神さんをそこで拝んだそうですな。何とか直してもらいたいとかね、そう言う祈願を行屋でやったというんです。そうような建物であったんですな。そこへ、私が学校したんだ、学校手習いね。その時は、恐らく現在の机のようなもの当然なくて、本当に我々で、板で作ったカツバコを横にして勉強したような状態でした。それで、毎戸から児童ある人が、一つずつ持って行ってやったと。横にすると、なるほど本なんか入れても引き出しのようになっていて、上の面（つら）がカンナもかけないような板の上に本を出して、我々教育受けた先生としては、今、大和町の吉田、吉岡町との境のイチノサカっていうところの、変電所あっとこのちょっと手前の家ね。阿部民次郎という、年取ったね七十ぐらいだったんだな、民、次郎と書いてミンジロウと言ったんだっちゃ。その人が学校来てね、校長は菅野小一郎（大正二年十月～同十四年六月）と言う人。そうして、私らは手習いした。現在のような先生でなくて年も取ってるから、恐らくは冬期間中なんかは寝巻き、被り物は、目出し帽という毛糸の、マナグ（眼）と鼻と口が開いてだけの被ってね。まあ、そうしていたような状態でした。そして竹の鞭を持って、自分は炉辺にいて指図をして、第何ページ開けろと言って、児童は、ハイと言ってあき開いて、先生がお読みになって、そうして教育してけたわけしゃ。私らは尋常六年生まで、その先生に教わった。五年から建て始まって、六年にできた今の学校できた。

た？　おらはただ一回も入んない。

た？　おらは、六年生の時できた。ジッチャンは、学校建てる前に板背負いした。

久　その先生が、あの学校にちょっとだけあの先生が入ってやめて、あと、家帰って亡くなってしまったな。いうて阿部民次郎やめて、川村藤之進っていう人。その当時さ、おれのことだけ話すんだけども、行屋で勉強する前にね、私は、船形荘で育てられたんだからね。私が、どう言うわけで小川名乗ってここさ来たかというとね、私が、実際は、宮床の難波生まれなんです。現在の早坂吉蔵という人の親に万蔵という親がいてっしゃ、その人の。後家っちゅうことあったが、私は、六つのとき、吉岡にババとガガと生活して、私も一人慰めて生活してるうちに、吉岡の青戸マンベイという人に、下駄屋をやってたもんでね、取引関係上、そのお世話によって、おらいのガガが、早坂万蔵のコウサイ（後妻）に来たわけっしゃ。そん時、六つなんです、おら。覚えあんだから。そして育てられて勉強してるうちに、なかなかその頃現在の船形荘

でないからね、まず、困った時代だったんだね。ガガは後妻したが、米もない菜っ葉のカテ、大根のカテ、春はわらびガテ、藤ガテ、そういうようなの。そして南京米とかね日本米でなかったんす。そうしているなかで、私、学校で行っても、炭も焼かねとかんねけないからね、下駄もやっていたけれど、学校に行っても、私、今日は困るから、炭背負いだ、炭出しだ、立て方だといって、学校に迎えに来られて家さ戻って来るわけしゃ。スゴ背負って窯に行けといわれる。スゴ背負って行って炭出しをしたり、木を投げてやったりしてね。その頃から炭焼きというもの、ここで始まったんです。それまでは、あんまりね、長杉とか下駄木取りとかの状態であまり、炭焼かなかったんですね。そして、今度、私が、それで学校卒業して、ずっと手助けに炭焼きをして、指導されながら、炭焼きになったわけなんだね。

潤　誰指導したのす。

久　兄貴たちが先頭になって、吉蔵は今のさね、その人が私義理の兄弟になったから、あっちは先妻の子供だからね。手助けに歩るって。兵隊検査受けて、兵隊に四連隊に入った。そして、私が、担当者は早坂万蔵でいったわけっしゃ。そして行って、その時、私は、宮床の小川キュウサクというジジがあって、そのジジの孫長男となっている関係ね。輜重兵で、一年半で輜重兵除隊ということになって、輜重で陸軍歩兵上等兵で善行章を貰って帰ってきたわけっしゃ。

潤　すごいね、上等兵。

久　ここでは私が上等兵となって帰って来たのは、日露戦争後、大変、四連隊に入った人は沢山あるんだけども、下原、種沢、升沢で、一〇人近く行ってたけども、上等兵つうの初めてだおね。役場に回ってご挨拶したが、係りがヒラクチの阿部ヨシエさんという人だったからね「いやーどうもご苦労さまでがした」、「いまだかって、日露戦争も兵隊ができたけっども、小川久五郎さん一年半で輜重で除隊したのは、ほんとうの珍しいこだ」と誉められっしゃ。帰ってきて、得意な事は射撃、銃剣術、非常に得手だったんだね、射撃上手かった。銃剣術も、荒い方だからね。歩兵四連隊の第三大隊第一中隊の名誉中隊に入ったものだから、非常に励まされてね。第一次中隊の四番のライオンて言われたんです。現在、賞状なんかもあっちの方にあんけっとも、連隊に……た時私体弱くてね、弱いっていうことはあまり暴飲暴食して兵隊に行ったために、胃が悪くて、一期前は休んで、一期……してから、大分一生懸命やった結果、一年半で除隊とされたが上等兵公舎には入んないでしまった、一生懸命やった関係でね。中隊大隊では、射撃とか銃剣術は優勝して、賞状なんかまだある

んです。そして、帰って来てから三月だから九〇日、吉岡の伊藤先生、医者ね、体格のいい人ね、私は、銃剣術でここをやらって肋膜肺炎になってね、病室がなかったからね、百姓屋みたいなでね。早坂薬店で泊まって治療した。そして、危なく肋膜でないかとか、肺病でないかとっかって、避病院に下げらっとこしたが、大学から出張して鑑定してもらった結果、これは、肋膜肺炎であるけども避病院に下げる必要ないとのことで治療して治って来て、その十一月でしたか養子に入って、おらいのババと一緒になった。もと御番所あったという家さね。そして、親が非常に胃が悪くて後に胃ガンで亡くなったけども。あと、弟が四つになる時そこに来てね、そして、私が一生懸命炭を焼き始めたわけなのしゃ。その時大体一冬に、十一月から四月ころまで三五〇から四〇〇位は出したんだね。そん時は国有林払い下げの時でね、窯はどれ位出るかというと、大体三〇俵ないし三五俵ね。三窯で一〇〇はどうしても出たんです。まず、すけたことも月に四つかね三窯というと一一〇俵、一一五俵かね、三窯だと。あるいは、三窯、四窯やったからね。そのうちには、全部山さ行って話し合いになって、熊狩り行ったとかシシ狩りいったとかって遊んだこともあるし、兎狩りして遊んだこともある。養子に入ってから、その時鉄砲ぶった。昭和二年の年帰ってきたらね。帰った年の暮れに行ったんだから、昭和三年の十一月二十二日だかちょうど、時期あんべー時熊狩り行って熊獲ったわけだったのしゃ。炭焼きしながらね。その頃、物もないから、国有林に、大体、四キロ、六キロ位行って焼いた。船形さんからずっとまだ奥、だから、窯打って炭焼いたんです。その位のとこ朝早く起きて一回炭背負って　来るんだからね。三俵背負って　来る、ご飯食べて行って、木切りしたり背負って　集めたり、立て方をしたり、火を焚いて、ヒョウソウしたりして、部分的に毎日やって、夕方また三俵背負って帰ってきた。そんなような状態で升沢で仕事したんでがす。なかなか、あの頃の炭焼きは、米背負うより金になったかもしれないね。その頃から炭焼きしたんだから。その頃の升沢部落はね、ほとんどは炭焼きだね全部。何戸あったのやー。一八ねえさーまだ、ここに住居構えないでね、キリエ（寄留）ってものしてね。山に小屋かけて、それを自分の住居として炭焼きしてたもんだね。それからだんだん、だんだんにここに家建てて住んで、住まいにたったけっども、家持たね人あったんです。村役場に寄留してね家持たね人があった。例えば遠刈田から来たとかね。さっき帰った根本さんなんかもね、家ねんだから。人の家の裏の方とか茶の間とか……。

（中断）

［22］「カミサマ・オナガドコロ。鏡ヶ池」

（昭和四十七年五月二日）

登場人物　老婆・潤之介

（宴会。唄が続く。）

老婆　ね、ホウイン（法印）って、今の従兄弟、ジイチャンのカクメェの従兄弟ね。今おがってれば二十なんぼになる、わけー、ヤロッコども二人ね。トチコナシテ一番目と二番目と死んだんでがす、ぐっと悪い病気でね。ぐいら遊んで丈夫で遊んでたのっしゃ。ちょうどあたった一番目死んだら、こんだ二番目も死んだ。お医者さ行かねうちさ途中で死んだの。そして、二日のうちに二人亡くしたの、二日のうちに。だれー、ジョウニンサマさ願かけたのなんだのって拝んでたってこと、おらいにさっき語ったっけ、八十二になるオバサンは。こういうに子供ども拝んでけったとね。願わたししねからこういうふうになったんでねかったべし。ジョウニンサマは新たなジョウニンサマでこいな。わたしもジョウニンサマだってカミサマみな信じてっからなーと思っていたっけ。したれば、なにかったらなにかったら、ほれほだからって、わたしなんでかんで考えて、ゴロゴロッてつうヤロッコドモ、ぐぎだうちに死んだったから行ったたおんね。ほれ、、先生が今小川さいに行って来したべ。りっぱな小川久五郎さんっしゃ。久五郎さんいっとこでおら話したったおんね。なにバンサマこんなの語ったら、カエルさションベンもなんにもたてらんねべ。そんなばかなことカミサマ、そんなカミサマ、カミサマだのなんだのあるもんでね。道路さションベンも何もたてらんねとかなんとか言わったおんな。日がたって。いやー、小川さんそんなもんでねんだどって言った。カミサマひがさな、おれうんと好かねど、先生。第一、カミサマ一生懸命信心して、一から一〇までなにしてるとこさや、ひがさねのってことがいん。おれ、ほんと、そだからね。一〇人が一〇人、一〇〇人が一〇〇人が十色さ、行く人はまた持ってんでがす、私一人。神信心する人は教えられっと、教えられねとちゃんとする人に。

　食べなさい、やっこいから、私取った筍だからこいつ。今朝煮つけたんだから。

潤　そして、そしてっしゃ。そいから、教えて。

婆　だからさ、そいふうに神信心して、ほいつさ一生懸命教えてヒガサネんねのこと教えねっこと、ねっこと。ほだからね、おらいの大っきな家でカミサマ宿なんだけっと、おらいのジイチャンも見てんだや。ぐりる、なかま古い家だけっとぐりるカミサマお堂っこいっぺあんでがすと。仙人さんのこ

と語りしたべ、あれ。ダテ仙人つうことあれ、仙人さんっつ人は四十なんぼでお隠れになったんだとね。あの人は法印様になってこの村に来て、一生懸命毎日この拝んでた人で、前の自分の氏神さまみてにしてたんだからね。いつも居る小屋でね、あのカミサマ。ほうして毎日拝んでたんでがすと。んだから、私行くとワラまたいであのカミサマね、ほんどもみながらいだいなたかいほんどもみながらだって。小さい子供達……さんかけたりして、見ろ、安田さんが……こいなのはとってくないかって。なんだべこんなまるっこかかえたりなんだり、あんた達貴様達、こんなことしたてるもんでないんだと。ほんぞんしてめいめいからっぽ……仙人様だなんだといてて、本尊……来てて、本箱さいっぺんにへってきたとこいなのは、みな取っておかねねんだ。こんなまるっこ書いたり三角だって、子供さ預けるもんでね。こいつしまっておけ。その晩に私丁度寝てた時にめかったから、しまねでいたん、しべておけと。なんでかんで皆書かってんでがすと、そいつさ皆。えらいく上手、字。筆で書いたんでがすと、またあいつゾンツァン。仙人様、誰が書いたんでいったいあいつ、えらいく、あいな字なんだ、先生。見ていてもなんでもがいん。筆ね、真っ黒くすっかりまてにして、筆で書いたんだよ。まーず、あの字、かなっこでよし字でよし上手に書いたもんだね。まず、こいつしまっておいてしまったんでがす。

潤 また別な箱出してきたからね、ネズミだのクズだのいっぺだからこのみな投げらせてね。

婆 ネズミ入っていたの？

潤 ネズミ食ったような粉になってね。

婆 う、うん、ほだほだ。

潤 それ皆とりはらってね。畑さ投げてね。別にこうやって新聞紙で包んでてけさいって、虫へんないように。

婆 ほんでそいつ薬品やった紙、カミサマに、火つけてそのままぶんなげて……マッチで火……。

潤 袋に入れてした、あの嫁さん、ゴミ。

婆 ……先生、行かねうち……、帰えねと……。

（テープ中断）

A オナガドコロって言ったんだおね。

潤 オナガドコロってどう書くのっしゃ。

A さぁ、どう書いたんだ……。

潤 オナガドコロっていうことは小屋のことね。

A カミサマの小屋のことね。

潤 ユウヤチ（湯谷地）にもカミサマ祀ってあるんですよ。それから鏡ヶ池にね、鏡沈んであるはず。

A　ああ、鏡ヶ池か。

潤　うん、だから鏡ヶ池という。誰か拾い上げてけねかなと思って待ってんだがね。その大きさはこのくらいからこのくらいまでの大きさのやつ、決まってんだ。

A　ほー。

潤　あることはわかってんの。出羽三山の羽黒山から八〇〇枚の鏡が上がってんの。だから、鏡ヶ池っての。若い連中行ってね、深いところには置かねんですよ。浅いところに沈めた、なんか修験ってのは鏡を沈めるというくせがあるんだおね。だから、鏡があるはず。せいぜい深さ五尺位んとこね。で、なんか棒でつつきゃね、二〇センチか三〇センチんとこさね、ゴミだの木の葉だのみな沈んでんだから。二〇センチか三〇センチ、羽黒山の場合は三〇センチですよ。

A　浅いもんだね。

潤　五〇センチ掘るとね、鏡みんな沈んでる。みな国宝物になってんですよ、それ。

（中断）

潤　青森っての一体なにっしゃ、はじめから。ヒダマだかなんだかしゃねけっと、お祭りの前の晩に出るってんだ。

婆　お祭りの晩にす？おらね、先生、カネダマっつう真っ赤にヒダマをあがんのね。カネダマって聞いったもんね、小さい時から私。小さい時から、しゃねけっともね。あと青火、青火の飛ぶつうのはね、そいつはね、死んだ人の思いがつんだな。早く言えば、ほいつほの、青火さね、柄杓みてな柄ついて、ほの、皆んな飛ぶの見るとこいなわけさ。見る人たち、ほっち見ると、私はね、二〇前に見なければ見ねとしとくんだと、先生、ほいなのね。おら、二十前にも見たこと。また、おれは明治三十五年生まれでっしゃ、六月の十日生まれでがすが、まず、はっぱり見たことがいん。カネダマも見たことねえし、アオビカリも見たことがいん。

潤　でも、そういう話聞いたんだけども。なして出んだい。

婆　そいな人はお墓の土しょいとか、なにの土しょいって人あって、アオビカリだのそいなの見るもんでねんでがいんか。

潤　私はね、

婆　カネダマはね、真っ赤な、ほいな真っ赤な火でっしゃ。真っ赤な火になって見たことあるというんだね。そいのはカネダマというんだね、昔の人達語るには。

潤　とにかくお祭りの前の日出んだとっしゃ。

婆　お祭りの前の日？。アオビカリって言うんだと。

潤　おれから見たらね、あの山、山伏修験の山なんだからね。あのサイトゴマやんねんでねえかと思うんだ、ゴマサイトってね、板に木組んでねお祭りしねからね、カミサマの方で火

見せてけんじゃないかと思うんだ。だって、小栗山ではね、こんな太い木ね一畳以上積んでね、一晩中焚いてんだからね。それをここの船形さん要求してんでないかなと思って。

A　夜やんねからね。

潤　夜ごもりからしねけね。そもそもカミサマっての夜ごもり……。

（中断）

潤　はあ、そのオガタだのなんだのって、平家の落人？

婆　ここは早坂だおんね。早坂。私、嫁に来てから五一年になんだけっとも、二十才、年取ったばりで、二十才の旧暦二月の二十八日に来たんでがすと。私、嫁にここさ。新暦になってけっともね、昔、旧暦もとめたもんだおね。私、二十才なったばりの旧暦二月二十八日に来たんでがすと。ここの檀ノ原ってとこにね。にけがすけどまだ。初めて流行った赤いクツなんてね、買ってもらって。私ばっち娘なもんだから、買ってもらって喜んで履いてきたもんだなや。まだ、嫁に行く気もない時、けられたんだから、二十才になって。昔はおらたち嫁になっ時、私は一番に遅く嫁になんでがすと。みんな十七だもの、十七、十八だもの。ほだね、おらの両親など十六でおムコさん貰ったっていったべっしゃ。おらのジイチャンは十七の子でがすと。おらおんちの娘嫁になったもんだや、五一年なんだは、ここさ嫁に来てから、まんず。そのあたりは、あすくはどこだっけな。マヤマの人達ふだに来たね。

潤　栗原？

婆　うん、栗原だのマヤマだの、家さ泊まったんでがす。ほしてね、法印さまね、武田法印さま、ここっしゃ。法印だの別当さまだの、家さね。馬さつけてさ、大っきななにっしゃ米……箱っしゃ、……つけて、馬できたもんだ。送り迎えね。今みてに、車ねえもんだから。一五人、一六、一七人位家に泊まったんでがすと。いっそ法印さまのね、別当さまから法印さまのね、みな全部かなんでね。付いて来る人ばかり、一六、七人泊まったから、家さばり泊まったんだから。今、吉田法印だすぺ。いま東の家さなにそれまず、ご飯たべさせてけろだなんだと頼んでるけっとも。来た時はいっそ家さばり泊まってね。あの法印さま、五十なんぼで死んだの、タケシ法印。あの人はね、おらいさ来てっしゃ、一晩よけい泊まっていったね。死ぬ年だおんな、考えてみっと。ほうして、くうろっしゃ、おらいでここさあったんでがす、ここさ。くうろね。……しゃ壊してしまったの。私ね、加美郡から壁屋来っから、みな塗ってもらって、風呂場今塗ってんだけっともね、先に……からみな煤けてんだけっとも。なにっしゃ、ほういう時、五コクだかせめんで入ったの、四コクだ

か五コクばり入ったの水っしゃ。大きな釜の形のこいなあつい縁つけてタイルつけてもらったのっしゃ。そいつみなぶっこわっしゃたのっしゃ。ぐるわからなにから全部、タイルのなに。あん時どこにもねかったんだおんね。あっちこっちからみなやめて買ってきてした、家で高いお金出してっしゃ、作ったんだが、まず。ほいっさ、四人ぐらい入ったんでがす。泊まったお客様ね。こいつさキッツかけっとことなにと入るとこと、上がりてかけるとこと、とってもあんべよくキッツかけてほしてお湯さ入って足伸ばしてんによかったとさ、家のころ。そういうふうにやったんだ。タケシ法印様の、その人の年だった。とってもこっちの家の風呂いいこだ、気持ちいい、尻かけて足伸ばして寝ててもなにしててても手伸ばしてもいいどって。これ一番のなにしててもいいどって、褒めらってねや。ほうして、その晩、お湯さ上がっては入り、上がっては入り一晩よけい泊まっていったからね。その年の五月はじめにだが亡くなっただおね。何時来たってね、おらいのジイチャンだってこのとおり、家督だってこのとおり、嫁だってこのとおりね、このとおりだからね、喜んでおらいさ一六、七人も家さばり泊まったんでがすと。ほいでおらもずくなったんだね。死んだんだなとおれ忘れらんねね。まず、今度この人の家督さんが、ほんときはおれさ来たけんども、次からは今トラックだの自動車だの帰って行くから、来ましたって回りもしねんだ、今の家督がまた。わすれらんね、馬を止めてだよ、家さいったんでがす。うんと上がったの。

A　三〇〇人位。

婆　なんだもがいんかった。少しばりおめでとうでないんだおん。家さいっぺだったから。いっそ家さばり泊まっていったんでがすと、どこさも行かねんだから。宿はおらいでっしゃ。先には、おらいのジンチャン。さっきも語ったけども、フナドコで支所長だって何十年勤めてくる営林署の組合長からなにかに全部もたせたと、おらいのヅンツァン。このとおりでいる人なんだから、ながいでずっといて、あと神経痛たかって歩かんねくなってから、自転車も馬さも乗ったことのない人だかんね。ほうしておらくつかってなんだり皆任せてやって、あと家さほろけて……かたから役場いんから、米検査だつめ検査だ、営林署の人達青森営林局からまで来て、この杉お山ね、そん時一〇日も二〇日も泊まってたんだから、おらいさね、予算来るもの。次は……のね、いて泊まっていたんだまず。ほして、私、おら娘一番目娘だし、嫁貰らわねかったから、おれ一人でとてもほのお客扱わんねだおんね。ほいでわかんねと思って、タカツ担当区が山形、秋田、あの人柴田郡で奥さん秋田だったからね、ほの人今、あすくさい

んでがす。台原さ家建てて、仙台の、ほこにいんでがす、家建てて屋敷買ってね。ほして、タカツ担当区も家さ泊まって、泊まったんだ。吉田の担当区の、ほして担当区のなにで建てて、おらいで宿にしてやったんでがす、船形荘さ。おらいで一番の責任で船形荘さ宿おくってやったんだから、……。おれ、たまに言う時あんだ。はっぱり今の人達なにもしゃねで話おっきく語っときあんべから、聞くつとあんだから。どこへお客様やんねだっておらいさは三人でも五人でもよけなお客様は自分がいて、泊まらんね場合はよつことなんねんね。ほて、なあんにも知らねがす、いってる家の神頼み。おらいで宿家からやったんでがすと。ほうして、家それから宿やったらこんなぽっこり家さ泊めらんねど。だあれ、ヅンツァマに設計とって、まず昔の設計だから仕方ねけんとも、あれね、アレギたてっ時少しばり難儀したこってないんでがすと。ヅンツァマとバンツァマ、おらたちしっかりしてっけからね、おらいのあるふもとからあのバンツァマの一番目息子、別家なりしたべ、クラウド。あすくさ私のほれ、……のヅンツァンの親類から来てんだべ嫁ね。別家なってんだ……。

潤　あのオバアチャン。

（中断）

婆　煮てね、団子にまるめて煮立ったお湯さ入れておいて、そいつすくって、

潤　クマガイ（熊谷）ったら船形さん登らんねんでねの。

婆　熊谷ったら苗字でがす。熊谷って。

潤　んだから、熊谷って登らんねことになって、

婆　熊谷神道様、熊谷法印様っつうんだ。

潤　そういう場合の神道様ならよかったんですか？宮床の熊谷ハチロウまだ登んねおんね。「おら熊谷だからのぼらんね」って。そら面白いな。

婆　そいつは南……に行ったんでがす。

潤　だからね。

（中断）

［23］「藍染め・雨乞い」

（昭和四十六年六月十四日）

登場人物　老婆・老爺・吉田潤之介

潤之介　ほすか。

老婆　だから全然あっちの方のことはわかんねね。

潤　はあ。スケエモンとイエモンとそいからイチゾウとそれっきり、天保六年（一八三五）に。そん時升沢にね、ソウゲンイン（宗源院）というお寺あったんだ。

婆　はああ、そのお寺、あっちの方の人達は、あすくでねえんか？

潤　升沢の人達はね、中興寺。

婆　中興寺す。

潤　嘉太神はね、半分は中興寺で半分は別だね。墓石までひっくりかえしてやってきたの。でも、あまりひっくり返したりしたら警察ざただからね。だから、ひっくり返したの直してやったりして。ところがね、カンザシ（簪）出てきたよ、銀のカンザシ、バアチャン。で、塔婆の上に上げてきたからね。あそこの墓の一番西と北の隅っこのほうに出てきたから、塔婆の上にあげてきたかんねって言ってきた。お墓のものなんど持って来たらてえへんだからね。なんていったら、新しく仏んなった人三年ばり前にいんだおね。んで、あそこん家だべだなんて言ってたけんども。それにしたって、カンザシでがすっと。銀ってのは錆びねかんね。そして、柔らかだしね、金具が。そしてまっすぐにできるしね。だから、やはりそういう人がいたし、それからね、林右衛門さんあたりでは、ボンデン、こういうのがあんのっしゃ。銅で作ったボンデン見つけた。これはね、殿様でなきゃ持たんね。だから、あの林右衛門さん、「おらとこにこんなもんあんだ」って、とにかくこれ大事だからとっておかいよって。あと、これは、オバンチャンもウワサで聞いてっかわかんねけっとも、国男さん家で鎧うっぱらったおんね。んだから、そいことは……。

婆　おらあたりでも、みなー、宝物みなー出しては。おれ、あの角田の殿様おつぶれになったときっしゃ、おらいのオジってやつは骨董屋しておったおん。そいつ買って来たんだいっちゃ。そして、カラカネナベ（唐金鍋）なんだ、四……したの。こいつは貴様さ、けてやるおんなんて。おれ、貰って来たおんね。そいつも戦争ん時、みな持って行かれた。すっかり、刀だりなんだり、すっかり、みな。オヤンツァンって物好きで良くそいなん集めたんだおね。

潤　んで、まだまだ、オバンチャン宝物持ってる。

婆　なんにもね。

潤　宝物持ってるってね、瀬戸物随分良いのあんでがすと。

婆　瀬戸物、全然ない。

潤　昔ね、ウマッコ祭りあったときね、こんな藁で結わえつけた皿、三〇銭、二〇銭、まけたら一〇銭なんてね。

婆　ああ、買ったことね、おら。

潤　ねの？あれなど今すごい値段でがすと。わざわざ、昔の色つけようとしてるからね、今。科学でばりやってるからね。んでも、このくらい古ければね、とにかく何でも大切にしてれば大切な物になるからね。だから、国男さん家でなど、いろいろ、鎧売っぱらったなどといってウワサになってっけとも、……、自分食えなかったらうっぱらうの当たり前だかんね。

婆　んだね。

潤　だったらそれでいいからね。どういうものあったかってこと、ちゃんと記録に書いておく、それ、おれやってんの。そして、こういうものあったって、写真にとっておく。なくなろうとなんだろうと、こういうものあったっていうことが一番大事なの。個人のもんだから、自由にしていいんだから。後の人達が昔をたどって行く時の材料になるだけでね、だから、うっぱらうも構わね。ただ、こういうものあったってこと大事なんでね。おれ、それ、騒いでる。離す前におれさ見せろってね。なにもおれ売るなってなんど、おれが買うんだったらまた別だけっとも。

婆　貧乏徳利とか、もとあったいっちゃね。あんなんだり、なんだり、みなブンスケさん集めたから。

潤　ああ、あそこの。あの、ナカンダンに行くところの？

婆　まず、なんでも集めてた。貧乏徳利なんぼあるって言ってたっけね、この間来て。三〇〇なんぼとか四〇〇なんぼとか言ったよ。まず、なんでも集めてた。カギでよしなんでよしみな集めて歩った。

潤　貧乏徳利の三〇〇のうち、おそらく一〇位は本物だよ。本物っていうのはね、伊達藩がね、伊達藩が指定した切込め焼きってのあんだから。

婆　あと、丸っこい、醤油入れておいたんだったな。ほそっこくなって、そいなん皆、出したよ。おらいあたり新しくシンショ（身上）持ったのでそいなんないけっとも。

潤　ほすか？安田茶屋ってたら、昔からあったんでないか。

婆　んでないよ。まだ、六〇年そこそこだ。

潤　んで、オバアチャン、お嫁に来たころから？

婆　私お嫁に来てから始めたんだ。

潤　ようするに、美人の茶屋から買ったほうが良いってわけで繁昌したわけだな。

婆　そなわけでないけっとも。

潤　だって。

婆　おそらくそんな珍しいものなんて何もないな、おらなんか。

潤　こんなものって思って捨てて行くの多いもんでね、それがおしい。おれに譲ってけさいんって言いてけっともね、金ねえおんね。で、ああいうのは、値段あって値段あるし、値段あるようで値段ないしね。だから下手に買うわけにもいかねえしね。

婆　吉岡では持って行ってね、イワイさんあたりでは昔のものうんとあんでないすか？

潤　もう、だめだおわ。だめだお、イワイ。

婆　イワイさんのおじいさんって人は、昔のものよく集めたんでねすか、ね？

潤　集めたんだ。銀ギセルもあったんだ、こんなの。鎧もあったし槍もあったし兜もあったけっとも。なに息子のね、おれの兄貴と同級生なの随分使ったからね。でも、テルイ伯母さんって人ね、吉岡の染物が有名だったってこと私わかったのさ。どういう染物知ってした？

婆　染物すかや、あすくにあったのすかや。今どうなってんだい。

潤　染めて織ったんだか、織って染めたんだかしゃねけっとも、とにかく有名なんですよ。色はアイキョウ吉岡染めっていう名前になってんだから。ただ、紺の地か柿渋の地か灰色の地かそういうものを組み合わせた絣みたいなものか、そんなこと知りたくて知りたくてさ。とにかく前掛けしてたってんだから、その吉岡染めで。だから、オバンチャンなどね、布団袋の風呂敷、恐らく麻か木綿のあったと思うの。

婆　そいなのなんど、おらいで。この向かいの家から、一単もの貰って来たおんね。麻のっしゃ。そいつ、あとは、子供たちの服こしゃえて着たおん。私達着ねからね。みながら出したからな。

潤　戦争中物なくなって、ズボンにしたりシャツにしたりしたのすか？

婆　紺のね。こいうような模様入ったのね。

潤　ジュウね。ああ、思い出した思い出した。

婆　あと、こういうふうにかいてこういうふうにかいた。

潤　イゲタね。

婆　そいふうな模様入ったの。ほとんど着ねかったんだね。

潤　紺の地、これが白だったね。

婆　うん。白。

潤　ああ。織っていたんだ。サワのバンツァンなど織ってたの、そういえば思い出して来たよ。あれか。ふーん。

婆　おらはしねけんとも、向かいの家のバンサマなど機織した

んだよ。機織などなんでもないからね。昔のもんなんどは恐らくぶつっつぁいたりまったりしてっからね。

潤　おれのかあちゃんも九十二で死んでしまったけどね、去年。やっぱり、幼な心に、蔵の下、軒下に甕に入れてね、そしてそれから開けてしてたの見てんだ。柿渋、手なんど荒れててね。そいこと覚えてるんだ。やったこと覚えてるけど、色わかんねんだ、どういう色か。

婆　もとは何でもかんでも紺だおんね。紺と黒ね、みなそうだったおんね。

潤　紺の地？

婆　うん。

潤　紺と黒ね。

婆　うん。みなそうだったね。

潤　柿渋使うのは色おさえるのに使ったのすかや。柿渋の色じゃないの？

婆　ほだね。ほだから今この間も藤崎さ回わって見て来た、瀬戸物でも昔さ帰って来たわね、模様。

潤　わかってんだ、オバンチャ。

婆　茶碗でも何でもね。

潤　ゴロハチヂャワン（五郎八茶碗）欲しくて。

婆　なんだの、皿だの昔さ帰って来たなと思って、おら見て来た。

潤　うん。そういう、昔のやつがね、もう、これだったら機械で描くんだおね。これはまた大事にとっておくとその頃のものであるということになって行くんだが、これ、大事にしなくていけないし。これなんど、良い茶碗だね、この万古。

婆　これはお茶屋から頂いたんだ、

潤　温度の高いので焼くから、この艶出るし、良い茶碗ですよ。あと十年でもお湯かけてみさいん、色変わってくっから。これだって生き物だからね。使わないでとっておくのはだめ。時々出して使うと良い宝物になって行くから。その、自在鈎だのなんだのっていうの、おれも、炉辺切りやめたっていうから、自在鈎譲ってけさいんといったら、火分けた時のだからって、はっきり断るしね。売る方は、譲る方は、簡単に譲ってけるっていったら有難てけんども、三〇〇年位たってるのあるからね。おれ、ジョシアでいたとき、昔ポンプあったんだおね。ポンプのね、管をね、こう組むことできるけっとも、管が鉄が無くてね竹でやったの。竹を割れないように藁でこう抑えて井戸さ埋めったもんですよ。そしてそこを組んで、あの、酒作りの水汲みやってね、その竹三〇年水さ漬かってたの。

婆　竹ってもの、何年水に漬かってったって腐んねからね。

潤　その竹の色ね、ちょうどあの柱のような色だよ。んで自在鉤の竹ね、炉辺で煙でね燻したような良い色でねえけんどもね、油みが抜けたそれはそれで美しさがある。それは一つ取ってあるけっともね。やっぱり、長年手塩にかけたものって一番大事だなって。

婆　イワイ屋のヅンツァン、シノヅンツァン、よく集めたもんだなって。

潤　シノヅンツァン、そうだ。

婆　……フセっていった……。

潤　フセっていえばね、中興寺のとこに南カメ（？）ってとこあるね。あそこにフセって人あるね、知らね？

婆　はあ。わかんね。

潤　瀬戸先生がいて、その奥にフセって、皆あんまり知らないんだよ。明治の二〇年ころにフセ（布施千造）って学者いたんだよ。んで、『東京人類学雑誌』っていうのに四、五回出てるの見付けた。王城寺に、昔のね。今、日本人のいる前に住んでていろんなもの作ってたって、墓あったの調査してるんですよ。だから、案外吉岡に学者いるんですよ。そいなの吉岡の人はっぱりしゃねんだおね。で、あの、安永六年（一八五九）に升沢に六人しかいないってのどこでわかったかっていうと、カナヤのシサンね、いて、初めて吉岡分の人、欠入に何人、升沢に何人、そういう人の所在がわかったんでね。だから、古いものは大事だっていうのそれっしゃ。

婆　いろいろあったのね。あの戦争の時や、鎧兜。おらいのオヤンツァン好きだから集めてそいつ土ん中さ埋めしまってただ腐らかした。

潤　腐れたのどんなんしたの？

婆　そいなんど、ないかぶんなげたんでないか。

潤　あの、あれほしかったな。あの糸、真田紐、あの糸三〇〇年もつんだからね。だから、昔の、ケットなんど着てね。この時計の鎖取り上げられたから、刀のオサで時計のこの持ってたんだいっちゃ。これ三〇〇年前のだなんていうとびっくりしてね。ほんなことやってたな、少しボロボロになってけっとも。とにかく昔の人の仕事って丁寧です。大事にしてないとわかんねなと思って。オバンチャンなどお嫁さんに来たとき、なじょな櫛さして来した？

婆　これ、

潤　丸くて、歯のとこ細まくて、肉の厚さどれくらいしゃ？模様などついていたすか？

婆　私のはつかね。

潤　漆すか？

婆　漆でもね。

潤　ツゲすか？ベッコウ？ベッコウだったら最高だね。

（中断）

潤　で、ヤシダ（八志田）。

婆　随分、五輪（五輪塔）ってのはあったんでねすか？あっちゃこっちゃにね。もとにね。で、保存大変だなんだって、全部ひっくり返してしまったんでねすか。

潤　うーん。

婆　どこさかおっつけってったかもんだかね。

潤　やっぱりこの辺にも五輪あったのね。

婆　あったよ。

潤　升沢に七つあるんだ、おれ調べたんだ。ようするに五輪ってこんなかっこうした石。

婆　ほだよ。

潤　三角んなって、これくらい？みなあれ山伏のお墓だおんね。

婆　はあ。

潤　山伏でしか作んね石やっぱ、……だおなったんだね。

婆　んだね。

潤　そういう話大事なんだ。そいでね、雨乞いに行く時は味噌と米と鰹節。そしてカナマに行ったって聞きしたべ？

婆　うーん、そいなこともあったけっとも。なあにみな、いろいろなことしたんでねかすか、雨乞いだなんてね。ここいらでは、雨乞いだなんてことしたことまず、ないんでねがすか。雨降りだなんて、見た先くらいはすっかもしゃねけっとも、ここらの人は水ふくさねっちゃ。

潤　なるほど。吉岡の方が苦しいんだね。このへんはふくしいんだ。

婆　返って吉岡に水くれたんだとっしゃ。ここのまったりんときはね。今はバンミっつことねからわ。昔、バンミっつものあって、夜中一時二時までついったもんだね。

潤　ああ、堰の番してでね。そいう話、良い話だな。

婆　今はそいことないでっしゃわ。ヨワリかけて水引くなんつことねっちゃわ。まず、吉岡さは、水けたんだね。ここのバンミっつのは、もとのね。もとにって、この間までだね、五、六年こっちだいっちゃわ。

潤　あっちの道路みたら、疎水作ってんでね。

婆　今はねな。前は水けろっていうの来たもんだおん。

潤　そのカスヤって鉄砲ぶちね、雨乞いに行ってさっぱり雨降ねって、桑沼に行って回りで石投げたり木立てたりでワアワア騒ぐんだとっしゃ、吉岡の雨乞いってのは。そしたらさっぱり雨降ってこねって、すっかりごしょっぱらけてね。カスヤ鉄砲ぶちだったからね、あそこに風穴あるんだとね、桑沼に。風穴にね、鉄砲ぶってやったらドカーンと、そのはんど

で中から霧出てきたんだと。霧出てきたおかげでね、霧が空気の振動であたりの水分がみなその霧にくっついて雨降り出したと聞いたんだ。だからね、てっとりばやい話、安田茶屋のオバンチャンくらい知ってないかなと思って。

婆　おら、聞いたことないね、そいな話。

潤　死んだジュンゾウ兄いが言ったんだ。カスヤっていう鉄砲ぶちの倅がおれと同級生なんだ。そういう話聞いたことあんの。そいな話聞いてないかなと思って。んで、スタスタ、スタスタ帰って行ったんだな、寄んねで。雨降って嬉しくて。うちの倅今浪人してけっとも、六つん時船形に登った。船形に登ったのワラシコで一番小さかったって。升沢にいってたがね、絶対。

（中断）

老爺　あそこなんです、

潤　ヤジってどう書くのっしゃ、山形のヤジって、

爺　ただのヤジだね、

潤　谷の地？

爺　ええ。ちょうどあの、関山から越えてくるんですよ。真中から行くとジンマチ（神町）ってとこさ。左の方さ行くとヤジ（谷地）ってとこあんです。

潤　そこから出た方だね、アベさんって方ね。

爺　ええ。ヒイジンツァマだな。そん時、変なことには、そこにいる最上公さ納めた。米何石納めたとか、そんなんみな背負ってきた。くれてよこしたもんだか、あとで持ってきたもんだか。それ私、ちょいちょい見てやったおん。そい書類でも保存してあるもんだか、でも亡くなったからどうだかね。

潤　とにかくいいんだわ。とにかくおれの文献とギョウジョウホウシが出たっつことが共通に出たんだから、これと嘘なし。私の文献もいんちき文献じゃないってことね。その方が出たために今度逆に説明できたわけね。そのギョウジョウホウシっていう人の調査やったらね、とても手つけられないね。わかんない。とにかく時間かけりゃわかるんだよね、五年か一〇年かけりゃね。とてもそんな暇ないから、とにかく今年で打ち切りのつもりで出て来たの。それで、浅井さんにもね、吉田分だけの、ほんとはね、小栗山のね、字地も全部欲しいの。そうすれば総合判断できんです。そもそも、始まったのは、『最上郡誌』から始まったんですよ、船形調査に。一村を上げて村なくなったっていうね。その時ね。その村に早坂なる姓を……、仏さんも一緒になくなってんだ。村の氏神だからね。仏さん盗んでいったってこと、成り立たないです。だから仏なくなってね、それはしょうがないですよ。仏さん一緒に行きましょってついたんだから。あの最上川の氾濫で

食えないんだから。一村一夜にしてなくなったって、一部落が。早坂なる姓を……って、早坂ね。

爺　ここも、

潤　小栗山の別当も早坂なんだお。だからそういう点でね、小栗山と升沢兄弟なんだっていってんだおん。

爺　うん、そうなんですよ。

潤　兄弟神でありながら、兄弟喧嘩してんだおね。兄弟喧嘩してるっつの、どういうことだっての。

爺　こっちからいうとね、升沢のほいつ、なにしていうかっつの。吉田さん、オヅンツァン、山形から熊獲っていたけどって、ほんでは、ここ終われば奥の山に行くどっていう話はするどって聞いてきたと。われたちのことは知ってたかって、吉田さんのことは。一回か二回聞いてたどって。今日行ったか明日行ったかわかんねどっていたど、あれはお祭りの孫にさ、そういってたけどってさ。……孫に聞いて来た……。

潤　オオモリさんがあそこで話聞いて来たって。千畳岩ってどこですか？

爺　ここからいうと根白石、泉ヶ岳、北泉の境に沢があるんです。その沢をこう、峰あってね、北泉がここ南泉がここ、境に沢あるんです。この南いちばのでっぱなに、こう大したガンカタがある。そいで、この沢を登ってきてね、こっちにくるというとタガラモリ（タンガラ森）ってある。それが吉田分の境がくるわけ。それに、そっから来てタカクラヤマ（高倉山）っつのがくる、これが宮床の境になる。そこがセンジョウ。

潤　それは宮床分ですか？

爺　福岡となっている。今は泉町（仙台市泉区）。

潤　実はね、そこんとこにミササギあるんだ。ご存知か？御陵と書いてミササギ、六〇〇年の地図だ。わかんねんだ。なんか古墳かなんかですか？

爺　穴っこ。

潤　穴っこ。やっぱり、千畳岩のそばに。んで、コダマ言ったオオクラヤマ（大倉山）間違いだな。御陵って、なんで御陵って？そんとこは小さな字でちょこちょこ、ちょこちょこっと。おまけに泉ヶ岳んとこね、二子岳とも言うと書いてある。そこのね、千畳岩と泉ヶ岳の間に御陵ってでっかく書いてある。それわかんない。それに、嘉太神の嘉にもくっつけていったら、いい証明になるんだが、それは少し用心しようと思ってね。地域的にね、でも御陵っていったら、なぜいったか問題なんだね。

爺　……朴沢って、あれから登って……こっちから行くには宮床の難波ってとこね。そこから行けば、横んとこずっと

行けば千畳敷キっていくんです。もとのみんな桑沼さ雨乞い行ったとこの手前から入るんですね。

潤　いいこと聞いた。千畳岩と大倉山違うんだ。

爺　ええ。

潤　古老いわくだ。

爺　あとは、神様そこさ祀ってたはずだ、今はねかな。崩れたり、流れたり、どこかさ行くかわかんねからね。イッカンバタケっつとこあんです、茶畑。宮床と根白石の、これは、茶畑。

潤　それはもう、伊達藩が入って来てから。

爺　うん、茶畑ね。イッカンバタケという。今でもその。

（中断）

[24]「炭焼き③」

（昭和四十七年五月二日）

登場人物　老爺・たかの・A・潤之介

潤之介　そんときはあんたも運んだのすか？

老爺　俺、十六の時だね。そう、いくしたのは、学校やめてすぐ。でも、息子なんてろくにこしらえねおん。今になって息子のこしらえね、その頃だってね。俺なんにもかにもね、在郷軍人だ戦争ん時も在郷軍人やってたんだけども、何だかにだってね、あの頃は。今みると、ほとんど役場職員と同じだおんね。戦争当時頃なんかもしゃ。

潤　今年なんぼっしゃ。

爺　私すか。

潤　十六だから、三十五、六すか？

爺　んだねや。何だかにだって全部役言いつけらったんだね。だからね、息子さ指導できないのっしゃ。一人山行ってたんだからね。一人でノコギリ押して木切りしたりね、炭出ししたりね。もちろん戦争の当時になってからね、在郷軍人関係で。徴用関係、勤労報告隊、そういったようなことは全部役場からね。今度は女三名出して欲しいという時はっしゃ、俺の方爺　やんべ配って指示して出してやったんだかんね。なんていったもんだったか、ほんとに今語ったとね、前にこっだ綺麗にしたったら、おらもあそこさ行きてな、なんてね。よしよし、今度来たってば絶対来るようにすっからやなんて、おどけ冗談語っててね。そうすっとまた割り当てくんだおんね。だから、男なんか報告隊に行く時、他の人ばりやってらんねから、おらの舎弟も北海道さ勤労報告隊にやったんでがす。そして、今度それやったかと思うと、かたはしから戦争してるんだからね。戦死したっつとお骨迎え、和尚来たっつと、今日は兵隊送り、何にも仕事する暇もねんだおね、毎日、毎日。今度はね、何か今度は、例えば陸軍で使うね物を出荷するとなると、唐金火鉢は売れる。唐金売んねばけつねだったら、そいつも納められる。さあ、カヤの釣鐘はずして納めろ、全部そいなことさせらったんだからね。在郷軍人班長させらって。あそこにね、一一本あったんだ。

たかの　一一本だか一二本あったんだ。

爺　一一本あったんだ。それの二本だけね、上の方の太いやつ下の一本と残して。その時、第一補充兵、第二補充兵と親方の婿なんだから、七、八人いたのっしゃ。それをまず、ひっぱって行ったのっしゃ、外しさね。命令だからね。ところが行く途中、こういうことあった。その「おら船形神社の鎖とバチ当たったから外さね」とこういうことなったのしゃ。出荷すると言われたんだし、外さねわけにいかねし、命令だか

ら私が先頭なって。そうか命令なんで仕方ね、命令だから、是非外してやんねけねと。バチ当たんのは俺だとね、外すのだから、俺。全部外すから、根さね。こういうシンが刺さってるんだからね、ぎっちり根組んでそれこそただ抜いたんで抜けねから、ナタとノコギリ持って行って根っこを切ってっしゃ。外し方は全部俺やると。貴様たちは、今のような道路

爺　やないから、ダンコで炭つけしたから非常に道悪くてっしゃ、鎖引っ張って来るったって容易でないのっしゃ。そいつを升沢さ持って来なければ馬車に付けて下げらんねんだおね。でも、バチ当たんの俺が一人で当たっから、お前達は鎖を升沢まで運搬しろとなったのさ。ほんだら良いと俺はバチ当たんねから。小川さん一人でバチ当たんのだから良いと、全部外して升沢まで引っ張らせたのさ、かついでね。ズルズル、ズルズルとビロんなってもなにしても引っ張って来たのっしゃ。ところが、大汗流してここまで引っ張って来て、みな寄せたらね、バチ当たったのは引っ張って来た人がバチ当たったわけなのしゃ。ねえ、先生、みな汗かいて。俺さっぱりバチ当たんねんだね。外しかたばりしたからね。約束だからね。

潤　引っ張った人達に何バチ当たったのっしゃ。

爺　バチってね、疲れたしね、汗たらして。苦労ってバチ当たったんだね。俺、外すばりだからね、疲れもしねしっしゃ。何もバチ当たんねのっしゃ。そうしたことがすと。

た　あとね、ブンドウの葉っぱ取ってっしゃ、釜で煮てそしてなんだあいつ、イスベ入れっとね、固まんでがす。固まったやつを袋にいれて絞って、そうして干してカヤからどって持って行った。

潤　カヤ？

た　鉄砲の火薬。

潤　ブンドウって何っしゃ？

た　ブドウ、山ブドウ。そいなこともしたね。アカアカだのカラムシ。アイコでなくカラムシあんだおん。アカソウだのなんだのってあっぺっちゃ。あんなんも取らせらった。

爺　赤い茎の草だおな、ずっーと葉っぱ。

た　ブドウのね、葉っぱもっしゃ取って来て、煮てそういくして出してけろっていったの。おらいのヅヅチャンが監視して歩くから。おらいに、こった大きな釜あんでがす家に。そいって、おらいさ寄って皆煮方だおん。えらいひまだればりしたの、一銭にもならねのそいつ。

爺　そいから、食料薄くなった場合はね、役場の命令によって各自回ってそして、……何年経っても借りるというのでね、例えば宗右衛門君とかね国男さんとこで、キッツ（木造の倉）

ってものあんのっしゃ、保存しておくね。それを一切調査するといわってね。人の家のキッツだりなんだり、毎戸回ってっしゃ、何俵籾あっかの何俵味噌あっかのね。全部調査したのっしゃ。ところがその中にね、まず、二〇俵ある、三〇俵あると開けてみた時わかるけっともね、ツッとすると夜のうちにみんながっしゃ、畑に穴を掘ってムシロを敷いて五俵も一〇俵も隠してたもんだおね。現在おらいの小屋に何もないとね、それでも三〇何俵あったんだよ、今でも私忘れない。それを出してけた。

た　あれー、蝋燭つけて夜、山にしょったっちゃ。

爺　そういうことした。なんていうんだかね、今、考えると県知事って言ったらいいんだか、役場の町長って言ったらいいんだかっしゃ。

潤　悪代官。

爺　悪代官。えらいその何だからね。なんたってわかんねだから、戦争に負ける近くになってからやりぶつのでね、ナタの古いのだり、金の物、鉄類全部出させらったおね。全部出して何にもなくなってから、たか槍こやって、そいつは今度おきまりだおん。

た　こんだ学校さ青年団集めて朝前に教え方だおん。そんなことしたら負けてしまうべ、とおら言うと……。

爺　歩兵四連隊にいた地区……の上等兵というと、おら一人になったんでがすと、吉田で。戦争の時に。だから、今の黒川高等学校がもと農学校っていったんだおんね。あそこに分隊長教育として、まず、三週間。我々は幹部教育で上がったのっしゃ。こんだ一般召集になってね。第一も第二も……兵全部引揚げられてっしゃ。その時やっぱり伍長の人いたったけども特科隊だからね、馬でやるんだからね指揮するだってうまくなかったんだね。馬さ乗って。

た　そんとき、この人は黒川に行ってっぺし。正月、二月、三月とね、四月帰って来たんだっけか。そん時こっち学校やめたばりでっしゃ、藁の作りようもナワナイもしてねっちゃ。そいつ藁をぶたせて藁の作りよう教えてだおん。作らせて荷縄もなわせて、兵隊の……すす切った兵隊の木、こいなんだお。ここ切ってここ切ってっから、みな組んでたほみてで流れねの、この川流した。そんとき、毎日冷たい水さ入ってたから、俺。こっからこっちつべてんだかと思う。

潤　兵舎、燃料ね。

た　今ね、モンペたて中さもはいてすぺ、そのあたりモンペん中さはくズボンもないから、モンペばりはいて川に入った。だから足だって病むんだ。

爺　そんとき、イワイソウケイさんがやめて、そして浅野タケ

オさんが隊長だった。それから須藤えんとすては、先生の実家の向いの青木喜一、下駄屋の……。

潤　佐々木。

爺　うん佐々木喜一、だから大層上手かったのさ。

潤　話返すけどさ、炭焼き、炭焼きはどういう順序で出来上がるの。

爺　炭焼きはね、まず、国有林といい村有林といい、払い下げ受けてですね、大体メカンでね、マナグ（眼）で見たところでね、これがなんぼ棚これがなんぼ棚って区分けするんです、焼く人達でね。そして、ま、抽選あるいは場所と木の立ち込みの如何によってブチキンというものすんだね。例えば一番ここが悪いから良い山の方から三〇〇〇円出して、つまり悪い山さ三〇〇〇円をやると言ったような、ブチカケだね。そして、抽選をすると。当たった人は三〇〇〇円もらって一番悪い山を取ると場所も悪いとか木も悪いとか、アンブン（案分）して、第一番目に木切る人もあるし、また窯を構築するために唐鍬でね、だいたい三〇俵出るとか五〇俵出るとかの窯の大きさによって上土を剥いでそうして洞堀というものをするんだね、土を掘るの最初。こういうような格好にね、洞堀をやるわけです。そうしてね、例えば一番大きいのであれば奥行きを一三尺にしてね、横がここが八尺だとかあるいは、ツウカギリ手前さきて七尺というような、狭くしてね。口さきて火の焚きいれする所は二尺というような格好に作るわけだ。その洞堀は掘ってね、して今度は、水をもて土を練ってだね。あたりにドウを積むんですね、ズーッと。五寸だら五寸、六寸だら六寸の洞をグリーッと積むんです。なぜそういうことをやるかというとね、掘ったばりでやると後から木を立てて点火すると、自然のままの土ではドウがもたないんだね。焼けてしまう。ドドドと崩れてしまうんです。土を練って足で踏んでグリーッと練り固めてしまうと、それが焼ければね、丁度レンガを焼いたようになってしまってはそこに落ち着いて崩れねわけなんです。上の方はね、さらに後からやるんです。後からね。二尺四寸か二尺五寸の長さの木を切るんです、洞堀できたらね。一三尺に八尺に七尺位だとね二つ五分くらい。二つ五分位というのは、二尺五寸の長さにしてね、五尺に六尺の棚が一棚としてっしゃ、それが二つ半というとまあね、二倍半を切るわけだ。その他に、上の形を取るやつをさらに別に切らなくてないわけです。そして、木を切ったら割ってそこに寄せて、例えば洞堀したとこが汚いとこさ洞堀するんだけども、あたりに切るやつも、小屋かけてからそこへ倒れるやつようなを一番初めに切り倒して、洞堀したとこさ乗っけるかもわかんねからね。それを切って

しまって、割ってですね、こういう柴をみな敷いてね、それに、そのまま木を立ててしまうと、めりこまってしまって、なかなかキ（火）の切れが悪いんですね、初窯はね。だから木を敷いて立てて、平らに窯の形そういうふうに立てたらば木を全部立てて、こういう太いやつを転がしてですね、一番先にこういうふうに立てにしてね、真中の方さ、尻の方は横にしてね、横にやるんです。前の方は立ててもいいけっとも、ちょうどこういうふうにして、モリがはばさによってこのハツのモリを作るわけなんです。巾広ければ広いほど中心を高くしなければならないのっしゃ。ここんとこペチャッとなると点火した場合に落ちる恐れがある。土壌を見てこの土が弱いか強いかを鑑定して、強ければ砂土を選んで砂利のあるとこ砂利を補うどってね、そして混ぜてやるんです。見てこれはなにも混ぜなくてもいいという鑑定のときは、そのままやるんです。その窯の大きさによって土を前に掘り出してだね、その土が使えればドウボリ（洞堀）した土を使うんです。土が悪ければだね、吉岡から持ってくるわけです。また、何年か前にですね、古い窯あればですね、ゴミを払って焼けた土を利用することあるんです。それが一番完全なんだね、窯を構築するのに。そして、形をとってですね。今度はネリガマ（練り窯）とブチガマ（打ち窯）と二つ種類あるわけっしゃ。ネリガマの場合はまず一応、ニワにするとこに出してたった土に水をかけて、よく練り合わせてあげんのがネリガマだね。それから、ウチガマというのはだね、たくさんのアウを作るんです。

潤　アウ？

爺　アウというのは、杵の短いようなのだね。柄を付けてねボンボンとたたくアウ。ハンマーみたいな。それを作って。最初は洞を積み上げたとこさ土の置き換えはだね、竹でツドリってもの作ってね、編みつけて、組んでね、土を上げ始めんです。それを打つにはだいたい一三尺に八尺に四尺の窯を作るのには上げ方する場合には、四、五人は必要だね。そしてね、最初上げる時はね、ここんとこに煙突つけるからね。ところが、ここんとこは最初一尺から一尺くらいずつグリーッと巻くんです。二回目にはね八寸とかね、三回目には七寸とか、六寸とか五寸とか今度はズッと盛ってしまうわけっしゃ。二寸五分か三寸位にね、でも、ブチガマの時には四寸位上げないとだめです。そして今度は、根元から四たりだら五人でね、窯口のひにね、下からみんなでボンボンボンとたたくんでがす。アウでグリーッとね。練るね、練り合わせるためにね、皆んなではたいてね。何回もはたいたあかつきに今度はヘラを作ってね木で、そしてビタビタとならしてね、そして

出来上がり。そして、今度次の日から点火室のところに火燃えない程度に離して火焚いて、毎日毎日日光で土を堅くするようにアウとかヘラではたいて仕上げるわけっしゃ。そして今度は、大丈夫、指の跡も付かないように堅くなった場合に初めて、入り口に出入りすっとこの木にね火を点火するわけなんです。中を少し燃やしてからね、入り口を燃やしてから今度はそこに毎日薪を切ってくべて、そして奥の方に少し火燃えて大体一三尺の長さの窯が、半分程広くなるまでね、すっかり乾くまでに火を焚いて乾かすわけっしゃ。これで浮き沈みがないから大丈夫だという場合には、初めてその煙突を開けてそんで火をつけるわけっしゃ。そして、今度は、その前に小屋かける場合もあっけっともね。こんで大丈夫だという時には、長木を寄せて骨組みをして小屋を作って、草を掻き集めてだね、カヤ（茅）あれば茅、なければ笹、そういったようなもので小屋をかけて、手前の方の炭出すとこにもかけて、そして、大体五日か六日位かけて、そのいぶりが止まるわけっしゃ。そして、また、その間に、作ってる間に木を切ってね、割ってそして窯小屋の中に入れてですね、ちゃんと積み合わせて置いて一週間くらいで火が止まった時に、こんだ、三晩か四晩くらいすっかり密閉して止めるわけっしゃ、ケム（煙）がなくなってからね。でも、初窯は全然ケムなくなるってことはないんです。土が湿気ってるからね、なかなか全部燃えないからね。そしてこんだ、三晩か四晩たったところで、火がさらに止まったなと思う時は、ハツ（鉢）のほとりを見っとひゃっこくなってっからね。そん時初めてドウゴメつうものを出すのっしゃ。初めて込めていたとこをドウゴメっていうんだがね、そして、出すのはどのくらい日数かかるかっつうと、大体二十五日から三十日かかるんです。

た　なしてドウゴメっつうんだい。初めて出すんだおん、一番窯つうんだちゃね。

爺　一番窯なんだけっとドウゴメ、ドウゴメって言うんだよな。大体二十五日から三十日かかるんです。小屋まで出来上がるには。

た　ドウにしたやつを込めて出すからドウゴメっていうのか。

爺　そんなような格好で、初回に炭焼きの基礎というものをね。

潤　もう一回聞きますが洞堀って何っしゃ？

爺　洞堀つうの、窯の形を掘るわけ。

潤　地下の方に掘るのすか。

爺　そうそうそう。

潤　何尺くらい？

爺　赤土と黒土のね、タテワキが黒土が多いければ多いほど深く掘らなくてないわけしゃ。その地形によってだね。地形に

よってね。

潤　その上に木を置いてだんだん練り土上げて行くわけだね。

爺　そうだね。

潤　ハチ（鉢）って何んですか？

爺　ハチって、やっぱり、勾配のジッチョウだね。

潤　ああそうか。

爺　だけっとも全般にね、全般にその、木の立てこみを立てたとこのっしゃ、全般に立ての立てたとこの、上の土の盛ったとこをいわゆるハチっつうんだね。窯のハチって。

潤　カサのことだね。

爺　うん、カサだね。

潤　それからね、一番問題なの、土の鑑定ってとこ、どういうとこカンに入るんですか？

爺　やはり、砂とかね粘土、まるっきりね紙焼くような粘土でなければ適当とするんです。紙でも焼くような粘土、いっそで砂でもザでも入ってねということになれば、これが、土があまり強いからね、割れて落ちるという恐れあるわけっしゃ。

潤　適当な砂が入ってないと。

爺　そうだね。そうすると割れもないんだね。

潤　そういうのは、黒が多いんですか赤が多いんですか。

爺　赤土っしゃ。黒土では窯はぶてないんです。それは、全部投げるんです。黒いやつは、赤でなければだめだね。黒土は焼くっつうとアクのようになっちまう。粘土であればね。

潤　トコボリって？

爺　トコボリってさっき言った洞堀と同じことだけっともね。

潤　練り窯っていうの、ニワに土を。

爺　土を一旦置いてねそれを水をかけて練って、練り合わせるんだね。打ち窯っていうの、さっき言ったようにアウをもってね、全然水かけねでぐりーっと1尺だら1尺、次は9寸、8寸というふうにして最高……に上がった時は、木から土の厚みは3寸から4寸くらい上げてっしゃ、アウをもって全面的に打ち込むわけです。

潤　もうすでに、その時には木が縦になってたり横になってたり入ってるわけだね。

爺　ええ、入ってるわけです。

潤　そして、だんだんやってくと、今度はスドリ作りって。スドリ作りってなんですか？

爺　スドリっていうのはね、竹をこう、例えばこういうのを笹竹だね、こういうのを二〇本から二四本位で編むんだけどね。

潤　間隔どの位っしゃ？

爺　間隔すか、こんなやつの笹しゃ。二〇本か二四本切ってっしゃ、ずらりと元がこっちだらば並べるのっしゃね。編みつ

けるんです縄で、二通りか三通り位編みつけるんです。三通り編みつけたらばっしゃ、ここでこう、組み合わせるんです、裏の方。これを合わせたらばしゃ、ずっとこう回しては笹の裏の方ね、そしてこれを合わせたらこう縛ってね、そうするとここにふところができるのっしゃ。そいつに土を入れて回すわけしゃ。

潤 笹の長さどれくらいですか？

爺 そうだね、大体五尺位はあんだな。

潤 こういう具合になったとこは縄で結わえつけるんですか？

爺 そうだね。

潤 してまたその上に泥を塗っていくわけだね。

爺 塗んねのっしゃ。

潤 スドリの作りにはもう泥上げる必要ないわけ。

爺 上げる必要ないの。土悪いばね、もっかもわかんねしね。

た 土運ぶの、うんとあんだよ。

爺 土運ぶの、窯の上さ上げんのに。ふたっつ位なくてわかんねです。

た 例えればミ（箕）みてな。

爺 そうそうそう、ミと同じだね。大体あのような格好に作るんです。

た 裏ほれ、ここさもって来て、わんぐるとこっしゃえるから、こないになるわけ。

潤 はあ、初めて入り口の木に点火するわけだね。

爺 そして、はたいてね。

潤 はあ、はたいて。

爺 はたき続けてそして堅くなったところでね。初めて点火する、火を焚いてね。毎日毎日とおく、ハナのハナって言うんですがっしゃ、へりだね手前の方の点火室の、乾いたところで初めてそこを焼き抜いて、今度火焚いて奥の方乾かすわけっしゃ。

潤 五、六日燻り出すと。

爺 五，六日、そいつは大丈夫に乾いたところでですと。

潤 ああそうか。

爺 だから、一週間か一〇日位まわるわけです、初めて点火してその煙突をはらって燃やすっつと。

潤 点火するというの材料は何か、柴かなんか。

た うん柴焚くんだね。

爺 柴か、あと太い木でも構わねんです。

た 太いのでも構わねけっと、太い木切ったのの柴、こいなのなんぼもあっからね。そいの使うんだね。

（中断）

爺 土上げる場合はね、ここ一尺だこったらグリーッとこうい

うふうに、一尺に土おいてっしゃ、だんだんにこっちゃ頂上まで上がる。次第に薄くなってここが大体に三寸五分か四寸位とまるわけっしゃ。こっからこう、ゴリンとこういうふうに、ここは一番薄いわけっしゃ。そのかたを木でとるわけ。そしてここを乾かして、ここがへりから土を上げた所をへりがあるわけですね、ここを全部土上げたのしゃ。ここが乾いた場合に初めてここを点火する、火を付けて燃やすと燃えてしまう、その時緩んで来るから取ってっしゃ、そして、こんだこっちの方燃えるようにこんだ火をここさくべるわけっしゃ。前をからんでからめてこう蓋して下だけ開けてね。そして、この辺から白くなって乾いて来た場合に、ああこれで初めてこの窯は指の跡も付かなくなったから大丈夫だなというときに初めて煙突蓋しったやつをねとってね、ケムをボウボウと上げんのっしゃ。そして、今度全面的に火で燃やして、完全に仕上げるのっしゃ。

潤　それでドウゴメが終わるわけだね。

爺　そうだね。

潤　ドウゴメの他になれた窯はなんていうんだっけね。

爺　うーんと、窯は窯だけどっしゃ。こんだ二番目、三番目と。

潤　ああ、二番目、三番目となるわけね。してそれを何回も使うわけね。

爺　そうだね。今度は使えば使うだけ良い炭になるわけっしゃ。例えば、一番底に立てたのでもね、いぶりもつかなくなるわけです。底も焼けてくるわけです。

潤　こんだ、二番、三番の時は、体もってって入れなきゃないわけだね。

爺　そうでがす。どんどんとここを開けてっしゃ、炭を出すまでは身体使うね。炭は二つに切って積むんですわ、杭立ててね。こっちには、反対にわきを重ねて置くんです。

潤　用意だね。

爺　そうだね、さっき言った二間半だら二間半ね。

潤　六日か七日中の状態出来上がるまでね。

爺　ところがね、これ、失敗するとスポンと落ってねだめになることあんです。土壌の関係でね。

潤　そうすっとまたやり直し。

爺　ええ。

潤　やり直しになると、ドウゴメになんなきゃないわけだね。

爺　そうだね。だから簡単なもんではないんだね、炭焼きは。大体、一ヶ月積むんでがす。完全に仕上げるのに。

潤　一ヶ月仕上げて、窯何俵出るって言ったけかな。

爺　三五俵。

潤　三〇俵か四〇俵だね。

爺　四〇俵の方、大きい方でがす。

潤　すと、一俵一円だったね。

爺　最低で二三銭かなんぼするわけだね。

潤　戦前のこったね。

爺　うだね。

潤　二三銭

爺　そん時で米二五銭かなんぼでしょ、一升。だから、二銭か三銭足しまえしねきゃ、

潤　はあ、よけい働らかなきゃない。

爺　だから、一五〇円なんての雑木だべ。一六〇円位はナラ。

潤　ナラはなんぼっしゃ。

爺　大体一〇円か一五円高かったんだね。

潤　一六〇円か一六五円ね。

爺　ええ。そんな程度でね。

潤　クヌギは？

爺　クヌギっていうのは全然ここにないからね。

潤　ああそうすか。ようするに、ナラの方は値段も高いし出来上がりも良いと。

爺　そうだね。

潤　炭の良い悪いはどこを見て、

爺　そん時ね、炭の等級はしゃ、一級、二級、三級とあるわけっしゃ。どういうなにかっつうと、一級というやつは例えば丸いっそうです丸ね、二寸位のやつね、二寸のそろいだね。それから、二級というやつはね、割ったやつでもね、例えば二寸だら二寸、こっちさ二寸だら二寸といったような、わっつあきにそろいが二級です。その他に三級になるとね、どんなにおっきさでも良いと、その代わりクズ入れてはね。クズはクズでワラビョウ(藁俵)で出したんです。そんなような等級だね。まだまだやかましいのもあったけっともね。それから、今度は等級によってね、前の方が灰化するんですね、真っ白になってね、窯のね。

潤　窯の前の方の部分ね。

爺　炭ですと。灰化するのが等級落ちて三級の方さ入るんです。炭というのは黒いというのだけれども本当に黒くなってる部分は一級、二級になるわけでがす。

潤　シロスミ(白炭)というのが出るのね。

爺　ハクタン(白炭)というのはまた価格が違うんです。一日に木を切って一日に焼いて一日に出すんですね。人はとっても入れないんです。

潤　早く燃やすんだったら油でもかけて、

爺　いや、何もかけないんです。

潤　火が早く燃えるようにするわけ？

爺　そうだね、あのね、ハクタン焼くのはっしゃ、窯が小さいのぶつんですよ。

潤　はあ、その半分くらいの？

爺　半分もなにも、この半分もいらね。奥行き大体六尺くらいだべね。そしてね、土いっそでなく石でたたくんです。上だけが土ね、ハチの上、盛った所だけが土ね、あとは全部石ね、そしてね、奥行きが六尺位しかないね。して、やっぱり、こんな格好になってて、ここトノクチになってっしゃ。なぜ、そのようにやるかというとね、そして今度、カッツァン、カッツァンって言うんだが、ゴミカキのようになってね、金の長い柄をつけたね、あの、ハイカキ（灰掻き）のようなやつ、かくやつね。

潤　ようするにデリキというんですか？

爺　ビ（デ）リキっていうんですか？こういうような刃前になってここから柄ずーっと。

潤　はあ、そうかそうか。こういうやつね。取りやすいようにね、柄の長さどれくらいっしゃ？

爺　柄の長さはやぱり、七尺から八尺位あんでねすか。カギの棒でね。

潤　熱いからね。

爺　そしてね、木立てる時はね、大体窯の中が熱いんだからっしゃ、入ることできないんだから、トノクチから木投げてやる。そして、なんとか金棒かなにかで斜めにこう立てるわけ。そしてドンドン、ドンドンとトノクチに火を焚いて、そして燃えたならば、煙突から煙出るようになって、焚き付けとかなんとか温度によってね、焚きついたってことわかるようになるのっしゃ。カンだけ使ってるからっしゃ。

潤　なるほどね、して何百度位になるのっしゃ。

爺　八〇度位になればみなつくんです。ドガマ（土窯）も同じ。七五度ではつかないからね。

潤　ハクタン（白炭）とコクタン（黒炭）ではどっち仕上がりが良いんですか？儲けようするに。

爺　儲けすか。儲けは白炭は倍位するでしょ。値段ね。

潤　白炭はどういうものに使ったんですか？

爺　やっぱり、普通の人も使ったけどね。品物が堅くできるんです、炭。

潤　カンカンって。

爺　カンカンだね、その代わり土窯のようにね、完全にサックリした長いものできねんだね。クズですクズ。

潤　白炭の用途はどういうものに。

爺　用途はあれ、鍛冶屋さんあたりでも使った。

潤　鍛冶屋ね、鍛冶屋。ふーん。

爺　鉄工所だりね。今になってね、あの頃は。

潤　鍛冶屋さん。

爺　鍛冶屋さんならず、一般の方も焚いたんだね。ムサイってことはね、寿命が持つってことすか。起こりが良いとようするに活気があるんだね。

潤　鉛みたいな色の白いような炭、鉛みたいな光沢もってる炭あれなんですか？やっぱり黒炭の方ですか？

爺　んだねー。

潤　黒炭の方ですか。

爺　んだね、黒炭だね。

潤　白炭ってどういう色ですか？

爺　黒炭って、白炭の方だね、鉛のようになるのは。

潤　そうすか。鍛冶屋あたりで使ってたコークスみたいなやつ想像していいですか？

爺　んだね。鍛冶屋さんでね、カネを溶かすために使ってたのは栗炭なんです。これはカジズミ（鍛冶炭）と言って鍛冶屋さんが使うために鍛冶炭というもんです。それはね、枯れ立ちでも生木でもね、かわっていいのは、ただ穴を掘ってそしてこまあく割って、乾燥させてただボーウボーウとみな燃やすんですね。くべてっしゃ、一杯のオキになった頃に水に浸したコモでも掛けてね。そして、バーッと蓋した後に土で埋めてね。後に火を消して三日位たったら掘り除いてね。そして、今度はトオシで通して土とか石とか取ってね、スゴに詰めるのっしゃ。それが要するにカツズミだね。

潤　スゴって炭スゴだね。

爺　そうだね。炭スゴ。それが、専門的に鍛冶屋さん使う炭です。

潤　火の温度八〇度って言ったが、火の色みてどうのこうのといった心配なかったんですね。

爺　やっぱり、煙突んとこ寒暖計の温度み、て八〇度になれば大丈夫これは消えないという。

潤　煙の温度が八〇度ね。

爺　はいはい。大体はマッチの軸利用することあっけっともね。

潤　こうやって、燃えるか燃えないか。

爺　危ないんです、でも。

潤　危ないってどういうこと？

爺　ガスが出てぼうーっと火が。

潤　ほう。石油だかなんだか入れて炭を焚くって話聞いたことあんだけっとも。

爺　あれはね、炭の光沢をよくするためにっしゃ。なんていったかな、あれっしゃ。

潤　火の回りをよくするためにですか？

爺　そうじゃなく、炭の光沢をよくするためね。なんだか、薬あったんだ、四合ビンで売ってね。だけっとも、大した効果なかったね。困る時煙突からつっこんだんだね。銀色に光るとかなんとか言ってね。トカゲ色とかね。効果ねかったな。

潤　あの、時々今でも作ってらっしゃるんですか？

爺　窯ですか？

潤　ええ。

爺　窯作ってだけっとも、ここんとこに窯あんの。私、今度出すから、炭も少し入ってらの。そこに小屋あるがすぺっちゃや、あれ、窯や。

潤　作る季節は何時頃ですか？

爺　何時頃問わねんです。大抵は春と秋だっしゃね。寒中もやったことあっけっとも、冬季間にもぶったことあるけど爺きなげて。

潤　一週間でできあがんではなあ。一週間休まんねな、首なってからなー。

A　小さいのもっけに作って見せんだったら、一日かかんね。

潤　そうすか、

爺　もうけだらば簡単でがす。

潤　日当払わねけない。

爺・A　いやあ、そんなことない。

潤　これ、ちょっと今の話ね。一時間二〇分の話。一時間一五分だ。一時間一五分の話でね、満足な答え出たんだべか私。

爺　このようにやればね、炭焼きの基礎っていうのでんだからさ。

潤　続いてね、一里とか二里とか向こうに行って炭焼きやったって話あんだがね、その間帰って来るんですか、食事なんどに。

爺　食事って、昼食携帯で行くし、夕方途中から帰ることあっしっしゃ。そういう時どきはね、炭運搬は炭運搬で一日ひをたやして途中まで出すとか、あるいは、炭小屋を作って、冬季間だけそこに閉じ込めておいて、そして、ソリで運搬した場合もある。そん時はやっぱり、働く人は小屋を作って自炊して泊まってやったの。

潤　その自炊する時は、米、味噌、カツブシ（鰹節）、少し贅沢かな、どういうもの。

爺　やっぱり、大根、菜っ葉、漬物、ツトコに入れてね。樽から直接出してというわけにはいかないから。そして、持って行っては。

潤　動物性蛋白と言ったら、魚くらいなもんで……。

爺　魚だってね、そうなるとその頃の時代になっと塩鱒が出ます。

潤　あと、ウサギとかなんとか。

爺　そういうこともやったんです。

潤　そうすっと、創作しながら、炭作りながらウサギを焼いて食べるわけね。

爺　そういうこともないけっともね。やっぱり、午前中にみんなで巻き狩りして獲った場合にはね、皮をとってっしゃおいて、鍋で煮て喰ったりっしゃ。仲間で三、四ったりも泊まれば、甘いもの喰いたいといえば、家から小豆を持って行って煮てね、ニツブシと言ったようなやったりね。まず今のようにコーラとかジュースとかそういったのなかったから、砂糖持って、砂糖入れたたまにはニツブシを煮て喰った、その位だね。

潤　あの、水芭蕉など食わなかったですか。

爺　あいなの、食わねね。

潤　いろんな山の物など、ありとあらゆるもの食べたっていうんじゃないすか？

爺　やっぱり、今時になればね、ウド、シドケを食べたりっしゃ。ウド、それからコゴミもとった。それから秋になればっしゃ、キノコね。煮込みにね食べたんだってね。やっぱりそんなに米薄くなる時でっしゃ。カエルとって喰ったりヘビとって喰ったりそんなことはしねでしたのね。ただし、日本米とね、外米と混ぜて食ったことはある。そしたようなことはあるんです。

潤　それから、夜寝てる時、オオカミ来たり熊来たりってことはなかったんですか？

爺　そういうことはなかったけど、タヌキは来たことある。

潤　遊びに？

爺　遊びにでもないけっともね、小屋の回りに。

潤　そういうの、これやるんですか？

爺　うん、そういうこともあったね。

潤　食べてみたり？

爺　食べてみたりね。

潤　どういう味しました？

爺　食べたやつはあんまり美味しいものでねんだおね。そいから冬季間中は月夜の晩にね、……バンドリというもの獲ったね。

潤　バンドリ？鳥？

爺　バンドリっつう、ムササビだね。

A　大きいやつ。

爺　大きいやつね。

潤　ムササビってどれ位の大きさ。

爺　猫位あるね。

A　ムササビは。

爺　ムササビは小さいの。

潤　色は？灰色すか？

爺　うん、灰色、毛が長くてね、頭が猫の面とすっかり同じです。

潤　ムササビって飛ぶやつでねの。

爺　うん、飛ぶやつ。バンドリってのも飛ぶんです。決して鳥の羽みたいに羽ばたくんでなくてね、手を広げるとここさマクが出るんです。コウモリと同じだね。それを夜獲って来てね、毛ぬいて食べて。

潤　皮などは、

爺　張って売ったりね。だけっとも安くて。

潤　ここ四〇年か五〇年の生活、一時間で終わるとはおしいね。今日は、お祭りだったし、これ位にしておきましょうか。どうもありがとうございました。

爺　はいはい。

（中断）

A　……つな、土ができればだね、この土を剥いでしまってだね。この窯に適した土が早く出来ればだね、これをオチガマといってね、まるくみとっくみしないで、この傾斜のきつい所をここをこの辺の平地までさげた土をね、さらにこっちへ出してきて形を作ることなんです。

B　オチガマと称するんだね。

A　そういう場合もあるんです。また、本当に平らさぶつ場合はね、さらにニワの方まで土をはねてだね、自然に公平に二尺五寸だら二尺五寸下げるんです、黒土をはねてね、平地にぶつ場合ですと。でも、本当に傾斜のないとこさ窯つけねんです。そして、なるべくはね、一山焼くうちにこうした山の斜面にしや、……を徐行しなければないわけだね。例えば水が出てくるとこね、そういうとこ運ぶためには、……。

（テープ終了）

[25]「熊獲り」

（昭和四十八年五月一日）

登場人物　久五郎(久)・吉田潤之介(潤)

久五郎　まず、熊獲りに出発するとこからでいがすか？

潤之介　はい、いがす。

久　昭和三年（一九二八）にね、十一月二十二日、冬至寒の二日目だね、寒の二日目。三峰国有林のマナイタザワ奥に、国有林を払い下げした山に、その当時雪が五寸か六寸あった。そこにその時の仕事はだね、払い下げ奥の炭焼きを専業として、その時期はカマウチの最も最中であった。しかるに、当日、国有林には窯の葺き草がないために、普通出かける時にカヤを負い、同時にその年はね、狩猟免許証を取った年である。同時にカヤとね、鉄砲と弾と弁当を持って、八時ころ出発した。そして、すでに距離において一里半、現在であれば一〇キロですか。その現場に着いた時間、十時すぎであった。今でも私忘れてないから。そして、まず、新しい窯にね、焚き口に火を焚いたと。それからその日、雪の具合が良いために、友達の千葉カツジロウという、私にとっては、すでに親戚になってる、その人も同様に狩猟免状を得て来た人であった。ほれで、一服やりながら、鉄砲を二人で持参しているために、熊の跡を見てきましょうという話になったと。そして、マナイタザワより、南丸松保沢を通り、大倉沢、そして、北丸松保沢に至り熊の跡を見つけたと。これこそ、勝負をしようと二人は熊の跡を追った。というわけっしゃ。そして、方向は三峰山方向に熊の跡を追い、時間にしてその時は、二時半頃であったとね。二人はその時タバコを吸ってこの熊のあとを追い詰めることを出来ないと判断して、それより、また我々の炭焼きの小屋方向にね、小屋って窯方向ですよ、に帰りようとして、トボトボ下り、沢を下ったと。しかるに、思い出すとだね、大倉沢の北、丸松保沢の奥、熊穴のあることを思い出すと。そこへ足跡もなかったが、その穴を回ってみようと思い出し、二人はその穴の側面に至り、これが穴だと、私が言ったわけだ。相手の千葉君は、穴を覗かずに、まあ、顔色が青くなってしまったというわけですよ。その時、私はね、なんのその鉄砲持っていながらね、熊がいたって何が恐ろしいと頑張って穴を見たわけですよ。そうすると穴の六尺奥、二m奥位にね、さも、かわいらしい顔した熊が入り口を向かって、まなこがキロリキロリしておったと。「やあ、熊がいた」とこう言ったのっしゃ。そこで、熊を撃つということを話し、相手の千葉君は、「や、熊というのは正面からみて撃つもんではない」ということを言ったと。「これは家に帰って、あす、両方の親達を連れて獲るではないか」と言っ

たと。

潤　家族ですね。

久　親達ね、両方の、俺のオヤジと向こうのオヤジね。

潤　ああ、なるほどね。

久　それに、私だね、俺はその狩猟税も納めている。我々若者が、穴にいてね、どこにも行けない熊を獲らないでいては恥なことだと。そこで、まず、撃つからということを話たのっしゃ。そうすると、もし、出て来たならば二発目は俺が撃つと、約二間くらい二間って四mくらいあとで、千葉君は弾を込めてまちあっていたと、待ってたと。その時私は、穴の中に、鉄砲の筒先を入れ、そして、メイケン（眉間）、額だね、をねらってドンと撃ちましたと。すると穴の中は、バクエン（爆煙）で、煙だね、で全然見えなくなったと。見えるようになったのは、三、四〇分くらいであったと。そして、その時期に再び覗いてみたら熊は猛然として正面を向いていて、向かって右のね、目頭より血が出血してやったと、どうどうと顔から流れて、月の輪を血が通してやったと、それでもそうして見てたんだね。そうして更にまた、二回めの弾を詰めて私がブッタわけ。同じく千葉君は四m後ろに出たらばということで構えておったと。二発目もまた撃ったと、眉間を狙って撃ったと、そして、同じように三、四〇分後に爆煙の後、覗いたら更に体位を変更して反対に後ろ向きになっておったと。それで、鉄砲を側に置き、「千葉君、木を切ってごぜ」と、約三mほどの長木を切って、その木で自分は熊をつつき出そうとね、竿でつついたが、熊はモクモクとしてまだ死にきらなかった。そして、三〇分位たった後、様子を見て、どうしても熊が穴から出そうにもないし、出ておってもかかるふうが絶対ないような感じがしたと。それで、二人で穴の中を覗いてみたが、考えたにいつまでもこうしていても時間がたち日が暮れるようになったと。そこで、朝に窯の小屋のカヤしょい、背負い縄を持つ私は、穴の中に入り、熊の足を縛ってくるということを話、熊穴の中に入ったのである。その時後ろの姿を見て、左の足を両手でひっぱりまわすが、熊は漠然としてきてるので、例えるとガマのがんばりの足のように、何度も頑張っておったと。それを背負い縄でひっぱれば、低くしにしてだね。結んでひっぱればしまるようにして、そしてようようその足首を結わえ付けて出て来たと、私はね。そして、出て来て入り口でやあという声を上げて引っ張ったものの、背負い縄は切れるとも熊は出て来なかった。それで、もう一度折り返して二本に足を結わえ付けて来た。また、前のようにヤアという声を上げ、ひっぱるともに熊はどうなって出て来たものか、入り口からアアという声を上げて穴口に

正面に立ち上がったんです。その時千葉君は、後ろから自分の右の耳の脇に筒先をよこし、ドンと熊を撃ったんです。撃つ同時に、千葉君は弾の入れ替え瞬間だね、切り替え瞬間にカチャカチャっという音をたてると同時に、その場所は、はなはだしく水も流れ、岸壁であったので、足を踏みはずすから、沢底にまくれ落ちたんです。落ちたなと思った時に自分も熊に立ちあがれたので。

潤　あがられたのでね、

久　ええ、立ちあがられたので、同時にあっというまに、熊が一応穴の中に入り、またも、アアという声のもとに入り口に立ち上がり、これではと思い自分も縄を投げてはねおちる、って飛び降りるだね。飛び降りようとして駆け出す同時に、その場所が悪いために、岸壁のために一五、六間ほど下にまくれ落ち、柴にすがってようよう立ち止まったのである。その時、千葉君は下より鉄砲を持ち、その沢を上って来たのであると。「やあ千葉君、今、熊は大暴れをしておる」と、「それでもう一発撃たなければ、ま、死なない」ということから、そこより、二人で千葉君を先にたて熊穴に向かったというわけっしゃ。その時、私は鉄砲は持っていなかった。跳ね落ちたんだからね、ひっぱりかたしてたんだから。よく見ますと、一四、五間まで、熊の側につき、その時熊は穴の入り口におったと、それを左の腕下のところをめがけて、千葉君はドンと撃ったのであると。すぐ、熊は立ち上がり、ドンと後ろに倒れ、我々の上って行くところへ熊は逆さに落ちて来た。さあ大変ということを言いながら、我々は左手の柴にすがり足を上にあげ、後ろのケツホダを熊を下に落としてやったと。例えば、柴さすがってね、足を上さしてっしゃわ、ケツばりなにして、そこの下、熊通してやったの。まっこうに沢落ちて来たの、ぶったから。ところが、どこさも逃げらんねから、柴さすがって足の方を上さあげてそこを熊通してやったんだからね。そういう意味でがすと。そして、落ちた後に熊の穴のそばに近づいてみると、我々はね落ちたりまくれたりした間に、穴の側にあったミノっていうんだが、背中当てだね、昔はミノって言った、それに、スカリ、ブドウ皮のスカリだったな、それに弁当入れておいた。その弁当とミノをだね、それを人間と思ったかね、熊の手でムチャムチャに壊してしまったと。そして、ミノや弁当、弁当入れたスカリね、これは、ツマビで全部。そして、もう一度穴を覗いたがあとはいたようではないと。二人で話して大声で万歳を唱えた。それから自分は、掛けておいた鉄砲の弾詰まった銃を肩に掛け弁当とミノを、五、六寸の雪もあったもんだからね、それを沢なり柴にすがりすがり下に下りはじめた、下りはじめながら、

自分は「千葉君、君は大分顔色が真っ青で人色がない」というと、「小川君も顔色が人間のようでない」と言った。人間の色じゃないと。下におりてみると、熊はウチピシャになって、左の脇の下からツタツタと出血して、弾のあとから。それから千葉君の撃った弾が鼻の真中に撃ってあったと、それがために、口の中の舌ですね、舌が半分ほどもげて噛むことが出来なかったから、弁当や背中当ては手でかいたことが分かったと。噛みつく事でねから、ムチャムチャと歯やられたから、そこで、そういうような考えをしたんだ。そして、男かオナゴかと見ると男熊であったと。そこで、弁当を食べようと、時間もすでに四時半か五時頃であったと、弁当を食べようとみると弁当の中は、全部おかずから血まみれであったと、ご飯が。それで、腹がすきてるからそれを半分以上食べたと。そして、いろいろ考えるにどうして運搬しようと、話をしたが、まずもって足から背負い縄を解き、熊の首に背負い縄を付けて引っ張るか、あるいはそこで背負うかと話したので、足を引き立ててみるとさすがは、升沢から欠入までの炭の五俵も背負う力強い相手だからね、千葉さんという人は。私も身体が丈夫なほうだからして、それを背負って行きようということにして。そして、その頃はだね、背負い縄一本だけだから、その頃は、今は利用してないけっとも、その頃はねハタノオビっつうのがっしゃ、あれ六尺あったんでしょ、胴巻いてそして褌してたんだから。同じ、相手を同時にハタノオビを取って裸になって、そして、それをもって、足や手を縛り背負い縄で背負って運搬しようと、自分は、先にミノを着て背中を当てたの。千葉君は、弁当を背負って鉄砲を掛けるというように背負い、十文字に背負ってね。そして、自分は熊を背負っておちようとしたの。ところが片足を立てても両足は到底重いために立つことはかなわなかったの。その時、代わって「俺が背負ってみる」と言って、千葉君は、またもや鉄砲をおろし、代わって自分は鉄砲を背負い、弁当をスカリを背負って、千葉君も同様背中を当て、起きようとしたが起きることはかなわなかった。それから、二人で語りあって、今度はどうしても背負うことが出来ないから、熊の首に背負い縄を結び、二人で一丁づつの鉄砲を背負い、下りに熊をひっぱったんです。ひっぱり下げた、ね。ところが、始めは雪の上であったから、ツルツルと走ったんだが、だんだんと時間のたつ次第に、熊の背の毛の中へ雪が染み込み重くなって走りがかなわなくなった。走んなくなった、雪が。そして、約一〇〇m～一二〇mの所に置きして、なお、二人で語りあい、朝ほど出発の炭窯構築の場所へ、熊を置いて、窯の現場に帰ったと。その時、同じ窯の構築の方々、二、三人

位かな、四人位だったかな、もう家に帰られる合図をしてたったんです、「やめろー」とか「あがれー」とかねってね。そこへ自分は、熊を獲って来たから皆んな手伝ってくれと大声で叫んだと。すると、その仲間のうちにお前達に獲られる熊はいないということ、また、本当かというような声もあったと。そのうち、窯の構築の場所に帰って、うそではないと、この弁当入れのスカリあるいは背中当てを見ると、熊の血がかくのごとくであると。それで、みんなの方が熊臭い血がすると、それで認められたと。熊を獲ったということね。それで、雪を降った後に使用するソリがあったので、その二、三の方に、運搬するために手伝ってもらうことになり、更に、折り返し熊の落ち場に自分等も一緒に案内し着いたと。もうすでに、グラグラになる時期であるので、行く途中、枯れたガンビ、ってウタイカンバだね、を取りタイマツの用意をし、だね、熊の位置に着いたと。すでにそこで暗くなったので、その場でソリの準備をし、熊をソリに付け引き縄を付け、押すやら引っ張るやら、我家の方に向かって下ったというわけだね。そして、途中腹が減りへとへととなって、家まで引き押して帰った時間は、三時半頃であったと。その時自分は、家の近くへ来てから急いで家に入り、「今来た、熊を獲って来た」と言うと、自分の妻だね、妻は「本当に獲って来たか」という。「本当に獲って来た」ということになって、まず、起きてイロリに火を焚き湯を沸かさせ、と同時に熊を引き回す入り口まで着いたと。それから熊をおろしてニワに入れ、眺めた時には、本当に自分もたまげるような大きな熊であったと。それから、ヤサキゴシュウギ（矢先御祝儀）、鉄砲のご祝儀だね、鉄砲を撃った、として、酒を二升ほど、みんなであったためて飲み、また、ご飯を食べて風呂も沸かして皆で入り体をあったためた頃には、すでに東に朝日が出る頃であったと。まず、それまでが、到着したことでね。皮の何時まで話するかね。まず、その日は一日、我々は、お湯に入ってね、イロリの側にゴロゴロと皆で寝てしまったと。そして、朝ご飯の食べることにまた起き上がり、そのうち、近所の方が熊獲ったという評判で、見に来て一日ニワに滞在をさせたと。その時部落の方が、そのままで、その時の価格百円で値段を付けられた。しかし、我々ははじめて狩猟を許可受けその熊を売れば部落の方、獲った場所の営林署、あるいは警察署関係の方に、馳走することもできないので、百円では売らないという回答をしたのであると。そして、その晩それではこの熊を皮だちをして手伝うとのことで、有志の方が集まりその時、皮を半分くらいたつた後、手伝いの方は熊を煮て食べたいとのことで一〇人あまりで、四升焚きなべだったな、熊の

肉をこまく切り、ねぎを入れて三回ほどその晩一一時頃まで、食べたのであると。また、皮を除き、手足を股の根元あるいは肩の根元から切り離した。目方っていいますか重量、皮を除いたので手が四貫五百もあった。足は、五貫くらいあったんですよ、腿から。そのように、部分的の収量だね、目方で、おおよそ全貫が六〇貫に認めたと。その時の熊の胆、胆だね胆は、日数をかけて乾燥で四匁に出来上がったね。それから、皮ですね、これも一〇日とか半月とか二〇日とか日数かけないと乾かねからね、油のためにね。それを乾燥した皮ですね、大きさが、肩幅と尻幅で四尺二寸、それに頭が一尺五寸くらい。それに、足がついて爪をつけて足がある、大体七尺五寸くらいの高さ。それで、昭和三年の一〇月頃にその皮を玉造郡東大崎伏見でもねし、要害、要害、そこの高橋、手代、手代か、手代デンジロウという方に皮だけで一〇〇円で、他人のお世話で売り渡すと。そして、その皮をね、専業者に頼んで油をとり、出来上がったものにね、年寄りね、ヅンツァン、バンツァンと孫さん二人と横に敷いて寝る、休むように使っておったと。それで昭和二十年頃かな、から三十年の間には、その皮を他の人に三万位につけられてもその買い主は、家の宝ものとして残されてあるつうわけだね、売買しないと。なお、熊の胆の方はね、大衡村のね、駒場の方に胃の弱い……。

（テープ終了）

［26］「オシキ①」　（昭和四十八年五月二日）

登場人物　喜一郎(喜)・喜一郎妻(妻)・吉田潤之介(潤)

潤之介　昔、あったと思うんだがね、大判、中判、小判すか？

喜一郎妻　大判、中判、小判。

喜　それを、三つ組みつんだね。三つ組みと表してたんだね。売り方については、三つ組み欲しい人もあっし、中判欲しい人もあっし、小判欲しい人もあっしね、それはそいつで出してやった。

潤　そいうのをいっさいオシキ（神膳）といった？

喜　オシキっていうの。オシキっていうの神、膳と書くんだおね、先生。

潤　ああそうですか。神、膳とね。

喜　神膳ね、神様に上げるために作ってたの。

妻　本家にね、国男家と私の家と裏、今の宗右衛門家とあと船形荘と四軒。

潤　神膳っつの、一冬の間に作るのですか？

妻　十一月、十二月、ふた月。

潤　十一月、十二月のふた月。で一戸あたりでなんぼ作ったわけっしゃ？

妻　だなぁ、おらいあたりで三万なんぼか。

潤　三万？ふた月で三万？

妻　ほでがす。だれ、木挽きしてだお。板木挽きをこんなに大きなノコで木挽きしてだお、こんな板一部五人でひくんだよ。

喜　板の二つ割。

潤　あんな広いノコギリで？

妻　ほいつをね、みな干してほれからそいつを、縁をとったり板をとったりして、縫うわけ。

潤　その縫うっていうのはね、たとえば、木の皮剥ぐ……。

喜　サクラ剥ぐ、一年でも二年でも干しておいたやつ使うわけ、一年でも二年でも干してこの火棚で。

潤　ああ、干したやつ。

妻　生だら使わんねよ。もてて、先はささんね、だめ。一年、二年、三年も干さなくてだめ。順繰りに干しておく。このけえ、このくれえ皮を、こんだ、えれえなんだあんでがすこれを、ここさ当てて一分くれえにしてて切んの。

喜　てことはね、皮ってやつは木の太さによって幅ちがうのっしゃ。そいつをね、約一分くらいの幅にナタで断つの。

妻　んでね、こんだ、節だとかうんとがすぺ。節のいて節のねえのとこばり取ってきて縫うの。こえの膝株の上さなにか置いてね。ドヤ置いて、つ、つ、とこやえんの。

潤　縫うって簡単に言うけど。

妻　平らに、ゴキゴキとなるの、おら達嫁に来たばりん時。そいつね、ごそごそって、あんながら取んねの、下手だっつと。そいつすっかりささらんねよに平らにして。背にはいで、先を止めてつっこめて。メドオシあんの、針みてなの。

喜　その針みてなの、木さ通して。

潤　針みてなの何つけんのすか？紐すか？

喜・妻　ほいつ、ほれ、これ。こいなの一個つけて。

喜　皮通すために、針使うんだから。そうすると穴さカバ通して。

潤　カバって何すか？

喜　サクラ皮ね。

妻　サクラ皮縫うには、なんぼ渋い、板は渋い板あんのね。干せね板ね、口あかんねの。そいつめくるようにして、三回メんとこさ穴開けねない。

潤　穴開けんの何て言ったっけ？

妻　メドオシ。

潤　そのメドオシで刺すの、三回？

妻　おれのあったけどどこさいったか。

潤　探してってけさいん。身上持ちのバンツァンのくせに粗末にしてんだからなあ。

妻　みな、ねやー。どこさいったんだか。

潤　春来っからね。こい時オバンチャンさ食い下がっておかねと。

妻　おれは、こいなのあったんだけっと、すっかりいちいち覚えてるよ。

潤　オシキ作る時っしゃ。

妻　あのね、小判っつの五寸、中判っつの六寸、大判っつの七寸。

潤　幅に切っておいて。長さは？

喜　幅は、ほだね、なんぼや。五寸に六寸に切ったもんだかや小判こつうもの。それから、中判つうもの。

潤　板切っておいて干すの？

妻　板、長いまま干すの。

潤　だから、その長さがなんぼかつうの。

喜　長さは六尺二寸くれえに切って。

妻　小判はね、これくらいぐれえの板になんの、これくれえぐれえの丸棒削って。

喜　幅によって材料取ってくるわけだから。

妻　そいで、……に切るわけ。ほして、すっかりと干したあとで十文字にかけてぎっちとまるくわけ。よんねように真っ直ぐとなるように。

喜　そりくりするからね。

妻　そりくりなんねように、ぎっちりまるくわけ。

潤　バアチャン、今、まるくって。

妻　板おいて十文字に、板置いてこういく束ねるの。中判、大判、小判、ね。

潤　そうか、そして、一分くらいの厚さにして、干して、二年か三年干して置いて。

妻　そいつね、なまかむ干せば、口開かんねの。うんと縫うに難儀しなんね。

潤　その曲げ方どうすんのっしゃ。

妻　曲げね。このけぐらいずつに切んの。

喜　小判っこだとね、一尺、二尺くれえかな、二尺とかね。中判だと二尺五寸とかね。大判だと二尺六寸だとか切っておいてね。今度、こいな板を書くんだおね、ケイヒキつもんで書くんだおんね。縁を曲げて。

潤　そこを曲げるわけだな。そうすっと、真四角に折れるわけだね。こいく丸くなってたからね、なじょして曲げんのかと思って。

妻　小判はね、何寸だら何寸だりのとこさ墨するわけ。墨をしたとこね、切るのふたとこ（二箇所）、全部でヤアトコ（八箇所）切んの。ノコギリひくの。そいつをこいな鉄鍋かけんのここさ、グラグラ煮立てておいてそこさ入れて曲げんの。

潤　ああ、ほう言って聞かせれば話しわかるの。なんだかバンチャンの自慢話しばりしてるよなことばりで。

喜　ほだよ、ほだよ。

妻　それから、中判と大判だとすまっこだとようとこきかねんねの、ようとこ。このっけの丸いとこね。ようとこきかねんねの。ふたところ出るの。今みてにようとこひいてお湯さ入れて、すっかり曲げるの。中判も大判もすっかりこのけぐれえに丸くなるすぺ、ようとここのけぐらいひくのだから、ツ、ツ、ツ、ツと、ね。そして曲げて、ほうして、ナマワラ（生藁）でゆつけて、ほうしてすっかり百だら百バンずつ縄通して、干すわけしゃ。干せないときは、こたつさあげて、こいつかけて、ギリギリ干さねで、自然と干せば。ギリギリ干せば赤くなって裂けるの。

潤　ここまで、できました。それから上の方はなじょすんの？

喜　そいつが板、板のほうと縁くっつけるのっしゃ。

妻　大判だったら、こういくなってっから、角角あっから、今度はね、角はまるくね、このけぐれえの台っこあんでがす。こいなカキの台かけておいて、このっけぐれえの中さ入れるの、……ナンメとして。ナンメとして入れっとこんどこのジイチャが立ってて、足を掛けてこっちさ一本こっちさ一本に手付かったマンガリ、縁切んの、ナタあんの手付かってね、

あがって……したら、ぎちっと縛ってっから、こんだ、この台切るわけっしゃ、手で。このけぐれえまとめて切るわけさ、板。こいっさつけんの。……ったって、ヅンツァンわかんねんだ。五〇枚だら五〇枚ちゃんと入れてかたさ、それからかぶくの、すっかりナタでね。曲がった……でがす、わんぐりと。……ほいって切るわけさ、……男共がさ。いやんべ丸くなってるわけさ、ほいっさ、縁をおしけて縁をすっかり……当ててそうして縫うわけ。縁をあてて、大判、中判と縫うわけ。縁を当てたら、ここと、ふたとこ、こっちふたとこだから、やあとこ縫うわけ。ズーッと。縁をカンナかけて板もみな美しくカンナかけんの。ビガビガと光んだよ。こんだそのお膳っこ、縁つけてね、大判、中判四〇枚ずつ重ねんのね。そいつずっと重ねたらね、十文字に掛けてぎっちり掛けてまるっておくの。大判中判は四〇枚、小判は五〇枚、ほいってまるくの、ぎちっーと縁、縁をこっからね、すっかり縁、こいななってるから、すっかり板っこ板っこ、美しいんだよ、まるったの。ほいって下げるの、早坂クマジだら、クマジが今日はアオマンさ下げっ時は何百枚、宗右衛門家は宗右衛門家で何百枚と下げんのさ、札さ名前書いて。

潤　ほいって、たった一一月、一二月の間で三万枚作んの？

喜　んだね。

妻　三万五千だとはいう、四万ぐれ出す。

潤　四万も作られす？

喜　わけないんだおん。

潤　そうすっと、では、一日二千枚くれ作んねとねす。

喜　なんだや、そんな作んね。千ぐれは出たのね。

潤　五百枚作って千五百だね。

喜　そんなもんだね。

潤　そんくらいは作れるわけね。

喜　そうだね。

潤　大判中判は四〇枚というやつでね、どのくらいなるのっしゃ、まるくと。

妻　このくれぐれね。

潤　そんなんなんの。

妻　なる。すっかりね、コモさ包むんだお。このけぐれの四方に長いの。

喜　コモだって大きいもんだからね、めぐせからね、その幅に応じた高さでね。

妻　カヤ、スゴみてに編んでね入れて、あたりさ藁おって、こさ、……して、しよって歩くの。二モリだら二モリ、三モリ下げんの、あとはしょって歩くの、このけくらい

さ、……。

潤　あとは馬で？

喜　しょったのさ、沢渡まで、人力で。

妻　しょったんだよ。

潤　して、アオマンに行って。

妻　夜はね、そういな仕事して、夜食食って、寝るのは二時半、三時だよ、朝方の。寝っとこ、日だおん。そういうに、昔の人達難儀して、こういくして長生きしてんだよ、働いて丈夫なもんだよ、昔の人達。夜寝ねんだよ、二月も寝ねんだよ。先生ね。朝の三時、一晩闇夜して朝にやすぶくて寝んの三時だよ。三時間寝ればいいようだ。酒だって、正月いちげんに勘定してお金貰うの。こんだほれ粉だって砂糖だってあげねっちゃ、夜食食うの。そいなのは皆引かれんのさ。そっから上げっから、アオマンさ。

潤　帳面三冊だの、鉛筆五本だの、くし三本だの、タスキ二本だの、はたき三本だの……、しめて何円だのってなってんだお。

喜　んだよ。

妻　ほして上げれば皆引かれんだよ。おら先生、もぞいがす。故郷離れて、こっちで腰巻き一つ買って貰らわねよ。今の人達大騒ぎだお。寝ねで稼いで何にも買ってもらわねなんて。大騒ぎだ。

喜　時代だからお。そして服装からだおね、その当時はね、オナゴの腰巻き売ってんでがすと。ズロースはいたもんでもズボンはいたもんでもねんだお。

妻　ズボンはくとね、けどんな腰巻きはいたもんでも……、ミヤココシマキっつのねど、……なに腰巻きだなんだって……、足袋は履いた足袋は。

（中断）

外を歩く足音。

鳥のさえずり。

絶え間なく聞こえる鶯の声。

［27］「オシキ②・女正月」　（録音時期不詳）

登場人物　としお（と）・潤之介

としおオバンチャン　へったりへんねだったりだから、田作ったてわかんねな。つうようなことばり考えてね、来た節で、ほら、なにもあんまり、余計ななにもほら、考えるなどもないな。家では働く一方で、裏の家ではそれからずっと。いつ頃だか、山の管理山の世話になってずっと暮らしてきたことは、まず、管理人の世話になり、木あれするにしてもらってやって来たんだべけっともね。よったりや五人の人の総代、山総代どって営林署さ、今は中新田営林署あって行くけっとも、私達小さい時分には仙台さまで行かなければ、ショウリンキショウつうもの、あの、用たさんなかった。そうして、歩く時分に労働頼むからと言ってみんなしてよって頼んで、歩けば、ドウシン作ってね。そうして、今度吉岡あたりに今の担当区みたいなとこあったんだってね。そういうとっから、ショウリンキ来たりなんかして、皆してまわった、総代した……一年待ったなんてことあったんだってね。

潤　オバンチャンうんと苦労した時、木地作りかなんかやったのすか？吉蔵さんとこに聞いたらね、ヘラ作ったり炭焼いたり、サンボウ（三方）につかうオシキ（折敷）作って夜中まで働いたのっしゃ、なんてね。

と　そいつはしばらくやったんでがす。私ら、十四、五から折敷っつうものは、ここでずっと吉岡さ出して仙台まで吉岡から送って、ずいぶん。もとにはそういうもの使って、神様さ上げっとって、まず出してけろ、出してけろ、なるべく多く出してけろってことでね。雪ふり集まったってことで、折敷に山から木切って来て、板さひいて、何にも出ね節に家の中でする仕事だから安い仕事だけっとも、家ん中ですっから皆してすっから安いといったって、電気もきらわねし、雪は今のようではないんだおんね。年中沢山降って、外さ出て仕事すってことは冬分はねんだおんね。半年つうもん外の仕事でねような節でね。ほんだから、そいつは。でもね、神様さ上げる折敷だから、年前だけだからね。年越して過ぎれば、来年の為に作っておいても良いって言われっけども、別なことしなけないから年越すとやめったもんだね。そん時は夜十二時だり一時まで働いて夜、朝もなるべく早く起きてやるんだおんね。

潤　オバンチャンのお名前はなんとおっしゃんのっしゃ？

と　私の名前はとしおだなんて。

潤　としおオバンチャンだね。ひらがなすか？

なんでもあんまり古い話わかんねからね。もとのそういう話があったつうことだけは。

潤　その十六日のお祭りの時ね、なんか騒いだりなんだりしなかったのすか？門松はどこで焼いたのしゃ？

と　門松は家さ立てて、家で焼き納めたもんだおんね。

潤　炉辺で。

と　うだね、門松ってものは。

潤　ウチカドマツってやつで。

と　んだね。うちさ、門松ってもんは陰の方さ祀ってたもんだおんね。

潤　陰っていうと？

と　そっちの方さ、茶の間の方さ一つ飾ってたもんだね。三階松。お年縄ってのはしねの、ただ松だけ。そういくしたんだね。松は表の方さ飾るもんだつうけど、裏の方さつうことあんだね。茶の間の方さ飾って、あげっときは三日うちあげて四日目におろしてね、ここの座敷さ火を焚いて、別な火を焚いてね、そうして塩水くべて松をそこで焼いて、そこさ、炭くべてそうしては、そこで餅やいて喰ったりあげたりするもんだなんてね、十五日の日には。

潤　塩水かけたら火消えてしまうんではないのですか？

と　塩と水ふって火を清めるって言ったもんだね。

潤　わかった、なるほどね。

と　今はこういう節で、新暦ということになってそういう詳しいことしなくなったんでがすとわ。うちでおらいのお父さんとおれのダンナが一〇日違ったばりで、年越し初めに亡くなったたおんね。旧暦の十二月一日に十一日だったか、そういく亡くなってからはなにもあったもんでないから。あんまり、しない。門松はもとのように上げてはおくんだけっともね。

潤　マユダマしないんですか？

と　あいつは十五日に作って、十八日におろして、そのまま干して後から食べるようにね。

潤　十六日は女正月で、女の人たちが観音様から山の神さまから歩った。

と　うーん、歩ったね。

潤　八幡様歩って帰ってきたわけだね。

と　やっぱり、場所の方さ出て行かねから、ここの山だけでね。ここらに建ってる神さま達さお参りしてなんていたもんだおんね。

潤　オバンチャンの話聞いて為になった。だんだん納得ついて来ましたよ。それからね、お宅に、書いたものあるんですよ。鳴原先生、本家から借りたのって本あるの。

と　はぁ

潤　そんなものあったら見せてもらいたいんだけども。

と　オトサン達亡くなった時、私三十七才だったからね。

潤　三十七才で亡くなったっていったって、鳴原先生など、戦後ですよ。農学校にいたね。よく来て、ここからいろんな本見せらったり、大崎の殿さんのお札など見せらったと聞いたんだけども。升沢神社に上げたお札、字見えなくて真っ黒けの木札でね。それ、東北大学に持って行ってね、電気かけたら出てきたの。大崎っていったら向こうの古川、それから栗原の殿様ですよ、そっちの方までここの信仰厚かった神様です。だから、そういうのあったら見せてもらいたいなと思って。

と　私さっぱり何かにもわかんねようになって。そん時まだ子供、今の家督十五才の時だからね、吉岡にいるカツノシンというのと妹の亭主と……。

（中断）

［28］「結婚」　（採録時期不詳）

登場人物　早坂吉蔵・婆（吉蔵の妻）・吉田潤之介

（突然始まる）

潤之介　ここは、足入れ婚なんてのなくって、正式にやって、かたっぽうはゾウリの鼻緒切って、ダンナの方は表口の方から行って座敷の正面に、デイって、さっき言ったね。

吉蔵　そうだね。

（テープしばらく中断）

潤　それからね、ババチャンはどっから来たのっしゃ？

婆（吉蔵の妻）　おれはね、加美郡。

潤　加美郡、それで吉蔵さんはここの家督。

婆　おれのじいちゃんは色麻からもらったわけさ先に。その人と子供五人いたわけっしゃ、

吉　一八年そった。

婆　一八年のうちに五人もった。

吉　お産で亡くなったんだおんね。

婆　五人目にお産で亡くなったの。そして、亡くなった年にこの家からいったおんつまがおらいの実家の隣さ来てるんだ。クンヌキってとこさ、ね。ここからしゃ、ほほだかして、ここから、その人が、おれ、非常に子供好きで子供好きで、よその子供うんと目かけてけたもんだ。それで、子供数いるし、とうちゃんのほれ、妹二人に舎弟一人と三人いすぺ、とうちゃんの子供五人いすぺ、と八人の子供ね。一人前にしてけたりもらったりしたんだよ。ね、おれ、とうちゃんの子供。あと、おれんな五人でたべっちゃ。あの、さっき先生と語って行ったの。あれおれなの、おっきなのだ。飲べえ息子。あいつおっきなので、あの下五人いるんだ。一三人の子供おら、まず親代わりになってみながら、区別つけねでおがしたんだな。そして、皆けてしまってわ。今一人いるんだ、仙台に一人いるんだ、おれのバッチッコ。

潤　そいでね、来たね、お嫁さんに来た時どういうふうにしたんですか？玄関口でなんか歌うたうとか。

婆　おれな、おれ嫁ごでねえから。コウサイ（後妻）ってもんだ。さき死んだとこさ来たんだから。だから花嫁ごのようにめでたかたねわけさ。ただね、馬でぬりかけて来て、そして、十二月で、馬でぬりかけてきたの、おれ。子供とも一番おっきいのは一四、ツチオ一三、家督息子七つに五つだっちゃな。タツオ七つ、ケイイチ七つ。皆、鼻かんでました。古川さけたのは三つのうち来たの。そいつがほれ、「かあちゃんが病院さ行っててな、直ってきたんだからな」といったら、ほんとのガガの気してその晩からおっぱい飲んだんだよ、おれの。

潤　すいぶん苦労したんだね。

婆　苦労したどもね。苦労しした。

潤　ババチャンそういう苦労しして、ここにいらしたね。ここの一般的な結婚の方式はね、どういう方式なんですか。

婆　ここんのはやっぱり、ツノガクシ（角隠し）被って、リオンツァマ頼んで。

潤　付き添いだね。

婆　うん、付き添い頼んで。

潤　チョウチン（提灯）さげて？

吉　迎えにはチョウチン下げた。

婆　ほら、今ね、ここ嫁ご来たから、チカムカエつうもの出はんだ。嫁ご門口さ入らないうちに、チカムカエってもん出たんだ。向こうの方からメデタ若松のご祝儀の唄歌って来んの。とうとうっと、わかんの。ほんだら、こっちチョウチンつけて迎えに行くわけさ。

潤　そして、トノクチまで来て。そして、トノクチですか、ダイドコ（台所）の方の入り口ですか？

婆　ここの庭から入れんですね。

吉　門口から入ってきてね、ここの庭に臼を並べてしゃ。

婆　ヨイットモチつくんだっちゃ。

吉　二つ並ばせてしゃ、「ヨイサ、ヨイサ」ってやってんだね。両側でしゃ。その中をずうっと嫁ご通らせるわけしゃ。

潤　餅ついてる間、何か唄でも歌ってるんですか？

吉　歌うって人が歌ってるわけっしゃ。

婆　箪笥担ぐ人が歌ってるの。

吉　そしてね、餅ついたとこくぐって来っとしゃ。今度、やっぱり。

潤　正面玄関すか？

婆　んでねえの、この庭から入るの

（テープ中断）

東北文化資料叢書　第三集

船形山の民俗　吉田潤之介採訪資料

二〇〇八年三月三十一日　発行

発行者　東北大学大学院文学研究科　東北文化研究室
代表者　原　純輔
〒九八〇-八五七六
仙台市　青葉区　川内　二七番一号

編集　鈴木岩弓

印刷所　(株)東北プリント
〒九八〇-〇八二一
仙台市青葉区立町二四番二四号